

2020 年度

根力育成プログラム プロジェクト実習

地域志向教育プログラム プロジェクト演習

地域志向教育プログラム 地域 PBL 演習

活動報告書

(暫定版)

2021 年 3 月

茨城大学人文社会科学部

巻頭言

人文社会科学部長 内田 聡

人文社会科学部が立ち上がって4年目となり、メジャープログラム（主専攻）・サブメジャープログラムを履修した学生が初めて卒業を迎える、いわゆる「完成年度」を迎えました。後者の代表的なプログラムの1つである「人文社会科学部地域志向教育プログラム」には、主として学内で学ぶ科目群とならんで、「実際に地域へ出かけて行って、現実社会の中で課題を発見し・解決に取り組む」PBL科目や、「実際の官公庁・企業で短期間ながらフルタイムの仕事を経験する」インターンシップ等、主として実社会の中で学ぶ科目群が用意されています。

PBL技法に基づく授業である「プロジェクト演習」は、同プログラムの中核に位置づけられています。社会の現状を分析し、課題を見つけ、その課題を解決するため主体的に行動する。自分の意見を発信し、他人の意見を丁寧に聴き、異なる価値観を持つ人たちとチームを組んで課題に取り組む。そのような“社会人”を育てることが「プロジェクト演習」の目標です。

今年度は新型コロナウイルス感染が拡大し、プロジェクト演習も大きな影響を受けました。困難なことがさまざまな場面で多くありましたが、学生は、これまでの「常識」が必ずしも「常識」とは限らないことや、「日常」は無条件に成立するものではないことなどを体感しながら、オンラインなどのテクノロジーを駆使して活動し、これにまでない多くの学びをしたものと思います。例年以上に学生の成長・自信につながったとことでしょう。今起きている変化を少しでも前向きに捉えて、より良い地域社会を構築する一員となってくれることを期待しているところです。

最後になりますが、コロナ禍にもかかわらず、「プロジェクト演習」の運営をご支援いただいた地域の皆様に改めて深く感謝申し上げます。大学で4年間を過ごして巣立っていく若者たちの成長をうながす本授業の進化や深化の様子を、本報告書によりご確認いただければ幸いです。

コロナ禍への対応について

鈴木 敦

新型コロナの感染拡大に伴う 1 回目の緊急事態宣言は、2020 年 4 月 7 日に発出され、4 月 16 日には全国に拡大された。これを受けて本学では、5 月 14 日に緊急事態宣言が解除されるまでの約 1 ヶ月間、原則的に学生の入構が禁止され、授業はリモートベースでの実施となった。その後もコロナ禍が完全に終息することはなく、対面での授業や学外での活動は 2020 年度の全期間を通じて大きな制約を受けることとなった。

プロジェクト演習は、「外部協力者等から提案されたプロジェクト課題」について「学生チームが具体的なプロジェクト構想を策定」し、「外部協力者、地域の方々との緊密な連携」の下に「地域の中での活動」を柱として、「1 年間を通じて取り組む」ことを最大の特色とする「地域連携 PBL 授業」である (<http://pbl.hum.ibaraki.ac.jp/project/project.html>)。2020 年度はコロナ禍を受けてリモートベースでの実施となったことで、外部協力者は勿論、チームメイトとさえ対面での情報交換がままならない中、例年より 2 か月遅れで漸くスタートできた。「地域に出て行くこともままならない地域 PBL 演習」というパラドシカルな授業となり、学生・担当教員・外部協力者の 3 者ともども、これまでの経験が機能しない緊急事態のなかで手探りの活動を強いられた 1 年間であった。

そのような困難な中であっても、履修生たちは外部協力者の皆様のご支援の下、意欲的にプロジェクトに取り組んだ。具体的な状況については本書の第 1 章「チーム別活動報告」を参照されたい。

担当教員は、当初はそれまで対面で行ってきた授業の内容を急遽電子化して HP 上にアップする等、「リモートベースの地域連携 PBL 授業」を何とか成立させることに、ただただ忙殺されていた (<http://pbl.hum.ibaraki.ac.jp/archive.html#project> ファイル[111]～[119])。しかし年度も後半になると、この事態を敢えて「緊急時ならではの授業運営上の実験の機会」と捉え直すことができるようになった。2020 年度の担当教員の取組については、別途原稿を作成中であり 2021 年度内に公表する予定である。併せてご参照戴ければ幸いである。

[追記]

上記の原稿は、2021 年に「コロナ禍における地域連携 PBL 授業—人文社会科学部「プロジェクト演習」の対応と学生の評価—」として『茨城大学教育実践研究』40 号に掲載された。

https://rose-ibadai.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=19918&item_no=1&page_id=13&block_id=21

暫定版 目次

巻頭言

コロナ禍への対応について

目次

I : チーム別活動報告

1 : Meet U チーム 活動報告	3
2 : 茨内リンクプロジェクトチーム 活動報告	19
3 : MitoBloom チーム 活動報告	35
4 : さとみ・あいチーム 活動報告	49
5 : KoriNa チーム 活動報告	65
6 : 茨大交通政策課チーム 活動報告	81
7 : こみフェスチーム 活動報告	111

I : チーム別活動報告

- 1 : Meet U チーム 活動報告
- 2 : 茨内リンクプロジェクトチーム 活動報告
- 3 : Mito Bloom チーム 活動報告
- 4 : さとみ・あいチーム 活動報告
- 5 : KoriNa チーム 活動報告
- 6 : 茨大交通政策課チーム 活動報告
- 7 : こみフェスチーム 活動報告

1 : Meet U チーム

リーダー	：飯泉 海人	茨城大学人文社会科学部現代社会学科	2年
副リーダー	：宮下 楊子	茨城大学人文社会科学部現代社会学科	2年
書記	：柏 繭子	茨城大学人文社会科学部現代社会学科	2年
書記	：杉脇 大起	茨城大学人文社会科学部現代社会学科	2年
会計	：高安 大成	茨城大学人文社会科学部現代社会学科	2年

主担当教員：神田 大吾 茨城大学人文社会科学部准教授
主担当教員：鈴木 敦 茨城大学人文社会科学部 教授

MeetU チーム

1 : はじめに

宮下 楊子

私たち meet U チームは、茨城大学生 5 名によるプロジェクトチームである。新型コロナウイルスの影響が響く、ウィズ・コロナの時代。全国的に活気が薄れていく中、水戸も、如何にこれまでの活気を取り戻すか、そして如何に今まで以上に活気溢れる街にしていくかが課題になっている。「ウィズ・コロナの水戸を水戸産ワインで元気に」。これを信条に私たちは、水戸市泉町二丁目にある街中ワイナリー、Domaine MITO 株式会社さまからご提案いただいた、ワインを使ったツアー計画に取り組んだ。

ツアーを計画するにあたり、SWOT 分析を活用して、水戸の魅力・強み探しから取り組んだ。そこから、水戸の強みとして歴史・梅・農業の 3 点を洗い出し、ワインの魅力と掛け合わせるツアー 2 つを計画した。1 つ目は、水戸の有名な観光地である偕楽園と、ブドウ狩りやワインづくりといった体験を盛り込んだツアー。2 つ目は、1 つ目のツアーに、あんこう鍋と歴史、四季の魅力を取り入れたツアー。コロナ禍の中実践までは叶わず、集客法など具体的なところまで考えられなかった部分もあるが、ワインをきっかけに水戸の魅力に触れられるようなツアーを計画できたと思う。

ツアー計画というチームの誰もやったことのない経験を、皆で一緒に築き上げることができた。社会人としての振る舞い、計画の立て方、スケジュール管理、…。コロナ禍という難しい状況でも、実際に体験・経験しながら学ぶことができ、私たちは幸運だったと思う。Domaine MITO 株式会社さまに提案させていただいたツアーが現実に実行され、水戸の活性化につながることを願っている。

2：活動概要

高安 大成

(1) 活動の目的

①プロジェクトの目的

- (i) 水戸の魅力を活かしたツアー計画の策定。
- (ii) ワインを入口として、水戸の魅力に気づいてツアーを作る。

②チームの目的

- (i) 水戸にとっての斬新さと、実現可能性を兼ね備えたツアーを作る。
- (ii) 地域の魅力を再発見することで地域の課題を解決する能力を養成する。

(2) 活動の概要

①ツアー要素の選定

内容：ツアーの候補地になりうる観光スポット、体験要素の選出

②ツアー候補地の下見・体験

内容：候補地に実際に体験・訪問し、移動時間、駐車場、トイレの有無などを確認。

(i) 地酒フェス

日時：8月22日

場所：水戸駅ペDESTリアンデッキ

参加者：飯泉、宮下、柏

内容：

(1)ブース準備、片付け

(2)ワイン販売、接客

所感：実際にお客様が **Domaine MITO** のワインを飲んでいるお客様と接する機会を接することができて良かった。

(ii) ワイン醸造体験

日時：8月30日

場所：泉町会館

参加者：飯泉、高安

内容：

(1)ぶどうの破碎、ワイン醸造

所感：ワイン醸造の一連の体験をすることで、実際にツアーに組み込んだ際にどれだけ時間がかかるか、問題点はないか把握できた。

(iii) ぶどう狩り

日時：9月6日

場所：栗崎町ぶどう畑

参加者：飯泉、宮下、柏

所感：実際にぶどう狩りを体験することで、どれくらいの体験時間が適切か、適切な服装を把握できた。

(v) 偕楽園見学

日時：9月1日

場所：偕楽園

参加者：高安

所感：偕楽園を散策することで、全体を観るのにかかる時間を把握した。

(vi) 鯉淵農業栄養専門学校訪問（以下、鯉淵学園）

日時：10月15日

場所：鯉淵農業栄養専門学校

参加者：柏、杉脇、高安

内容：鯉淵学園の訪問と実施可能な体験の確認。

所感：鯉淵学園関係者に話しを聞いたことで、こちらが想定していた以上に、体験可能な作業があること、またソレラノ具体的な可能時期を知れた。

(vii) 昼食予定の店へのアポイントメント

日時：10月9日

方法：電話

参加者：高安

内容：ツアーで利用させていただく際の上限人数と、料理の内容確認、実際にツアーを行う際にどれほど前までに連絡すればよいかの確認。

所感：上記の質問をした結果全て問題なく確認できた。

③ ツアー計画の決定

内容：候補地の下見、情報集収をもとにツアーを計画、決定。

④ 課題提案者である宮本さまへのプレゼンとツアー計画の修正

内容：③で計画したツアーをもとに、宮本さまへ提案。指摘された点を修正し、その後再び提案。

3 : 議事録・活動記録

杉脇 大起

表 1 : 議事録・活動記録

No.	日時	場所	活動内容	参加者	実施時間
1	2020年 6月28日 22:00 - 22:50	teams	自己紹介、役割決め、今までの授業でやったことの復習	飯泉、柏、杉脇、高安大成、宮下	0:50
2	2020年 7月1日 20:00 - 21:45	teams	宮本さんと顔合わせ、プロジェクト構想に関して意見合わせ	飯泉、柏、杉脇、高安、宮下	1:45
3	2020年 7月5日 10:30 - 12:10	teams	考察したツアー案の共有、ツアーの概要を意見の共有 チーム名の決定	飯泉、柏、杉脇、高安	1:40
4	2020年 7月6日 10:30 - 12:00	teams	チームでまとめたツアー案の共有、次回授業までにやらなければいけないことの確認(エクセルでのプロジェクト構想を埋めるなど)	飯泉、柏、杉脇、高安、宮下	1:30
5	2020年 7月6日 14:50 - 16:20	teams	プロジェクトの概要を決定 プロジェクト構想書の記入	飯泉、杉脇、宮下	1:30
6	2020年 7月13日 10:30 - 12:00	teams	質疑応答 新新さ、活性化の定義	飯泉、柏、杉脇、高安、宮下	1:30
7	2020年 7月20日 10:30 - 12:10	teams	コンベンション協会とDomaineMitoさんのツアーへのかかわり方とか、次の時間で先生や宮本さんに確認したい	飯泉、柏、杉脇、高安、宮下	1:40
8	2020年 7月20日 14:50 - 16:20	teams	今後の予定とツアーについての確認、質問	飯泉、柏、杉脇、宮下	1:30
9	2020年 7月27日 10:30 - 12:00	teams	水戸の現状把握(各自調べてきたものの共有)、今後観光客や農政課に行く際に聞きたいことの洗い出し	飯泉、柏、杉脇、高安、宮下	1:30
10	2020年 8月3日 10:30 - 12:00	teams	中間報告会の準備 夏休みの活動について	飯泉、柏、杉脇、高安	1:30
11	2020年 8月3日 14:50 - 16:30	teams	中間報告会	飯泉、柏、杉脇、高安	1:40
12	2020年 8月18日 10:00 - 11:20	teams	地酒フェスの事前打ち合わせ(アンケート・聞き取り調査の練り直し)	飯泉、柏、宮下	1:20
13	2020年 8月23日 9:00 - 20:00	水戸駅 ペDESTリアンデッキ	地酒フェス 手伝いや、聞き取り調査	飯泉、柏、宮下	11:00
14	2020年 8月30日 9:00 - 12:00	泉町会館 Domaine Mito	破砕作業の体験、見学	飯泉、高安	3:00
15	2020年 9月3日 10:00 - 12:00	teams	地酒フェス、醸造体験の情報共有、ツアーについての話し合い	飯泉、高安、宮下	2:00
16	2020年 9月6日 7:00 - 12:00	茨城県水戸市 栗崎町	ブドウ狩り体験	飯泉、柏、宮下	5:00
17	2020年 9月8日 10:00 - 11:35	teams	改めて、ツアーの目的そしてターゲットについての話し合い	飯泉、高安、宮下	1:35
18	2020年 9月9日 10:00 - 11:40	teams	要素についての話し合い(借樂團、梅などについて)、また昼食場所についての話し合い	飯泉、柏、杉脇、高安	1:40
19	2020年 9月27日 10:00 - 12:00	teams	要素の決定、ツアーの流れの確認	飯泉、柏、杉脇、高安	2:00
20	2020年 10月1日 18:00 - 20:00	zoom	要素について、宮本様からアドバイス	飯泉、柏、高安	2:00

21	2020 年 10月4日 18:00 - 19:30	zoom	構想書の範囲決定、農業要素、昼食の案	飯泉、杉脇、高安	1:30
22	2020 年 10月15日 14:00 - 16:30	茨城県水戸市 鯉淵学園	施設見学 ブドウ狩りについての質問	柏、杉脇、高安	2:30
23	2020 年 10月21日 16:00 - 17:30	teams	水戸市農政課からのメールの返信の共有、各自調べたお昼ご飯のお店の共有	飯泉、柏、杉脇	1:30
24	2020 年 10月28日 12:40 - 14:30	teams	ツアー要素の優先順位、ツアールート の再考、お昼の場所	飯泉、柏、高安	1:50
25	2020 年 11月1日 13:00 - 15:00	teams	ルート1の決定 広告方法の案	飯泉、柏、杉脇	2:00
26	2020 年 11月4日 12:40 - 14:20	teams	広告の方法案、ツアーで使用する予定のお店に事前調査するためのアポ担当者決め、ツアー2の要素について	飯泉、柏、高安	1:40
27	2020 年 11月9日 12:40 - 14:30	zoom	広告方法の見直し、宮本様との話し合い	飯泉、柏、杉脇、高安	1:50
28	2020 年 11月11日 19:00 - 22:30	teams	ツアー2について(ツアーのタイムスケジュール(日程)決め、歴史要素の選定)	飯泉、柏、杉脇、高安	3:30
29	2020 年 11月12日 16:10 - 18:00	teams	費用の概算、20人の割り振り方、広告方法、借楽園の内容決め。	飯泉、柏、高安	1:50
30	2020 年 11月16日 14:20 - 15:50	zoom	今後の確認事項、ツアーの斬新性について	飯泉、柏、杉脇	1:30
31	2020 年 11月19日 13:00 - 15:15	teams	今後のスケジュールの確認、PPTやポスター作成の役割分担、プロジェクトのゴールの確認、ツアー要素選定の	飯泉、柏、杉脇、高安	2:15
32	2020 年 11月23日 10:30 - 12:00	teams	ワイン講座の内容、今後の予定の決定	飯泉、柏、杉脇、高安	1:30
33	2020 年 12月6日 17:00 - 18:45	teams	リハで指摘された点について、宮本さんからアドバイスいただいた点について	飯泉、柏、杉脇、高安	1:45
34	2020 年 12月10日 18:00 - 20:00	teams	指摘された点の改善、今後の日程確認	飯泉、柏、杉脇、高安	2:00

4：活動トピック

柏 繭子

(1)水戸の地酒フェス 2020 への参加

①日時

2020年8月23日(日)11:00~18:00

②場所

水戸駅北口ペデストリアンデッキ

③活動内容

水戸の酒造会社3社や、ホテルレストランなど関連団体と行政で「乾杯条例」が制定されており、条例の推進協議会が設置されている。その一環として、地酒フェスを開催することになり、私たちグループがお世話になっている、株式会社 Domaine Mito さんでもワインを出品するというので、イベントの雰囲気を知り、自分たちのツアー立案に役立たせるために参加した。オンラインでは何度もあったが、Domaine Mito の宮本様と対面では初顔合わせでの活動だったため、とても不思議な経験だった。フェスでは Domaine MITO のワインを試飲し Domaine MITO のワインがどのようなワインなのか、また実際にワインを飲んだお客様の声をすぐに聴けるなど、消費者に近い体験をできた。また地酒フェスにて、来場されていた30代の夫婦の方にインタビューを実施した。コロナ禍において子どもがいる中外出に行くことは憚られるため、いかに家でワインを楽しむかについて語ってもらった。にぎやかな会場で子供の面倒を見ながらの難しい状況であったがよい経験になった



図1：ワインの販売の様子



図2：お客様にワインの説明をしているメンバー



図3：販売ブースにて記念撮影

(2)ブドウの破碎・醸造体験

①日時

2020年8月30日(日)11:00~18:00

②場所

水戸市泉町 2-3-17 泉町会館

③活動内容

破碎とはブドウの実と茎を分ける作業である。当日は水戸市鯉淵町にある鯉淵学園農業栄養専門学校で収穫されたアーリースチューベンの実を取り除き、破碎機にブドウの実を入れ、ブドウのジュースを作った。それに酵母を加え、発酵準備段階にした。その際、温度管理がとても重要であることを学んだ。冷やしすぎても発酵が進まないが、温度が高すぎても発酵しすぎてしまう。適切な温度管理が求められた。ワインの製造作業をしたのは初めてだったため、作業自体が新鮮で楽しく、ブドウが実の状態からジュースの状態に変わっていく様が面白かった。



図4：実を取り除いているメンバー



図5：実を破碎機に入れてジュースをつくらしているメンバー

(3)ぶどうの収穫体験

①日時

2020年9月6日(日)7:15~11:15

②場所

水戸市栗崎町 ぶどう畑

③活動内容

株式会社 **Domaine Mito** さんのワインで使用されているぶどうの収穫を体験した。参加したメンバーはぶどうの収穫がほとんど初めての状態であったため、どのようなぶどうを収穫すればいいのか、また枝のどの部分から切るといいのかなど、丁寧に教えていただきながら収穫をした。当日の気温が高い上にビニールハウスの中の温度が加わり、暑い中での作業となったが、自分たちが今収穫したものがこのあとワインになっていくと思い、やりがいを感じながら収穫をした。ぶどうを収穫したらコンテナに入れて、重さを測った。またぶどうには病気になっているものもあったが、実際にその病気についてのお話を聞く中で、病気にならないように工夫しながら今もやっていて、以前に比べて病気が少し治まったとのことだった。それでも病気になってしまうぶどうはあり、栽培することの難しさもわかりました。だからこそ丁寧に栽培しており、それが私たちの手元に渡すということで、感慨深いものを感じた。実際に自分たちが収穫体験をしてみることで、子どもから年配の方まで参加することができる難易度であるとわかり、ツアーに組み込む際の参考になった。



図 6 : ぶどうの収穫の仕方を教わるメンバー



図 7 : 収穫真っ最中



図 8 : 自分たちで収穫したブドウ



図 9 : 水分補給(とても暑い日でした)

(4) 鯉淵学園農業栄養専門学校の視察

① 日時

2020年10月15日(木)14:30~16:30

② 場所

水戸市鯉淵町 鯉淵学園農業栄養専門学校

③ 活動内容

鯉淵学園農業栄養専門学校の担当の先生から鯉淵学園農業栄養専門学校の校内にあるぶどう畑の説明を受けた。ツアーのぶどうの収穫体験はこの鯉淵学園農業栄養専門学校さんで実施しようと考えているため普段いつごろ収穫しているのか、また何人ぐらいの人数ならハウスに入れるかについてお話を伺った。またツアー要素として農業が上がっているため、鯉淵学園農業栄養専門学校では、ぶどうの収穫以外にどのような農業体験ができるのか伺った。そこでは、梨の収穫や準備をすればさつまいもほり、トマト・きゅうりの収穫、田植え、稲刈りなどができるとのことだった。ツアーを二つ提案するうえで、時期選定する際にどの時期に何の農業体験ができるのか知ることが出来たので、実際に訪問しお話を伺うことが出来てよかった。



図 10 : 先生から前回収穫時のお話を伺う



図 11 : ぶどうの栽培を行う大きなハウス

5：個人レポート

コロナ禍において必要なスキル

茨城大学 2年 飯泉 海人

何か、2年生で地域に貢献することをしたい。企業の方々と協力して何かを成し遂げたい。その気持ちを胸に、この授業に挑んだ。課題ご提案者（DomaineMITO 株式会社代表取締役社長の宮本紘太郎様）からのプレゼンを聞き、胸を躍らせた自分は、何も知らないワインに興味を持ち、このプロジェクトに取り組むことにした。コロナ禍で授業開始が遅れた上に、基本的にはオンライン、そしてフィールドワークも思うように参加できなかった今年度のプロジェクトは、簡単に進められるはずがなく、様々な問題に直面した。しかし、このプロジェクトで得られた経験、学びはかけがえのないものであり、今後の自分に大きく影響を与えることとなった。本レポートでは自分がこのプロジェクトで得た学びと反省について論じていく。

まず学びについて。このプロジェクトを通して自分が一番学んだことは、リーダーシップとファシリテーション能力である。自分は今回のチームでリーダーを務めていたが、オンライン上での会議をした経験が全くなかったため、司会進行をすることが非常に難しかった。しかし、回数を重ねるごとにどのように問いかければ答えやすいか、どのような方針で会議を進めればより円滑なるのかなど、分かってくることも多かった。このファシリテーション能力は今後、社会に出たときに必ず必要になってくる能力である。冒頭の授業で説明されたように、コミュニケーション能力は16年連続で経団連新卒採用調査の項目で1位を取っており、いかにコミュニケーション能力を高めるかの重要性が感じられる。チームを結成する上で、自分は友人2人を引き連れ結成したため、どちらかと言えばコミュニケーションが取りやすい環境ではあった。しかし、他の2人とは初対面であり、かつ全体を統括するために適切なコミュニケーションを取ることができたと考えられる。

また、学びとしてもう一つ挙げられることが理屈と根拠の重要性である。自分たちが出し合ってきた意見は、あくまでも自分たちのイメージからくるものであり、エビデンスは全くない。確かにイメージだけでいい発想が出るときもあるが、それを実際にツアーなどのビジネスに落とし込むとなると、しっかりと根拠が必要になってくる。自分たちは最後の裏付けとしてデータを探したが、それは逆であり、統計やデータなどを分析した上で、ある程度、方向性を確保し、そこからどのような内容が考えられるのかイメージする。これが非常に重要だと痛感した。

反省に関しては、まず初めに計画性が挙げられる。自分は計画性が全くないままこのプロジェクトを遂行してしまった。いつまでに何をやり、どのようなゴールに向かってこのプロジェクトを進めていくのか。このような計画性が自分には欠如していた。この問題にどのようなアプローチをするべきだったか。自分をもっと他人に頼って計画を練るべきだったと考える。当時の自分は、リーダーということもあり、自分で舵を取らなくてはと必死になっていた。そのため、自分で計画を立ててみんなに方向性を示そうと努力したが、自分一人ではうまくまとめ上げることができず、結局計画がうまくいかなくなってしまった。複数人でなくてもいいからメンバーのせめて誰か一人とでも話し合い、確認しながらプロジェクトを進めておくべきだった。

反省としてもう一つ挙げられることが情報共有である。会議に参加する人は一定ではなく、毎回参加する人もいれば2回に1回参加する人など様々である。そこで求められるのが情報共有の質と量である。プロジェクトを円滑に遂行するためにはチームの全員が後れを取ることなく、話し合いに参加することが重要となってくる。自分たちは議事録を用いて情報共有を試みたが、それだけでは十分ではなかった。会議が始まって最初の5分を情報共有の時間にすることで、質をもっと高める必要があったと考えられる。

このように自分はこのプロジェクト演習を通して様々な学びと反省を得た。これらは自分にとってとても貴重なものであり、自分もこの授業を通じてかなり成長を感じている。今後コロナ禍でパラダイムシフトが起こり、対応しなければならぬことが増えていくが、この授業で得た学びを用いて柔軟に対応できるようにしていきたい。

「失敗」という成功

茨城大学 2年 宮下 楊子

他の人とは違う経験を積みたい。プロジェクト演習 I の履修を決意したのは、何かゼロから作り上げるという、“普通”に生活している大学生では得ることのできない経験をしたいと思ったからだ。私はメディア系、特にテレビや映画などの映像制作の業界を志望している。公務員のような仕事を志望する人が多い中、私のようなタイプは珍しかったと思う。今回 **Domaine MITO** 株式会社の宮本紘太郎様からご提案いただいた、ワインを使って水戸を元気にする、ウィズ・コロナ時代のツアー計画。コロナ禍で混乱を極める今日において、今まで以上に水戸を元気にするという試みは、コロナという制限も相まって、私にとってとても新しく映った。新しいことに挑戦する、ゼロからものを作る。今までやってこなかったことに、飛び込んでみたかったのだ。

しかし実際にやってみると、苦労の連続だ。まず自分たちには、ツアー作りの知識がない。ツアーを作るといっても、チームは当然の素人集団であった。同時に、例年より何か月も遅れての活動スタート。勉強から体験、計画作成のほぼすべてを同時並行的に進めなければならず、普通の大学の授業や後期から始まったゼミ活動が加わると、両立がなかなか上手くいなくなっていった。

このプロジェクト演習を通じて学んだことは2つ。一つ目は、ゼロから始めるということの大変さだ。私たちのチームは最初から、ゼロのようなものだった。最初のグループ決めで、このプロジェクトを選んだ人が、自分を含めて2人しかいない。このままではチーム結成すらできないという状態で始まったのだ。スタートラインにすら立てず、ゼロ、もっと言えばマイナスの地点からの始動だった。そして、プロジェクト自体が、「コロナ禍でのツアー」という、まだ前例もまともにならないようなツアーの計画。そこに惹かれたからこそ選んだプロジェクトだったが、そこに泣かされることになるとは思わなかった。前述した通り、私たちは普通のツアー作りですら分からないことだらけだ。事前知識がないという状態と、例年よりも短い期間。二つが合わさっていることに気づいたとき、軽く絶望さえしたものだ。しかし、ゼロから作るとはそういうこと。本当に何も無いところに何かを生み出す辛さを経験できたのは、自分の志望する就職先を意識した時、大事な経験だったと思う。

二つ目は、スケジュール管理は一人でできるようなものではないということ。ゼミ活動との両立に悩んだ私は、まず先に入った約束を優先するという事に集中した。どんなときも、どんなに大事な会議でも、先に入っていた約束を守る。そういう当たり前のことから取り組んだ。最初はなかなか上手くいっていたと思う。しかし、私がゼミ長になってから大きく変わった。ゼミ活動の方が先に入ることが多かったことに加え、ゼミ長という立場上、緊急の会議でも参加することを求められるようになった。それまでの私であれば断っていたが、「ゼミ長として…」という意識が働き、プロジェクト演習を疎かになるようになった。自分一人でやろうとしても、どうしても外的要因が絡んでくる。そうなれば、決意も容易に揺らいでしまうことを経験した。

今回のプロジェクト演習に関して、正直に言えば、私は失敗ばかりだった。おそらく、他の受講者が前向きなレポートを書いているなかで、私の書くこのレポートは異彩だと思う。しかし、様々な経験が積めたことは私にとっては一種の“成功”だ。成功を掲げている人でさえ、失敗を経験していない人はいないと思う。「失敗することを恐れるな」。この活動を通して最低な失敗を経験した私は、これ以上怖いものはないと思っている。これからの私は、このプロジェクト演習での経験を反面教師として、どんなことにもチャレンジできるようになると思う。

意思疎通の大切さ

茨城大学 2年 柏 繭子

今回、私は友達に声を掛けられて受講を決めた。受講を決めた理由は二つある。一つは参加するチームテーマが水戸の街中ワイナリーである **Domaine MITO** 株式会社さんのワインであるということである。お恥ずかしい限りであるが、私は水戸市出身にも関わらず初めて **Domaine MITO** さんのワインを耳にしました。自分の中で新しい分野であるため、前提として私たちの知識不足がある。そのため自ら学びに行く姿勢がないと何もわからないまま、日数だけが経ち何も得られないということにつながる。この状況下だからこそ講義を受講することで、主体性や、課題発見力を身に付けることが出来る機会だと考え、受講を決めました。もう一つの理由は、社会人基礎力を身に付けることが出来ると考えたからである。この講義は一人でやるのではなくチームでやる上に、外部の方の協力を得ながらやるため、コミュニケーション能力はもちろんのこと、基本的なマナーも必要である。また今までの大学生活で、長い期間にわたって、チームメンバーと一つのことに取り組むという機会があまりなかったのも、今回の授業で、決められた期間の中で、いかに成果を出していくのか、そのような力は社会に出てからも必須であるため身に付けたいと思ったからである。以上のような力は、普段の講義ではなかなか養えないものであり、このプロジェクト演習を受講したからこそ、学べるものであると考える。以下にこの講義を受講した感想を述べていく。

今回講義を通して私が感じたことは、「意思疎通の大切さ」である。今回のプロジェクト演習では、新型コロナウイルスの影響もあり、途中までオンライン上での会議で進めてきて、その後課外活動を行い、また引き続きオンラインでの会議をするという形態であり、なかなか対面で会うことが厳しい状況であった。私たちのチームでは、「ワインを入り口として水戸市を活性化させようというツアー」で進めていきました。最初に議論したのが、どこまでやるかということであった。前回はツアーを計画して実行するまでやっていたとのことだが、コロナ禍の状況を踏まえて自分たちの最後のゴールはどこかを決める必要があり議論の末、私たちのゴールはツアーを計画することになった。水戸市には偕楽園や歴史館などを回るツアーがすでにある中で、自分たちのツアー案が採用されるためには、今までにない「斬新な」ツアーであることが必要であると考えた。まずここで問題になったのが、「斬新な」という言葉である。斬新とは何か、誰にとって斬新なのか、など様々な議論がなされた。何回か議論を重ねていく中で、「斬新」は、今回今までの魅力(偕楽園の梅など)ではなく、今まであまりツアーに組み込まれていなかった農業を新たな水戸の魅力としてツアーに組み込むことで斬新なツアーにしようとなった。この過程で私は意思疎通の重要性を改めて知った。それぞれチームメンバーには役割があり、リーダーを中心に議論が進められたが、受け答えするのもリーダー、考えるのもリーダーというように最初はなってしまうと、他のメンバーがあまり発言をしないのはよくない、全員でやっているからこそお互いに思っていること、考えたことは発言すべきだとアドバイスをいただいた。今回であれば「斬新な」の認識がずれていた時もあったので、当たり前なことではあるが、思っていることはその場で発言して、この認識であっているのか確認をして共通の認識を持っていなければ話が進んでいかないということを改めて気づいた。今回私はプロジェクト演習を通しての達成目標ルーブリックの一つに「発信力」を強化したいと書いた。今まで私は思っていることを簡潔にまとめることが出来ないまま話してしまい、結論が見えない発言になってしまうというのが課題であった。今回は最初の段階では以上に書いた通り、発言ができていなかったが、後半になるにつれてお互い打ち解け、私自身も思ったことを発言できるようになった。その時には自分の考えを箇条書きでメモをしておいて、それを基に話すなど工夫して簡潔にまとめられるようにできたこと、またそれがなくてもまとめることができたことが今回受講した成果であると考えた。

今回この授業を通して、このレポートには書ききれないほど多くのことを学ぶことができた。実際に現地に赴いて自分の目で見て学ぶ。そして課題を発見して、どのように解決していくのか、また本当にその解決策でいいのか議論することが大事であるので、今回学んだこと身に付けたことを今後の生活に生かしていきたいと思う。最後に、神田先生、鈴木先生など諸先生方、また今回お世話になりました **Domaine MITO** 株式会社の宮本様、鯉淵学園農業栄養専門学校先生方をはじめ、meet U に関わってくださったすべての皆様、そして最後まで励まし合いながらともに頑張り続けてきてくれたチームメンバーに感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

meet U プロジェクトを経て

茨城大学 2年 杉脇 大起

私はチームリーダーの飯泉さんに誘われて、このプロジェクト演習を履修することに決めた。以前からこのプロジェクト演習には興味を持っていたが、自分にはレベルが高いのではないかと思い、なかなか履修する決心がつかなかった。また、もともと「地域活性化」という分野に関心があったので、Domaine MITO株式会社の宮本紘太郎様が提案なさった「ワインを入り口として、水戸を活性化させよう」というプロジェクトにとっても惹かれた。結果的に今回のプロジェクト演習を履修してよかったと思う。

私はプロジェクト演習を通して、多くのことを学んだ。今回はその中でも特に重要だと感じたことについて述べる。

一つ目は意思共有の重要性である。今回の授業では先生から指示が出るというわけではなく、課題提案者からコンセプトを聞き、それに沿ったプロジェクトを学生が自主的に行うというものだった。最初に提示された課題のイメージも学生一人一人が違い、そこから会議で意思共有する必要性があった。すべての作業を一人で行うような今までの授業とは違い、チームメンバー全員で同じイメージを持つというのはとても難しかった。ツアーのターゲットは誰にするのか、言葉の定義はどうするのか、本来の目的何であるのかなどを決めなければ会議の効率が悪くなってしまふことを学んだ。また、会議では扱うことのできなかつた議題をそれぞれで考えてくる際も、課題解決のアプローチは違つたとしても、ゴールのイメージが同じでなければ良い意見を集めるのは難しいということも学んだ。チームで活動する際の前提として意思共有が大切であることを学んだ。

二つ目はブランディングの難しさである。今回のツアーのコンセプトは「ワイン造りを通して、水戸を活気付けていく」というものであった。私たちは水戸を活気付けるにはまず水戸に人を呼ぶことが大切だと考えた。そして、水戸に人を呼ぶには水戸に興味を持ってもらうことが大事である。水戸の新たな魅力を発見し、それを効果的に伝えることで興味を持ってもらえるのではないかと考えた。私たちは、歴史とワインを組み合わせた今までにはない「斬新」なツアーを提案することで、水戸の魅力を伝えようとした。しかし、そのツアーで集客は見込めるのか、水戸の魅力はしっかり伝わっているのかということも考えなければならぬ。魅力を効果的に伝えるためには、自分たちの案を客観的に見ることが重要である。新たな魅力を発見するだけでなく、その資源をより魅力的に顧客に伝えるにはどうすればいいのかを考えることが難しかった。

三つ目は計画の重要性である。プロジェクト開始当初はその場で何について話すか決めていて、考える時間も少なく、良い会議内容とは言えなかつた。また、5人のチームで活動していたので、見通しを立てないとみんなで目標を共有することも難しかった。しかし、次第に計画を立てるようにし、事前に会議の議題を提示することで会議の効率が上がった。ツアー作りの際も協力していただく方に連絡する際も、計画的に行うことで焦らず、適切な対応ができた。また、いつまでにこの作業を終わらせるといった目標を設定することで、全員がそれを意識することができ、会議が活発になったのではないかと考える。計画を立てそれをチーム全員で実行することで、意思共有ができ、深い議論ができることを学んだ。

プロジェクト演習を履修したこの1年で私は様々なことを学ぶことができた。ツアーの企画、立案だけでなく、メールでのマナーや、プレゼンを行う際の注意事項なども学ぶことができた。今回のプロジェクト演習で学んだことやできなかったことを社会人になつても活かし、さらに成長していきたいと考える。

最後に、meet Uのプロジェクトに関係したすべての皆様に感謝申し上げます。特に課題提案者であるDomaine MITO株式会社の宮本紘太郎様、プロジェクト演習の先生方、meet Uのメンバーには大変お世話になりました。誠にありがとうございました。

社会に出る前に

社会人として、人として必要な事

茨城大学 2年 高安 大成

プロジェクト演習の受講を通し、普段の大学生活では得ることのできない知識、経験ができた。その貴重な活動の中で、私は自分の能力の物足りなさを実感した。そして特に欠けていると感じた能力が3つある。

1つ目は「主体的に行動する力」である。この活動には人に誘われて参加しており、その時点で主体性が欠けていたのかもしれない。最終的には自分で判断して参加したのだが、流されて参加したという意識があった。元来私は人に流されやすく、大学に進学したのも自分の意志というよりは、世間体や周りの人の大多数が進学しているからというのがあった。この意識が大学では足を引っ張った。自分から積極的に動かないため、情報を集めない、活動に関わらないというのが頻繁であった。その消極性が周りとの意識の差を生み、なぜ大学にいるのかわからなくなってしまっていた。そのような中で参加したこの活動も正直なところ何度も途中で投げ出しそうになった。だがこのまま社会に出たところで、「何もできない能無しとして生きていくことになるのではないか？」という危機感があった。その意識だけが私をつなぎ止め、最後まで活動に参加できたのだと思う。そしてこの活動を最後までやり抜くことで、物事を途中で投げ出せない程度の責任感はあるのだと実感できた。また何かに取り組むにあたって、自分で決めるということの重要性を実感した。自分で決めるから責任感を感じる、積極的に行動する、最後までやり遂げられる。このことを意識して今後は物事に取り組みたい。

2つ目は「挑戦する能力」である。この活動では社会人としての基礎力を身に付け、社会人としての経験をある程度積むことができた。だがその中で私は「挑戦」をしてこなかった。自分の意見を言うのは、他人に賛同するか反対するかの時だけであり、自ら何かを提案するという機会はほぼ無かった。だが今となってはもっと挑戦すべきであったと後悔している。この活動では私たちはあくまで「学生」という立場であり、大学側も、提案者側もある程度の失敗は織り込み済みであったと思う。そのようなある程度失敗しても大丈夫な環境であるのに何かに挑戦しなかったというのは実に勿体なかった。社会に出てしまえば「学生」という立場は無くなり、責任は確実に重くなる。そのような中で失敗を恐れずに挑戦できるかといえば、私には難しい。少なくともある程度失敗が許されている環境で挑戦しなかった人にはできないのではないか。それゆえ「学生」という身分であるうちに、何かしら挑戦したい。

3つ目は「チームで活動する意識」である。大学までの授業は基本個人での活動がメインで、チーム活動というのは授業内でのちょっとした活動であった。だがプロジェクト演習ではチームでの活動がメインである。つまり自分の役割の出来、不出来が他人にも影響を与える。個人の遅れはチームの遅れ。個人の失敗はチームの失敗であるということを認識する必要がある、その点が他の講義とは違う点であった。それゆえに一人での活動より責任感を感じながら活動していた。また今年はオンラインでの活動がメインであり、対面での活動は数えるほどであった。それゆえ表情が見えにくい環境での活動がほとんどでありチームメイトと打ち解けるのに時間がかかった。その結果、会議が活発にならず、良い意見も生まれず、停滞する。活動当初はこの悪循環にハマっていたと思う。しかし今後の社会ではオンラインというのが基本になるかもしれない。「対面じゃないから良い活動ができませんでした」というのは言い訳として通じない時代になるかもしれない。そんな時代でも素早く打ち解け、「チーム」として一つになる能力が重要であるのではないか。今の時期にこのような体験ができたことを幸運に思う。

この活動を通して私がいかに社会人として未熟で、「学生」という立場に甘んじているのかを痛感した。このまま何事もなければ2年後には卒業し、社会人となる。その前にまず欠けている能力を補い、人として成長しなければならない。今まで持っていた危機感を、行動に移すきっかけを与えてくれたこの活動には感謝しかない。まずは上記の能力を取得、伸ばせるように精進したい。

最後に宮本さまを始め MeetU の活動に協力して下さった方々に感謝を申し上げます。誠にありがとうございました。

6：おわりに

飯泉 海人

「ウィズ・コロナの水戸を水戸産ワインで元気に」宮本さんによるプレゼンのもと、自分たちのチームが結成した。コロナウイルスの影響により、例年より約一か月遅れ、そしてオンラインで行われることになった今年度のプロジェクト演習。自分たちはこの状況下で、水戸の課題、魅力を再発見し、**Domaine MITO** のワインがこれら水戸の問題にどのように関わっていくことができるのか。様々な面から話し合った。

「水戸の魅力(歴史・梅・農業)を活かしたツアーを作る、水戸に来る観光客が増えるツアーを作る、ワインを入り口として、偕楽園などの水戸の魅力に気づいてもらうツアーを作る。」これが自分たち、**MeetU** のプロジェクトの目的である。ただ漠然とツアーを作ればいい話ではない。どのようなツアーを作るのか、ツアーによって水戸にどのような影響が及ぼされるのか。また、「チームの目的として斬新さ(水戸として、ツアーとして斬新)と実現可能性を兼ね備えたツアーを作る、地域の課題をその魅力を再発見していくことで解決する能力を養成すること」を挙げていたが斬新さとは何か、地域の課題をその魅力を用いてどのように解決するかなど頭を悩ませることが多かった。

とりわけ斬新さについてはチームでよく話し合った。どの要素が斬新なのか、何をもって斬新とするかなど、抽象的ではあるが非常に重要な話である。ここで自分たちが学んだことは、客観性を保つことである。ともするとイメージだけで話が進んでしまうことがあったが、データなどを参照し、客観性を保つことによってより論理的な主張にすることが求められる。

客観性の大切さも自分たちにとっては大きな学びの一つであるがこのプロジェクト演習を通して自分たちが得た一番の学びは、社会経験である。課題提案者である **Domaine MITO** 株式会社の宮本様には、慣れないオンライン会議だったからとはいえ、多大なる迷惑を何度もおかけしてしまった。その反面宮本様から学んだことは数多くある。これらの学びは今後のウィズ・コロナの時代における社会人基礎能力として役立てていくことができると考えられる。

今回、前代未聞のオンラインプロジェクト演習となり、紆余曲折しながらもなんとかプロジェクト演習を終えることができた。次のチームに自分たちが学んだことが活かされることを願う。

末尾となりましたが、今年度の活動にあたり、多大なるご支援をいただきました **Domaine MITO** 株式会社 宮本紘太郎様、鯉淵学園農業栄養専門学校 鈴木一広様、水戸コンベンション協会 海老澤真人様、水戸市産業経済部観光課 神原幹生様 プロジェクト演習 I 担当教員神田大吾准教授、鈴木敦教授、そして活動にご支援いただきましたすべての皆様に厚く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

2 : 茨内リンクプロジェクトチーム

リーダー	： 結城 大雅	茨城大学人文社会科学部現代社会学科	2年
副リーダー	： 浅野 楓	茨城大学人文社会科学部現代社会学科	2年
書記	： 小野崎邦彦	茨城大学人文社会科学部現代社会学科	2年
書記	： 雨澤明日香	茨城大学人文社会科学部人間文化学科	2年
会計	： 大橋 拓朗	茨城大学人文社会科学部人間文化学科	2年
会計	： 羽田 皓	茨城大学人文社会科学部人間文化学科	2年

主担当教員：岩佐 淳一 茨城大学人文社会科学部教授
副担当教員：鈴木 敦 茨城大学人文社会科学部教授

茨内リンクチーム

1 : はじめに

結城 大雅

私たち、茨内リンクは、今年度初めて成立したチームである。提案者様は茨城大学の赤岩先生であり、2020年4月にできた茨城大学水戸駅南サテライト(以下「駅南サテライト」と表記)をどのように活用していくかということをご提案していただいた。駅南サテライトは水戸駅から徒歩3分という位置にあることから、他大学の学生、先生や遠方からお越しくださる人にとっては水戸キャンパスに行くよりも近い。また、茨大生の中でも遠方から通学している人もいるため、バスの時間や電車の時間に間に合わせなければいけない人にとっては、駅南サテライトに寄るということは負担がかからない。

当チームでは「茨大生のわくわくした挑戦のきっかけづくりを支援する」というプロジェクトの目的に沿ってさまざまな活動を行った。駅南サテライトができたばかりで認知度がそこまでないことや、新型コロナウイルスの流行を考慮して、対象は茨大生に絞った。また、人とのつながりを作ることや駅南サテライトの認知向上を目的としてイベントは大きく分けて「みんなで茨大トーク」と「価値観を広げる茨大トーク」の2つを開催した。「みんなで茨大トーク」と「価値観を広げる茨大トーク」をそれぞれ2回ずつ、そのうちの「価値観を広げる茨大トーク」の1回を除いて駅南サテライトで開催することができた。

しかし、今年は新型コロナウイルスの蔓延により、前期はすべてオンライン、後期でも活動が一部制限されるなど、非常に厳しい状況の中での活動であった。提案者様からは駅南サテライトを「共創の場」にしたいというご意向があったことや、駅南サテライトがある茨城県産業会館では多くの人々が入り出りしたり、多くの学生や社会人が水戸駅を利用したりする環境面を考慮し、更に前述したプロジェクトの目標にある「挑戦のきっかけ」の一つになるという考えから、私たちのチームは「人とのつながり」を重点に置いた。また、新型コロナウイルス蔓延の状況下で人と人とのつながりは非常に重要であることを感じることも多かった。人との接触が制限されている中で人とのつながりを作っていこうという考え方にシフトしていった。

今までにない制限された環境の中、二つのイベントを企画・運営することは多くのことに気を遣う必要があったために、チームとしても強い結束を得ることができた。加えて、冒頭でも述べた通り当チームは他チームと違い前例が全くないため、最初はどのようなことをすればいいかわからなかったことも多々あったが、その分多くの学びや経験を得ることができた。当チームの活動の内容をぜひとも見ていただきたい。

2：活動概要

羽田 皓

(1) 活動の目的

① プロジェクトの目的

(i) 茨大生のわくわくした挑戦のきっかけを支援する

② チームの目的

(i) 人を巻き込む、人に働きかける方法を学ぶ

(ii) チーム内の中を深める

(ii)に関して、他人に働きかけるには、自分達がまとまっていなければいけない、という意見からあえてチームの目的に設定した。

(2) 活動の概要

我々は駅南サテライトキャンパスの共創の場としての活用を考えた結果、前述したプロジェクトの目的の下茨大生の価値観を広げ、新たなつながりを作っていくための活動を行ってきた。以下に主な活動とその概要について述べる。

① みんなで茨大トーク

日時：2020年11月4日、18日（第一回）

25日（第二回）

対象：茨大生

目標：駅南サテライトキャンパスに目的の無い空間を作り、雑談を通じて新たなつながりを作り出す

人と人とのつながりは新たな挑戦を行う際の武器になりえると考えた我々は、初対面の人同士を雑談やグループ活動を通じてつなげていきたいと考え、イベントを企画・実施した。今年はコロナ禍による外出自粛もあり気軽な対面が難しかった背景もあり、考えていた以上の需要が生まれた。

② 価値観を広げる茨大トーク

日時；2020年11月21日(第一回)

1月20日(第二回)

対象：茨大生

目的：大学生の価値観を広げるための話を聞く。

私達の周りにいる人々は、それぞれにそれぞれの価値観に基づいた人生がある。自分たちの人生の先輩をゲストにその価値観を伝えてもらい、自分たちの価値観の広がる経験をすることで、今後の人生の選択肢を広げてもらいたいと考えた。そうして、IOPラボとの連携を行ったり、モチベーショングラフを用いたりとより実践的なイベントを企画・実施した。

③ ラジオ出演

日時：2020年12月23日

対象：視聴者様方

目的：自分たちの活動の拡散

自分たちの活動や、コロナ禍の現状での学生の声を多方面に届けた。複数のイベントを実施してきた我々の苦労話や成功譚を和気藹々とした雰囲気でも共有した。学生のこのような自主的で影響力のある活動の発信の一助になることができた。

3 : 議事録・活動記録

雨澤 明日香

No.	日時	場所	活動内容	参加者	実働時間
1	2020年 7月1日 21:00 - 23:10	オンライン	自己紹介、チーム名・役職決め、プロジェクト構想立案	結城、浅野、小野崎、雨澤、大橋	2:10
2	2020年 7月2日 13:00 - 14:40	オンライン	現地オンライン視察、具体的な活動内容に関する打ち合わせ	結城、浅野、小野崎、雨澤、大橋	1:40
3	2020年 7月9日 13:00 - 14:30	オンライン	教員を交えた構想発表反省会	結城、浅野、小野崎、雨澤、大橋、羽田	1:30
4	2020年 7月15日 21:00 - 0:00	オンライン	反省、目的の再考	結城、浅野、小野崎、雨澤、大橋、羽田	3:00
5	2020年 7月20日 21:00 - 21:40	オンライン	目的最終決定	結城、浅野、小野崎、雨澤、大橋、羽田	0:40
6	2020年 7月22日 21:10 - 22:50	オンライン	企画立案、年間計画の見直し	結城、浅野、小野崎、雨澤、大橋、羽田	1:40
7	2020年 7月29日 21:00 - 22:50	オンライン	成功の基準・検証方法再考、企画書確認	結城、浅野、小野崎、雨澤、大橋、羽田	1:50
8	2020年 8月5日 21:00 - 22:30	オンライン	成功の基準・検証方法決定、SNSについての話し合い	結城、浅野、小野崎、雨澤、大橋、羽田	1:30
9	2020年 8月18日 13:00 - 15:40	オンライン	企画についての話し合い	結城、浅野、小野崎、雨澤、大橋、羽田	2:40
10	2020年 8月20日 13:30 - 15:00	オンライン	広報室・山崎さんを交えてのミーティング	結城、浅野、小野崎、雨澤、大橋、羽田	1:30
11	2020年 8月25日 13:00 - 15:00	オンライン	企画についての話し合い	結城、浅野、小野崎、雨澤、大橋、羽田	2:00
12	2020年 9月2日 21:00 - 23:10	オンライン	現状の問題点解決(名称、リスク管理について)、企画についての情報共有	結城、浅野、小野崎、雨澤、大橋、羽田	2:10
13	2020年 9月9日 21:00 - 23:30	オンライン	企画についての話し合い	結城、浅野、小野崎、雨澤、大橋、羽田	2:30
14	2020年 9月13日 15:00 - 16:40	オンライン	企画班分け	結城、浅野、小野崎、大橋、羽田	1:40
15	2020年 9月25日 13:00 - 14:30	オンライン	各企画班間での情報共有	結城、浅野、小野崎、雨澤、大橋、羽田	1:30
16	2019年 9月25日 16:00 - 18:00	オンライン	企画プレテストおよびその反省、各企画班間での情報共有	結城、浅野、小野崎、雨澤、大橋、羽田	2:00
17	2020年 9月30日 21:00 - 22:50	オンライン	各企画班間での情報共有、後期報告会へむけた話し合い	結城、浅野、雨澤、大橋、羽田	1:50
18	2020年 10月6日 14:00 - 15:00	オンライン	後期報告会へむけた話し合い	結城、浅野、小野崎、大橋、羽田	1:00
19	2020年 10月14日 15:20 - 17:40	駅南サテライト	広報室・山崎さんを交えた話し合い	結城、浅野、小野崎、雨澤、大橋、羽田	2:20
20	2020年 10月21日 15:00 - 17:30	オンライン	企画についての話し合い、ラジオ出演についての話し合い	結城、浅野、小野崎、雨澤、大橋、羽田	2:30
21	2020年 10月28日 15:00 - 17:30	駅南サテライト	(イベントに)呼びたい人プレゼン	結城、浅野、小野崎、大橋、羽田	2:30

22	2020年 11月4日 15:00 - 17:30	オンライン	企画班ごとの話し合い	浅野、小野崎、雨澤、大橋、羽田	2:30
23	2020年 11月19日 10:20 - 12:00	オンライン	価値観を広げる茨大トークについて	結城、浅野、小野崎、雨澤、大橋	1:40
24	2020年 11月25日 15:00 - 16:30	駅南サテライト	ラジオ出演について、イベントの反省	結城、浅野、小野崎、大橋	1:30
25	2020年 12月16日 21:10 - 22:10	オンライン	価値観を広げる茨大トークについて	結城、浅野、小野崎、雨澤、大橋	1:00
26	2021年 1月6日 21:00 - 0:00	オンライン	価値観を広げる茨大トークについて	結城、浅野、小野崎、雨澤、大橋、羽田	3:00
27	2021年 1月13日 22:00 - 0:00	オンライン	価値観を広げる茨大トークについて	結城、浅野、小野崎、雨澤、大橋、羽田	2:00
28	2021年 1月29日 18:00 - 19:30	オンライン	提出物について	浅野、小野崎、雨澤、大橋	1:30

表 1 : 議事録・活動記録

4：活動トピック

大橋 拓朗

茨内リンクチームで行った活動としては、2つのトピックが挙げられる。第一に、「みんなで茨大トーク」、「価値観を広げる茨大トーク」という2つのイベントの開催であり、第二に、茨城放送のラジオ番組「青春インタビュームービングなう！」への出演である。

①「みんなで茨大トーク」について

「みんなで茨大トーク」とは、11月4日、18日に水戸駅南サテライトにて開催されたイベントである。本イベントは雑談を通して大学生の新たなつながりを生み出すことを目的として開催され、ミニゲームや雑談を通して参加者間の親睦を深めた。本イベントは二部構成になっており、第一部は三人を一グループとした小グループでの活動、第二部は六人一グループとした大グループでの活動であった。小グループの活動としては、自己紹介や「そうそうそう」「ワンワード」といったゲームを基にしたミニゲームを行った。大グループでの活動としては、小グループでの活動によってできたつながりや活動を土台に、雑談をした。



図1：第一部の活動風景



図2：第二部の活動風景

②「価値観を広げる茨大トーク」について

「価値観を広げる茨大トーク」とは、11月21日、1月20日の二度に渡って開催されたイベントである。本イベントは、茨大生の価値観を広げ、挑戦の契機を作り出すことを目的としている。初回は水戸駅南サテライトにて開催され、第二回は zoom を用いてオンラインにて開催された。初回のゲストには、茨城大学院理工学研究科博士後期課程に在籍中の高橋健太さん、第二回のゲストには、茨城大学広報専門職の山崎一希さんをお迎えし、お二方の人生を振り返る深い視点からお話をいただいた。初回の参加者は5人、第二回の参加者は12人であった。

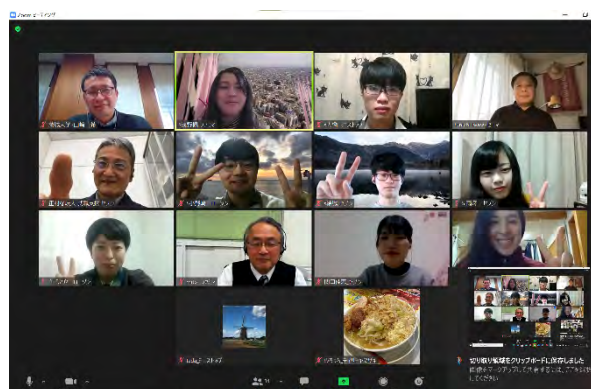


図3：価値観を広げる茨大トーク Vol.2の写真撮影

第一回のイベントは、小グループでのモチベーショングラフの共有と、ゲストによる講演の二部構成で開催した。第二回のイベントでは、モチベーショングラフを用いた、参加者間の交流が行えなかったため、ゲストへの質問の時間の拡大及び、イベント後の参加者交流会の開催で代替した。



図4：価値観を広げる茨大トークの講演風景

③「ラジオ出演について」

茨城放送のラジオ番組「青春インタビューービングなう！」に、茨内リンクチームとして出演した。2020年12月26日（土）、2021年1月30日（土）の二回に出演し、コロナ禍におけるプロジェクト演習の活動や、大学生としての生活についてお話をした。



図5：実際の収録風景



図6：最後の記念撮影

5：個人レポート

なんとなくから再構築へ

茨城大学 2年 結城 大雅

プロジェクト演習っていう授業興味ない？チームが成立しないから入ってくれと助かる。同じチームの友人からこのような連絡が来て、私はこの授業を履修しようと決めた。今思えば本当に安直な理由だなと思う。その時は、自分のせいでほかの人の希望が絶たれてしまうと思うと自分がつらくなってしまいうの後悔するよりはやろうという気持ちがあったのだろう。そして、もう一つこの授業を受けた理由がある。前期は新型コロナウイルスによりすべての授業がオンラインとなり、本当に自堕落な生活を送っていた。1年生のときは毎日2時間半かけて大学に行き帰ってくるというハードな生活を送っていたために、通学時間で浮いた分を自分でもどう過ごせばいいかわからなくなっていた。プロジェクト演習を受ければ、通学時間の分を埋め合わせすることができるのではという考えもあって履修することに決めた。

しかし、甘い考えで履修したこの授業は非常に厳しいものであった。先ほども述べた通り前期がオンライン授業だった分、レポートの量も非常に多かった。チームで考えるべき、あるいはやるべきことも詰まっていたため、それらを両立することに苦労した。さらに今回はリーダーの役職についていたため、その仕事量は相当だった。私は小学校、中学校の頃は積極的にリーダーを務めていたが、高校生に上がってからはそのような役割を務めることに消極的になっていた。久しぶりにこの役職になってみて、改めて企画を取り仕切ることを大変さを感じた。私は昔から他人に仕事を託すよりも自分でやった方が早いと思っていて、最初の方でもその考えでずっとやっていた。しかし、実はチームで分担してやった方が早いということはリーダーという役割をやってきた中で生まれて初めて感じたし、それを気づかせてくれたチームの仲間には非常に感謝している。このように厳しい状況下の中でたくさんの苦労をしてきたがその分、4つの収穫を得ることができた。

まず、苦手だったコミュニケーションの能力が上がったことだ。中学の時にあったとある事件から限られた親しい人としかしゃべれないという性格を持っていた。自分でもこの性格を引きずってはだめだと考えていたし、早く治したいと思っていたがなかなかその機会がなくて今に至っていた。この授業ではそんなことは関係なく多くの人と話すことになるのでいい機会だと思い、会話がしっかりできるようになるための本を買ったり、接客業でアルバイトを始めたりするなど、積極的に自分の弱点を克服しようとした。結果的に、イベントでその力を発揮することができ、自分から相手の会話の詳細を引き出したり、そこから発展させたりすることができるようになった。

次に、メールの基本的な作法だ。先ほども述べた通り、当時私は積極性がなかったので先生にメールを送る機会が全くなかった。先生方や外部の方々とのやり取りの中でメールの基本を覚えることができた。社会に出れば会社内部や企業との取引先とのやり取りはメールが多く、そこで自分の無作法なメールのために取引先との関係が悪化し、自分の企業の業績が悪化する、などと考えるとここでしっかりと学べてよかったと思う。また、そのおかげで先生を含めいろいろな方々へのメールを積極的に送れるようになったという点では成長したなと感じている。

最後に、広報の難しさだ。私たちのチームでは2つのイベントを企画し、ぜひとも来ていただきたい対象を絞り、Twitterを使って積極的に広報したのにもかかわらず、人がなかなか集まらなかった。Twitterは良くも悪くも拡散性があるので、自分たちがイベントをするとツイートすれば自然と人が集まってくるものだとばかり思っていた。しかし、現実はいまうまくなかった。むしろ、自分たちが直接来てほしいという旨を話してやっと来てくれるということがほとんどだった。今後イベントなどを開催する際には今回の教訓を生かしていきたいと考えた。

この授業を通して、私は土台の部分が本当に何もかもできていなかったことを強く痛感させられた。なんとなく履修したということもあり、この授業をいやに思ったり途中で投げ出したいと思ったりしたことがたびたびあった。また、自身の不手際により先生方に多大なご迷惑をおかけしたこともあった。ただ、この授業を受けていなければ、自分が非常にもろい土台のまま社会に突っ込んでいったわけで、そう考えると恐ろしいと思った。こんな欠点だらけの自分の性格を正していただいたプロジェクト演習を受けたチームの仲間やお世話になった先生方や外部の方々には感謝申し上げます。また、この成長をばねにいろいろなものに積極的に挑戦したいと感じたし、自分の欠点を今よりも潰していきたいと強く思った。

コロナ禍での活動・交流を通して

茨城大学 2年 浅野 楓

本レポートでは、2020年度のプロジェクト演習の授業を通して得られた学びや発見について、新型コロナウイルスの感染拡大が続く状況での活動・交流に注目しながら述べていきたい。

今年度のプロジェクト演習の授業は、数か月遅れての開始となった他、新型コロナウイルスの感染拡大により昨年度とは大きく異なった授業形態の中で活動を行うこととなったため、メンバーとのミーティングや情報共有の仕方もオンライン環境を中心としたものが増加した。また、茨内リンクチームは、茨城大学水戸駅南サテライトキャンパスを「共創の場」として活用していくことが目的であったが、前期授業期間の間にサテライトキャンパスを訪れることは出来ず、10月頃に初めてサテライトキャンパスを見学することができた。以上の様に、今年度の活動ではこれまでの授業ではなかった様々な困難があったが、活動の中で様々なものを発見できた。私が活動を通して発見できたこと・学べたことは以下の2つのことである。

1つ目は、今後イベント等を開催する際には、状況に合わせて会場や運営形態を変化させていく必要があることだ。コロナ禍の中で、緊急事態宣言や外出自粛要請、「三密」の回避といった、人々の直接的な交流を減らし感染拡大を少しでも抑えようとする動きが重視されていたため、茨内リンクチームでもイベントを開催する際には感染症対策を十分に行った。図1の写真は、2020年11月21日に対面形式で行われた「価値観を広げる茨大トーク」で、3・4人のグループに分かれて自分の人生について話すという企画を行った際の様子を写したもののだが、メンバーと参加者はマスクを着用して話すようにするだけでなく、グループの人数が少なくても十分な距離を取って会話をするようにした。価値観を広げる茨大トークは参加者にも好評であったため、同じように感染症対策を十分に行いサテライトキャンパスで2回目を開催しようと考えていた。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大が大きく進展しまったため、2回目はイベントを開催する直前に急遽オンライン開催に変更した。私はイベントの運営・方針をメンバーと共に決定していく際に、同じ企画・イベントを複数回開催する場合は、参加者にも分かりやすいようにするために、できるだけ同じ条件で開催した方が良いと考えていたため、価値観を広げる茨大トークの2回目をオンライン開催に変更するという方針はこれまでにない新しい形・考えであるように感じた。以上のことから私は、今後のコロナ禍での企画・イベントを開催する際には、周囲の状況や感染リスク等を踏まえた上で、臨機応変に対応・変化させることが重要であることを学べた。

2つ目は、コロナ禍では人々の繋がりが非常に重要なものとなることだ。前述の通り、茨内リンクチームのメンバーがサテライトキャンパスを初めて訪れたのは10月頃であったが、活動開始から間もない頃にオンラインでサテライトキャンパスを視察したことがあった。その際に、サテライトキャンパスの構造や雰囲気等を把握することはできたが、サテライトキャンパスで業務を行う職員の方々の存在を明確に把握したのは10月に初めて訪れた時であった。10月以降から、何度もサテライトキャンパスでミーティングやイベントを開催し、職員の方々とお話をする機会が増加し繋がりを形成できたことで、サテライトキャンパスの活用に関する考え方・アイデアが大きく変化した。現在、コロナ禍で直接誰かと対面する機会は少なく、オンライン環境でコミュニケーションを取ることが多くなったが、サテライトキャンパスの職員の方々と交流を通して、オンライン環境のコミュニケーションでは人々の繋がりを形成できるような工夫をしなければ、相手の考え・心情・立場を十分に把握することは難しく、自分の成長に結びつかないことが分かった。

今年度の活動を振り返ると、環境の変化が非常に激しくメンバー全員が変化に慣れることに苦労していたように感じた。また、思うように活動・企画を進行できない場面も多々あった。しかし、そのような中でも学べたものは非常に多く、今後の学修・生活環境に活かしていくことで更に成長できそうな学び・発見を得ることができた。今後は、変化に直ぐ対応できるようにするだけでなく、今年度の活動で学べたことを活かして、社会人になるに当たって重要な知識・学びを身に付けていくことを意識していきたい。



図：価値観を広げる茨大トーク

一步踏み出す

茨内リンクでの活動を通しての成長

茨城大学2年 小野崎 邦彦

プロジェクト演習の募集が開始された今年の6月、私はこの授業への参加を決めかねていた。大学生活において私は様々な人と関わり、その中で多くの挑戦をしていきたいと考えている。アクティブラーニング要素が多いこの授業はそんな私のやりたいこと、目指していることと非常にリンクしているともいえる。しかし、私はこの授業への参加を決めかねていた。なぜなら外出することが制限されるようになったコロナ禍の日々、自宅において自粛生活を送っていた私の体にある異変が起きていたからである。私は自粛生活を送り、オンライン授業を受けていたある日から突然、オンラインで発言しようとするのが気分が悪くなるという原因不明の症状に悩まされていた。特にオンラインでプレゼンをしようとするのが気分が悪くなり、吐き気に襲われた。話したくないのではなく、話したいけど話せないのだ。プレゼンがしたくないのではなく、プレゼンはしたいけどプレゼンをすることができないのだ。オンラインで発言するという「当たり前」のことができないということに対して私は大きな焦りや不安を感じていた。本心ではいろいろな人と関わりたい、多くのことに挑戦していきたいという気持ちがあっても体がそれを拒んでいた。人とのオンラインでの関りやオンラインでプレゼンをすることが多いであろうこの授業に参加することに私は大きな不安を抱いていた。周りの友人や先生方にはこの症状で悩んでいることを言いたくない、心配をかけたくないという気持ちがあり、このことに悩んでいることは一部の親しい友人にしか明かしていなかった。参加するかどうかわ私の中で非常に悩んだがこの授業を履修したいという自分の気持ちに正直になり、最後まで活動をできるかは分からないが自分にできる範囲でとりあえずやってみようという気持ちで参加を決めた。

前期の活動では、チーム内ミーティングにおいて時に気分が悪くなることもあったが特に大きなトラブルもなく活動を続けることができた。しかし、役職においては発言の機会が少なそうな書記を選択する、7/9に行われた構想報告会では発表を控えるなど自分にできる範囲での活動を行った。このことを許容してくれたチームメンバーには本当に感謝している。

私がこの症状に本格的に向き合わなければならなかったのは夏季休業中に行われたプレゼン講座だ。プレゼン講座の中で1人持ち時間5分で授業履修者全員に対し、オンラインでプレゼンをする機会が設けられていた。私はプレゼンをしようにも気分が悪くなるのではないかと、吐き気に襲われるのではないかと不安を感じていた。しかし、大学のカウンセラーの方にこのことを相談したところ成功体験を積み上げなければこの症状から回復することはできないかもしれないと言われたのだ。つまり、不安を感じていたとしても躊躇したままではこの症状は改善されず、実際にプレゼンをするという成功体験を積み重ねなくてはこの症状は改善されないのだ。オンラインでプレゼンをするということに対して私は非常に大きな不安を感じていたが、プレゼン講座での個人プレゼンを行うという決断をした。個人プレゼン当日私は非常に大きな不安を感じ、緊張して挑んだが、大きなトラブルもなく無事にプレゼンを成功させることができた。このことは私にとって非常に大きな成功体験となり、オンラインで発言すると気分が悪くなるという症状克服の大きな一歩となった。

この後、徐々にできることが増えていき後期のキックオフ報告会・活動報告会での発表、価値観を広げる茨大トークでの進行役、茨内リンクとしてのラジオ出演などの成功体験を経て今ではオンラインで話すのが気分が悪くなる、吐き気に襲われるという症状から完全に立ち直ることができた。このことは私個人として、プロジェクト演習を通しての大きな成果であると感じている。今日まで共に活動してきたチームメンバー、一步を踏み出すための機会を与えてくださった先生方には本当に感謝している。この授業を通してオンラインで話せないという症状を克服した私は一步を踏み出すことができたともいえるだろう。チーム活動として実際にイベントを開催したことで様々なことを学ぶことができた。この経験をもとに今後も多くの人と関わり、多くのことに挑戦していきたいと考えている。



図：価値観を広げる茨大トーク

活動を通して身に付けた3つの力

茨城大学2年 雨澤 明日香

プロジェクト演習を履修するにあたって私が達成を目指したのは「働きかけ力」「計画力」「チームワーキング力」の向上である。結論から述べると、私はプロジェクト演習の活動をおこなったこの数カ月間で、それら3つの力を向上させることができた。以下ではこれまでの活動を振り返りつつ、それらがどのように3つの力の向上にかかわっていったかについて考察してまとめる。

茨城水戸駅南サテライトを拠点とした共創の場づくりを課題の根底に置いた私たちのプロジェクトは、今年度から開始したものだ。前年度にも活動していて先例のある他のプロジェクトとは違い、プロジェクト演習に初めて参加する2年生が右も左もわからないところからスタートさせた。さらに2020年は新型コロナウイルスの流行によってさまざまな制限を受けたなかでの活動となった。そのため振り返ってみると苦労が多かったように思うが、そのぶん学びも多い数カ月であった。

茨内リンクの活動は、共創の場づくりというテーマを実現するための第一ステップとして、人と人をつなげることを目指した。チームでイベントを企画し、その参加者同士のつながりを形成しようというのが具体的な活動内容だ。イベントを企画するにあたってチームは何度もミーティングをおこない、最終的に2つのイベントを企画した。1つはオンライン授業化によって交流が少なくなった茨大生に交流の場を提供しようというもの、もう1つは誰かの体験談を聞いて自分の価値観を広げ、それをきっかけとして何かに挑戦したり、イベントをとおしてつながりを得た人と共創したりすることを促すというものだ。他の企画案もあったなかでこれら2つのイベントを企画しようと決めた理由は、茨大生同士の交流が少なくなっている状況を問題だと考えたから、そしてその後の人生に大きく影響するかもしれない進路決定を下す大学生が、気軽に誰かの体験談を聞くことができる場が少ないことを問題だと考えたからだ。プロジェクト演習をとおして向上させることを目指した3つの力のうちの1つである「計画力」の中身である、課題解決へ向けた計画を立てる力はこのようなイベント企画によって向上したと考えられる。

イベントを開催するにあたってもっとも重要なことであり、なおかつ難しい課題となったのは、他者を巻き込むことだった。課題解決へ向けてイベントを企画しても、そこに参加してくれる人がいなければ課題は解決されない。しかしどのように働きかけたらいいのか、自分たちのプロジェクトへの賛同を得て協力してもらうにはどうしたらいいのかという問いに答えを出すのは容易なことではなかった。実際、イベントへの参加者を思うように確保できず、チームで悩んだこともあった。私が向上を目指した3つの力のうちの1つ「働きかけ力」は、このように活動のなかでもより苦戦したところで養われたように思う。もともと自分には足りていない力だと考えていたため、他者に働きかけ巻き込むことについて真剣に考え、チームの人たちと悩んだことでわずかでも働きかけ力が養われたのなら、それは向上という目標を達成したと考えている。

最後に、今回の活動全体をとおして学んだことや身に付いたものとして、チームの一員として考え、行動する力「チームワーキング力」を挙げる。プロジェクト演習は学生主体の活動が基本であり、先述したとおり私たちのプロジェクトおよびチームは今年度から開始したもので、例がないなか多くのことを手探りで進めなければならなかった。そのためチームで協調することが非常に重要であったのだ。チームの活動がうまくいくように、他のメンバーとサポートし合うこと、自分のできることに尽力すること。その大切さはわかっているが、実際にチーム活動を経験しなければ身に付くものではない。今回のチーム活動の実践でそれらを学べたことは、大きな成果である。

今年度のプロジェクト演習の活動をとおして身に付け、向上した3つの力をこれからも生かし、向上させ続けることを今後の課題としたい。



図：茨城大学水戸駅南サテライト

チームで活動するということ

茨城大学 2年 大橋 拓朗

私は一年間、茨内リンクのメンバーとして活動をしてきた。このチームは今年度から発足したばかりのフレッシュなチームで、それ故に様々な困難を経験したように感じる。過去の蓄積が存在しないので十分な広報力も有しておらず、問題を解決するためのノウハウもなかった。しかしこのような環境であったからこそ、他チームよりも多くの会議を重ね、チームメンバー全員で一丸となり問題を対処してきた。チームワーク力という面においては大きな成果を挙げられたように感じる。チームの目的の一つである「チームの仲を深める」というものも十分に達成できた。

私がこの一年間達成したい目標としてきたのは、思考力、基礎的素養、社会生活力の三点であった。特に、思考力の中では計画力、基礎的素養の中では話す能力、社会生活力では人間関係構築力をメインの課題としていた。ここでは、前述のチームワークの話と関連して、思考力の部分をメインに、三点について記述していきたい。

プロジェクト演習履修時に配布される社会人基礎カテゴリーには、計画力は「課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力」と定義されている。私はこの定義を基に、立案したプロセスの中に、実行可能な具体的手段や、余裕を持った時間配分の計画を、個人レベルで盛り込めるようにすることを今年度末の具体的な目標としてきた。この点については、一年間の活動の中で、概ね達成できたと考えている。それ以上に、私がこの一年で学んだのは、計画力とは必ずしも個人のだけの内容ではないという点である。私は当初、個人の目標としてこの項目を捉えていた。しかしながら、ノウハウの全くない環境で、様々な問題をチーム一丸となって取り組んでいく経験を通して、チームとしての計画力がより重要であると感じることが多くなった。チーム全体で課題を解決するための道筋を理解し、解

決するためのプロセスを立案するのである。個々人の計画力ももちろん重要であることに変わりはない。しかし、個人の頭の中だけでは、必ず限界が生まれてしまう。そのような時、立てた計画を様々な視点から吟味・検討してくれるチームメンバーの存在がとても重要なものになるのである。

話す能力については、同書では説明能力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力と定義されている。この点についての私の目標は、公の場でのプレゼン・説明が論理的でわかりやすいものであることに加えて、聞き手からの質問や批判にも動揺せずに対応できるようにするというものであった。一年間の活動を通し、イベントや報告会、ラジオ出演など、様々な話す機会に恵まれた。それらにより話すことにある程度慣れてきたものの、公の場でのコミュニケーションには改善の余地が残ったように感じられた。

人間関係構築力については、同書では生活を送る上で必要な、人間関係を円滑にするための力と定義されている。この点についての私の目標は、様々な場におけるルールやマナーを把握し、自分の態度を客観視することができるだけでなく、常々遵守できるようにすることであった。これについても、一年の活動を通して常々ではないものの、多くの場面で遵守できるようになった。

以上の二点においても、計画力と同様に、チームの重要が感じられた。チームであったからこそ改善するための機会に恵まれ、また、それらの機会を活用できたのだと思う。



図1：みんなで茨大トーク風景



図2：価値観を広げる茨大トーク風景

プロジェクト演習を通して私が得たもの

茨城大学 2年 羽田 皓

私がこのプロジェクト演習の講義を受けたのは、自分の意思がすべてではなかった。友人のグループに人数が足りず、一緒にやらないかという誘いを受けての参加であった。私はこの誘いを受けてからも随分と悩んだ記憶がある。プロジェクト演習がどのようなものかは友人に聞いていたから、自分に自信のない私はどうもこのような大きな、そして多くの人に影響を与える活動が苦手であるのだ。だが、いつもそれと同時に自分にとって重要な体験になると期待もしている。経験則としてこのような感情を抱いたときはやってみた方が面白くなると考えている私は、期待に騙されたふりをして参加することにした。

茨内リンクチームに所属して得られたものは、今まで学びようがなかった社会的な学びと、自分自身に対する新たな知見である。具体的にはまず、社会的な学びについてである。このプロジェクト演習は、私が思っていた以上に社会に近いものであった。その中でも一番感じたことは、人間関係の難しさと、成功への道の多さだ。私と違い自分から志願してこの講義を取った人が大半のチームなので、この課題を成功させたい、という気持ちは一緒であった。しかしそれでも思考にずれはある。チーム内で受け入れられる点も受け入れられない点もちろんあった。初期の会議がそれを一番表している。司会もおらず、言いたいことのある人が言いたいことを言い合うだけ、と思いきや発言しない人もいた。けれど当時の私はそんな現状を理解していながらも、そして行っていることは不毛なことだとは思いつつも口出しはしなかった。なぜなら、チーム内でやっていることの全否定ともとれることをこんな初期段階に発言したらチームの仲が壊れかねないと危惧したからだ。個人的に、チーム内の人間関係は何よりも重要という考えもあったことも影響している。だが、会議の数をこなしてきたことや、時間がたつにつれお互いの理解が深まったことで、最終的には口論を討論に進化させることが出来た。時間に任せる、という方法が正しかったのかは今でもわからないが、ある程度の成功を修めることが出来た。この正解が分からない不安定さや人間関係の不安定さは、きっと社会に出た後も変わらないのだろうと感じた。続いて自分自身に対する新たな知見についてなのだが、これはプロジェクト演習の達成目標ルーブリックで活動を振り返っている時に得たものである。それは、私は私が思っていた以上に主体的な行動ができる、ということである。この発見はかなり大きいものであった。後半の、先に述べた討論へと進化した会議や私の担当するイベントの打ち合わせでは、不明な点への質問をしたり自らの意見を臆せず言ったり、イベント会場の設営等でも率先して動いたりと自らイベントやチームのために動くことが案外できていたと思う。ではなぜこれを発見することが出来なかったかを考えると、この主体性はチーム内の環境によって発現したりしなかったりするからだと考えた。逆に、私に足りないと思ったのは課題を見つける力である。何か大きなイベントを起こす際には、課題はいたるところにある。その課題の多さに対し、私の課題を見つける力は全く足りていなかった。茨内リンクではこの力が欠けていたばかりに、もう少しで多数の、多方面の人びとにご迷惑をかけるところだった。これだけ大きな間違いであっても気づかなかったのは単純に不甲斐なかった。

これらすべてのことを踏まえうえで、私が現在最も必要としているものが見えてきた。それは、自分に自信を持つことである。これがあれば、方向性がばらばらな会議でも自分の思う正しいことに向って他人を叱咤も激励もすることが出来るし、そうすれば物事の成功のビジョンもはっきりと見ることが出来るだろう。そんないい環境下では己の主体性も遺憾なく発揮できるだろう。ただこの時気を付けたいのは、他人の意見をないがしろにしないことだ。チームは全員が全員違う言いたいことを持っている。それを無視すると、ただの一人よがりになってしまう。それに、自分以外の意見もしっかりと聞いておかないと、私の弱点でもある無数の課題の一つや二つが零れ落ち、大きな損失につながるかもしれないので気を付けなければならない。

以上が、このプロジェクト演習を通して主に学んだことである。勿論これ以外にも学んだことは多数ある。茨内リンクの企画したイベントも成功したりしなかったりして、そのたびに多くの反省点が得られた。例を挙げるなら、人を呼び寄せるための広報の難しさや、報連相の重要性などがそれにあたる。この演習では本当に苦労するところも多かったが、その分多くの学びが得られた。私達が企画したイベント中にも学びが得られたほどだ。私は、これからの人生に重要なこれらの報酬を得られたのだから、このプロジェクト演習に参加したことを後悔することはないだろう。

6：終わりに

浅野 楓

今年度は新型コロナウイルスの感染拡大により、対面での活動が十分に行えず、主にオンライン環境での活動を行った。実際に、水戸駅南サテライトキャンパスを活用できるようになったのも後期からであり、夏季休暇まではメンバー全員がオンライン環境で顔を合わせる形になるなど、昨年度とは全く異なった環境での活動となった。活動開始から間もない頃は、メンバー全員がオンライン授業に不慣れであったため、オンライン環境で十分な活動が行えるのかどうか不安に思うことが多かった。しかし、ミーティングや個人での企画提案などを重ねることで、活動内容をより深めていくことが出来たほか、みんなで茨大トーク・価値観を広げる茨大トークの様に、対面形式でのイベントの開催やラジオ出演の機会も得られた。価値観を広げる茨大トークでは、講演者の方の人生を振り返る中で、どのような経緯・感情を持って現在に至っているかが分かったことで、今後社会人としてどのような姿勢で生きていくのかを深く考えることができた。また、みんなで茨大トークでは思うように参加者が集まらなかったため、思い描いていたようなイベントにはならなかったが、イベントを開催する際の広報・企画などの調整がどれ程難しいのか理解できた。以上のことを踏まえると、昨年度までの対面授業が中心であった授業形態に劣らない活動を行えたと思われる。また、イベントを通して社会人の方々とお話をする中で、今後社会人として生きていくための行動規範等を学ぶこともできたため、プロジェクト演習の授業を通して得られたものは非常に多い。

当チームでは1年間の活動を通して、社会人としての行動規範や生き方、企画を発案・運営することの難しさなど、今後の大学生生活・社会人生活で重要な観点を学んだ。来年度の授業も対面授業とオンライン授業の併用であり、引き続き新しい生活様式の中で学修をしていくと考えられる。しかし、今年度のプロジェクト演習で得られた学びは今後の学修で大いに活かすことが可能であるため、活動の中で見つかった疑問・課題を解決していくための糸口として利用し、新たな価値観・視点を得られるよう努力していきたい。

最後になりますが、プロジェクト提案者である赤岩先生、茨城大学水戸駅南サテライトキャンパスの皆様方、イベントに参加して下さった皆様、そしてプロジェクト演習担当教員の鈴木先生、神田先生、岩佐先生、1年間茨内リンクチームの活動を支えて下さり、ありがとうございました。皆様のご支援・ご協力のもと、茨内リンクチームは1年間無事に活動することができました。活動の中で学べたことを、今後の学修・生活に活かしていけるよう努力して参ります。

3 : Mito Bloom チーム

リーダー	： 山口二千翔	茨城大学人文社会科学部現代社会学科	2年
副リーダー	： 木村友紀奈	茨城大学人文社会科学部現代社会学科	3年
書記	： 稲野邊優香	茨城大学人文社会科学部現代社会学科	3年
書記	： 太田 成美	茨城大学人文社会科学部現代社会学科	2年
会計	： 須摩 玉来	茨城大学人文社会科学部現代社会学科	2年

主担当教員：鈴木 敦 茨城大学人文社会科学部教授
副担当教員：岩佐 淳一 茨城大学教育学部 教授

Mito Bloom チーム

1 : はじめに

木村 友紀奈

私たちは「地域コミュニティを重要視し、支援する」チームである。

昨年度、「Mito Bloom」チームは茨城大学人文社会科学部プロジェクト演習の枠組みの中で結成した。活動拠点は水戸市であり、そこで暮らす人々の地域コミュニティを活性化させるために活動を行っている。今年度は昨年度のメンバーに新たなメンバーを加え、計5名で活動を行ってきた。

活動拠点としている水戸市は、他の地域の例外ではなく、地域コミュニティの希薄化が懸念されている。ひと昔前は地域ぐるみのイベントやご近所づきあいが盛んにおこなわれていたが、現在はそのような光景が少ない。このような状況をうけ、市内では「310 食堂」という交流イベントが定期的に開催されている。これは「NPO 法人セカンドリーグ茨城」様を運営母体とし、食を通じて地域住民の交流の場となることを目指す、水戸市の子ども食堂である。市内3か所を拠点に開催され、大人から子どもまで幅広い世代が参加できる交流イベントだ。私たちはこのイベントと自分たちの活動の趣旨が似ていると感じ、昨年から連携して活動を行っている。

昨年度は「310 食堂番外編」と題し、地域住民に参加を募り新たな交流イベントを開催した。また、310 食堂という交流の場の認知度を向上させるため、紹介動画を作成して広報活動にも乗り出した。今年度もそのような活動を引き継ぎ、より多世代にアプローチをして活動の強化を目指す予定であった。しかしコロナ禍の影響が活動を直撃した。感染予防の観点から、不特定多数の人が集まる交流イベントの開催が困難になってしまったのだ。連携していた310 食堂も当面の間通常開催が見送られ、私たちは活動の見直しを迫られることとなった。

しかし、私たちは困難な状況下でも模索し続けることで、地域コミュニティの支援を試みた。

議論の末にたどり着いたのは、「間接的な支援の形」を新たに生み出すことであった。具体的な内容は次項以降で詳しく述べるが、簡単に言うとインターネット上に310 食堂の一つの拠点（レシピサイト）を立ち上げ、310 食堂に興味を持つ人を増やす仕組みだ。単に活動紹介を行うのではなく、レシピサイトという新たな切り口をつくることで、これまで興味を持っていなかった層にも届けることが狙いである。同時に昨年力を入れられなかったSNS 上での広報にも力を入れ、広報活動の強化を図った。今年度の活動は、どれも直接的な会話や関係性を生み出すことはできないものの、コロナ禍が終息し、以前のように人が集まれるようになった際に生きるような活動を目指した。

新たな活動内容に苦戦することも多々あった。感染予防の観点からチーム内でのコミュニケーションもオンラインでのやり取りが大半を占め、昨年よりも色々な面で負荷が大きかったと思う。しかし、その分学びの多い活動になった。活動を開始した当初は、活動を通して社会人基礎力の中に位置づけられる実行力や発信力の養成を目指していたが、この項目以外にも各個人が成長を感じることができたと思う。

約半年間という、例年よりも短い活動期間ではあったが、困難な状況下でも工夫して活動を続けることができた。その記録がこの報告書である。ぜひ最後までお目通しいただければ幸いである。

2：活動概要

太田 成美

(1)活動の目的

私達の活動の最終目的は、水戸市民の地域コミュニティを支えることである。今年度は、地域コミュニティを支える場である 310 食堂に新たな魅力を作り、新たな層に 310 食堂について知ってもらうこと、そしてコロナ禍でも幅広い世代が 310 食堂に関われる仕組みを創ることを目的とした。

(2)活動の概要

新型コロナウイルスの影響で 310 食堂の開催が見送られていたため、私たちはオンライン上で 310 食堂の新たな魅力をいうお話があり、Mito Bloom ではそこに掲載される農家飯のレシピをより詳しくみられるようなサイトを開設することになった。
作ることにした。310 食堂の運営母体である NPO 法人セカンドリーグ茨城で、茨城の農家さんを対象にしたパンフレットを作成すると

①第 2 回チーム内ミーティング

2020 年 6 月 29 日、Zoom を用いてオンラインで実施。

これからどのようにプロジェクトを進めていくかについて、大まかな方向性を決めた。新型コロナウイルスの影響で休業中だった 310 食堂の新たな魅力をどのように作っていくかを話し合い、オンラインを活用した活動を行うことを決めた。

②セカンドリーグ茨城の横須賀様との顔合わせ

2020 年 7 月 19 日、Zoom を用いてオンラインで実施。

310 食堂の運営母体である NPO 法人セカンドリーグ茨城が今後新たに始めようとしている活動についてお話を伺った。そこで、農家の方々と地域住民をつなげる地域の小規模農家にフォーカスしたカタログの作成が企画されていたため、Mito Bloom 提案の Web 制作企画との連動を検討した。

③セカンドリーグ茨城の横須賀様とミーティング

2020 年 8 月 7 日、Zoom を用いてオンラインで実施。

パンフレット制作の段取りについて打ち合わせを行った。

④農家様へのご協力依頼

2020 年 9 月 13 日、茨城県労働福祉会館にて実施。

NPO 法人セカンドリーグ茨城の中村三郎様にご協力いただき、電話で農家の方々にレシピ提供の協力を依頼した。

⑤試食会の実施

2020 年 10 月 24 日、マチノイズミにて実施。

農家の方々にいただいたレシピを実際に調理し、試食した。また、ホームページに掲載するための写真も撮影した。

⑥ホームページ内容確認

2020 年 12 月 8 日

ホームページ制作ツール Wix を用いて作成した Mito Bloom のホームページをセカンドリーグ茨城の横須賀様にご確認いただいた。

⑦SNS でのカウントダウン

2020 年 12 月 10 日～2020 年 12 月 15 日

ホームページ公開に向けて、SNS 上でカウントダウンを行い、広報活動を行った。カウントダウン用の画像を作成し、Twitter と Instagram 上で 5 日前から公開した。

⑧ホームページ公開

2020年12月15日

農家飯のレシピを掲載した Mito Bloom のホームページを公開した。

3：議事録・活動記録

山口 二千翔

1	2020年 6月27日 10:00 - 10:45	Teams	自己紹介、役職決め等	山口、木村、太田	0:45
2	2020年 6月29日 10:30 - 12:00	zoom	プロジェクト構想立案	山口、木村、太田、(橋本)	1:30
3	2020年 7月6日 10:00 - 11:20	zoom	プロジェクト構想立案・報告会に向けた準備	山口、木村、太田、須摩、(橋本)	1:20
4	2020年 7月10日 16:40 - 17:30	zoom	活動案の具体化	山口、木村、太田、須摩	0:50
5	2020年 7月13日 10:15 - 11:30	zoom	活動案・年間スケジュールの再検討	山口、木村、太田、須摩	1:15
6	2020年 7月19日 15:00 - 16:00	zoom	セカンドリーグ茨城 横須賀様との顔合わせ・活動案のご相談	山口、木村、須摩	1:00
7	2020年 7月20日 10:20 - 11:10	zoom	前日の共有、活動案の検討	山口、木村、太田、須摩	0:50
8	2020年 7月27日 10:30 - 11:20	zoom	HPについて、8月の予定確認等	木村、太田、須摩	0:50
9	2020年 8月7日 16:40 - 17:10	zoom	セカンドリーグ茨城 中村様とパンフレット制作の段取りについてご相談	山口、木村、須摩	0:30
10	2020年 8月15日 11:00 - 12:20	zoom	HPの詳細や今後のスケジュールを確認	山口、木村、太田、(稲野邊)	1:20
11	2020年 9月13日 10:00 - 11:30	茨城県労働福祉会館	レシピ募集に向けて、農家の皆様へアポ取りを実施	山口、木村、須摩	1:30
12	2020年 10月7日 13:10 - 13:40	LINE	後期キックオフ報告会に向けて打ち合わせ	山口、木村、太田、須摩	0:30
13	2020年 10月14日 14:30 - 15:15	zoom	SNS運用について	山口、木村、太田	0:45
14	2020年 10月24日 9:00 - 14:30	マチノイズミ	農家レシピの試食、撮影	木村、太田、須摩、(稲野邊)、(橋本)	5:30
15	2020年 10月30日 9:00 - 9:50	zoom	レシピ集の編集分担について	木村、太田、須摩、(稲野邊)	0:50
16	2020年 11月18日 15:00 - 16:10	zoom	今後の広報、最終報告会について	山口、木村、太田、須摩、(稲野邊)	1:10
17	2020年 12月5日 10:00 - 11:00	Teams	チーム内リハーサル	山口、木村、太田、須摩	1:00
18	2021年 1月8日 9:00 - 10:00	zoom	報告書等役割分担	山口、木村、太田、須磨	1:00
19	2021年 1月21日 12:10 - 12:40	zoom	サイトの広報について	山口、太田、須磨	0:30

4：活動トピック

(1) SNS を利用した広報活動

須磨 玉来

<活動内容>

310 食堂や私達の活動について、より多くの層に周知するために、Instagram 及び Twitter を利用して Mito Bloom の広報活動を行った。

Instagram では、メンバーのおすすめレシピの投稿、ウェブサイトの公開までのカウントダウンを行うことでアカウントを頻りに動かし、フォロワーの目に良く留まるようにした。カウントダウンではウェブサイトに掲載予定の料理の写真を投稿することで興味を持って貰えるようにした。現在、完成したウェブサイトのリンクはプロフィールに掲載し、投稿によってフォロワーをリンクの場所へ誘導する形となっている。試食会の際は Instagram のライブ機能を利用して、試食会の様子をフォロワーに生配信した。また、Instagram の機能を通常版からビジネスプロフィールモードに切り替え、投稿やウェブサイトの閲覧状況が分かるようにした。現在フォロワーは茨城大学の学生を中心に 37 名である。

Twitter では、メンバー紹介の投稿やミーティングの活動報告を掲載し、フォロワーに Mito Bloom の現状が届くようにした。メンバー紹介は、メンバーの情報を公開することで、よりチームについてフォロワーに周知することを目的に行った。方法としては、LINE グループのノート欄にメンバーが自己紹介をそれぞれ投稿し、それらをコピーして Twitter に投稿する形とした。また、ミーティングの活動報告では、実際に会議中に撮影した Zoom の画面を掲載し、定期的に活動中の団体であることをアピールした。フォローについても、茨城大学の学生を中心に積極的に行った結果、現在フォロワー数は当初の目標であった 50 人を上回る 65 人に達している。

広報活動では、知名度が無い中でいかにフォロワーに興味を持ってもらうかを常に考えることが出来た。フォロワー数などの点で伸び悩むことも多かったが、フォロワー目線に立ち、レシピ情報などフォロワーにも有益な情報を織り交ぜるといった工夫を凝らすことが出来た。



図 1：Instagram のアカウント



図 2：Twitter のアカウント

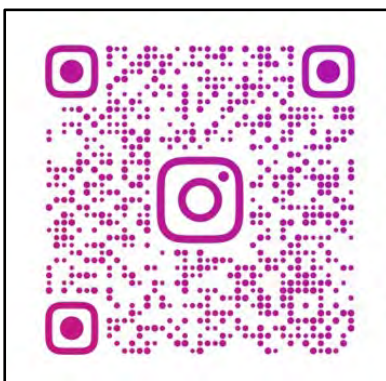


図 3：Instagram アカウントの QR コード



図 4：Twitter アカウントの QR コード

(2)マチノイズミでの試食会

太田 成美

<日時>2020年10月24日(土)

<場所>マチノイズミ

<活動内容>

310 食堂の運営母体である NPO 法人セカンドリーグ茨城の方々にご協力いただき、レシピサイトに載せる料理の試食会を行った。事前にダニエル有機農園とぼんがる有機農園の方々に送っていただいたレシピをもとに、マーボー小松菜・辛ロジンジャーエールの2品を調理し、試食した。マーボー小松菜は通常の麻婆豆腐に小松菜を入れることで、シャキシャキした食感が加わるうえ、栄養価もあがるということで大変好評であった。辛ロジンジャーエールは、大人はもちろん子どももおいしく飲んでくれていた。

また、茨城のゴマ農家の方がいらっしゃっていて、茨城県産のゴマを持ってきてくださった。NPO 法人セカンドリーグ茨城の方にゴマおはぎの作り方を教えていただき、そちらも試食品とともに提供した。マチノイズミでは、アンケート協力のお礼として、新鮮な有機野菜を受け取りに来た地域住民の皆様や310 食堂の関係者にも試食していただき、「おいしいね」・「こういう食べ方もあるんだね。」といった感想をいただいたり、中には「おかわり！」といったお子さんもいたりメンバー以外からも感想をいただくことができた。また、ホームページにレシピを掲載する際のコメントの参考になった。新型コロナウイルスの影響でオンラインでの活動がメインになっていたため、実際に310 食堂に関わっている方々や地域住民の方々と関わり、お話できたことはメンバーにとって、大変活力になった。

また、この試食会の様子を Instagram の IGTV という機能を使って10分程度ライブ配信し、その後アーカイブに残した。調理中のメンバーの様子や完成した料理を映したり、Mito Bloom の活動の目的やレシピ掲載の予定を話したりしたことで、Instagram をチェックしてくださっている方々に興味をもってもらえるようにした。この配信は急遽行ったもので、ライブ感が大変強い映像である。事前に決めていれば、段取りよくあとからも見やすい動画になったのではないかと考える。



図5：試食会の様子



図6：制作したマーボー小松菜



図7：調理中のジンジャーエール



図8：完成したジンジャーエール

(3)ホームページの制作

太田 成美

<活動内容>

310 食堂の運営母体である NPO 法人セカンドリーグ茨城で、茨城の農家さんを対象にしたパンフレットを作成するというお話があり、私達はそこに掲載される農家飯のレシピをより詳しくみられるようなサイトを開設した。

サイトは Wix というホームページ作成ツールを利用し、制作した。レシピのページ以外にも、昨年度の活動で作成された 310 食堂の紹介動画を掲載したり、各種 SNS アカウントとの紐づけを行ったりすることで、私たちの活動がより多くの方に伝わるように工夫した。

農家の方々からいただいたレシピを試作・試食し、サイト掲載用の写真を撮影するとともに、調理時間の確認を行った。また、レシピを、調理時間 30 分を目安に 2 つにカテゴリ分けしたことで、見やすく探しやすいよう工夫を凝らした。さらに、食材名を入れて検索することも可能である。レシピの最後には、試作・試食したメンバーの感想を、編集者からのコメントとして掲載することで、よりそのレシピの味や魅力が伝わるようにした。

ホームページは事前に NPO 法人セカンドリーグ茨城様のご確認をいただいた後、SNS での 5 日間のカウントダウンを経て、12 月 15 日に公開した。また、最終発表会の際にプロジェクト演習を受講している学生に URL (<https://mitobloom.wixsite.com/website>) と QR コードを公開し、見ていただくことができた。



図 9：作成したホームページのホーム画面



図 10：ホームページの QR コード

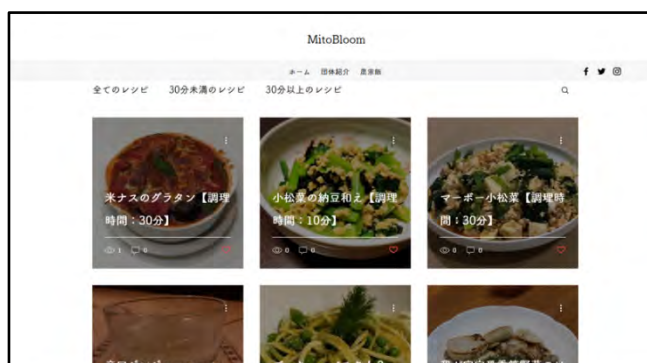


図 11：農家飯のページ

5：個人レポート

コロナ禍の活動において得た3つの力

茨城大学2年 山口 二千翔

今年度、私が Mito Bloom の活動において学んだのは主に実行力、発信力、情報収集力の三つの力である。

まず一つ目の実行力は、プロジェクト開始時点で私にとって最も不足している力であった。特に今年度はコロナ禍により、昨年のような対面でのイベント開催が困難となった。そのため前年のノウハウなどが利用できず、前例の無い中で新たなものを作り上げる必要があり、より実行力が試される年となったのだ。私は実行力の定義を、主に「目的までのプロセスを明確化し、達成のための行動を即座に起こすことが出来る力」とであると定義し、活動の中でその力の習得を目指した。チームの最初のミーティングでは、非対面でも開催できるオンラインイベントの内容を考えることとなり、最終的に大まかな年間計画に落とし込むことが出来た。しかし当時、私はその時点で大体なすべきことが決定したと思い、満足してしまった。しかし、メンバーからの指摘で、目的の達成のために今から何をすべきか、誰がどの作業を担当するべきかなどをまだ決めていないことに気づかされた。私は、実際にプロジェクトを進めていく中でまず何をすべきかなどといった優先順位を決定し、誰に協力を依頼するかなどといった、プロセスを具体化する視点が抜けていたのだ。このミーティングで、私はプロジェクトの実行には多くの人々の協力を得る必要がある、そのためには、目的までのプロセスを明確化し、実際に実行可能であるという信頼を得る必要があることを学んだ。その後、実際にレシピサイトを製作することが決定してからは、どのようなツールを利用し、どの様に連携するか等、構想を具体的な作業に落とし込むことを意識した結果、無事に計画通りレシピサイトを完成させることが出来た。

二つ目の発信力については、私は当初その必要性や難易度を過小評価していた。しかし、私とその重要性を実感したのは、プレゼンを行った際と、SNSによる発信を行った際である。私は、発信力を「自分の意見を、相手の立場、文化的背景、価値観などを理解した上で、相手が理解しやすい形で発信できる力」と定義し、その力の習得を目指した。しかし、当初プレゼンテーションを製作した際には、所々で出てくる固有名詞の説明もなく、目的と活動のつながりが明確に述べられていないなどの指摘を受けてしまった。そこで私は、自分達の活動について知らない立場の人達が、自分たちの発表をどのように受け取るか、客観的な視点から分析することの重要性を学んだ。また、SNSでの発信においても、私達は当初ミーティングの報告などの情報しか発信しておらず、活動に興味を持ってもらう工夫を凝らしていなかった。しかし、主に一人暮らしの学生・主婦にターゲットを絞り、その層に対して有益なレシピの情報なども発信することで、より多くの人々に興味を持ってもらい、無事にフォロワー数の目標に達することが出来た。

三つめは、情報収集力である。今年度は前年度とは全く異なる状況となり、さらに先の見通しも立たない中で、より情報収集の重要性が高まった年であった。特にチーム結成当初のミーティングでは、未曾有の状況下でどんなことが可能であり、何が求められているのか、ほとんど見通すことが出来ず、情報量の少なさを実感した。そこで私が重視したのは、「現場の声を聴く」ことである。私は実行力の定義を、主に「実際に活動したい分野で活躍している人々の生の声を聴き、現場で本当に求められているものは何かを見出すことが出来る力」と定義した。これまでは、データや現場の声に基づかず、勝手に自分の価値観で物事を判断してしまうことが多かった。しかし、実際に何が求められているのかなどといった情報は、現場の人間にしかわからない。そして、コロナ禍におけるオンライン化の進行は、わざわざ現地に行かなくとも、遠隔で現場の人々の生の声が聞けるという点で追い風であると考えた。そこで私は、実際に多くの農家や地域団体との関りをお持ちである、NPO 法人セカンドリーグ茨城の横須賀様、中村様からオンラインでお話をお伺いした。その結果、現在農家の方々と消費者を結ぶ機会が減少しており、それらの問題を解決するために、農家の方々の生活等を発信するパンフレットの制作が計画されているなどの貴重な情報を得ることが出来た。

今年は従来のような対面型のイベントが開催できず、出来ることの少なさを実感し絶望することもあった。しかし、厳しい状況の中で、実行力、発信力、情報収集力を駆使して出来ることを模索した経験は、大変貴重なものであり、確実に自分を成長させたように思う。



図：プレゼンの様子

2年目ならではの視点と成長

茨城大学 3年 木村 友紀奈

昨年度、私はこの Mito Bloom チームを立ちあげ、1年間活動を行った。その1年を土台として、今年度は自分の中で2つの目標を立てていた。1つは「新たに加わってくれたメンバーに、このチームでの活動を好きになってもらうこと」。そしてもう一つは「自分自身の話す力の向上」である。

まず1つ目の目標を掲げた理由として、このチームの長期的な継続を目指していることがある。なぜなら地域コミュニティの活性化というゴールは一朝一夕では達成できないものであり、長期的な関わりが必要だと思うからである。そのため私が卒業した後も活動が続いていくことを願い、まずは今年のメンバーへ活動の魅力伝えたいと考えたのだ。

伝えなかった活動の魅力とは、「活動を通して様々な人と出会う楽しさ」と、「周囲との協力で責任感が養えること」だ。しかしコロナ禍を受け、人と直接会うことが困難な状況となった。そのため活動当初は「人と出会う楽しさ」を伝えることは困難だと考えていたが、一度だけ、私たちはレシピの試食会を通じて地域の方と触れ合うことができた。今年の活動の中で、私はこの日が最も印象に残っている。久しぶりに属性も年齢も異なる人々が集まった空間には、人の縁から生まれた予期せぬ展開が盛りだくさんだった。飛び入りで参加した方同士で話が盛り上がったり、新たな活動の話が生まれたりするなど、直接人が集まったからこそ生まれる会話や繋がりに、とてもわくわくした。たった数時間の活動ではあったが、この日があったことで、メンバーにも本来の活動の魅力が少しでも伝わっていたら良いなと考えている。また同時に、自分自身もコミュニティの大切さを改めて再確認する機会となった。

またもう一つの活動の魅力と考えた「周囲との協力で得られる責任感」については、オンライン中心の活動の中でも伝えられるよう試行錯誤を重ねたが、自分自身の立ち位置の複雑さゆえに悩むことも多かった。私は、主体的に活動へ取り組むことが大切だと考えていたため、メンバーに対しては最小限のアドバイスにとどめ、彼らの意見やペースを大切にしようと考えていた。これは、学年の違いによって私の発言力が大きくなることを考慮したためである。一方で今年も副リーダーという役職があったため、活動全体のことを考えるとある程度は声をかける必要があり、どこまで見守るべきか、その境界線に悩んだ。実際のところ、昨年の経験をふまえ、特にリスク回避の観点でつい声をかけてしまう場面が多かったと思う。このようにメンバーの成長を考えることの難しさを痛感した一方で、この経験は自分自身の学びにもなった。単に自分が活動へ気を配るだけでなく、周囲の人が同じことを出来るようにサポートするため、伝え方やタイミングを工夫する姿勢は今後のチームワーキングにも活かしていきたいと考えている。

次に目標の2つ目として掲げていた「話す力」の向上だが、この点もやはりメンバーとコミュニケーションをとる中で鍛えることができたと感じている。昨年度はどちらかというと大勢の前で話すプレゼン力に重点を置いていたため、今年は日々の会話の中で分かりやすい発言ができるよう意識していた。例えば、結論から話すことや、語尾を曖昧にしないこと、具体例を効果的に取り入れて話すことなどを心がけた。また昨年の経験を伝える際、過去を振り返りながら話すことでだらだらと長く話してしまう傾向にあったため、事前にメモを作り伝えたいことを明確にしておくなどの準備を続けた。その結果、徐々にメモをつくらなくても分かりやすい発言が出来たと感じる機会が増えたり、友人から発言の明確さを褒めてもらえるようになった。これは今年度だけではなく、昨年から本講義を通じて努力を続けたおかげだと感じ、自信にもつながった。就職後も活かせるよう、さらに努力していきたい。

以上のように今年度は2年目という立場を活かして、後輩を育てる視点で活動を行ったり、昨年からの「話す力」の向上に引き続き取り組んだ。コロナ禍で想像していた活動はできなかったものの、同じチームで継続して活動できたことは自分自身の成長に大きくつながった。何よりこの状況下でも新たに活動へ加わってくれたメンバーに感謝するとともに、また交流イベントが開催できる日まで、チームが存続できるように働きかけていきたい。



図：試食会の様子

実行力とプレゼンテーション力における私の変化

茨城大学2年 太田 成美

1：全体を通して

プロジェクト演習の授業に参加したことで、自分自身もつスキルとしっかりと向き合い、成長することができた。また、オンラインの授業でなかなかアウトプットが出来なかったコロナ禍において、自分たちで考え、積極的に行動することが求められる機会があったことは、学びの充実に繋がった。ここでは、プロジェクト演習を受講して、私の中で特に変化があった実行力とプレゼンテーション力の2点について述べる。



図：作成したレシピサイト

2：実行力の向上

私は、大きな目標に対して大まかに見通しを持つことはできても、それをきちんと計画として落とし込み、実行に移すということが苦手であった。

今回、私の所属した Mito Bloom では、茨城県内の農家の方々からいただいたレシピを「農家飯」と称して掲載する、レシピサイトを作成した。レシピサイトを作成するまでには、ホームページ作成ツールを利用しフォーマットを作成したり、試食会で写真を撮影したり、公開までのカウントダウンを SNS 上で行い広報したりなど、様々な過程があった。今までの私であったら、「レシピサイトを作りたい」とアイデアだけで終わってしまっていたものを、グループのメンバーと協力して、きちんと形にし、公開することができたことで自信に繋がった。目標に向けて必要なことをピックアップし、具体的に締め切りを決め、実行するという基本をきちんと身につけられたことで、この授業だけでなく様々な場面での計画力や実行力が向上したと感じる。また、メディア文化メジャーに所属し、以前から広報や発信という分野には強い関心があったが、学んできたことを実行に移すことができていなかった。今回実際にサイトを作成してみて、発信の難しさを実感したのと同時に、達成感を感じる事ができ、より多くの人に効果的に伝えられるような発信技術を磨きたいという新たな目標ができた。

3：プレゼンテーションの変化

私は、以前から人前に立って発表するという機会が多く、プレゼンテーションをすること自体には抵抗があまりなかった。しかし、質疑応答となると、途端に緊張してしまい、どのように対応して良いのかわからず、苦手意識があった。また、オンライン上でのプレゼンテーションは、聞き手を直接見ながら発表するのとは異なるため、戸惑いが大きかった。夏休みにプレゼンテーション講座を受講したことにより、質疑応答への対応の仕方やオンライン上ならではの表情の作り方や伝え方を学ぶことができ、今までの不安を解消することができたオンライン上では普段対面で発表するときよりも表情を豊かにすることや、ポインターを多用すると重くなってしまっ見づらくなってしまふことなど、どのような点に気を配って発表するべきかを学ぶことができた。

「プレゼンテーションはプレゼントである」という先生の言葉を聞き、プレゼンテーションに対する気持ちが変わり、以前よりも丁寧に、聞き手への伝わりやすさを考えた原稿やスライドを用意するように心がけるようになった。また、プレゼンテーションに関して直接ご指導いただける貴重な機会であったため、自分自身のプレゼンテーションや発表への姿勢を見つめ直すことができ、今までなんとなく構築されてきた自分の伝え方をより良い方向へ修正することができた。今回身につけたプレゼンテーションのスキルは、最終報告会での発表で大いに活用されたことはもちろん、他の授業でも発揮されている。

Mito-bloom として活動をしていく中で

茨城大学 2年 須摩 玉来

1. 農家メシのレシピをまとめるに至った経緯

Mito-bloom は昨年度、コロナ禍になる前には対面でのイベント活動をしていた。しかし、今年度はコロナ禍になり、感染拡大を防ぐために対面でのイベントを通じた地域活性化を進めるのが難しくなってしまった。そのため、人と人が対面で活動しなくても地域が活性化し、310 食堂に関わる人の年齢層を広げる方法として、農家メシをまとめて本にするという案がでてまとまった。なぜ農家メシなのか。それは、農家の方によるレシピは野菜の特色が生かされた、他に出回っているレシピとは違うものになるのではないかと考えたからだ。この話を NPO 法人セカンドリーグ茨城の方にすると、ちょうど茨城の農家に関するパンフレット作成の企画を考えていたとのことだったため、農家メシの企画もそのパンフレットに載せてもらおうという話でまとまった。その後、NPO 法人セカンドリーグ茨城の事務所まで赴き、Mito-bloom のメンバーでパンフレットの協力をえた茨城の農家さんに一軒一軒電話をし、レシピ提供をしてくださる農家さんを探した。



図：試食会の様子

2. 試食会

試食会では、農家さんが提供してくださったレシピをもとに実際に料理をした。メンバー全員が揃ったのはこの時が初めてだったものの、全員が協力し合い、無事料理を完成させることができた。また、私は広報担当としてこのグループで活動していたのだが、いつも活動の事後報告をしており、フォロワーの方々にライブでの活動報告をしていなかった。そのため、この試食会の時に Mito-bloom として初めてインスタライブという機能を使い、試食会の様子をライブ配信した。このライブ配信には当時入院中だったリーダーの山口さんも見に来てくれた。

3. 広報担当として

広報担当として、気を付けたのは、アカウントを定期的に更新することだ。なかなかテスト期間になるとグループでミーティングが開催出来なかった。しかし、そのような時期にもアカウントで活動報告以外の投稿をするようにした。例えば、私は料理をすることが好きだったため、私の料理のレシピを写真とともに投稿したり、メンバーの自己紹介の投稿を何日かに分けて少しずつ投稿したりするようになった。このレシピの Instagram の投稿はハッシュタグを沢山つけたため、フォロワー以外の方からの「いいね！」が多くあった。また、投稿を保存してくださった方もいて、農家メシをウェブサイトやパンフレットで公開する導入として良いものだったと考える。

また、ウェブサイトを開示するにあたって、閲覧者の数を伸ばすために、1週間前からカウントダウン投稿を毎日行った。このカウントダウン投稿で使ったのは、メンバーそれぞれが試食会の時に NPO 法人セカンドリーグ茨城の方々に頂いた野菜を使って作った料理の写真だ。メンバーみんなが協力し料理を作ってくれたことで1日も欠けることなく投稿することができた。

4. まとめ

この一連の活動を通して、アクションを起こすことが今まで億劫だったのがもっと気軽なものに変わっていった。地域を活性化するのに学生が出来ることは沢山あると考える。Mito-bloom としての活動が終わっても、また違う形で地域活性化のために尽力していきたい。

6 : おわりに

山口 二千翔

今年度は、4名のメンバーによって Mito Bloom チームが結成された。

しかしながら新型コロナウイルス感染拡大の影響で昨年のような集会型イベントが開催できず、未曾有の事態の中、活動内容も昨年とは大幅な変更を余儀なくされた。しかし、そのような状況にあっても、310 食堂を通じた水戸市内の地域コミュニティの活性化という活動理念は曲げず、出来ることを模索し、結果を残すことが出来たことに達成感を感じている。

結成当初は、今後の活動の目的や活動内容を決定することに苦慮した。コロナ禍で人が集まるのが困難となった現在、与えられた状況の厳しさや今後が見通せない状況にしばしば頭を抱えることもあった。しかし、どのような活動をすれば地域コミュニティの活性化に貢献できるかについてお互いに案を出し合う中で、困難な状況下でも出来ることを必死に模索する重要性を学べたことは、非常に良い経験となった。

例えば、活動内容を決める際、まずチーム内でブレインストーミングを行った結果、どのような層にアプローチするか、それが活動理念と合致しているか、また限られた状況下で、チームとしてどのようなリソースを活用できるかなど、企画を立案する上で考慮すべき重要な事項について学ぶことが出来た。また、その後お世話になっている NPO 法人セカンドリーグ茨城の横須賀様とお話しさせて頂く中で、農家の方々を対象としたパンフレット製作のお話を伺うなど、地域の方々も巻き込んで主体的に活動することで、活動の糸口を掴むことができるということも学んだ。

また、サイトの制作においては、スケジュールを立てて役割分担を行い、またご協力いただいた NPO 法人セカンドリーグ茨城の中村様とのご連絡をこまめに行うなどして、地域の方々と共に構想を形にするための実行力を身につけることが出来た。

例えば、NPO 法人セカンドリーグ茨城の事務所にて、農家の方々に電話でレシピ提供のお願いをさせて頂いた経験は、相手に活動を理解してもらい、協力を得るためにどのような説明を行うべきかについて深く考える貴重な機会となった。それと同時に、プロジェクトの実行に様々な人々の協力が必要であるという事実についても身をもって学ぶことが出来た。

そして、制作したサイトを広報するために、SNS をどのように活用するかについて試行錯誤する中で、自らの活動をより多くの人に伝える発信力を身に着けることが出来た。

さらに、制作したサイトを、SNS を利用してより多くの人々に広げることで、310 食堂の存在を周知し、間接的に地域コミュニティにとっても意味のある活動になったと確信している。

末尾になりますが、私たちの活動にあたり多大なる支援をいただきました水戸市内の皆様、そして鈴木敦先生をはじめとする諸先生方に厚く御礼申し上げます。

4 : さとみ・あいチーム

リーダー	： 谷川 晴香	茨城大学人文社会科学部現代社会学科	2年
副リーダー	： 大金咲由莉	茨城大学人文社会科学部現代社会学科	2年
書記	： 藤枝 千夏	茨城大学人文社会科学部現代社会学科	2年
会計	： 友部瑠莉那	茨城大学人文社会科学部現代社会学科	2年
相談役	： 大貫 史織	茨城大学人文学部人文コミュニケーション学科	4年

主担当教員：岩佐 淳一 茨城大学人文社会科学部教授

主担当教員：鈴木 敦 茨城大学人文社会科学部教授

さとみ・あいチーム

1：はじめに

谷川 晴香

茨城大学人文社会科学部プロジェクト演習は地域連携・地域貢献をテーマにした授業である。当団体は授業が開講した初年度に結成されて以来、9年間活動を行ってきた。メンバーの入れ替わりが行われながらも活動内容の成果物は次のメンバーへとその思いとともに受け継がれ、今年度に至る。初年度より茨城県常陸太田市里美地区を主なフィールドとして活動を続けている。

茨城県最北端に位置する常陸太田市里美地区は、中山間地域であり、少子高齢化・過疎化が進む農産地域である。しかし、豊かな自然や在来作物である「里川カボチャ」、「荒蒔亭」に代表される古民家だけでなく、豊かな自然や農業を通して新たな事業を始めようとする方々といった魅力的な地域資源・環境資源が数多く存在している。当団体は長く実際に現地に足を運び交流を重ねることで、地域が直面する課題や魅力を「学生」という立場からどのようにアプローチできるのかを考え、成果物の作成や茨城大学で年に一度行われる茨菰祭への出店など多彩な活動を行ってきた。昨年度までの活動では、メンバーが定期的に里美地区に訪れ、イベントやリーフレットの作成などを通して当該地域の魅力発信に努めてきた。

2020年度は全世界的に大流行し多くの死者を出し続けている新型コロナウイルスの感染拡大により「さとみ・あい」の活動は困難を極めた。長く当団体の活動の根幹をなすのは現地に赴き、交流を重ねる「地域を識る（しる）」活動であったためである。しかしこの状況が却ってメンバーを「里美地区を知らない」視点へと立ち返らせるものとなった。

私たちはプロジェクトの目的を「常陸太田市里美地区の特産品である『里川カボチャ』の生産量を増やす」こととし、生産者を増やすことを目的とした広報活動の土台となる情報を収集することを活動の軸とした。在来作物「里川カボチャ」はその他と異なる見た目や調理のしやすさ、糖度の高さから需要は高いものの、少子高齢化・過疎化や入植者不足により供給に課題を抱えていたためである。このため本年度は大学で学んだ質的・量的調査の方法を活用し情報収集・調査・分析を行った。またこの際「里川カボチャ」の研究・生産を行っている「里川カボチャ研究会」の方々にお力添えいただき、里川カボチャ研究会の保有する里川カボチャについての文献を利用した調査や生産者である会員の方々へのインタビュー調査活動を行うことができた。活動後得られた情報を基に、里美地区へ入植し後継者になるメインの世代である40-50代の方をターゲットに広報用ポスターも作成し、次代のさとみ・あいへの引継ぎ資料としてのマニュアルも作成した。

また、チームで活動していく中でメンバー全員が成長するための目的として「分析力・説明能力・情報収集力の向上」を掲げた。コロナ禍で現地に赴き体験を通してその土地を「識る（しる）」ことができなくなったことで今まで以上に里美地区がどのような魅力を持った土地なのか、言葉や資料で理解できることの限界をメンバー全員が理解し、自分自身が生産者として入植するならどのような情報が欲しいかを繰り返し考えることで、同時に目的に沿うような成長を各々が遂げた一年間であった。

構成は、二年生3名、四年生1名の計4名である。四年生は以前のプロジェクト演習やさとみ・あいの活動を知る学生としてチーム全体の相談役を務めた。二年生3名は常陸太田市を訪れたことがなく、うち一人は県外出身者だったこともあり「里美地区を知らない・識らない」視点の要となった。本年度の活動は例年行われてきた「体験を通して土地を知る」活動から「調査・分析を通して土地を知ってもらおう広報を行う」活動へと変化し、コロナ禍という異例の状況を糧にもう一步踏み込んだ、目新しい「さとみ・あい」を形作ることができたのではないだろうか。

今年度の「さとみ・あい」がどのような活動をし、コロナ禍だからこそ得られたものは何か、また地域との関わりによってどのような相互作用や学びを得たか。これらの点を示すべく、具体的な活動内容報告について記録していく。最後までお見通しいただければ幸いです。

2：活動概要

(1) 活動の目的

① プロジェクトの目的

茨城県常陸太田市里川地区の特産品である里川カボチャの生産量を増やすことを目指し、生産者を増やすための広報活動に役立つ情報の収集を行うこと。

② チームの目的

次年度以降のさとみ・あいチームが活用できるマニュアルや実践例の確立、現地の方が継続して使用しやすい成果物の作成、広報活動の経験を積むということを通して、分析力、説明能力、情報収集力を向上させること。

(2) 活動の概要

私たちは、「さとみリサーチプロジェクト」と題して、茨城県常陸太田市里川地区をフィールドに、里川カボチャの生産者を増やすための広報活動に繋がる調査活動をメインで進めてきた。

① 茨城県常陸太田市里川地区見学

里川地区の現状を知るために現地に赴き、地元の方々と交流した。

② インタビュー調査、分析

里川地区に住み、里川カボチャを栽培している方々にご協力いただき、現地での暮らしについて尋ねた。

③ アンケート調査、分析

インタビュー調査よりも多くの方々にご協力いただき、より広く里川地区での里川カボチャの栽培について尋ねた。

④ 広報物作成

調査でわかった情報をもとに、里川地区の基本情報や里川カボチャの生産について載せたポスターを作成した。

⑤ マニュアル作成

次期さとみ・あいチームが活動しやすくなるように、里川地区の情報や活動例を載せたマニュアルを作成した。

3 : 議事録・活動記録

No.	日時(10分単位)	場所	活動内容	参加者	実働時間
1	2020年 6月27日 22:00 - 23:30	Microsoft Teams さとみ・あいチーム	自己紹介、プロジェクト構想立案 連絡事項の共有	谷川、大貫、大金、友部、藤枝	1:30
2	2020年 7月6日 22:00 - 23:45	Microsoft Teams さとみ・あいチーム	先生方との進捗確認 大まかなプロジェクト概要決定	谷川、大貫、大金、友部、藤枝	1:45
3	2020年 7月31日 9:00 - 10:20	Microsoft Teams さとみ・あいチーム	調査方法に関する話し合い 構想書改訂について	谷川、大貫、大金、友部、藤枝 (遅)	1:20
4	2020年 8月27日 9:00 - 15:30	常陸太田市 里美地区	荷見様、小林様との里川カボチャ畑見 学と調査活動についての話し合い。	谷川、大金、友部、藤枝	6:30
5	2020年 9月11日 13:00 - 15:40	Microsoft Teams さとみ・あいチーム	質問項目に関する話し合い 広報内容に関する話し合い	谷川、大貫、大金(早)、友部、藤 枝	2:40
6	2020年 10月3日 21:00 - 22:00	Microsoft Teams さとみ・あいチーム	役割分担の再設定 プロジェクト外のゴールの再設定	谷川、大貫、友部、藤枝	1:00
7	2020年 10月11日 21:00 - 21:40	Microsoft Teams さとみ・あいチーム	今後の動き・スケジュールの決定 さとみ・あいの名刺についての話し合い	谷川、大貫、大金、友部、藤枝	0:40
8	2020年 11月1日 8:45 - 16:00	常陸太田市 里美地区	荷見様とのインタビュー調査の打ち合 わせ 里川カボチャをつかったゴロッケ作り体 験	谷川、大貫、友部、藤枝	7:15
9	2020年 11月21日 10:00 - 11:00	Microsoft Teams さとみ・あいチーム	22日の調査の持ち物や役割分担の確 認 活動報告会の提出物の担当決め	谷川、友部、藤枝	1:00
10	2020年 11月22日 9:00 - 17:45	常陸太田市 里美地区	北山様宅、金波寒月見学 里川カボチャ研究会の方々へインタ ビュー	谷川、大金、友部、藤枝	8:45
11	2020年 11月28日 22:30 - 23:30	Microsoft Teams さとみ・あいチーム	インタビュー結果・考察の共有 最終報告会での発表内容の方針決定	谷川、友部、藤枝	1:00
12	2020年 12月16日 22:30 - 0:00	Microsoft Teams さとみ・あいチーム	今後の活動方針についての話し合い 今後の具体的な活動スケジュール案策 定	谷川、大金、友部、藤枝	1:30
13	2021年 1月13日 21:00 - 22:20	Microsoft Teams さとみ・あいチーム	チーム予算の申請についての話し合い 提出物の分担決定	谷川、大貫、友部、藤枝	1:20

表 1 : 議事録・活動記録

4：活動トピック

(1)第1回里美地区見学

①日時

2020年8月27日(木)9:00～15:30

②場所

常陸太田市里美地区

③活動内容

今年度初の常陸太田市里美地区訪問は、8月下旬であった。日差しも強く、まだまだ夏が遠ざからない中での訪問であったが、里美地区は水戸地区よりも数度ほど気温が低く夏でも過ごしやすい環境であるように感じた。

岩佐先生、鈴木先生引率のもと荷見様と合流をし、荷見様のお話を伺いながら自分たちの足で里美地区を歩き回った。その後、荷見様宅にて、昼食をいただいた。その後、荷見様から里美地区の現状や特徴を教えていただき、今年度のさとみ・あいチームの活動方針をお伝えした。また、荷見様の畑なども拝見させていただいた。荷見様宅を出発したあとは小林様宅に伺い、こちらでも里美地区の特徴や現状を、外を回りながら具体的に教えていただいた。

チームのほぼ全員が「里美地区」とは？というような状況からスタートしたため里美地区の情報や年度を通しての活動内容の指標が定まりきらない部分があった。しかし、この一度のフィールドワークで具体的な情報を得ることができ、まさに「百聞は一見にしかず」とはこのことである。自分で実際に足を運ぶことの重要性を体験できた。



図1：里美地区内各所を見学



図2：荷見様のお話を伺う



図3：荷見様の畑を見学



図4：小林様宅訪問

(2) 前調査

①日時

2020年11月1日(日) 8:45~16:00

②場所

常陸太田市里美地区

③活動内容

今年度2回目となる里美訪問では、本調査のための話し合いが活動の中心であった(図1)。岩佐先生と鈴木先生の引率のもと、荷見様のお宅でメンバーが用意した資料に基づき話し合いを進めた。各メンバーが資料に補足を加えながら荷見様や先生方に調査内容を説明した。1時間半にも及ぶ話し合いの中で、形式的なことから調査内容の本質的なことに至るまで様々なご指摘を頂戴した。本調査までの課題が明らかとなり、前調査の重要性を感じた一日であった。

荷見様のお宅で昼食をいただいた後、里川カボチャを使ったカボチャコロッケ作りの体験をした(図2、3)。例年であればイベントでカボチャコロッケを販売することもあったのだが、今回荷見様ご夫妻のお心遣いにより、カボチャコロッケ作りの体験だけでもとご用意いただいた。具材を丸め、卵に浸し、パン粉をまぶして、油で揚げるという工程を体験した。慣れない作業に苦戦しつつも、コロッケ作りを一通り体験できたことは非常によかったことである。

この日の最後には、里美ふれあい館イベント広場で開催されていた「第33回里美かかし祭り」を見学した(図4)。地元の方や小学生が制作した数々の作品が並んでいた。印象的であったのはアマビエをかたどった作品が多かったことだ。コロナウイルスの終息を願う人々の気持ちが作品からひしひしと感じられた。



図1: 荷見様宅でのミーティング



図2: カボチャコロッケ作り その1



図3: カボチャコロッケ作り その2



図4: 里美かかし祭りの見学

(3) 本調査

①日時

2020年11月22日(日) 9:00~17:45

②場所

常陸太田市里美地区

③活動内容

大学に集合した後、午前中は北山様のお宅を訪問し、その後金波寒月で昼食をごちそうになった。午後は里川コミュニティセンターにおいて里川カボチャ研究会の皆様にご協力いただき、最後の調査活動となるインタビューをさせて頂いた。この際、インタビュー内容とその概要、目的を記した資料とアンケート調査紙を持参し、アンケート調査紙を荷見様にご協力いただき後日回収する運びとなった。以下、活動内容の詳細である。

(i)北山様宅訪問

「まった〜り村の小さな農園」を営んでいる北山夫妻のお宅へ訪問した。繁忙期であるとのこと、北山様にはお会いすることはできなかったが、引率の鈴木先生、岩佐先生から北山様たちのことについてお話を伺うことができた。北山様たちは外部から移住し、里美地区で稲作の他、在来種の小豆である「娘来た」の栽培や養鶏などを行っていることがわかった。

(ii)金波寒月にて微生物の慰霊祭へ参加。

金波寒月にて実験や生産に使われた微生物たちへの祈りを行う、慰霊祭に参加した。地元の方々はもちろん、地元企業の社長の方や、県内で活動している和楽器の演奏家の方、早稲田大学の教授の方など、たくさんの方々が参加していた。

(iii)里川コミュニティセンターでのインタビュー活動

調査時間：約3時間

調査対象：里川カボチャ研究会の方4名(荷見誠様、荷見安様、大森清正様、佐藤健一様)
観光大使の山口様

調査方法：座談会形式

調査結果：次年度以降のさとみ・あいにつなぐ「里川マニュアル」の作成、里川カボチャの生産者を増やすことを目的とした広報用ポスターの作成に目的を絞り、事前に推敲を重ね質問項目を考えた。当日はタイムキーパー、録音係、質問者、司会者に担当を分けてインタビューを行った。以下は質問項目を一部抜粋したものである。

【質問項目】

- ・里川カボチャ作りを始めたきっかけを教えてください。
- ・栽培から販売までを通して、里川カボチャ作りで最もやりがいを感じていることを教えてください。
- ・週末農業のなかで里川かぼちゃを栽培することは可能でしょうか。
- ・SNSの使い方などの説明を受ける機会があり、説明を踏まえた上で可能であればご自身でSNS広報をやってみたいという気持ちはありますか。
- ・新しく里川かぼちゃの生産者を迎え入れることになったら、年齢、性別、性格、農業経験、出身地等の点から、どんな人に来てもらいたいですか。
- ・里川カボチャ研究会の役割を教えてください。特に、初めて南瓜栽培を行う人に対しどのような援助が行われるのかお聞かせください。
- ・生産、主な販路、主要生産品の現状について、生産者として加工や個人的に工夫している点、教えてもらって引き継いでいる点などあればお聞かせください。

(4)オンラインミーティング

①日時

- (i)2020年6月26日(金)22:00~23:30
- (ii)2020年7月6日(月)22:00~23:45
- (iii)2020年7月31日(金)9:00~10:20
- (iv)2020年9月11日(金)13:00~15:40
- (v)2020年10月3日(土)21:00~22:00
- (vi)2020年10月11日(日)21:00~21:40
- (vii)2020年11月21日(土)10:00~11:00
- (viii)2020年11月28日(土)22:30~23:30
- (ix)2020年12月17日(木)22:30~0:00
- (x)2021年1月12日(火)21:00~22:20

②場所

Microsoft Teams

③活動内容

コロナウイルス感染拡大の影響で、例年とは異なり、対面でのミーティングを行うことができない状況であった。そのため本年度は Microsoft Teams を使用し、全てオンライン上でミーティングを行った。ミーティングでは、6月から7月にかけてプロジェクトの概要について、8月から11月にかけて調査活動の詳細について、12月には年明け以降の活動方針について話し合った。基本的にマイクはON、カメラはOFFの状態で行い、議事録を画面共有しながらリーダーの進行で話し合いを進めた。時間は1時間から2時間程度行った。マイクを常時ONにし、誰かが話しているときに相槌を打つことを心がける、事前に話し合う事柄をチーム内で共有しておくなど、小さなところから工夫していくことで、回数を重ねるごとにコミュニケーション量が増やすことができた。また、Microsoft Teams 上にファイルをアップすることで、前回までのミーティングの議事録や調査活動のためのメモなどを閲覧しながら話し合ったり、1つのファイルを共同で編集したり、ミーティング後に議事録の誤字脱字の全員でのチェック、といったことが可能になった。こういったオンラインだからこそ可能なことを生かし、ミーティングの質を高めることができた。オンライン上でのミーティングを数多くこなすことによって、プロジェクト演習以外の Microsoft Teams を用いたオンライン授業でグループワークを行う際にも生かせるような、オンライン上でのグループワークのコツをつかむことができた。オンライン化が進む社会において大きな学びであったといえるであろう。

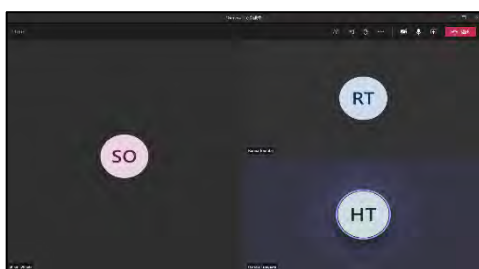


図1：MS-Teams によるミーティング

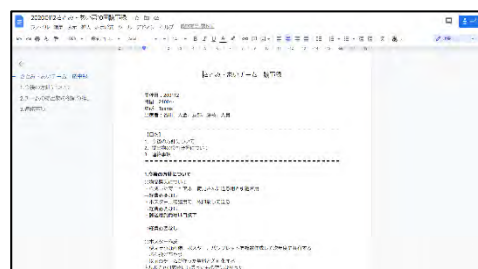


図2：MS-Teams による議事録作成



図3：MS-Teams 上に作成した共有フォルダ

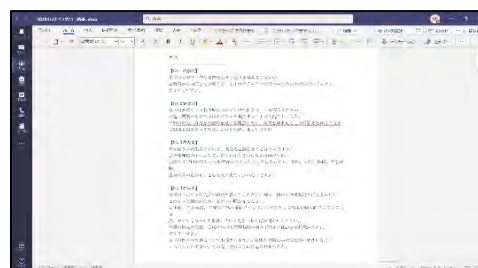


図4：MS-Teams で共同編集したファイル

5：個人レポート

コロナ禍のさとみ・あい

茨城大学2年 谷川 晴香

コロナ禍において最も活動が困難なものになったチームがさとみ・あいだった。そのさとみ・あいのリーダーとして何ができるだろうか、そう考え続けた一年だった。

昨年度までの活動は実際に里美地区に足を運び、農作業のお手伝いをさせていただきながら名産品里川カボチャを中心に販売促進の広報を様々な機会・媒体を通して行っていた。しかし新型コロナウイルスの感染拡大によりそういった現地の方々との交流も難しく、それどころかメンバー同士も夏を過ぎてようやく顔を合わせ交流するという異例の一年になった。MycroftTeams を利用し、オンラインミーティングを通して話し合いを進めていたもののやはり、和気あいあいとはいかない。アイコンタクトのような、非言語コミュニケーションが使用できないが故の苦しさだった。

しかし、リーダーとしてチームを牽引すべき立場にあったからこそ、焦燥感にかられると同時にメンバーの協力や心遣いがより克明に感じられた。今年度の活動を振り返ると、当初は「リーダー」としてとかなり杓子定規に話し合いに臨んでおり、一人で仕事抱え込んでしまうことが多々あった。先生方から方向性や計画についてアドバイス等もいただいていたが、やはり私一人で事がうまく運ぶわけもなく頭を抱えていた。思えば自分が「やっていること」に一生懸命になりすぎて周りが「してくれたこと」がうまく見えていなかったように感じる。しかし、オンラインミーティングや中間報告会、フィールドワークなどを通してようやくメンバーと同じさとみ・あいの一員として相談し合うことができるようになった。やるべきことを分担し合おうと声をかけてもらい、仕事を分担するようになってからは自分よりも数百倍しっかり先を見据えて行動しているメンバーに、前期に感じていた焦燥感とは別の意味で「私がリーダーでよかったのか？」と笑ってしまった。牽引していたのではなく、後ろから背を押してもらっていたのだと気づいたのもこの時だった。

今年度のさとみ・あいの活動は主に「調査」「広報準備」を目的として行われた。県外出身者も含めて現地への訪問すらままならず、だからこそ「里美地区をしらない」人間の抱える問題が浮き彫りになった。コロナ禍の為、インターネットや先生方からのお話から情報を収集していた。しかし、さとみ・あいとして活動する上でも不十分な量だと感じた私たちは、里川カボチャの生産者を増やすための広報活動を行うと同時に、次代のさとみ・あいが活動をより行いやすいようなマニュアル作りのための調査活動を行った。また、調査/広報系の講義を受けており、実践的な活動に意欲的だったことも私たちの活動が昨年度までのものと一線を画す要因となった。「コロナ禍だからこそ出来ることを」という視点は活動

当初からあったため、それを無事成果物として形にできたことを嬉しく思う。現地の方々との交流に際しご尽力いただいた鈴木先生、調査活動において幾度となくご助言を下さり、軌道修正して下さった岩佐先生、そして調査活動にご協力いただいた荷見様をはじめとする里川カボチャ研究会の皆様のご協力なくして今年度の活動はなかった。

できないことばかりが話題に上った一年だった。しかし、その中であってさとみ・あいも私自身も一歩前進することができた。周りの支えなくして得られなかったであろうリーダーとして、一団体のメンバーとしての学びを胸にこれからの活動を進めていきたい。

最後に、里川カボチャ研究会の皆様、先生方をはじめとしたさとみ・あいに関わってくださった皆様、そしてしっかりと前を見据えて共に歩み、一番近くで支えてくれたメンバーたちに厚く御礼申し上げます。



図1：荷見様宅でコロッケ作り



図2：初回課外活動 メンバー初対面

本当に必要な力

茨城大学 2年 大金 咲由莉

私がさとみ・あいチームに参加したきっかけは、チームメンバーからのお誘いであった。当初は、このプロジェクト演習という授業を履修すること自体考えておらず、「さとみ」と聞いてもあまりピンと来なかった私であったが、メンバー数が足りなくてチームを結成することができないという話を聞き、何か力になれるのであればと思い参加した。私は他のメンバーより遅れてチームに参加したが、メンバーは私のことを快く受け入れてくれて、少なからず迷惑をかけながらも、みんなで協力してこのプロジェクトを進めてきた。

私たちは、「さとみ・リサーチプロジェクト」と題して、里川地区の里川カボチャ事情をデータとして形に残すことや里川カボチャの生産者が増えるような広報活動に繋げることを目標として活動してきた。私個人の目標としては、対応力、想像力、傾聴力の3つの力を向上させることを目指した。対応力とは、物事に流されず疑問に思い主体的に対応する力を指す。想像力とは、課題やその解決方法の影響をイメージする力を指す。傾聴力とは、相手の意見を丁寧に聞く力を指し、さらに相手の本音を引き出す力と私は定義づけた。

この3つの力が不十分だと一番強く感じたのは、プロジェクト構想を練っている段階のときであった。何度も現地に訪れなくとも、現地とインターネットで繋がることができなくとも、里川カボチャの生産量を増やす手助けをすることはできないだろうか。そう考えたときに思いついたひとつの施策が広報活動だった。広報活動とひとことで言っても、ターゲットはどの地域の人々までか、利用する媒体はマスメディアかSNSか、いつ発信するのか、予算内に納まるのか等、自分の考えが至らない点が多く、想像力に欠けているなど感じていた。また、批判的思考ができていなかったことや代替案を即座に提案できなかったことを踏まえて、もっと瞬時に対応できる力が欲しいと思った。そして、インタビュー調査やオンライン上でのミーティングにおける傾聴力を見つけないかと思った。

一年間の活動を通して、想いを形にすることの難しさを体感した。いくら対応力や想像力、傾聴力に長けていようが、自分の理想をみんなが理解できるまでに具体的な言葉に落とし込んで、共感を得られるように伝え方を工夫する力がなければ、自分の理想を叶えることはできないのだということをまざまざと思い知らされた。例えば、オンライン上でのミーティングの際は、うまく自分の意見をまとめてから発言したいところだが、会議のスムーズな進行のためにも指名されたときに自分の想いを簡潔に語らなければならない。みんなでインタビュー内容を考えたときには、メンバーそれぞれが関心を持っている部分が異なり、インタビューしたい事柄もバラバラで、それは的を射た質問になっているのか、質問の順番はそれが適切か等、時間をかけて思考を巡らせ、自分の想いとみんなの想いをうまくつなぎ合わせなければならない。

活動を終えた今、私に一番欠けていて早急に身につけるべき力は、「巻き込み力」だと感じている。私は、理想を語る事ができて、それを実現させるための具体的な道筋まで提示することができない。また、自分のやりたいことややるべきことが明確になっていても、たくさんのプロジェクトが同時並行で進めなければならない場合にひとりで片づけることができないことがある。それを解決するためにも、チームでプロジェクトを遂行していかなければならない環境で、自分の力では補えない部分を他のチームメンバーやチームの外の方々に補ってもらえるように「巻き込む」ことが必要である。ただ「巻き込む」のではなく、誰の協力を得ることが最も有効か、協力を求める相手のメリットを明確に提示できるか等、一方的にお願いを押しつけずに交渉できる人間になりたい。たくさんの人を「巻き込む」と、それだけのマネジメント能力が必要とされる。プロジェクトを進める土台にあるマネジメント能力を高めた上で、「巻き込み力」を鍛え、常に周りの人をワクワクさせられるような仕事の進め方ができるという状態が私の理想である。

最後に、私は優秀なさとみ・あいチームのメンバーに出会えて、一緒に活動できて良かったと感じている。今回のチームメンバーは、私にはない思考力、行動力、コミュニケーション能力を兼ねそろえていた。人生かけても追い越すことはできないが、少しでもみんなに近づくことができるように、これからも日々努力していきたいと思う。

さとみ・あいでの活動で得た学び

茨城大学 2年 藤枝 千夏

今年度のプロジェクト演習において、私はさとみ・あいの書記として1年間活動した。私は将来、地方公務員か広報関係の仕事に就きたいを考えており、大学生活で地域活性化に貢献できるような体験や広報活動の経験をしたと考えていた。そこで、そのどちらにも関わる活動ができるプロジェクト演習の存在を知り、さとみ・あいに参加した。さとみ・あいはプロジェクト演習スタート時から継続されているチームで、長年地域連携・地域貢献をテーマに農作物の栽培や、イベントへの参加といった現地活動がメインであった。しかし、今年度はコロナウイルスの感染拡大という社会問題が起こり、従来のような活動が行えないという状態で授業が始まったため漠然とした不安があった。しかし一年間の活動を終えて振り返ると、そんな状況だからこそこれまでになかった活動に挑戦する機会であり、自己成長のチャンスであった。そこで、本論では「個人の達成目標ルーブリック」で掲げた3つの目標一つずつについて振り返りを行い、さとみ・あいでの一年間の活動で得た学びについて述べる。



図：調査の打ち合わせの様子

1つ目に立てた目標は、文章読解能力、論理的思考能力、分析力をはじめとする「読む力」の向上である。具体的には、難易度や長さは問わず文章を飽きずに最後まで読み通せる状態を目標とした。目標達成のために、約5000~6000字程度のインタビュー調査の議事録やいただいた資料を元に考察を行うなど、積極的に長い文章を読む練習を行った。結果として、以前よりも文章量が多い文章を集中して読み通すことができるようになった。加えて、考察を要約し報告会用のPowerPointを作成することで、読んだ文章を元に考察を行ったり、要約してその内容をプレゼンテーションで簡潔にまとめ、他人に伝えるという経験を積むことができた。自身でも読む力の向上を実感することができ、今後控えている卒業研究でも生かせるような学びを得ることができた。

2つ目に立てた目標は、特に課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力「計画力」の向上である。具体的には、明確に課題の現状を適切に分析・把握できている状態、アイデア力を高めるための方法を理解している状態を目標とした。目標を達成するために、ミーティングの終了前や役割分担の決定後に「今回話し合うことはこれで十分か、本当にその分担で大丈夫か」という批判的思考を持ち、疑問点、不安点があればすぐにメンバーに相談する、という習慣を心がけた。メンバーと打ち解けていくにつれ、自分からチームが抱える問題点を指摘したり、詳細な活動スケジュールを提案するなど、自分で考えた解決策を実践することができた。今年度のさとみ・あいは少人数であったが、大きなトラブルもなく活動することができた。このことから、課題の現状を分析・把握する力を伸ばすことができたと考えられる。その一方で、スケジュールを提案する際にメンバーの予定を聞くなどあまり周りの意見を聞くことができず、単独で動いてしまいがちになっていたという自身の課題を発見した。また、アイデア力の向上に関してはほとんど改善することができなかったという反省があった。今後の学生生活で改善していきたい。

3つ目に立てた目標は、自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力「状況把握力」の向上である。具体的には、組織内の課題解決のために自分から積極的に行動を起こしており、チームのメンバーの特性を理解できている状態を目標とした。課題解決のための行動力は、前述の「計画力」を鍛える中で向上させることができた。また、メンバーの特性、性格については、メンバーのほとんどが顔見知りということもあり、あまり時間をかけずにある程度は把握することができた。チーム内で私だけが唯一バイトをしておらず、他のメンバーよりも比較的余裕があったため、特性だけでなくどれくらい忙しいのか、という状況把握にも気を配ることができた。そのため、実際に自身の役割に手が回らないメンバーがいたときに声を掛けたり、自分から役割を引き受けたり、といった対応をすることができた。自身の役割をただこなすだけでなく、仲間を助けるために、周囲にも目を向け続ける大切さを学ぶことができた。

一年間のさとみ・あいでの活動を通して、里川地区の魅力、そして住民の方々の優しさに触れながら、チームのメンバーと協力して社会調査の経験を積むことができた。掲げていた個人の目標をほぼ達成することができた一方で、新たに見えてきた課題もあるため、今後の学生生活で改善できるよう努めたい。

行して得られること

茨城大学 2年 友部 瑠莉那

今年度、プロジェクト演習を履修した理由としては自分の中で、「通常の座学授業以外にも何かをしたい」と考えていたからである。しかし、「何か」という具体的なことが自分自身でも分からず、何に取り組むかを決めかねていた。そんななかプロジェクト演習授業の存在を知り、この「さとみ・あい」チームに出会った。実際に、履修をすると決めたことは良かったものの今年度は大きな課題があった。それはコロナウイルス感染症の流行である。プロジェクト演習自体の授業開始の遅れ、また、さとみ・あいチームは例年通りの活動ができないという状況であった。チーム人数も少なく、プロジェクト演習自体を初めて履修する人がほぼ全員だったため、授業の説明を受けても「一体、何を、どうしたらいいのだろう」という気持ちが本音であった。しかし、例年通りの活動ができないことやさとみ・あいチームを初めて体験する人が多いということは、逆手にとって考えると例年の活動を一新して今年度の状況を生かした新たな活動に取り組みやすい状況であると考えた。



図：荷見様からお話を伺う

では、今年度何をするか？とチームで考えた際に、インタビュー調査・マニュアル作成と広報をしたいということになった。しかし、取り組みたいことが決まったのであとは計画を立てて順序よく物事が進む、というわけにはいかなかった。今年度のチームの目標を達成するにはどういった順序・内容で進めるのかといった具体性を求める際にチーム内での話し合いや意見のすり合わせ等に時間がかかった。いろいろなところに意識が向きすぎて本来の趣旨から外れてしまうようなこともあり、その都度、岩佐先生、鈴木先生の助けをいただきより具体的な方向性へと持っていくことができた。目標から計画、さらには実際に行動に移すという過程の難しさを痛感した。

定めた目標を実施するために常陸太田市里美地区を訪れ、荷見様や小林様に現地の現状や今後の展望等のお話を伺った。私たちチームのやりたいことだけを追求しては地域連携の意味がないので現地の方々との意見のすり合わせは必須であるということ深く実感することができた。現地で得た知見をもとに、実際にインタビュー調査の質問項目をチーム内で各々作り上げることにした。質問項目を作り、岩佐先生にチェックをしていただき、修正しさらにそれを確認していただき、という工程を繰り返した。そしてまずは前調査という名目で荷見様とインタビュー調査本番の事前打ち合わせを行ったが、その中でも質問項目の曖昧さが出てしまった。これについて自分の未熟さを感じた反面、普段の生活の中ではこういった機会や経験はなかなか得ることができないと思い、これから先に生かしていこうと考えることができた。

里美地区の里川かぼちゃ研究会の方数名にお集まりいただき、実際に行ったインタビュー調査で私は「さとみ・あいチーム」が今年度何を目的にどういった活動をする、これからしていくのかということを実地の方々から資料を用いつつ説明をした。事前に話すスピードや時間も意識しながら練習はしていたが、学内の授業とは違う場所・相手ということもあり想像以上に緊張したものの、これは個人の達成目標ルーブリックの「説明能力、プレゼンテーション」を意識して自らこの役割を立候補した。同時に「主体性」を少なからず満たすこともできたのではないかと考える。実際にインタビューを行っている際も、相手に話を振るタイミングや反応を見ながら相槌をうったり、相手が話をより深く話してくれたりするような話の運び方などただ授業の話を聞いて学ぶだけでは分からないことが多くあった。

活動を通して、自身に足りないものや得られた知見が多くあった。人数が少ないからこそ「主体性」や「話す」という、掲げていた目標達成に近づくことができた。しかし、完璧に目標達成とまではいかない部分がある今回の活動で露見した。そのためこれからは活動で得た貴重な経験やチーム活動を踏まえて未熟な部分と伸ばしていきたい部分をそれぞれ良い方向へと発展させていきたいと思う。「コロナ禍」という状況でも活動したということ、「何かをしたい」という気持ちを実現できたということは今後自分の強み繋がるのではないかと考える。

コロナ禍だからこそその学び

—「情報」「本質」「言葉」の三点から—

茨城大学 4年 大貫 史織

「情報」「本質」「言葉」。この三つが今年度のプロジェクト実習を振り返る上でのキーワードである。私は昨年度1年間休学していたが、今年度復学し4年生となった。プロジェクト実習は2年生から履修しており、休学していた期間も含めると今年度で4年目であった。大学生最後のプロジェクト実習はどのようなものになるのかと期待に胸を膨らませていたが、今年度は予想外の連続であった。新型コロナウイルスの蔓延により、オンラインで活動せざるを得ず、例年通りの活動が制限された。4年生の受講生が私しかいなかった。昨年度のさとみ・あいを知っている学生が、今年度のチーム内に私しかいなかった。コロナ禍という未曾有の事態に加え、私しか昨年度と今年度の橋渡しを担うことができなかつたため、思いの外精神的な負担がかかったこともあった。先に挙げたキーワードとともに、この1年を振り返る。

まず「情報」である。これは、今年度私が伸ばしたい力として挙げた情報収集力と関係している。それと向き合い続けた結果、そもそも情報は二種類に分けられるのではないかという考えが思い浮かんだ。何もしなくても得られる情報と、自分から進んで動かなければ手に入らない情報である。前者は光や音など自然に受け取る情報であり、後者はメールをチェックするなど自分から行動しないと手に入らない情報である。後者の、能動的ともいえる情報。これを集める力を伸ばしたいと思っていたのだ、と一人で納得していた。今年度は活動の中心がオンラインに切り替わったこともあり、以前にも増して授業に関する通知をチェックするようになった。他に4年生の受講生がいないため、自分に必要な情報を私が得ていくしかないという危機感にも似た気持ちもあり、積極的に情報を得ようとする姿勢は身についた。その一方で、情報を収集するための手段を増やすまでには至らなかつたと反省している。自分が慣れ親しんだ手段を繰り返し使っていたに過ぎず、新しい手段を開拓できずに終わってしまった。しかし、情報に対する自分の思考を深化できたこと、意欲的に情報を入手する姿勢が身についたことは大きな学びといえるのではないだろうか。

次に「本質」である。これは「課題の本質をとらえ、適切な解決に導く力」、すなわち課題解決能力と関係している。私はある先生から「感覚で本質を捉えている」と言われたことがあった。その言葉は、まるでパズルの最後のピースのように、私にぴったりはまるものだった。その言葉通り、私はなんとなく本質を掴むことができたのだが、それを言語化することに慣れていなかった。例えば、オンラインでのチームミーティングの際に、趣旨がずれてきている、活動の目的を見失っているなどとぼんやり思うことはあった。しかし、それを他のメンバーに伝えることはできなかった。また、時にはミーティングの雰囲気や個人的な感情に惑わされ、課題の本質を見抜くことさえできないこともあった。「感覚で本質を捉えている」という言葉をいただいたことは非常によかったが、言語化できなかつたり客観的に考えられなかつたりする己の未熟さを痛感した1年でもあった。

最後に「言葉」である。これは自分の意見を分かりやすく伝える発信力と関係している。今年度は言葉と向き合わざるを得なかつた。卒業論文の執筆はもちろんのこと、今年度の事情があるからだ。オンラインを中心とした活動に加え、さとみ・あいでは私以外がプロジェクト演習を初めて受講する2年生だったからだ。私と2年生との間では、授業についての情報量の差、経験値の差が大きく、言葉選びにかなり神経を使ったこともあった。初心者の方の2年生にどこまでの質を求めるのか、言うべきか言わざるべきか、と一人脳内会議が開かれたこともあった。また、私自身の語彙を増やそうと、知らない言葉を見つけたら紙の辞書や電子辞書で調べる癖をつけることもできた。相手に理解してもらえるように伝える力、言葉を自分のものにしようとする力は確実に身についたといえる。この1年でひたすら言葉に向き合い、私の強みを伸ばすことができたのは、大きな収穫となった。

大学生最後のプロジェクト実習では、大変なことが多かったように感じる。しかし、「情報」「本質」「言葉」の三つの視点から振り返ると、例年では得られないような貴重な学びを得ることができた。コロナ禍という前例にない事態だったからこそ、得られた学びだったのかもしれない。最後に、プロジェクト実習の受講生として4年間も活動できたこと、今ここに自分の言葉を綴れることに感謝の意を表し、レポートを閉じることとする。私を成長させてくれたプロジェクト実習、本当にありがとうございました。

6：おわりに

大金 咲由莉

今年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のために世間が自粛ムードの中、オンラインと対面を併用した活動を行ってきた。例年であれば五月ごろに顔を合わせて交流を行い、活動を開始するが今年は緊急事態宣言の発令、学期開始の遅れもあり、初めてメンバーと対面で交流ができたのは八月の末日となってしまった。活動を開始した六月から普段のミーティングはオンラインで行い、現地に向かう回数も最小限の三回に抑えた。例年よりメンバーも少ないということもあり、当初は一つのグループとして成立するかどうか、人数の面からも現地活動が困難であるという面からも活動の幅が狭まるという不安は私たちに重く付きまとった。さとみ・あい結成9年目において、できることが限られた環境下でも私たちが里美にどう貢献できるかを考え続けた1年間だった。

活動開始当初、私たちは茨城県の一市町村としても農村地帯としても里川地区のことをほとんど知らなかった。調査活動や広報活動を実際にやりたい、という意欲の枕詞として「里川カボチャの販売促進のため」という言葉が腰を下ろしていた。しかし、現地の方々との交流も深い先生方から里川カボチャの生産量及び生産者が需要に対して少ないという課題を教えていただき、私たちの活動は大きく方向を転換することとなる。販売促進ではなく、既にある需要に応えることができるだけの生産者の方々に入植していただくには何が必要なのか、深く考え、そして知る必要があった。

里川カボチャの生産者を増やすための広報活動を行う事前準備として、里川カボチャの栽培方法や里川地区での生活等、里川地区でカボチャの生産者となる場合に必要な情報や、里川地区や里川カボチャ生産についての魅力を知りたいと思い、「さとみサーチプロジェクト」と題してアンケート調査やインタビュー調査を行った。また、次期さとみ・あいチームが活動しやすくなるようにマニュアルを作成し、実際に広報物を制作することを通して、分析力、説明能力、情報収集力の向上に励んだ。

回数こそ少なかったが、一年間の活動を通して里川地区を訪れ、その魅力に触れた。里川カボチャ研究会の会長である荷見様のお宅には複数回お邪魔させていただくだけでなく、里川カボチャがどういった野菜で、どの様な歴史を辿り現在の魅力ある里川カボチャへと成ったのか、ご伴侶様の手料理もお御馳走になりつつお話を伺った。最後のフィールドワークである本調査では、事前に用意した質問や、追加の質問を通して里川カボチャ研究会の皆様の方として、そして生産者としての本音を伺った。その中で、新型コロナウイルス禍という行動が制限された時代においても、地域に貢献できること、その方法はたくさんあるのだということを考えることができた。活動前の地域貢献のイメージは、必ず現地に赴いて、地元でお手伝いをするようなものであったが、直接顔を合わせる回数を減らしても、地域が抱える課題を持ち帰って解決策を検討したり、その地域についてポスターやSNSで広報したりすることでも、地域へ大きく貢献することができるという新たな活動の形を見出すことができた。

これからも、制限されたように見える環境下で何ができるか、より面白いことができるのではないかと、ポジティブな模索を続けていきたいと思う。

最後になりますが、さとみ・あいチームはたくさんの方々を支えられ、この一年間活動し続けることができました。今回の調査活動にご協力いただきました常陸太田市里川地区の皆様、プロジェクト演習担当教員の赤岩先生、岩佐先生、神田先生、鈴木先生にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

5 : KoriNa チーム

リーダー	: 根本 千歳	茨城大学人文社会科学部現代社会科学科	2年
副リーダー	: 安藤 未羽	茨城大学人文社会科学部人間文化学科	3年
書記	: 中山 瑠伽	茨城大学人文社会科学部現代社会科学科	3年
書記	: 渡邊 崇元	茨城大学人文社会科学部現代社会科学科	3年
会計	: 小澤 栄里	茨城大学人文社会科学部法律経済学科	2年

主担当教員 : 鈴木 敦 茨城大学人文社会科学部 教授
副担当教員 : 神田 大吾 茨城大学人文社会科学部准教授

チーム KoriNa

1 : はじめに

安藤 未羽

茨城大学人文社会科学部地域志向教育プログラムは、「地域活性化志向」を重視し、より深く、より実践的に学ぶサブメジャーである。その中に位置するプロジェクト演習Ⅰ・Ⅱで本チーム「チーム KoriNa」は成立した。

チームの成立は2019年度、第二外国語で学んだ中国語・韓国語を使って茨城県のインバウンド推進と観光資源のアピールに貢献することを目標とし、人文社会科学部学生4名と教育学部学生2名の計6名によって活動をスタートした。当初は中国語・韓国語を使って県内イベントでのボランティアガイド活動を計画していたが、メンバーの語学レベルに懸念があったために断念した。紆余曲折を経てチームがたどり着いたのは県内の観光スポットの翻訳版リーフレット制作だった。結果2019年度には、茨城県北茨城市に所在する五浦美術文化研究所の中韓版リーフレットを完成させることができた。現在も五浦美術文化研究所の受付口にて所望された来訪者にはお渡しいただけることになっている。

2020年度は、2019年度からの続投メンバー2名に加えて新たに3名のメンバーを迎え、計5名で再びチームを成立させることができた。感染症の影響でチームの成立は通常の数ヶ月遅れとなり、また活動の大部分をオンラインで行う必要があることから、昨年度からの続投メンバーであった筆者は、このコロナ禍でのプロジェクト成功に当初不安を感じていた。しかし実際にオンラインでの活動を始めてみると、実家から大学に通う学生の通学コストが軽減され、そのために昨年度よりもミーティングへのメンバー参加率が上がったというメリットを感じることができた。そんな最中行われた本年度の活動では、昨年度リーフレット制作の候補に挙がり翻訳作業まで終えたものの、時間的制約と金銭的制約のために完成させることができなかった、茨城県北ジオパーク構想の水戸・千波湖リーフレットの英中韓版リーフレットを制作した。茨城県北ジオパークの再認定を目指して活動されている茨城県北ジオパーク推進室の皆様、翻訳の元とした既存版リーフレットを制作された茨城大学地質情報活用プロジェクトの皆様、担当教員の先生方、その他多くの皆様にご協力いただきながら、英語・中国語・韓国語の計3種の翻訳版リーフレットを完成させることができた。

本プロジェクトの活動開始時には、チームワーキング力、計画力、課題発見能力の三つを中心とした社会人基礎力の養成をチームの目標として掲げた。まず、チームワーキング力に関しては、常に情報共有を意識することでチームとして効率的に活動することができた。特に今年度はコロナ禍での活動であったため、オンラインでの定期ミーティングなどの際には相手の表情が見えないためにチーム内で齟齬があるのではないかと不安になるという場面もあったが、オフラインでの活動以上に常に課題の共有を意識することで、その不安も解消された。次に計画力に関しては、昨年度の失敗を生かして、チーム活動開始から間もなくして逆暦を作り、いつまでに何をしなければいけないのかを常に意識して活動してきた。また、その逆さ暦をプロジェクト協力者の皆様とも共有することで、よりスムーズな活動の遂行に努めた。最後に課題発見力に関しては、特にネイティブチェックの段階で身につけることができた。リーフレット制作における課題の一つとして、翻訳した文章の正確さをどのように確保するのかという課題がある。その課題を発見したあと、地域の企業にお勤めのネイティブの方や当大学にお勤めのネイティブの先生にチェックを依頼したりすることで、課題解決能力も身につけることができた。

それでは実際に私たちチーム KoriNa がどのような活動をしてきたのか。その具体的な内容を以降にてご紹介したい。チームメンバーが心血を注いで活動してきたその日々を、本稿にて少しでもイメージしていただけたなら幸いである。

2：活動概要

中山 瑠伽

(1) 活動の目的

①プロジェクトの目的

- (i)茨城県の観光資源 PR のために県内の既存のリーフレットを外国語に翻訳する
- (ii)外国人の方に茨城県の魅力を知ってもらい県のインバウンド推進に貢献する

②チームの目的

- (i)チーム全体として効率的に働くチームワーキング力
- (ii)計画力や課題発見能力を養い社会人基礎力を身に付ける

(2) 活動の概要

チーム KoriNa は昨年度発足したチームで、今年度で 2 年目の活動となった。昨年から引き続き参加した 3 年生 2 名、今年度から参加の 3 年生 1 名、2 年生 2 名、計 5 名で構成されている。本チームはプロジェクト演習 C のカテゴリーに属する。また、本年は新型コロナウイルス感染症の影響に鑑み、6 月末より活動を開始した。

①翻訳リーフレットの決定

活動開始と同時に、翻訳するリーフレットの選定を行った。昨年度の候補を引き継ぐ形で、茨城県北ジオパーク構想(以下、県北ジオパーク)のリーフレットを翻訳することに決定し、制作の許可をいただいた。また、県北ジオパークのリーフレットには英語版がなかったため、中国語、韓国語のリーフレット制作に加え、昨年度は行わなかった英語のリーフレットも制作することに決定した。

②リーフレットの翻訳

リーフレットを決定後翻訳に取り掛かった。英語、中国語、韓国語の 3 か国語、いずれかを母国語とするネイティブの方にご協力いただき翻訳文が語学的に正しいかを確認していただいた。その後、9 月末までに、ネイティブの方による確認を含め、翻訳作業を完了させた。

③イラストレーター作業

弊学は、県北ジオパーク構想の推進室を有する。今回は推進室の方や、日本語版リーフレットを制作された茨城大学地質情報活用プロジェクトの方々にご協力いただき、推進室にあるイラストレーターのアプリをお借りし、翻訳した原稿をリーフレットに挿入した。また、茨城大学地質情報活用プロジェクトの方々には、原稿を印刷可能な体裁に整えていただいた。

④リーフレット印刷

完成したイラストレーターファイルのリーフレットを、2020 年 11 月 30 日に印刷会社様に入稿した。12 月に入り完成版が納品された。

⑤設置

完成したリーフレットは弊学図書館横のインフォメーションラウンジ、及び水戸市国際交流センター、水戸市役所 4 階に設置された。今後、水戸駅の観光案内所にも設置していただく予定である。

3 : 議事録・活動記録

渡邊 崇元

No.	日時 (10分単位)	場所	活動内容	参加者	実働時間
1	2020年 6月26日 16:30 - 17:30	各自宅	第1回チームミーティング	根本、安藤、中山、小澤	1:00
2	2020年 6月28日 10:00 - 10:30	各自宅	渡邊さん顔合わせ	安藤、中山、渡邊	0:30
3	2020年 6月29日 8:40 - 10:20	各自宅	第2回チームミーティング	根本、安藤、渡邊、小澤	1:40
4	2020年 7月3日 10:30 - 12:00	各自宅	第3回チームミーティング	根本、安藤、中山、渡邊	1:30
5	2020年 7月6日 8:40 - 9:40	各自宅	第4回チームミーティング	根本、安藤、渡邊、小澤	1:00
6	2020年 7月10日 10:30 - 11:50	各自宅	第5回チームミーティング	根本、安藤、中山、小澤、渡邊	1:20
7	2020年 7月13日 8:40 - 9:40	各自宅	第6回チームミーティング	根本、安藤、渡邊、小澤	1:00
8	2020年 7月20日 9:50 - 10:00	各自宅	第7回チームミーティング	安藤、小澤、渡邊	0:10
9	2020年 7月27日 8:40 - 9:50	各自宅	第8回チームミーティング	根本、安藤、中山、渡邊、小澤	1:10
10	2020年 7月31日 10:30 - 11:00	各自宅	第9回チームミーティング	根本、安藤、渡邊	0:30
11	2020年 8月7日 10:30 - 11:10	各自宅	第10回チームミーティング	根本、中山、渡邊	0:40
12	2020年 8月17日 10:30 - 10:40	各自宅	第11回目チームミーティング	根本、安藤、渡邊	0:10
13	2020年 8月18日 19:00 - 19:40	各自宅	第12回チームミーティング	安藤、中山、渡邊、小澤	0:40
14	2020年 8月27日 10:00 - 10:15	各自宅	第13回チームミーティング	根本、安藤、中山、小澤、渡邊	0:15
15	2020年 9月8日 10:00 - 10:30	各自宅	第14回チームミーティング(推進室の武田様ご同席)	安藤・中山・渡邊	0:30
16	2020年 9月16日 20:00 - 20:30	各自宅	第15回チームミーティング	安藤、中山	0:30
17	2020年 10月6日 8:40 - 9:30	各自宅	第16回チームミーティング	根本、安藤、中山、渡邊、小澤	0:50
18	2020年 10月13日 9:00 - 10:10	各自宅	第17回チームミーティング	根本、安藤、中山、渡邊、小澤	1:10
19	2020年 10月20日 9:50 - 10:00	各自宅	第18回チームミーティング	根本、安藤、中山、渡邊、小澤	0:10
20	2020年 10月22日 10:20 - 10:35	各自宅	第19回チームミーティング	根本、安藤、中山、渡邊、小澤	0:15
21	2020年 10月28日 14:20 - 15:50	人文棟A214	第20回チームミーティング	根本、安藤、小澤	1:30
22	2020年 11月17日 9:00 - 9:50	各自宅	第21回チームミーティング	根本、安藤、中山、渡邊、小澤	0:50
23	2020年 12月1日 9:00 - 9:45	各自宅	第22回チームミーティング	根本、安藤、中山、渡邊、小澤	0:45
24	2021年 1月22日 9:00 - 9:50	各自宅	第23回チームミーティング	根本、安藤、中山、渡邊、小澤	0:50
25	2020年 12月18日 12:40 - 13:50	図書館横インフォメーションラウンジ	広報室の山崎様との打ち合わせ	安藤、中山、小澤	1:10
26	2021年 1月22日 9:00 - 9:50	各自宅	第23回チームミーティング	根本、安藤、中山、渡邊、小澤	0:50
27	2021年 2月1日 15:20 - 15:50	常陽銀行本館(赤岩先生ご同行)	常陽銀行様御礼訪問	根本、小澤	0:30
28	2020年 2月9日 10:20 - 10:50	水戸市国際交流センター(鈴木先生ご同行)	水戸市国際交流センターへの設置	根本、小澤	0:30
29	2020年 2月16日 11:00 - 11:30	水戸市役所(鈴木先生ご同行)	水戸市役所への設置	安藤	0:30
				合計	22:25

4：活動トピック

根本 千歳

(1)7月～8月中旬 翻訳作業

茨城県北ジオパーク構想の水戸・千波湖リーフレットを英語・中国語・韓国語に翻訳した。まずは、元の日本語を翻訳しやすい日本語に噛み砕く作業を行った。その後、チーム内で担当言語を決め、分担して翻訳作業を行った。日本にしかない言葉などを他の言語ではどう言い換えれば良いかを考える必要があったため、大変な作業だった。チーム内で担当した箇所を交換して、何度もチェックし合った。

(2)8月下旬～10月 語学的チェック・地質学的チェック

チーム内で翻訳した文章を2つの視点からチェックをした。まず、地域の企業にお勤めの方や、当大学の先生方にご協力いただき、翻訳した文章が語学的に間違っていないかをチェックしていただいた。次に、茨城大学地質情報活用プロジェクトの皆様にご協力いただき、翻訳した文章に含まれていた地質学的学術用語が誤っていないかをチェックしていただいた。難しい学術用語を他言語に翻訳する作業は簡単ではなかったが、たくさんの方のご協力のおかげで、それらの用語もしっかりと外国人の方に伝わる言葉に翻訳することができた。

図1：元の日本語版リーフレット表紙



(3)10月中旬～11月 イラストレーター作業



図2, 3：イラストレーター作業の様子

ネイティブチェックと地質学的チェックが完了し、ブラッシュアップされた文章をイラストレーターという編集ソフトを使用し、原稿に挿入した。既存の日本語版リーフレットを制作され、地質学的チェックにもご協力いただいた茨城大学地質情報活用プロジェクトの方から、イラストレーターの使用方法をご教示いただいた。最初は慣れない作業に苦戦したが、地質情報活用プロジェクトの皆様にもアドバイスをいただき、英語版、中国語版、韓国語版のリーフレットの版下が完成した。

(4)11月下旬～12月上旬 入稿・納品

イラストレーターファイルをチーム内で何度も入念にチェックを重ねた後、印刷会社に入稿した。そして、ついにリーフレットが完成し、納品していただいた。これまで頑張って作ってきたものが、現物になって手元に届いた時の喜びはとて大きかった。

The Origin of Lake Senba

Modified based on the image diagram (Amano et al., 1994)

The Lake Senba that Changed Form

Do you know that the Lake Senba was about three times the size of the present lake until about 90 years ago? In the past, Lake Senba spread to the present south side of Mito Station. Then how was the current Lake Senba formed?

Edo period
Lake Senba affected the life of people deeply from long ago. In the Edo period (1603-1868), Lake Senba played its part as the water source of an outer moat (the moat which was made as the outer fence of the castle to prevent enemies from easily invading it) and the rice fields of Mito Castle.

Taisho period
In 1921 (Taisho 10), two-thirds of Lake Senba became cultivated land for the reclamation work that Ibaraki performed, and the remainder became a reservoir.

Showa period
In around 1950 (Showa 25), the area around Lake Senba stopped being used as rice fields. After that, construction to make the area surrounding Lake Senba into a park began. The relocation of city hall was carried out due to the division of land on the south side of Mito Station. The south exit of Mito Station was completed afterwards. In addition, it was planned to turn the reclaimed land around Lake Senba which used to be rice fields into an urban area.

The current Lake Senba
When you superimpose old Lake Senba onto a current map, the south side of Mito Station in old Lake Senba. Let's see the difference between ① ground on the upland with point ② which was lake. Point ① consists of the hard stratum which was deposited tens of thousands of years ago.

When you superimpose old Lake Senba onto a current map

On the other hand, point ② is a place filled up artificially. It consists of the new man-made stratum 25~30m underground. Please see back side STOP2 for more information about the geological features of ①.

North Ibaraki Geopark Plan

Geosite map

Mito and Lake Senba

Let's take a look at the old memories hidden within the city!

North Ibaraki Geopark Promotion Council
Contact Us: geopark@mito.ibaraki.ac.jp
HP: http://www.ibaraki-geopark.com

Production cooperation: This is a project of students of Ibaraki University. It was produced as a result by the students of the Team KonNa taking the project exercises of the College of Humanities and Social Sciences, Ibaraki University.

Trivia

Actually Senba...pond? In Japan, a lake is a body of water with a certain size and usually refers to an area of water deeper than 10m. However, Lake Senba has an average depth of 1m and a maximum depth of only 1.2m! It is generally a pond when the water depth is within 5m.

2nd in the world! The total planned area of Kaiyaku Garden reaches about 300ha, and it is the second largest park in the world next to Central Park in New York as an urban park located inside a central city area.

Mito and Lake Senba

What is Geopark?
A geopark is a park of the ground or earth. It's a place where you can learn about stratum and rock, and know about the attraction of history, culture and industry which developed on the ground.

What is North Ibaraki Geopark?
North Ibaraki Geopark is geopark in the area of northern Ibaraki Prefecture. The history of the oldest ground in Japan remains from about 500 million years ago to the present.

Why don't you walk while thinking about the formation of the castle town Mito?

STOP 1 About 15 minutes walk from Mito Station
Yanagizaki Shell Mound
Yanagizaki shell mound was formed about 6,000 years ago in the Jomon period. However, the shell mound facing Lake Senba was found about 20m above sea level, and about 13km from the current coastline.

STOP 2 About 25 minutes walk from Mito Station
Upland of Mito
Let's take a look at the other side of Lake Senba. You can see that the other side is higher than here. That's the upland. Actually, the underground structure is different between where you are and the upland on the other side.

STOP 3 About 45 minutes walk from Mito Station
Upland Structure
About 5m of mudstone (cliffs) that formed before the birth of mankind are located along the tracks. In addition, on top of this stratum, there is a gravel layer, which is sediment of Naka River.

STOP 4 About 3 minutes walk from Mito Station
Ieyozaka
This slope is relatively gentle, connecting the upland and the lowland. We can't imagine it now, but the lowland around the lake used to be under water, including the area that is now on the ground surface. Therefore, the bottom of this slope was Lake Senba. Please look at the back of the leaflet for information about the formation of Lake Senba.

Please observe without using things such as a hammer. Do not enter off-limits area.

図 4 : 英語版

干波湖的形成

那珂台地
距今约2万年前，地球处于冰河时期。那时地球上的水分大部分以降雪和冰川融存在陆地上，因此，海平面也比现在要低，海面低的话，河流便变得湍急，侵蚀作用增强，在陆地上形成深谷。那珂川和枚川也形成了深谷，这对于干波湖的形成起了重要作用。

上市台地
距今约1万2千年前，地球开始变暖。距今约六千年前的海平面比如今还要高6米。随着海平面的上升那珂川的搬运能力下降，导致泥沙在下流堆积。

那珂川
从那以后，海平面开始下降，那珂川的沉积物将河口变窄，形成了一道河湾。由于枚川的截流，形成了如今的干波湖的雏形。

根据程德雄（天野等，1994）进行改编

干波湖的形状发生了变化

您知道吗？大约90年前，干波湖的面积几乎是今天的3倍。曾经的干波湖延伸到当前水户站南侧附近的地区。那么，目前的干波湖是如何形成的呢？

江户时代

干波湖长期以来一直与人们的生活息息相关。在江户时代（1603-1868年），干波湖作为水户城的护城河（为防止敌人轻易入侵而建造在城堡外的护城河）与稻田的水源发挥了重要作用。

水田 大正时代

由于茨城县在1921年（大正10年）实施了填湖计划，干波湖的三分之二成为了耕地，剩余的则变成了蓄水池。

市政厅 昭和时代

1950年左右（昭和25年），干波湖周围水田的使用结束之后，施工将干波湖改造成公园。水户站南侧也进行了区域整改，完成了市政厅的迁移。随之，干波湖的公园改造施工、干波湖城市改造计划也同时展开了。

把现在的地图和从前的干波湖重叠起来，水户站南侧在从前的干波湖里面。让我们看一下台地上的①和原为湖泊②的地质差异。

地点①由数千万年前沉积的坚固地层形成。而地点②是人工开凿湖造地，它由地下25至30米的人工地层形成。有关①地质的详细信息，请参阅“背面STOP2”。

有关此简介的咨询，请联系地质信息活用项目！
该地图是地质科学研究补贴（课题编号KK07213）制作的。

東京地図研究社
Tokyo Map Research Inc.

地調調査・OTF

这个图使用了凸凹地形图(TM)来表现地形。

North Ibaraki Geopark Plan

茨城县北地质公园构想

地质·景观·地图

水户·干波湖

让我们一起来探索那些都市里隐藏的
昔日的记忆吧！

茨城县北地质公园推进协议会
联系我们 geopark@ml.ibaraki.ac.jp
主页 http://www.ibaraki-geopark.com

制作协助 茨城大学 地质情报活用プロジェクト
制作协助 茨城大学 学生举办的项目
本作品为茨城大学人文社会科学部Kan'Na部成员のプロジェクト 制作 (项目练习) 课程的实践成果。

水户·干波湖

地质景观地图

让我们边散步来看看水户小镇的构成吧。

什么是地质公园？

地质公园是指大地公园。是可以据此研究地层的、岩石，并了解其发展成地方的历史、文化、产业等魅力的地方。

茨城县北地质公园是？

“茨城县北地质公园”是以茨城县北部地区为对象的“地质公园”。从约5亿年前开始至今在日本留下了最古老的大地历史。

凡例

洗手间 停车场
免费停车场
收费停车场
收费+大型车停车场

海拔 (m)
7 28

STEP 1 柳崎贝塚

柳崎贝塚是约6000年前縄文时代形成的。但是，面向干波湖的柳崎贝塚是在距离现在的海岸线约13千米、海拔约20米的位置被发现的。

STEP 2 水户的台地

让我们从那个地方看看干波湖的对侧吧。可以看到对侧比这边要高一些。那里便是台地。实际上你所在的位置与对侧台地的地下结构是不同的。

STEP 3 台地的结构

沿线有在人类诞生之前形成的约5米的泥岩(崖)。而且在这个地层上面，可以看到那珂川的沉积物形成的鹅卵石层。

STEP 4 银杏坡

这是连接台地和低地的比较平缓的坡。现在可能无法想像，干波湖周边的低地，包括现在的地表部分，曾经都是湖的一部分。所以，这个坡下曾经也是湖。干波湖的形成过程，请参考背面。

请不要使用锤子等进行观察。禁止进入的场所，请不要进入。

图5：中国語版

센바호의 형성과정

지금으로부터 약 2만년 전 지구는 빙하기였습니다. 따라서 지구의 수위는 내린 듯이나 빙하의 형태로 유압에 쌓여 있었고 해수면은 지금보다 낮았습니다. 해수면이 낮아지면서 강의 흐름은 빨라지고 침식력이 높아져 육지에 깊은 계곡을 만들기 시작했습니다. 나가카와 사쿠라강도 마찬가지로 깊은 계곡을 만들고 센바호 형성에 중요한 역할을 했습니다.

약 12000년 전부터 지구의 평균 기온이 상승하고 약 6000년 전에는 해수면이 지금보다 약 6m 상승했습니다. 해수면의 상승은 나가카와의 운반력을 약하게 해 토사를 하류에 퇴적시켰습니다.

그 후 해수면은 낮아졌습니다. 나가카와의 퇴적물에 의해서 하구가 좁아지고 토사가 형성되었습니다. 사쿠라강이 막혀 지금 시모이치에서 미카와마을까지 얕은 늪이 형성되었습니다. 이것이 센바호의 원형입니다.

이케노(아카노 리, 1994년 기초조경)

형태가 변한 센바호

지금으로부터 약 90년 전까지만 해도 센바호의 크기가 현재의 약 3배나 되었다는 사실을 알고 계십니까? 옛날 센바호는 지금의 미토 역 남쪽 지역 부근까지 펼쳐져 있었습니다. 그렇다면 현재의 센바호는 어떻게 형성된 것일까요?

센바호는 옛부터 사람들의 생활과 깊은 관련이 있었습니다. 에도시대(1603~1868)에는 센바호가 미토성 외부의 해자(적이 쉽게 침입하는 것을 막기 위해 성 외곽에 만들어진 물 웅덩이)와 농업용수로 사용되었습니다.

다이쇼 10년(1921)에 이바라키 현이 성시화 계획 사업으로 센바호의 상류의 이는 경각자가 되고 나머지는 저수지가 되었습니다.

쇼와 25년(1950)경부터 센바호 주변은 더 이상 농경지로 사용되지 않게 됩니다. 그 후 센바호 주변을 공원으로 바꾸는 공사가 시작되었습니다. 미토 역 남쪽 지역에서는 구와 정비사업으로 시장의 이전 등이 이루어졌습니다. 그 후 미토 역 남쪽 출구가 완성되었습니다. 또 옛날에 남아있던 센바호 간척지를 시가지로 만드는 계획도 세워졌습니다.

현재의 지도와 옛날 센바호를 겹쳐서 보면 미토 역 남쪽은 옛 센바호 안에 있는 것을 알 수 있습니다. 단지 위의 ①과 호수였던 지점의 지반차이를 한번 살펴볼까요? 지점①은 수만 년 전에 퇴적된 단단한 지층으로 이루어져 있습니다.

반면 지점②는 인공적으로 매립된 위치이며 지하 약 25~30m까지 새롭게 만들어진 지층입니다. ①의 지점에 관한 자세한 내용은 뒷면 STOP2를 봐주세요.

이 책자에 대한 문의는 직접 정보 활용 프로젝트로 부탁드립니다
이메일: info@ibaraki.ac.jp (주최 번호: 16K01213)에 의뢰 부탁드립니다.

지도조정 - DTP 東京地区研究所 Tokyo Map Research Inc.
본 지도는 지형정보시스템(지오정보시스템, GIS)을 사용하였습니다.

North Ibaraki Geopark Plan

미토·센바호

이바라키 현 북부 지오파크 구상
지도 사이트 맵

토사 안에 숨겨져 있는 옛 기억을 알아 보자!

미토역 30초
미토·센바호

이바라키 현 북부 지오파크 추진 협의회
문의처: geopark@mlibaraki.ac.jp
HP: http://www.ibaraki-geopark.com

미토·센바호

지오·사이트·맵

조카마치(성하촌)으로 발전해 온 미토 대지를 생각하면서 함께 걸어 보실까요?

가미 이치 단구

가미리쿠엔 도키와신사 가미리쿠엔 일지부 가미리쿠엔역 가미리쿠엔역 동이바라키 단구

센바호 이바라키 현립 현대미술관

미토 코몬상

이바라키 현 북부 지오파크란? 이바라키 현 북부 지오파크란 이바라키 현 북부 지역을 대상으로 한 지오파크입니다. 약 5만 년 전부터 현재까지, 일본에서 가장 오랜된 대지의 역사가 남아 있습니다.

지오파크란? 지오파크는 대지 공원을 뜻합니다. 지중이나 암석에 대해 배울 수 있고, 그 대지에서 발견한 역사·문화·산업 등의 대를 알 수 있는 장소입니다.

미토·센바호

가미 이치 단구

센바호

이바라키 현립 현대미술관

미토 코몬상

이바라키 현 북부 지오파크란? 이바라키 현 북부 지역을 대상으로 한 지오파크입니다. 약 5만 년 전부터 현재까지, 일본에서 가장 오랜된 대지의 역사가 남아 있습니다.

지오파크란? 지오파크는 대지 공원을 뜻합니다. 지중이나 암석에 대해 배울 수 있고, 그 대지에서 발견한 역사·문화·산업 등의 대를 알 수 있는 장소입니다.

STOP 1 미토 역에서 도보 약 15분
아나기자키 패총

아나기자키 패총은 약 6000년 전 조몬시대에 형성된 조개부둑입니다. 하지만 센바호에 직결해 있는 아나기자키 패총은 현재의 해안선에서 약 13km 떨어진 해발 약 20m의 위치에서 발견되었습니다.

STOP 2 미토 역에서 도보 약 25분
미토 단구

이곳에서 센바호 건너편을 바라볼까요? 건너편이 이곳보다 높은 것을 알 수 있지요. 저곳이 바로 단구입니다. 사실 지금 당산이 있는 곳과 호수 건너편의 단구는 그 지하구조가 다릅니다.

STOP 3 미토 역에서 도보 약 45분
단구의 구조

인류가 단층하기 전에 형성된 약 5m 높이의 이암질벽이 선로를 따라 펼쳐져 있습니다. 그리고 이 지층 위에는 나가카와의 퇴적물인 역층(차갈이 많은 지층)도 보입니다.

STOP 4 미토 역에서 도보 약 30분
이초자키(은행나무 고개)

이 고개는 단구와 저지층을 잇는 미묘한 완만하고 고개입니다. 지중은 상상도 할 수 없지만 현재 지표로 이루어져 있는 부분을 포함해 센바호 주변 저지는 먼 옛날 물에 잠겨 있었습니다. 그래서 이 고개 밑은 센바호였습니다. 센바호의 형성 과정에 대해서는 뒷 면을 봐주세요.

방치된 시설을 사용하지 말고 관찰해 주십시오. 출입 금지 구역에는 들어가지 마십시오.

图 6 : 韩国語版

(5)12月中旬～ ご協力下さった方々へのご挨拶と各所への設置

当初は、完成品は全て日本語版の管理者であり中韓版の製作費をご負担くださった茨城大学ジオパーク推進室にお納めし、同推進室から本学図書館内のインフォメーションラウンジや水戸駅の観光案内所等に設置して戴く計画であった。「翻訳版を完成させること」にばかり意識が向いていて、完成品の活用方法にまで頭が回っていなかったのである。

その後、プロジェクト演習の課題提案者のお一人である水戸市交通政策課長の須藤文彦様のご尽力により、水戸市役所ならびに水戸市国際交流センターにも設置して戴くことができた。これを機に、制作物の活用方法についても主体性を持って考えねばという思いが高まった。2020年度の授業としてのプロジェクト演習は既に終了しているが、今後の課題として向き合っていきたい。

3 カ国語のリーフレットを完成させることができたのは、たくさんの方々のご協力があったことである。ボランティアでネイティブチェックをして下さった方々、またその方々をつないで下さった先生方、地質学的知識やイラストレーターの操作指導等で支えてくれた茨城大学地質情報活用プロジェクトの先輩方、そしてリーフレット設置にご協力してくださった方々、本当にありがとうございました。



図7：茨城大学ジオパーク推進室の皆様へ
ご挨拶と完成品のお届け



図8：水戸市国際交流センターにお届け
常務理事の七字裕二様と



図9：水戸市役所にお届け
交通政策課長の須藤文彦様と

5 : 個人レポート

皆、ありがとう

～チームの大切さを知った1年間～

茨城大学2年 根本 千歳

大学に入学して、あっという間に1年が過ぎていた。この1年間何をしていたらどうか。何か成果を得たらどうか。何もしていない。そんなこんなで私は2年生になった。何気なく教務情報ポータルのお知らせを見ていると、プロジェクト演習という集中講義のお知らせが来ていた。そこには、「社会人になったときに必要なプレゼンスキルを身につけることができる」といったような内容が書かれていた。これを受ければ就活が上手くいくのではないか。プレゼン講座、なんだか楽しそう。やって面倒くさそうだったら途中でやめればいだろう。去年何もせずに過ごした私は、軽い気持ちでプロジェクト演習を履修した。しかし、そんな甘ったるい考えではこのプロジェクト演習をやり遂げることはできなかつたのだ。

私は語学に興味があった。優しい先輩が課題提案をしてくれたチーム **KoriNa** に所属した。そして、軽い気持ちでリーダーという役職についた。最初はまだあやふやだったプロジェクトの内容も、自分たちの活動が進むにつれだんだんわかってきた。そして、予想もしていなかった大変さに、私は心が折れた。毎日送られてくる難しい言葉だらけのメール、何度も何度も繰り返さなければならない翻訳作業、会えない中での状況把握。心構えができていなかった私の頭はパンクしそうだった。メールは誰かが読んでくれるだろう。私は先輩から言われたことだけをこなしていればいだろう。そんな最低な考えをしていた。

そんな私に対して、メンバーの皆さんは優しくしてくれた。先輩たちは、何もわからなかった私に色々なことを教えてくれた。自分たちのプロジェクトのことだけでなく、メールマナーや言葉遣いなど、社会人として必要なことまで教えてくれた。リーダーである私がリーダーらしくなれるよう、指示を出してくれたこともあった。いつもアドバイスをくれ、「何かあったらいつでも言ってね」と優しい言葉をかけてくれた。チームで唯一同い年のえりちゃんも、私の仕事を自ら手伝ってくれた。積極的に活動に取り組んでいた。私はとてもメンバーに支えられていた。リーダーである私がチームを引っ張っていかなければならなかつた。こんな自分が情けなくなつた。チームメンバーに申し訳ない気持ちがこみ上げてきた。

それから私は、チームに貢献できるよう頑張つた。メールは必ずすぐに読むようにし、状況把握が常にできているよう心がけた。チーム内で分担した仕事も早めに終わらせ、今やるべきことは何か自分でも考えて行動するようになった。当たり前だと思われるこれらのことが、今までできていなかつたのだ。一生懸命頑張っていくうちに、なんとかプロジェクトを成功させたい、良い物を作りたいという欲が出てきた。プロジェクトが進むにつれ、完成が近づくにつれ、活動が楽しくなつてきた。

このプロジェクトでは、たくさんの外部の人の協力をいただいた。その中で、上手いかないこともあり、社会の厳しさを知ることもあった。お叱りを受けることも多々あった。頑張つて作業したからといって、全てが受け入れてもらえるわけではないことも知つた。その度に、チームメンバーで何がいけなかつたか共有し、正解を考えた。こうして、様々な課題をチームで乗り越えてきた。

コロナで活動がしにくいと感じることもあったが、ついに目標のリーフレットを完成させることができた。頑張つた分だけ、喜びは大きかつた。

このプロジェクト演習で様々なことを学んだが、一番気づかされたことは、チームのありがたさだ。こんなにも頼りになるチームメンバーが他にいるだろうか。リーダーらしくない私を、最後までサポートしてくれ、感謝してもしきれない。チーム **KoriNa** で活動ができて本当に良かった。チーム **KoriNa** の一員であることを誇りに思う。そして、プロジェクト演習を履修してよかったと心から思った。一年間を通して、怠けていた私は、社会人として生きていける人間に成長したと感じる。何かを一生懸命頑張ることの喜びを知ることができた。まだまだ、至らないところはたくさんある。成長したといっても、先輩たちやえりちゃんにはかなわない。支えてくれたメンバーのようになれるよう、これからの学生生活でも積極的に何かにチャレンジし、がむしゃらに頑張っていこうと思う。ありがとう、プロジェクト演習。ありがとう、チームの皆。



図：完成したリーフレットの一部分

二年目こそ新しいチャレンジ

茨城大学 3年 安藤 未羽

チーム KoriNa が誕生したのは、昨年度のことであった。我がチームの「お題」は茨城県のインバウンド推進に貢献すること。そのために海外の方に茨城県の観光資源を知ってもらおうと、茨城県の観光施設の翻訳版リーフレットを制作することにした。多くの方々のご協力を経て、昨年度は茨城県北茨城市に位置する五浦美術文化研究所の中韓版リーフレットを完成させることができた。

さて今年度は、5名のメンバーによって再びチーム KoriNa が成立した。筆者を含む2名が昨年度から続投し、新しく3名のメンバーがチームに加わってくれることとなった。昨年度道半ばとなっていた茨城県北ジオパーク構想の翻訳版リーフレット制作に取り掛かった。昨年度とは異なって具体的な活動内容が活動開始当初から定まっていたこと、またその大筋の流れを一度経験したこともあり、筆者含むリピーターは特に、それなりの自信をもって活動に臨むことができたのではないだろうか。

しかし今年度の活動は、昨年度の活動をそのまま踏襲するというわけにはいかなかった。

まず昨年度と異なったのは、英語への翻訳をする必要があったという点である。昨年度翻訳版リーフレット制作を行った五浦美術文化研究所は、元々日英版リーフレットを採用していた。そのために昨年は、英語の翻訳を行う必要がなかったのである。しかし茨城県北ジオパーク構想の既存リーフレットは日本語のみで書かれたものであったため、中国語と韓国語に加えて英語翻訳も行う必要があったのである。そのため、言語的正確さを確認していただくためのネイティブチェックに関しても、英語、中国語、韓国語と、それぞれを母国語とするネイティブの方を合計で3名探す必要があり、その点に関しても昨年度の踏襲というわけにはいかなかったのである。

次に昨年度と異なったのは、版下作成を行う必要があったという点である。昨年度の入稿作業は、翻訳した文章を印刷会社にお渡しするのみで、リーフレットの具体的なデザイン、つまり版下に関しては印刷会社の方に作成していただいた。しかし今年度リーフレット制作に取り掛かった茨城県北ジオパーク構想のリーフレットは、この版下に関してもチームで制作を行った。茨城県北ジオパーク構想のリーフレットには地図が使用されており、その分デリケートな作業が予測されたからである。また、昨年度の中韓版リーフレット1種と比較し、今年度は既存の日本語版リーフレットから英中韓版リーフレット計3種を制作する必要があったために、コストカットの必要性もあった。版下の作成は、画像編集ソフトイラストレーターにて行った。既存の日本語版リーフレットを制作された茨城大学地質情報活用プロジェクトの皆様はその使い方をご教示いただきながら、何とか版下を完成させることができた。完成後には地質情報活用プロジェクトの皆様に出ラインや地図上の細かい部分を整えていただくことで、既存の日本語版とほとんど同じクオリティで翻訳版を完成させることができた。また、通常印刷会社に依頼する版下作成をチーム内で行うことで、結果的にコストカットにも繋がった。

そして昨年度と異なった最も大きな点として、オンラインでの活動の必要性があったという点がある。感染症対策のために対面での接触を控えるためであったが、これに関してはメリットもデメリットも両方あったように感じる。まず、定期ミーティングのために毎度大学に出向く必要がなかったことは、誠に便利であった。しかし対面でないために相手の考えていることが感じ取りにくく、きちんと共通理解が持てているかどうか分かりにくかったというデメリットもあった。ここに関しては、常にチーム内で情報共有を行うことによってチーム内での齟齬が起きないように対策することによって克服した。

以上のように、今年度は二年目の活動であったものの、昨年度の活動の踏襲というわけにはいかなかった。しかし、だからこそ新しく取り組めたことが多く、新しいことに挑戦するやりがいを学ぶことができた。加えて、オンラインでの活動だからこそ情報共有を意識したために、昨年度以上に強いチームワークの中で活動することができた。この学びを生かして将来は、主体的に新しいことに挑戦し、周囲と積極的に連携を図ることで課題解決能力できる人材になりたいと考えている。

最後に、本プロジェクトにご協力いただいた全ての皆様、また一年間共に活動してくれたチームメンバーに心からの感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。



図：リーフレット設置の様子

チーム KoriNa としての 2 年間

茨城大学 3 年 中山 瑠伽

新型コロナウイルス感染症による自粛生活。そのような状況下から始まった今年度のチーム KoriNa の活動も無事に終了した。今年度の活動開始時には不安が多かった。私は昨年度からのリピーターであり、今年度も活動を続けたかった。しかし、今まで経験したことのない社会状況や、チーム KoriNa に新しいメンバーが集まるかどうか、同じリピーターである安藤とチーム全体を再度見つめなおした。結果、今年度も主体性のある良いメンバーに恵まれ、チームを成立させることができた。

今年度のチームの目的は、チーム全体として効率的に働くチームワーキング力、及び計画力や課題発見能力を養い社会人基礎力を身に付けることであった。また、プロジェクトの目的は、茨城県の観光資源 PR のために県内の既存のリーフレットを外国語に翻訳すること、外国人の方に茨城県の魅力を知ってもらい県のインバウンド推進に貢献することであった。

私自身は昨年度の反省を活かし、今年度は説明能力や計画力・柔軟性についての目標を立てた。中でも重点を置いたのは、計画力である。私は昨年度の活動時に、韓国語版・中国語版の日本語訳に齟齬があった時の対応で、印刷所に入稿するのが期限ぎりぎりになってしまった際に、素早く筋道を立てて課題を解決する力の不足を感じた。そのため、今年度の活動時には、計画の中に「計画通りいかない場合」のことも考えることを意識した。加えて、どのチーム活動でも自身に柔軟性がないと感じることが多かったため、柔軟性、そして発表時に原稿を意識してしまうため、説明能力を目標とした。

今年度の活動時、自身の目標やチーム、及びプロジェクトの目的が達成されたと感じたタイミングは 3 つある。まず 1 つ目に、チームでも個人でも重点を置いていた計画力についてである。本年度は茨城県北ジオパーク構想のリーフレットを作成するという事で、茨城県北ジオパーク推進室や茨城大学地質情報活用プロジェクト様、ネイティブチェックにご協力くださった皆様など、多くの外部の方と関わる機会があった。そのため、計画的に物事を進めることが大変重要であった。しかしその中でも、計画的に物事が進まない場合もあった。今年度は計画を立てる際に、計画通りにいかない場合も意識して計画を練ることができていたため、計画通りにいかない際のリスクを抑えることが十分にできた。2 つ目として、発表時に意識してアイコンタクトを取ったり、原稿を見ないようにしたり、など、自信を持ったコミュニケーションが取れるようにした。今年度は実際に対面で発表ができたのは 1 度だけであったが、オンラインの場合でも、カメラを通してアイコンタクトを取れるようになった。そして最後に、柔軟性である。私は昨年度の活動も含めチーム活動をする際には、どうしても「私が行う方が早い」と考えてしまい、どのような仕事でも自分で進めてしまうことが多かった。しかし今年度は、KoriNa 以外の活動も多かったという状況もあるが、メンバーに多くの仕事を任せることができた。しかし、任せた際の伝達事項などをよりきちんと伝えるべきであったという反省もある。以上が今年度に目標が達成されたと感じたタイミングであった。

また、今年度は個人の目標とチーム、プロジェクトの目的が合致している点も多くみられた。計画力はもちろんであるが、チームワーキング力という点では、私が立てた個人目標である、柔軟性と合致しているように思う。なかなか顔を合わせてやり取りできない状況ではあったが、チームとしての一体性を目指すことができた。目標を立てそれを達成していく中で、チームで働くことの重要性や難しさを認識し、そのチームの中で自分自身がどのような役割で貢献していくか、多面的に分析することの重要性を学ぶことができた。

昨年度から行ってきた、チームで外国語版リーフレットを完成させ、茨城県の観光資源 PR に貢献する、というチーム KoriNa の活動は、私の中で、大学生活の中心となっていっていった。昨年度に引き続き今年度も、様々な方との交流を通し、多くの貴重な経験をすることができた。翻訳するリーフレットを決定するときの緊張感、翻訳する際の自身の語学力の向上、出来上がった際の達成感。努力が形になり手元に届いた際の感動は大きなものである。今年度は多くのハードルを越えリーフレットが完成した。これもひとえに、ご協力くださった方々、先生方、そしてメンバーのおかげである。この場をお借りし、厚く御礼を申し上げます。来年度以降には就職活動や卒業論文執筆を控えており、もちろんその先でも多くの経験をしようと思う。そのどのタイミングでも、このプロジェクト演習、チーム KoriNa での経験を活かすことができる力を身に付けることができた。ここで培った力を存分に発揮し、今後様々なことに臨んでいきたいと思う。

コミュニケーション力と計画力の重要性

茨城大学 3年 渡邊 崇元

私がプロジェクト演習を通じて身に付けた力は、コミュニケーション力と計画力である。これらの力をどのようにして身に付けたのかを述べるまえに、まず私がこのプロジェクト演習に参加した理由を述べたいと思う。理由は、自分のコミュニケーション力と行動力を培うことができると考えたからだ。このプロジェクトは授業でありながらも、学生自らが主体的に活動されることが要求される。通常授業といえば、先生が教壇に立ち、学生は座って黒板に書かれたことをノートにまとめたり、話を聞いたりする場面を思いうかべるだろう。しかし、プロジェクト演習という授業は違う。生徒が自ら考え、行動しなければならない。そのような授業を通じて、自分を成長させたいと思い、履修した。それではどのような活動を通じて、上記の力を身に付けていったのかを次の段落から述べていきたいと思う。

まず、私はプロジェクト演習のなかでも、チーム **KoriNa** という、地域の魅力を伝える既存のリーフレットを外国語に翻訳するプロジェクトに参加した。このチームの目的は、翻訳したリーフレットをもとに、茨城県の観光資源の PR と、それらを外国人に知ってもらうことで、インバウンド推進に貢献していくことだ。この目的を達成するにあたり、チーム内でお互いが協力関係にあることや、常に全員が同じ情報を共有している状態であるなど様々な重要な要素が必要になってくる。そのなかでも、私は特にお互いのコミュニケーションがとりわけ重要だと考えた。この活動で翻訳した言語は英語に中国語、さらに韓国語の三つであった。翻訳しなければいけない量が多いことに加え、三か国語とも同じ情報が記載されていなければならない。そのために、まず日本語の独特な表現や言い回しなどを確認する作業などを行った。翻訳するうえで意識しなければいけない点が多数あるなかで、お互いがしっかりコミュニケーションを取ること、チームの目的を達成するうえで非常に大切である。同じ情報共有したり、チームメンバーが協力的な関係を構築したりするためにも、その根本的なところにはコミュニケーションが必要になってくる。チームで決めた目的をみんなで成し遂げるために、些細なことでも話すことは重要であると私は学んだ。

次に私がこの活動を通じて、身に付けたもう一つの力である計画力を述べる。私が参加した翻訳プロジェクトは、ただ三か国語の翻訳をしたら、それで終わりということではない。大学の先生や地域の企業にお勤めされているネイティブの方に、自分たちの翻訳したものが学術的に間違っていないかのチェックを依頼したり、翻訳したリーフレットをいつまでに印刷会社に発注すべきかを話し合ったりした。また、自分たちのこれまでの活動を報告する場である最終報告会に向けて、誰が、いつまでに、何をするのかという役割分担と計画を念入りに話し合い、実行してきた。このような念入りの計画があったからこそ、チームで最後まで活動をやり遂げることができたと私は考えている。チーム **KoriNa** には三年生が私を含め、三人いる。三年生とえば、だんだん自分の将来について考えなければいけない時期でもある。そのため一年を通して各企業のインターンシップに参加したり、様々な業界について研究したりすることが多くなる。また、就職活動だけでなく、大学での課題やゼミでの研究など、やらなければいけないことが多くなる学年である。自分の将来に向けて一つ一つの準備は多くの時間もかかり大変なものである。しかし、このチームと活動を通じて身に付けた計画力は上記で示した就職活動やあるいは学校の課題などで忙しい時期をどう乗り越えていくかだけでなく、これから大学を卒業し、社会に出た際にも大変役に立つ力であると私は考えている。

以上のことから、プロジェクト演習を通じて、私はコミュニケーション力と計画力の二つの力を身に付けることができた。ここで培われた力を残りの大学生活だけでなく、大学卒業後社会人になった際にも存分に発揮していきたい。繰り返しになるがプロジェクト演習は、通常の授業とは違う。学生自らが主体的に活動し、学んでいくことができる授業はとても貴重なものである。今回私は特にコミュニケーション力と計画力を得たが、この活動を通じて他にも得られたものはたくさんある。プロジェクト演習は様々なことを学べる大変素晴らしい授業だと私は感じた。



図：ジオパーク推進室での作業風景

苦手の克服とたくさんの学び

茨城大学 2年 小澤 栄里

まず、私がプロジェクト演習に参加したのは、大学生になったら、何かにチャレンジしたいと思っていたことがきっかけだった。加えて、社会人になるための基盤を構築したいとも考えていたため、プロジェクト演習で社会人基礎力を身につけることができると知り、この授業の履修を決めた。また、このチームに決めた理由は、元々言語の勉強が好きだったからだ。言語能力を上げるとともに、社会人基礎力の向上をしたいと思い、このチームへの参加を決めた。

私がこのチームで活動して得られたことや学んだことについて、三つ述べる。一つ目は、ストレスを前向きに捉えるという思考だ。私はもともとストレスに弱く、ストレス耐性の低さが社会人になった際の一番の懸念点だった。そのため、個人の達成目標ルーブリックでは、ストレスコントロール力を伸ばすことに大きな比重を置いていた。このように目標を定めていたものの、最初はストレスから逃げてしまうことも多々あり、なかなかこの力を伸ばすことは難しかった。特に、前期のオンラインのみでのチーム活動は、コミュニケーションを取ることが難しく、コロナ禍の活動という点でのストレスが大きかった。しかし、終盤になるにつれて、チーム活動にも慣れ、多少時間はかかるが、ストレスや不安に感じることもあっても、「成長の機会だ」、「なんとかできる」と前向きに捉えられるようになったと感じる。このように思えたのは、自分の考えの変化だけではなく、チームメンバーの存在が大きかったと考える。イラストレーター作業や、普段のメール対応やミーティングなど、大変なことがあっても、一緒に活動し、頼れるメンバーがいたからこそ、ストレスや不安を緩和できたように思う。

二つ目は、人に頼ってもいいということだ。当たり前なことかも知れないが、人に頼ることが苦手だった私にとっては、とてもいい機会になった。リピーターがいるチームだったため、学外の方や先生との会議の仕方、メール対応の仕方、リーダーシップ性など、たくさんのことを学ばせていただいた。とても頼れる先輩であるため、報告会や普段のメール対応やミーティングなど、どうしても頼ってしまう機会が多くなってしまい、最初は申し訳ないという気持ちが大きかった。しかし、「何か分からなかったら言ってね」「何か手伝えることはある？」など、声をかけてもらい、「人に頼ってもいい」、「人に頼ることは申し訳ないことではない」という思考が生まれた。今後は、自分が人に頼られるような存在に成長したいと考えている。

三つ目は、チームで動く楽しさや大変さを知ることができたということだ。私はもともと、一人で行動する方が好きで、人というのあまり得意ではなかった。しかし、仲間と一つの物を作り上げるというチーム活動を通して、辛さの中にも楽しさがあり、チームで動くことがとても有意義に感じられた。また、チームで課題に向けて行動する経験が今までなかったため、最初は自分が何をすべきかがわからず、「これをした方がいいのかな」と考えるだけで、行動に移すことができず、苦しい思いをしていた。しかし、徐々に、メンバーの状況を考えて、自分にできること、すべきことが分かり、行動に移すことができた。この点が、一番成長できた部分なのではないかと考える。

このように、ストレス耐性や人との関わり方、チーム内での動き方など、この一年でたくさんのことを吸収し、大きく成長できたように感じる。また、これらに加えて、このプロジェクトに快くご協力くださった方々と関わる中で、人とつながる大切さや、有り難さを感じた。コロナ禍で人と会う機会が減ったことで、より一層このように感じられたのではないと思う。最初は、自分の言語能力と社会人基礎力の向上を期待して参加したが、このように、想像以上の成長・学びがあった。これは、ただでさえ大変なプロジェクト演習を、コロナ禍の大変な一年に履修できたからこそ得られたのだと思う。

これまで、ストレスになることから避け、挑戦することを恐れていた。しかし、ある程度のストレスは、成長や学びに繋がり、また、周囲と協力することで、大変な中でも楽しさを感じられることを知った。また、このプロジェクト演習を通して、成功体験が得られ、何かに挑戦することに対して前向きになれたように感じる。これからは、やってみたいけど、「大変そうだな」、「辛そうだな」ということに対して恐れずに、この授業で得たことを活かし、いろいろなことに挑戦していきたい。



図：水戸市国際交流センターへの設置

6 : おわりに

小澤 栄里

2020年6月、本格的に活動が開始した。感染症の影響で、前年より2ヶ月遅れのスタートであったため、スケジュールはかなりタイトであった。そんな不安の多い中、リピーターがいたことで、前年度の反省をもとに計画を立てることができ、今年度から参加したメンバーはとても心強く感じていた。しかし、順調そうな活動の中にも、いくつもの壁があった。「予算の関係上、三言語全てを印刷できないかもしれない」、「慣れないイラストレーター作業で、印刷用の版下がなかなか終わらない」などである。だがこれらは、本プロジェクトにご協力いただいた方々のご尽力とメンバーの努力によって、乗り越えることができた。問題一つ一つに対し、メンバーそれぞれが対処方法を考え、次のステップに進む。問題が一つ解決するごとに、リーフレット完成に向けて、大きく進んでいるような感覚を感じていたことを覚えている。このような、チームで一つのものを作り上げるという体験は、普通に大学生活を送っている中では、滅多にできないことである。そのため、メンバー一人一人にとって、この活動は大学生活の中での、大きな経験の一つになっているだろう。

私たちは、チームの目標として、社会人基礎力を養うことを掲げていた。具体的には、チームワーキング力、計画力、課題発見能力だ。この中でも特に、この一年で成長した部分は、チームワーキング力だと考える。コロナ禍だからこそ常に情報共有を意識し、チーム活動の現状をメンバー全員が把握することによってチームワーキング力を高めることができた。また、プロジェクト開始時よりもメンバーそれぞれが、常にすべきことを意識して行動できるようになった。対面でのコミュニケーションが難しい中、一人一人が成長したことによって、チームの結束力が高まったのではないだろうか。

リーフレットの選定から始まり、翻訳作業、イラストレーター作業、リーフレットの最終確認、たくさんの細かい作業を積み重ね、納得のいくリーフレットを完成させることができた。実際に手元にリーフレットが来た時、「やっとここまで来ることができた」と、感慨深いものがあった。しかし、リーフレットを完成させ、配布まで出来たことは、もちろん私たち力だけではなく、たくさんの支えがあったからである。ネイティブチェック、イラストレーターのご教示、印刷会社、担当教員のご協力。多くの方々に支えてもらっていたことを、この文章を書きながら、改めてひしひしと感じている。コロナ禍で、人と会えることが当たり前ではないことを知っていたからこそ、人との繋がり大切さをより強く感じることもできたのだろう。

現在の情勢を考えると、外国人観光客が、実際にこのリーフレットを手取るのは、かなり先のこともかもしれない。しかし、またいつか元の日常に戻り、私たちの努力・想いのこもったリーフレットが外国人観光客の手に渡った時、少しでも茨城県の魅力が伝わるよう願っている。

最後になりますが、茨城大学ジオパーク推進室の皆様、茨城大学地質情報活用プロジェクトの皆様、ネイティブチェックにご協力いただいた皆様、印刷会社の皆様、配布にご協力くださった皆様、担当教員の皆様、本プロジェクトにご協力いただいたすべての皆様に、心より御礼申し上げます。

6 : 茨大交通政策課チーム

リーダー	: 菊池祐太郎	茨城大学人文社会科学部人間文化学科	3年
副リーダー	: 伊丹 丈瑠	茨城大学人文社会科学部人間文化学科	3年
副リーダー	: 尾崎 友祐	茨城大学人文社会科学部人間文化学科	3年
書記	: 小野 夏鈴	茨城大学人文社会科学部現代社会学科	2年
書記	: 齋藤 遥	茨城大学人文社会科学部現代社会学科	2年
会計	: 高野 優香	茨城大学人文社会科学部現代社会学科	2年
会計	: 和田 綾香	茨城大学人文社会科学部現代社会学科	2年
渉外	: 大竹 美沙	茨城大学人文社会科学部人間文化学科	2年
渉外	: 河内彩奈咲	茨城大学人文社会科学部人間文化学科	2年

主担当教員 : 鈴木 敦 茨城大学人文社会科学部教授

副担当教員 : 岩佐 淳一 茨城大学人文社会科学部教授

「茨大交通政策課チーム」活動報告書

1 : はじめに

河内 彩奈咲

私たち「茨大交通政策課」チームは、茨城大学人文社会科学部地域志向教育プログラムプロジェクト演習の中で、「公共交通等利用促進プロジェクト」という水戸市役所交通政策課様からのご提案を受けて結成されたチームである。

このチームは毎年結成されており、昨年度までは水戸市内のバスの利用促進を目的とした活動を行ってきた。しかし今年度の私たちは、茨大生が関わる自転車事故が増加していることや茨城大学前の国道123号線が茨城県のサイクルツーリズム推進事業で策定するサイクルルートの候補路線となっていることに着目して、茨大生の自転車マナー向上を目的とする活動を行うことにした。自転車マナーを周知するために工夫を凝らした動画・チラシ・電子パンフレットを制作し、完成後には学内外の様々な場所で設置・掲載をしていただいくことができた。

約9カ月という短い期間の中で、多くの課題に直面しながらも、水戸市役所交通政策課の皆様や先生方をはじめ多くの方々のご協力があって、チームとして最後まで本プロジェクトを遂行することができた。私たちが制作した動画・チラシ・電子パンフレットが、茨大生を中心により多くの人目に触れ、自転車マナーの向上につながることを願っている。

2：活動概要

高野 優香

(1) 活動の目的

①プロジェクトの目的

プロジェクトの目的は「茨大生の自転車マナー向上」である。理由は、これまでプロジェクト演習において自転車を対象とした取り組みが行われてこなかったこと、茨城大学前の国道123号線が茨城県のサイクルルートの候補路線になっていること、学生が関わる自転車事故が年々増加していること、の3点である。

②チームの目的

私たちのチームの目的は、社会人基礎力を養成することである。これを達成するために、大学全体を巻き込むこと、コンテンツを制作・公開すること、課題解決能力を身につけること、という3つの小目標をたてた。

(2) 活動の概要

以下、茨大交通政策課チームの主な活動とその概要について述べていく。

①定例会議

毎週1回オンライン上で定例会議を実施した。プロジェクトを成功するために、チーム内で何度も話し合いを行った。

②フィールドワーク

2020年8月25日に、茨城大学の構内と大学周辺で実施した。大学構内では駐輪場やグリーンラインの視察、大学周辺では自転車事故の多い場所や自転車事故が起こりそうな場所を視察した。

③学外実習

2020年9月10,11,14,15,17,18日に3班に分かれて、水戸市役所交通政策課にて学外実習を行った。水戸市役所交通政策課の方々にご指導いただき、動画やチラシの具体的な構想を考え、チームメンバー同士で意見交換を行った。また、実際に自転車の通行指導を見学させていただき、自転車利用に関する現状や正しい走行方法を学んだ。

④サイクルツーリズムの勉強会

2020年9月30日に、Zoom上でサイクルツーリズムの勉強会に参加した。水戸市役所交通政策課の方からご提案いただき、サイクルツーリズムについて専門家の方からお話を聞いた。自転車に乗ることは事故の危険があるだけでなく、ツーリズムとしても人気のある楽しい乗り物であるということを改めて再確認することができた。

⑤ラジオ出演

2020年10月31日に、チーム代表者3名がIBS茨城放送様の番組「4Me」の「青春インタビューービングなう！」のコーナーに出演した。チームの活動の目的や具体的な取り組みを紹介させていただいた。

⑥チラシ・電子パンフレットの作成

2020年9月～11月にかけてチラシと電子パンフレットを作成した。チラシ・電子パンフレットはIllustratorを使用して作成した。チラシは「思わず読みたくなる、繰り返し見てもらう」を電子パンフレットは「より詳しい実用的な情報を伝える」をコンセプトに作成した。

⑦動画撮影・制作

2020年11月に撮影・編集作業を行い、動画を制作した。動画の撮影は、大学構内、大学前の道路、大洗の海岸で行った。茨城大学生協様、ケバブのキッチンカーPapa chef様、大学周辺のラーメン店の方々にご協力をいただき制作することができた。動画は、「共感できるテーマを軸に多くの人に見てもらおう」をコンセプトに制作した。

⑧制作物の公開

2020年12月に茨大交通政策課チームのYouTubeとTwitterに「茨大あるある」動画3本を公開した。1月には、水戸市役所様のYouTubeに自転車マナー啓発動画2本を掲載していただいた。また、茨城大学の人文社会科学部のデジタルサイネージにも自転車マナー啓発動画2本を掲載していただいた。プロジェクト演習のFacebookでも自転車マナー啓発動画2本を掲載していただいている。現在(1月24日時点)では、チラシを配布する準備をしており、学内に置かせていただく予定である。また、チラシ・電子パンフレットはチームのTwitterやプロジェクト演習のFacebookで公開する予定である。

3 : 議事録・活動記録

齋藤 遥

No.	日時	場所	活動内容	参加者	実働時間
1	2020年 6月26日 16:50 - 18:10	Teams	チームの方向性と、チーム名、定例会議の日にちに関する話し合い	小野、齋藤、大竹、河内、菊池	1:20
2	2020年 6月29日 20:00 - 21:10	Teams	具体的にチームが取り組む課題を決定し、案を出す	小野、齋藤、高野、和田、大竹、河内、伊丹、尾崎、菊池	1:10
3	2020年 7月2日 8:40 - 10:20	Teams	水戸市交通政策課様との顔合わせ、方向性の話し合いや質疑応答	小野、齋藤、高野、和田、河内、伊丹、尾崎、菊池	1:40
4	2020年 7月3日 20:00 - 21:30	Teams	プロジェクト課題のテーマを決める	小野、齋藤、和田、大竹、河内、伊丹、尾崎、菊池	1:30
5	2020年 7月4日 14:00 - 16:10	Teams	活動内容の具体化、課題の洗い出しなど	小野、齋藤、高野、和田、大竹、河内、伊丹、尾崎	2:10
6	2020年 7月5日 14:00 - 16:10	Teams	活動内容の具体化	小野、齋藤、高野、河内、伊丹、尾崎、菊池	2:10
7	2020年 7月6日 20:00 - 21:10	Teams	水戸市交通政策課様からの意見の共有と、課題の最終決定	小野、齋藤、高野、和田、河内、大竹、尾崎、菊池	1:10
8	2020年 7月13日 20:00 - 21:30	Teams	水戸市交通政策課様からの意見をもとに活動内容の具体化	小野、齋藤、高野、和田、大竹、河内、伊丹、尾崎	1:30
9	2020年 7月16日 8:30 - 10:20	Teams	水戸市交通政策課様と鈴木先生、岩佐先生に参加いただき、プロジェクトの見直し	小野、齋藤、高野、和田、河内、尾崎、菊池	1:50
10	2020年 7月16日 13:00 - 14:40	Teams	見直したプロジェクトの具体化	小野、齋藤、高野、和田、大竹、菊池	1:40
11	2020年 7月20日 20:00 - 21:40	Teams	プロジェクト構想書の改善、チーム決め	小野、齋藤、高野、和田、大竹、河内、伊丹、尾崎、菊池	1:40
12	2020年 7月22日 12:30 - 13:20	Teams	動画班、動画についての話し合い	小野、高野、河内、伊丹	0:50
13	2020年 7月27日 20:00 - 21:30	Teams	プロジェクト構想書の改善、各チームでの企画の具体化	小野、齋藤、高野、和田、大竹、尾崎、菊池	1:30
14	2020年 8月2日 20:00 - 21:00	Teams	パンフレット班、パンフレットについての話し合い	齋藤、和田、大竹、菊池	1:00
15	2020年 8月3日 20:00 - 21:10	Teams	班ごとの活動報告、班別での話し合い	小野、齋藤、高野、和田、大竹、河内、尾崎	1:10
16	2020年 8月10日 20:00 - 21:20	Teams	班ごとの活動報告、班別での話し合い	小野、齋藤、高野、和田、大竹、河内、伊丹、菊池	1:20
17	2020年 8月17日 20:00 - 21:20	Teams	班ごとの活動報告、班別での話し合い	齋藤、高野、和田、大竹、河内、伊丹、尾崎、菊池	1:20
18	2020年 8月20日 18:00 - 19:20	Teams	動画班、動画についての話し合い	小野、河内、尾崎	1:20
19	2020年 8月24日 17:00 - 18:20	Teams	班ごとの活動報告、フィールドワークについて、班別での話し合い	小野、齋藤、高野、和田、大竹、河内、伊丹、尾崎、菊池	1:20
20	2020年 8月25日 10:00 - 11:30	茨城大学構内、茨城大学正門周辺、セイブ袴塚店前	動画・パンフレット制作のためのフィールドワーク	小野、齋藤、高野、和田、大竹、河内、尾崎、菊池	1:30

21	2020年 8月31日 13:00 - 14:40	Teams	岩佐先生、鈴木先生とのミーティング、 動画・パンフレット作成にあたっての相談	小野、齋藤、高野、和田、大竹、 伊丹、尾崎、菊池	1:40
22	2020年 8月31日 20:00 - 21:40	Teams	前回のミーティングの振り返り、班別で の話し合い	小野、齋藤、高野、和田、大竹、 河内、伊丹、尾崎、菊池	1:40
23	2020年 9月3日 10:00 - 11:15	Teams	動画班、動画についての話し合い	高野、伊丹、尾崎	1:15
24	2020年 9月3日 19:00 - 21:00	Teams	動画班、絵コンテの作成	小野、河内、尾崎	2:00
25	2020年 9月7日 10:00 - 13:00	人文C棟503室	パンフレットの作成	齋藤、和田、大竹、菊池	3:00
26	2020年 9月7日 19:00 - 20:00	Teams	動画班、絵コンテの作成	小野、高野、河内、尾崎	1:00
27	2020年 9月7日 20:00 - 21:30	Teams	前回のミーティングの振り返り、班別で の話し合い	小野、齋藤、高野、和田、河内、 大竹、伊丹、尾崎	1:30
28	2020年 9月10日 9:00 - 10:40	Teams	動画班、絵コンテの作成	小野、高野、尾崎	1:40
29	2020年 9月11日 9:00 - 11:00	Teams	動画班、絵コンテの作成	小野、高野、尾崎	2:00
30	2020年 9月21日 20:00 - 21:30	Teams	各班の方針の報告、班別で話し合い	小野・齋藤・高野・和田・大竹・ 河内・尾崎・菊池	1:30
31	2020年 9月28日 20:00 - 22:00	Teams	各班の進捗報告、意見交換、班別での 話し合い	小野、齋藤、高野、和田、大竹、 河内、尾崎、菊池	2:00
32	2020年 9月30日 8:40 - 9:40	Teams	パンフレット班、チラシについての話し 合い	齋藤、和田、大竹、菊池	1:00
33	2020年 9月30日 13:30 - 15:00	Zoom	「大洗・ひたち海浜公園シーサイドルー トを活用したサイクルツーリズムの推進 に係る専門家による勉強会」の参加	小野、齋藤、高野、和田、河内	1:30
34	2020年 10月1日 16:00 - 17:40	Teams	動画班、動画の構成についての話し合 い	小野、高野、河内、尾崎	1:40
35	2020年 10月2日 8:40 - 10:00	人文講義棟28番教室	各班の進捗報告、意見交換、キックオフ 報告会の準備	小野、齋藤、高野、和田、大竹、 河内、尾崎、菊池	1:20
36	2020年 10月5日 17:30 - 18:20	Teams	キックオフ報告会の準備	小野、高野、和田、大竹、河内、 伊丹、尾崎、菊池	0:50
37	2020年 10月5日 18:20 - 19:40	Teams	動画班、動画の構成についての話し合 い	小野、高野、河内、伊丹、尾崎	1:20
38	2020年 10月7日 8:40 - 10:10	Teams	パンフレット班、チラシと電子パンフレ ットについての話し合い	齋藤、和田、大竹、菊池	1:30
39	2020年 10月7日 12:40 - 14:40	Teams	動画班、動画についての話し合い	小野、高野、河内、尾崎	2:00
40	2020年 10月12日 17:30 - 20:20	Teams	キックオフ報告会の準備、班別での話し 合い	小野、高野、和田、大竹、河内、 伊丹、尾崎、菊池	2:50
41	2020年 10月14日 20:00 - 22:40	Teams	キックオフ報告会の最終準備	小野、齋藤、高野、和田、大竹、 河内、伊丹、尾崎、菊池	2:40
42	2020年 10月16日 18:00 - 19:00	Teams	動画班、動画についての話し合い	小野、河内、尾崎	1:00
43	2020年 10月19日 18:00 - 20:00	Teams	動画班、動画についての話し合い	小野、高野、河内、伊丹	2:00
44	2020年 10月21日 8:40 - 9:20	Teams	動画班、動画についての話し合い	高野、河内、尾崎	0:40
45	2020年 10月23日 8:40 - 9:10	Teams	意見の出し合い、相談、進捗状況確認	齋藤、高野、和田、大竹、河内、 尾崎、菊池	0:30
46	2020年 10月24日 9:00 - 10:30	Teams	動画班、動画についての話し合い	小野、高野、尾崎	1:30

47	2020年 10月27日 8:40 - 9:10	Teams	動画班、動画についての話し合い	小野、河内、伊丹、尾崎	0:30
48	2020年 10月30日 8:40 - 9:30	Teams	撮影の打ち合わせ、ラジオ打ち合わせ、 班別話し合い	小野、齋藤、高野、和田、大竹、 河内、尾崎、菊池	0:50
49	2020年 11月2日 8:40 - 10:10	茨城大学構内	動画撮影	小野、齋藤、高野、和田、大竹、 河内、尾崎、菊池	1:30
50	2020年 11月4日 8:40 - 10:10	茨城大学構内	動画撮影	小野、齋藤、高野、和田、大竹、 河内	1:30
51	2020年 11月5日 11:50 - 12:40	茨城大学構内	動画撮影	小野、大竹、河内、尾崎	0:50
52	2020年 11月6日 8:40 - 10:10	Teams	動画撮影、録音	小野、齋藤、高野、和田、大竹、 河内、尾崎	1:30
53	2020年 11月7日 9:00 - 12:00	大洗海岸	動画撮影	小野、高野、河内、尾崎、菊池	3:00
54	2020年 11月8日 9:30 - 11:00	茨城大学正門前公道	動画撮影	小野、高野、伊丹、尾崎	1:30
55	2020年 11月9日 16:00 - 17:00	茨城大学生協	動画撮影	小野、高野、和田、大竹、河内、 尾崎	1:00
56	2020年 11月10日 12:00 - 12:20	茨城大学生協前	動画撮影	小野、齋藤、高野、和田、大竹、 河内	0:20
57	2020年 11月16日 8:40 - 10:10	茨城大学構内	動画撮影	小野、齋藤、高野、和田、大竹、 河内	1:30
58	2020年 11月17日 21:00 - 22:20	Teams	動画・パンフレットの進捗確認	小野・齋藤・和田・大竹・河内・ 尾崎・菊池	1:20
59	2020年 11月20日 8:40 - 10:00	Teams	これからの方針について、報告会の準備	小野・齋藤・高野・和田・大竹・ 河内	1:20
60	2020年 11月27日 8:40 - 10:10	Teams	動画・パンフレットの掲載について	小野、齋藤、高野、和田、大竹、 河内、伊丹、尾崎、菊池	1:30
61	2020年 12月4日 8:40 - 10:10	Teams	発表会のPPTについて	齋藤、高野、和田、大竹、尾崎、 菊池	1:30
62	2020年 12月11日 8:40 - 9:40	Teams	発表会についての話し合いなど	小野、齋藤、高野、和田、大竹	1:00
63	2020年 12月16日 8:40 - 9:50	Teams	発表練習	小野、齋藤、高野、河内、尾崎、 菊池	1:10
64	2020年 12月16日 9:00 - 9:30	学生支援センター	電子パンフレット話し合い	和田、大竹	0:30
65	2020年 12月18日 8:40 - 9:40	Teams	発表練習	小野、齋藤、高野、和田、大竹、 河内、尾崎、菊池	1:00
66	2020年 12月18日 9:40 - 10:10	Teams	パンフレット班、電子パンフレットとチラシ についての話し合い	齋藤、和田、大竹、菊池	0:30
67	2020年 12月24日 11:00 - 11:30	生協	話し合い	和田、大竹	0:30
68	2021年 1月19日 12:40 - 13:15	鈴木先生の研究室	チラシ発注作業	和田、大竹	0:35
69	2021年 1月21日 15:00 - 15:30	学生支援センター	話し合い	和田、大竹	0:30
70	2021年 1月26日 13:15 - 14:00	鈴木先生の研究室、 人文学務	パンフレット発注作業、話し合い	和田、大竹	0:45
71	2021年 2月8日 14:40 - 15:10	鈴木先生の研究室	チラシ等の受け取り	齋藤、和田、大竹	0:30
72	2021年 2月16日 11:00 - 11:50	水戸市役所	チラシの受け渡し	菊池、齋藤、和田	0:50
73	2021年 2月16日 14:00 - 16:00	茨城大学構内	チラシ等の設置、掲示	齋藤、和田、大竹	2:00
				合計	124:15

4：活動トピック

和田 綾香

(1) フィールドワーク

2020年8月25日 10:00～11:30に茨城大学構内と茨城大学周辺に分かれ、フィールドワークを行った。茨城大学周辺では自転車事故の多い場所、自転車事故が起こりそうな場所を中心に視察を行い、茨城大学構内では駐輪場やグリーンラインの視察を行った。



図1：茨城大学周辺視察の様子



図2：茨城大学構内視察の様子

(2) 学外実習

2020年9月10,11,14,15,17,18日 8:30～17:15に水戸市役所交通政策課にて学外実習を行った。水戸市役所交通政策課の方々にご指導いただき、動画やパンフレットのコンセプト等、具体的な構想を考えた。

また、水戸市が進めている「水戸市自転車利用環境整備計画」についてのご説明を受け、実際の通行指導を見学させていただいた。



図3：学外実習の様子

*編者注：

コロナ禍で各種活動が制限される中、感染症対策を徹底した上で受け入れて戴きました。水戸市役所の皆様のご尽力に、心より篤く感謝申し上げます。

(3) 動画の撮影、制作

動画は「共感できるテーマを軸に多くの人に見てもらおう」をコンセプトに制作した。自転車マナー啓発を押し出しすぎると誰も見てくれないのではないかと考え、茨大あるあるを集めた動画の中に CM として自転車マナー啓発動画を挿入することにした。

茨大あるあるは実際に茨城大学の学生にアンケートをとり集めて制作したもので、バイト編&食事編の間には「イヤホンで音楽を聴きながらの運転の危険性」を伝える CM、授業編&サークル編の間には「自転車は車道の左側」を伝える CM をそれぞれ挿入した。

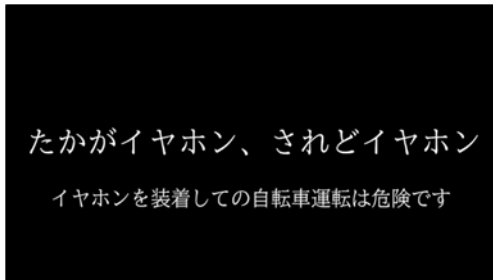


図 4：作成した動画①



図 5：作成した動画②

(4) チラシ・電子パンフレットの制作

チラシは「思わず読みたくなる、繰り返し見てもらおう」を、電子パンフレットは「より詳しい実用的な情報を伝える」をコンセプトに作成した。チラシは多くの人に手に取ってもらえるよう、ルール違反を組み合わせたイラストの間違い探しを載せたチラシを作成し、楽しみながら自転車ルールを学んでもらえるよう工夫した。

電子パンフレットはチラシ裏面の QR コードから見られるようにし、より自転車保険や茨城大学周辺の自転車修理店などより詳しく実用的な情報を載せた。



図 6：作成した電子パンフレット

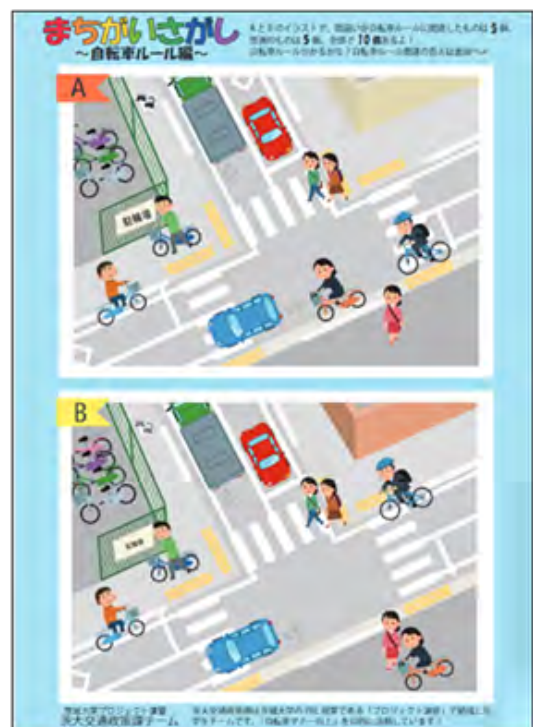


図 7：作成したチラシ

5：学外実習レポート（水戸市役所 市長公室交通政策課）

公共交通の担い手として

菊池 祐太郎（人文社会科学部人間文化学科 3年）

1. 参加の動機

今回、私はこの学外実習に「プロジェクト演習」の一環として参加しました。もともと私が地元や地域に貢献できるような仕事がしてみたいと思っており、そのアプローチの仕方は様々なものがあるかと思えます。その中でも水戸市役所交通政策課が取り組んでいる公共交通・交通空間というのは、普段自分が利用していることもあり、自分たちの力でなんとか貢献してみたいと思い、交通政策課の課題を選択しました。

2. 派遣先の概要と業務内容

今回学外実習を受け入れてくれた水戸市役所交通政策課は水戸市の公共交通の企画及び調整に関する業務や自転車走行空間整備の企画及び調整に関する業務を行っています。今年はコロナの影響もあり、例年より短い2日間の学外実習となりました。そのためプロジェクト演習で取り組んでいた「自転車マナーの向上」という課題解決に重点を置き、自転車マナーに関するレクチャーを受け、実際の交通指導を見学したり、資料作成のためのパソコン業務、そして市役所の方々へのプレゼンなどを行いました。



図：交通指導見学の様子

3. 学外実習を通して修得したこと

今回の学外実習を通して学んだことは、細部にまでこだわる丁寧さです。

公共交通は普段からいろんな人が利用していて、ある意味「ありふれた存在」といっても過言ではないと思います。自転車に関しても同じで「自転車に乗る」というのはみんなすることですし、目にする光景です。だから多くの人は公共交通を特段意識することなく、「普通」に利用していると思います。

しかし、そういう「ありふれた」、「普通」の中には細かい決まりや考えが詰まっていました。自転車レクチャーの中では、事前に自転車について情報を集め勉強していた私たちも全然知らなかった法律や条例を学べました。また、交通政策課の業務への取り組み方にも様々な決まりがあり、例えば、交通指導を見学した際、自転車に車道側を走らせること自体を目的とせず、むしろ弱者(歩行者)を守ることが大切だと学び、ほかにも資料の作成の際は見やすさや全体の仕上がりを考え、丁寧に作業していることを学びました。

今まで交通安全マナーと聞くと、「そんな細かいとこまでどうでもいいじゃん」と思うこともありましたが、「神は細部に宿る」という言葉があるように、一人一人という細かい単位で安全を意識することで、最終的には交通空間全体の安全に繋がっていくのだと思います。そして多くの人に安全を意識してもらうためにも、交通政策課の細部にまでこだわっていて、丁寧な企画や施策が欠かせないのだと思いました。

4. 後輩へのアドバイス

学外実習には、チャンスがあればなるべく参加するべきだと思います。学外実習は働くことを実感できる場であり、多くのことを学ぶことができる場であるのはもちろん、自分の考え方やモノの見方を変えるきっかけでもあります。そういった経験は就活するときにも必ず役立ちますし、自分の人生の蓄えにもなります。できるだけ経験が積める機会を逃がさないようにしてもらいたいです。

また、時間は厳守するようにしましょう。集合時間や締め切り時間など社会人にも数多くの時間が与えられています。しかしその時間は学校というモラトリアムの中とは比べられないほど大きな責任を伴っています。学外実習に参加する際には社会人になったつもりで責任をもって行動しましょう。

現場に行って初めて知った公務員という職業

伊丹 丈瑠（人文社会科学部人間文化学科 3 年）

1. 参加の動機

私は、自分の専攻分野を活かした職業に就きたいという考えから、学芸員資格の取得を目指しています。この資格を保有する者は博物館を始め、自治体の文化財保存課や教育委員会の職員として働く機会が設けられています。このことから、以前から地方公務員が働く現場に関心を持っていました。今回、水戸市交通政策課様が現場学外実習を提供して下さいと知り、このような貴重な機会を逃す訳にはいかないと考え、参加する事を決めました。コロナ禍の中、現場実習を提供して下さいった同課の皆様及び交渉に当たった先生方に感謝申し上げます。



図：学外実習の様子

2. 派遣先の概要と業務内容

現在、水戸市は超高齢化社会の到来を始め、高度経済成長期に整備したインフラの老朽化や地球環境問題など新たな課題に直面しています。そこで、同課では都市機能を構成要素する交通に着目し、年齢や障害等に関わらずあらゆる人々が心地よく安全に利用できる公共交通の整備に加え、環境に配慮したスマートシティの構築などを目指しています。同課での学外実習は二日間で実施され、初日は自転車政策の学習や通行指導の視察など、現場の実情を体験しました。そして、二日目は初日で得た知見を基に、自転車政策の立案及び発表を行いました。

3. 学外実習を通して修得したこと

学外実習に参加する前は、公務員は真面目かつ誠実というプラスの印象を持っていた一方で、発想が固く、他人の意見に厳しいというマイナスの印象も持っていました。しかし、実際に学外実習に参加した事で、印象は大きく変わりました。まず、プラスの印象についてです。本課で働く職員の方々は職務に忠実であり、地域の課題を解決する為に自分は何が出来るのか真剣に考えていました。これを受け自分の考えは概ね当たっている事が分かり、より公務員という職業に好感を持つ事となりました。次に、マイナスの印象についてです。二日間という短い期間ではありますが、職員の方と共に業務を行い、柔軟な発想を受け入れて下さる方が多い事に気付きました。「2. 派遣先の概要と業務内容」で紹介した通り、二日目に自転車政策を自分で立案し発表する機会がありました。私は、学生や市民といった特定の対象には限定せず、出来る限り多くの人に関心を持って貰えるよう、コロナ禍に伴い巣ごもり需要が増大した点も考慮した上で、ゲームソフトを利用して自転車政策をPRする事を提案しました。私と一緒に参加した学生はチームで行っている活動を軸に学生を対象とした施策を提案した為、方向性を間違えてしまったと後悔しました。しかし、実際に発表を行うと私の施策に関心を持って下さる方が多く、貴重なアドバイスや質問を頂く事が出来ました。良識に反しない限り、発想や考えを受け入れ、批評をして下さる職員の方々の丁寧な姿勢に尊敬の念を抱きました。二日間を通して、公務員に対する自分の印象が大きく変化しました。また、社会人としての業務に対する基本的な姿勢について学ぶ事が出来た、大変重要かつ貴重な経験と考えております。

4. 後輩へのアドバイス

学外実習は、世の中にはどんな仕事があるかを知るだけでなく、現場で働く人がどういう姿勢で仕事をしているか知る事が出来る貴重な機会です。自分の知見を向上させる為にも、まずは自分が関心を持つ業務から、時間に余裕のある1年次の内から積極的に参加して欲しいと思います。

見てもらうための仕掛け・工夫

尾崎 友祐（人文社会科学部人間文化学科 3年）

1. 参加の動機

私が今回、学外実習に参加した動機は、水戸市が現在、どのようなことに取り組み、どのような課題を背負っているのか、私たち市民はその課題に対してどのような形で関わることができるのかを学びたかったからです。また、私は大学のプロジェクト演習という講義を受講し、茨大生の自転車マナー向上のプロジェクトに取り組んでいるので、学外実習を通してプロジェクトに活かせるアイデアも得たいと思ったからです。



図：学外実習 1日目

2. 派遣先の概要と業務内容

水戸市役所交通政策課は、公共交通の企画や調整に関すること、高齢者・障がい者等の移動等の円滑化の促進に関する法律に関すること、自転車走行空間整備の企画や調整に関することを主に担っています。

私は2日間の学外実習に参加させていただきました。1日目は、自転車の交通ルールや自転車事故、自転車保険などの自転車に関する情報収集を行った他、自転車の通行指導の見学をさせていただきました。

2日目は、自身が大学のプロジェクト演習という講義で取り組んでいる、自転車マナー向上を目的とした動画のシナリオ作成を行いました。プロジェクト演習には、水戸市交通政策課の方々と共に取り組んでいる為、2日目にプロジェクト演習に関する作業に取り組む時間を設けていただきました。

3. 学外実習を通して修得したこと

私は学外実習に参加したことで、自分たちが作ったものを多くの人に見てもらうためには、仕掛けや工夫が大切であるということを知りました。先ほど述べたように、私は大学のプロジェクト演習という講義で、水戸市交通政策課の方々と共に自転車マナー向上プロジェクトに取り組んでいるのですが、そのプロジェクトにおいて、自分たちがどんなことを伝えて、どうしてもらいたいかわかりを考えていました。そのため、独りよがりな押し付けがましい雰囲気になっていました。しかし、2日間の学外実習を通して自分たちが何を伝えたいかだけでなく、どうすれば多くの方が自分から進んで見たいようになるのか、どうすれば自転車マナーを楽しく学んでもらえるかという仕掛けや工夫を施すという考え方を得ることができました。どれだけ一生懸命作ったものでも誰も見てくれなかったら意味がありません。多くの人に見てもらえるように、楽しい仕掛けや惹きつけるような工夫を取り入れることは自分が将来、どこに就職した時にも必ず必要になる視点だと思うので、学外実習で得ることができたこの経験を大切にしたいと思います。

4. 後輩へのアドバイス

今年度はコロナウイルスの関係で、2日という短い期間の学外実習となりましたが、とても貴重で密度の高い経験をさせていただきました。社会人として働く姿勢、自分が将来、どういった姿を目指したいのか見つけなおす機会にもなりました。公務員を希望している人は、自分が目指す職種の業務内容や雰囲気を体験する良い機会になると思うので、参加することを強くおすすめします。また、学外実習は、受け入れて下さる方々が私たちのためにわざわざ割いてくれている貴重な時間なので、感謝を忘れず失礼のないようにしましょう。その分、貴重な体験ができると思うので、礼儀正しく貪欲な姿勢で取り組むと良いと思います。

見つめなおす二日間

小野 夏鈴（人文社会科学部現代社会学科2年）

1. 参加の動機

私は将来、地域の人々に貢献できる仕事がしたいと考えていて、公務員として市役所で働くことに強い興味を持っています。しかし、市役所職員の方々が市民のために日々どのようなことを考え、どのような仕事に取り組んでいるのか知らないことがたくさんあると思いました。市役所職員の仕事がどのようなものであるのか、学外実習に参加することで具体的に知りたいと思い、この学外活動に参加しました。

2. 派遣先の概要と業務内容

水戸市役所交通政策課は水戸市の交通に関する諸問題の解決や公共交通の活性化に関わる業務を行っています。

私はインターン期間中、主に三つのことを体験しました。一つ目は自分たちのプロジェクトの見直しです。ここでは茨城大学の学生の自転車マナー向上のために作成する動画の構想の練り直しを行いました。動画を通して何を伝えたいのか情報収集を行い、人気 SNS の動向を調べ、多くの人に動画を見てもらうための仕掛けについて考えました。これらを組み込んで動画のシナリオを作成し、最終日に課内で発表しました。二つ目は水戸市の自転車利用に関する取り組みについてのレクチャーの受講です。このレクチャーでは、水戸市が行っている自転車が走行する場所を示す矢羽根の路面標示について学びました。三つ目は水戸駅の南側で行なっている自転車への通行指導の見学です。自転車が車道の左側、矢羽根の路面標示の上を走行するように指導する様子を見学しました。

3. 学外実習を通して修得したこと

私がこの学外実習を通して修得したことは、チームでの企画の進め方です。活動時間の多くを自分たちのプロジェクトの見直しに充てさせていただきました。職員の方から構想を作るプロセスを教えていただき、それに沿って動画のシナリオを作成しました。この活動から今までのプロジェクトの進め方では下調べが不十分だったこと、動画を作ることばかりに目が向き、何を伝えるべきなのか主軸がぶれてしまっていたこと、みんなで考える方法を取っていたためにプロジェクトに対する一人一人の責任感が弱くなっていたことに気が付きました。学外実習後、メンバー全員のプロジェクトに対する意識が向上し、それぞれが役割を担うことで責任感を持って効率的にプロジェクトを進められるようになりました。この学外実習によってチームで高みを目指してプロジェクトを進めるコツを学ぶことができました。まだプロジェクトを修正できる段階でこのことに気が付けたこと、そして何より自分が社会に出る前にチームでの企画の進め方を知ることができたことが本当に良かったと思いました。この学びを今後のプロジェクトはもちろん、社会でのさまざまな活動に生かして頑張っていきたいです。



図：実習冒頭のごあいさつ

4. 後輩へのアドバイス

最初のうちはとても緊張すると思います。しかし、職員の方々はとてもやさしく迎えてくださり、私たちが学外実習を通して成長できるように尽力してくださいます。安心して活動に参加してください。この学外実習で自分がどのように成長したいのか、何を得たいのか目的意識をしっかりと持つことで有意義な学外実習にすることができると思います。また、職員の方々と積極的にコミュニケーションを取ることで、より多くの学びを得ることができると思います。このチャンスを最大限に生かして頑張ってください。

何事も経験してみないと分からない

齋藤 遥 (人文社会科学部現代社会学科 2年)

1. 参加の動機

私はプロジェクト演習において、茨大生の自転車利用に関する課題に取り組んでいます。自転車の利用促進やマナー向上に関して施策を行っている水戸市交通政策課が、普段どのような業務を行っているか知ることで、自分たちの活動に活かせることがあると思い、学外実習に参加しました。また、私は市役所という職場に興味を持っていました。しかし、実際にどのような仕事をしているのかについては知りませんでした。市役所ではどのような業務をしているのか、またどのような雰囲気の職場なのか知りたいと思い、学外実習に参加しました。



図: 自転車に関する施策の説明を受ける様子

2. 派遣先の概要と業務内容

水戸市交通政策課は、水戸市の公共交通や、自転車走行空間の企画・整備などに関する業務を担当しています。

水戸市交通政策課が行っている自転車に関する施策についての説明を受け、自転車の交通指導を見学しました。また、交通政策課の皆様からアドバイスをいただきながら、自転車に関する情報を調べて Word でまとめたり、プロジェクト演習で制作している動画やパンフレットについての構想を練り直したりしました。

3. 学外実習を通して修得したこと

私が学外実習に参加して実感したのは、何事も経験してみないと分からない、ということです。この学外実習に参加する前までは、市役所の仕事はパソコンで書類を作ったり、窓口で市民の対応をしたりするものだろうと漠然と考えていました。しかし、実際は同じ市役所でもたくさんの課があり、それぞれの人数も業務内容も異なっていました。たくさんの市役所職員の方々が、それぞれの役割を連携を取りながらこなしている姿を 2 日間目にしたことで、より具体的に市役所の仕事を知ることができました。

また、実際に政策を作り、実行する方々の生の声を聞くことができたのも大変勉強になりました。市民のためにどうすればより良い交通環境になるのか、予算や時間などが限られた中でどうすれば最大限の効果を出すことができるのかなど、水戸市交通政策課の皆様とお話しさせていただく中で聞くことができました。人のために働くことの大変さややりがい、そうしたお話を通じて少しは理解できたと感じています。

今回の学外実習は、プロジェクト演習の課題についての勉強になっただけではなく、自分の将来の可能性・視野を広げることにもつながりました。また、プロジェクト演習へのモチベーションを上げることもできました。2 日間と短い期間ではありましたが、私にとってとても貴重な 2 日間でした。

4. 後輩へのアドバイス

事前に何を学びたいかを明確にしてから学外実習に参加することが大切だと思います。学外実習では、たくさんの経験をします。しかし、慣れない場所で慣れないことをするので、目の前のことをこなすだけで精一杯になってしまいがちです。学外実習が終了してから、「結局私は何をしたんだろう」とならないために、何を学びたいかを明確にしてから学外実習に臨みましょう。また、学外実習当日は、積極的に職員の方とコミュニケーションをとったり、分からないことがあったら質問をしたりしましょう。失敗を恐れて何もできないほうがよっぽど恐ろしいことだと、私は学外実習で学びました。交通政策課の皆様は、真摯に学生に向き合い、アドバイスをしてくださいます。勇気を持って、たくさんの経験をしてください。

実際に見てわかること

高野 優香（人文社会科学部現代社会学科2年）

1. 参加の動機

私たちのチームは、「茨大生の自転車マナー向上」を目的とした課題に取り組んでいます。課題に取り組むなかで、自分の自転車利用に関する知識が少ないことに気がつきました。学外実習を通して新たな知識を得たいと思い、参加を決めました。また、私は以前から地域の現状や問題を把握し、改善していくことで誰もが暮らしやすい地域づくりを行っている市役所の仕事に興味がありました。そのため、地域との関わりが深い市役所の仕事をぜひ体感したいと思い、今回の学外実習に参加しました。



図：自転車の交通指導を見学する様子

2. 派遣先の概要と業務内容

水戸市交通政策課は、主に公共交通や自転車走行空間整備の企画及び調整に関すること、高齢者・障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律に関する業務などを行っています。

私が行った業務は主に三つあります。一つ目は、自転車について知るための情報収集。二つ目は、自転車の交通指導の見学。三つ目は、パンフレット班と動画班それぞれに分かれているため、自分が担当している方の構想書作成です。

3. 学外実習を通して修得したこと

私が今回の学外実習を通して修得したことは主に二つあります。

一つ目は、決められた時間内で最大限の力を出すということです。今回の学外実習では、主にチームの課題である「茨大生の自転車マナー向上」に関する業務を行いました。チームの中でパンフレット班と動画班に分かれているため、自分の担当している方の構想書を作成しました。二日間で学んだことや新たに考えたことなどを含めた構想書を作成し、最終日に発表しました。私は、これまで二日間で構想書をまとめ、発表するという経験がありませんでしたが、相手に伝わるようにわかりやすくまとめたり、意見交換をたくさん行ったりしたことで、決められた時間内で納得のいくものを作成することができました。また、今回の経験から諦めずに取り組むことが何よりも大切だということ学びました。

二つ目は、自転車利用者の現状を知ることができたことです。私は学外実習に参加するまで、自転車を利用する人は正しい走行ルールやマナーを知っていても、面倒だという考えから実行に移さない人が多いのだと思っていました。しかし、実際に自転車の交通指導を見学して、自転車の基本的な走行ルールを知らない人が多いことに気づきました。そのため、茨大生にも基本的なルールを知ってもらうことから始めるべきだと思いました。これはプロジェクトを進めるにあたっての大きな変化でした。

二日間の学外実習を通して、決められた時間内で最大限の力を出すことの大切さを学び、自転車利用者の現状を知ることによって新たな発見がありました。今回学んだことは、これからの生活や今後のプロジェクト演習の活動に活かしていきたいと思います。

4. 後輩へのアドバイス

業務以外の時間でも積極的に職員の方々とコミュニケーションをとることが大切だと思います。初めは緊張と不安があると思いますが、水戸市役所の職員の皆様はとても優しく接して下さいます。業務で分からないことがあったらすぐに質問をしたり、指示されたことを正しくこなしたりすることはもちろん大切です。しかし、職員の方の話を実際に聞ける貴重な時間も大切にしてほしいと思います。何気ない会話のなかでも自分の考えに何か変化があるかもしれません。そのため、積極的にコミュニケーションをとってみてください。学外実習は学ぶことがたくさんあるとても濃い日になるのでぜひ参加してみてください。

意識を変えることの大切さ

和田 綾香（人文社会科学部現代社会学科 2年）

1. 参加の動機

私が水戸市交通政策課での学外実習に参加した理由は2つあります。

1つめは、プロジェクト演習の活動に活かしたいと思ったからです。私のチームでは茨大生の自転車マナー向上を目的に動画とパンフレットの作成を行っているため、学外実習を通して自転車への理解を深めたいと考えました。

2つめは、市役所での業務を体験することで将来について考えるきっかけにしたいと思ったからです。私は将来、地域のために働きたいと考えているため、学外実習を通して地域や将来のことをより深く考えたいと思いました。



図：学外実習での様子

2. 派遣先の概要と業務内容

水戸市交通政策課では、主に公共交通機関や自転車の利用促進のための業務が行われています。

今回の学外実習では、「水戸市自転車利用環境整備計画」について説明していただき、その後水戸駅南での交通指導を見学させていただきました。また、今回は2日間と限られた時間だったため、プロジェクト演習の活動で取り組むパンフレット作成について、職員の方々にアドバイスをいただきコンセプトやレイアウトを考えました。

3. 学外実習を通して修得したこと

私は今回の学外実習を通して2つのことを学びました。

1つめは、人びとの意識を変えることの重要性についてです。水戸市交通政策課では自転車専用道路の整備を進めるだけでなく水戸駅南周辺で交通指導も行っていました。その様子を見学させていただく中で、職員の方が「ただ交通ルールを押し付けるだけでなく、歩行者など弱者を守るために自転車は歩道を通るように指導する。しかし、その自転車が歩行者からも車からも迷惑がられる存在になってしまっているため、自動車に乗る人の意識も変える必要がある。」と仰っていたのがとても印象に残っています。ルールを一方的に押し付けるのではなく、歩行者や自転車に配慮するモラルを持ってもらえるよう人々の意識を変えることが重要であると感じました。そして意識を変えるためにはすぐに結果を求めず長期間の取り組みが必要であると改めて感じました。

2つめは、多くの人に見てもらおうパンフレットの作成についてです。自転車マナー向上のための動画やパンフレットの作成において、もっとも重要な点が「多くの人に見てもらおうための工夫」であり、多くの人目に留まり読んでもらうためには設置方法や配布方法についても考える必要がありました。学外実習を通して職員の方々から様々なアドバイスをいただき、QRコードを利用することでスキマ時間を利用して動画やパンフレットを見てもらおうなどの工夫も必要であると感じました。また、パンフレットを最後まで読んでもらうためには、載せる情報をしぼり最も重要なことを伝える必要があり、そのためにはクイズなどの仕掛けをする必要があるとも感じました。

4. 後輩へのアドバイス

学外実習参加の際は目的を持って取り組むことが重要だと思います。また、学外実習を通して業務内容について知るだけでなく、職場の雰囲気を感じることも将来を考えるにあたって重要なことだと思います。

私は2日間でも多くのことを学ぶことができました。実際の職場で体験させていただくことはとても貴重な経験になるので学外実習を通して多くのことを学んでほしいと思います。

見てもらうことの難しさ

大竹 美沙（人文社会科学部人間文化学科2年）

1. 参加の動機

公務員について少しでも知りたいと思い、参加しました。前期の間、自身の進路について考えることがありましたが、今の私は民間で働くのか、それとも公務員として働くのかを決めることができていません。そのため、学外実習を通して公務員について知り、進路決定に役立てたいと考えました。また、コロナ禍であるにもかかわらず、交通政策課様や先生方が学外実習の実施を決めてくださり、これは掴んでおかないといけないチャンスだと思いました。



図：情報収集をしている様子

2. 派遣先の概要と業務内容

水戸交通政策課は公共交通の企画や調整、バリアフリーの促進、自転車に関してはルール啓発や道路の整備、利用の促進を行っています。2日間の学外実習では、私たちが取り組んでいるプロジェクトの情報共有や意見交換を行いました。初日は自転車に関する情報を集めたり、交通政策課の取り組みについてレクチャーを受けました。また、通行指導の様子を実際に見学させていただきました。交通政策課ではどのような取り組みが行われてきたのかを知ることができ、良かったと思っています。2日目は、自分が得た情報をもとにパンフレットのレイアウトを作成しました。そして、水戸交通政策課の皆様からフィードバックをいただき、これからの活動について考えることができました。

3. 学外実習を通して修得したこと

学外実習を通して感じたことは、ターゲットに見てもらうことの難しさで作り手の大変さでした。

いただいたたくさんのアドバイスの中の一つに、「自分が見る側だったら？自分はどんな時にどんなパンフレットを手にとるのだろうか？」というアドバイスがあり、印象に残っています。それまで自分が伝えたいことについては考えていましたが、ターゲットにより見てもらう方法については考えることができていませんでした。アドバイスをいただいた時、今まで自分が考えていた伝え方だと、大学生には見てもらえないのだと気づかされました。たとえ、どんなにいいものを作ったとしても、それが伝わらなくては意味がない。このことは様々な場面でいえることだと思います。また、ターゲットに興味を持ってもらいつつ、自分が伝えたいことを伝える方法を考えるのは、簡単なことではないと感じました。

伝えたいことを多くの人に伝わるようにするにはどうしたらよいか。このことは学外実習が終わっても、自分の課題であり続けると感じます。

4. 後輩へのアドバイス

私が学外実習に行き良かったと感じた点は2つあります。まず、市役所の雰囲気を感じることができたことです。学外実習中は、実際に働いていらっしゃる職員の皆様の様子がよく分かります。他の課の様子も見ることができ、もし市役所で働くならこんな風に過ごすのかとイメージできました。次に、交通政策課の皆様から公務員になったきっかけなどお話を聞くことが来たという点です。公務員として働いている方にお話を聞く機会は普段あまり無いため、貴重な機会であったと感じています。

このように、学外実習では進路決定のヒントを得ることができました。学外実習に参加するか迷っている方はぜひ参加することをお勧めします。

最後になりましたが、お忙しい中、またコロナ禍である中、学外実習を受け入れてくださった交通政策課の皆様にご心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

自分が楽しむことの大切さ

河内 彩奈咲（人文社会科学部人間文化学科 2年）

1. 参加の動機

私は将来、地域社会と関連した職業に就きたいと考えていて、市民と直接関わりあって生活をよりよくするための業務を行う市役所の仕事に興味がありました。その中でも、特に公共交通という誰もが関係のある分野についての企画・調整などを行っている交通政策課様で学外実習を行うことで、市役所で働くことがどのようなことなのか、地方行政と市民の生活についてより考えを深められるようになりたいと思い参加しました。



図：学外実習の様子

2. 派遣先の概要と業務内容

水戸市役所交通政策課は水戸市役所 4 階にあり、主に①公共交通の企画及び調整に関すること②広域交通体系に関すること③高齢者・障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律に関すること④自転車走行空間整備の企画及び調整に関する業務を行っています。

3. 学外実習を通して修得したこと

私は今回の学外実習を通して、自分の仕事を自分自身が楽しめるように工夫することの大切さを学びました。

今回の学外実習では、自分たちがプロジェクト演習で行っている茨大生の自転車利用マナー向上のプロジェクトの構想を再考することをしました。インターン初日には現在の具体的な自転車政策について教えていただいたり、実際に自転車の交通指導を見学させていただきました。その上でそれぞれプロジェクト構想案を考え、インターン最終日にその構想案を発表するという日程でした。しかし当初は自分一人で構想案を考えるというのは難しく私は頭を抱えながら構想案を考えていました。そんな時に交通政策課の方が、「自分たちが楽しめるプロジェクトにすることでいいものができる」とアドバイスをしてくださいました。私はその時までとはとにかくプロジェクトの目的に沿って自分たちができそうなものにするしか考えられていませんでした。そのためプロジェクト自体が自分にとって負担になってしまっていた部分がありました。しかし交通政策課の方からのアドバイスの通り自分自身が楽しめるプロジェクト内容を考えてみると、構想案を作ることが楽しくなりアイデアも多く出て作業がはかどりました。

この「自分が楽しめるようにする」という考え方は学業にも仕事にも言えることだと思います。決められた枠の中でも自分自身がその勉強や仕事を楽しむためにはどうしたらいいかを考え、工夫することで自分の学業や仕事に対するモチベーションや成果は大きく変わることを実感しました。今回の学外実習で学んだ「自分が楽しめるように工夫すること」を今後の学業や仕事で生かしていきたいと思います。

4. 後輩へのアドバイス

学外実習をする中でわからないことや疑問に思ったこと、確認したいことは遠慮しないできちんと受け入れ先の方に聞くようにするのがいいと思います。受け入れ先の方々には普段のお仕事がある中で私たち大学生の学外実習を受け入れてくれています。だからといって遠慮するのではなく、「せっかく頂いた貴重な時間を無駄にしないように吸収できるものは吸収して全部自分の力にしよう」という気持ちを持って取り組むことが大切だと思います。

6：個人レポート

コロナ禍におけるリーダーの役割

茨城大学 3年 菊池 祐太郎

私は今回、プロジェクト演習を初めて履修した。新型コロナウイルスの影響でオンライン授業化していたりといくつかの不安要素を抱えたままの授業が始まった。私はプロジェクト演習を履修するにあたって、これまでの学生生活の中で特段大きな活動をしてこなかった自分を「挑戦できる自分」にしたい、それと自分が生まれ育ったこの地域に必ず貢献したいという思いが自分の中に存在していた。そこで私は、これまであまり縁がなかった水戸市役所様とかかわりが持て、中学・高校・大学での通学で利用していた公共交通チームに参加することを決めた。まず、プロジェクト演習を通して具体的に身に着きたい能力・スキルを個人の達成目標ルーブリックを用いて選択した。それは課題の本質を捉え、適切な解決方法を導く「課題解決能力」とプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力などの「話す力」、そして社会人としてルールや約束を重んじる「規律性」である。「挑戦できる自分」を目指して自分の足りていない要素、社会人の基礎的能力を補う必要があると考えた。

まず、「課題解決能力」について、これが一番苦労した点だった。これまで公共交通の課題に取り組んできたチームはすべてバスの課題に取り組んでおり、私たちのチームでは自転車に関する課題にチャレンジすることになった。しかし、コロナ禍ということもあり、水戸市役所交通政策課様との顔合わせがオンラインとなった。オンラインの特性上、プロジェクト提案に対するフィードバックを一方向的に受け取る形になり、課題解決に向けた積極的でオリジナリティある意見をなかなか提案できずにいた。おそらくプロジェクト演習のほかのチームと比べて課題解決方法の模索に一番時間をかけたチームであろう。試行錯誤を繰り返しながら、9月に水戸市役所で行った学外実習を経て、「茨大あるある」や「間違い探しチラシ」など興味を引くような広告を起点に課題解決をめざすというこれまでにない独創的な課題解決アプローチを生み出すことができたと考えている。

「話す力」についてはやはり活動のオンライン化が大きく影響を及ぼした。実際に顔を合わせることなく活動が始まったこともあり、ざっくばらんに意見を出し合うような関係性を築くのに時間がかかってしまった。また、プレゼンテーションの能力については大きな経験を得ることができた。オンライン上でプレゼンするときには対面の時よりも情報量が圧倒的に少なくなってしまう。限られた範囲の中で相手の理解を最優先にできるよう何度もプレゼンの練習に励んだ。この経験はリモートワークが加速している今の日本社会ではとても有用なものであると考えられる。また、10月31日に茨城放送様のご厚意で番組「4Me」の「青春インタビューなう！」のコーナーに出演させていただいた。生放送だったためかなり緊張したが、普段の学生生活では味わえない経験だったと振り返る。

次に「規律性」についてだ。私はチームを組んで一つのことに長期間チャレンジしていくという経験をこれまでしたことがなかったが、今回、自分の意見を抑え相手を尊重し組織の決定に従うことが、こんなにも難しいものであったことを認識することができた。公共交通のプロジェクトに参加したい気持ちが強かったために、自分の意見を反映してもらいたいという態度がにじみ出ていたのではないかと反省している。

私はリーダーという経験は初めてであった。「挑戦できる自分」になるためにも率先してリーダーの役割を買って出たが、正直後悔することは少なくなかった。ミーティングの進行、計画・スケジュールの立案・管理、制作物作成の指揮、プレゼンの発表者など仕事量の多さに圧倒されてしまったこともあった。しかし、私の力量よりもハードルが高い要求をこなすことで、成長を自覚でき、自信を得るきっかけにもなった。また、私の中でリーダーシップへの考え方が変わった。自分が先頭になってメンバーをぐいぐい引っ張っていくリーダーシップの在り方はコロナ禍においてはさほど重要ではないのかもしれない。リモートで業務を行うにあたってリーダーがすべてを把握・コントロールするのは難しい。むしろメンバー個人の自律性を最大限に活かしながら、それと同時に孤立して業務を遂行することによる多少の疎外感をフォローする必要がある。チーム全体にとられるのではなく、一人一人に丁寧に向き合っていく、そんなリーダーが求められているのだと思い、私もそうでありたいと願うばかりだ。



図：茨城放送に出演

茨大交通政策課のメンバーとの活動から得られたこと

茨城大学 3年 伊丹 丈瑠

私が今年度のプロジェクト演習を通して最も伸ばしたかった能力は、意見を伝える能力である。特に思考力と課題解決能力に力を入れたいと考えていた。今年度が初のプロジェクト演習であり、またメジャーないしサブメジャーにも所属しておらず、完全な自由履修であった。また、私が所属した茨大交通政策課チームは、自分以外の全員がメジャーないしサブメジャーとして「人文社会科学部地域志向教育プログラム」というプログラムを履修しており、活動初期は彼らの価値観や感覚への順応で精一杯となり、なかなか中心で活動出来なかった。さらに、メンバーも多く、自ら意見を発信する回数が少ないと感じていた。そのため、今年度はまず課題の本質を理解しつつ、解決策を少しでもメンバーに提案することを目標とした。しかし、目標を達成したとは言い切れない一年間であった。今年度の活動を通して感じていたことは、私がチームに所属している事でかえってチームの邪魔になっていないかという不安であった。前述した通り私以外のメンバーは人文社会科学部地域志向教育プログラムの授業を受けてきている人々であり、一定程度の社会力や論理的思考力を既に身に着けている。これらのようなことを、彼らと比べて強く意識していなかった私が、チームメンバーとして加入し、プロジェクトを共に遂行出来るのか不安であった。また、私は本年度の後期から学芸員資格の本格的な取得を開始し、集中講義を含む相当量の授業に加え、就職活動もそこに加わり、やむを得ず活動に参加出来ない状態が続いた。もちろん、動画編集や報告会のスライド作成など合間を縫って作業が出来るようなことに関しては、可能な範囲で協力した。しかし、動画の撮影やフィールドワークなど、外での活動には殆ど参加出来なかった。そのうち「自分はチームから必要とされていないのではないか」という疎外感が強まり、自分が担当したこと以外は殆ど関心を示さなくなった。さらに悪いことに、自分が負担になることはしたくないという感情が強くなり、チームが何か新しいことをやろうとすると「それをやるとメンバーの負担が増えてしまう」「それをやって効果はあるのか」など、遠回しにチームメンバーの考えや意見を否定するようになってしまった。一時は「こんなことをして何になる」「地域課題の解決は本業の行政に任せればいいではないか」など、あろうことかチームの存在すらも裏で否定するようになり、無断で会議を欠席した時もあった。しかし、チームメンバーはそんな私を見捨てることはなく、温かく受け入れてくれた。特に、同学年の人たちには大いに支えられた。私が活動に殆ど参加出来ていなかった時期、どういった活動をしているのか、どういったことを会議で話したのかを常に連絡してくれた。また、履修を断念してチームを辞退しようと考えていることを打ち明けた時には、親身になって私の話を聞き、どういった心構えでプロジェクトに向き合えば良いのかについても教えてもらった。彼らの助言を受けて、目標を完全に達成する事に深く拘らず、まずは人の意見を受け入れる所から始めようと目標の修正を行った。始めは不安であったが、チームは変わらず温かく見守ってくれた。これを受けて、チームの為に出来ることを無理のない範囲で続けていこうと考えるようになり、チームでの活動は苦痛でなくなった。寧ろ、活動することに喜びを感じるようになり、メンバーの意見を汲んで「このように活動を進めるのはどうか」「今はこの活動に集中すべきではないか」など、チームの方向性の決定に自ら意見を述べるまでに至っていた。私がここまで立ち直ることが出来たのは、ひとえに助言をしてくれた同学年のメンバーと、私の行動を温かく見守ってくれた他学年のメンバーのお陰である。この経験から、私は茨大交通政策課のメンバーのように、誰も見放さず、温かく人に寄り添えるような人間になりたいと思った。プロジェクト演習を通して学ぶべきことはたくさんあるが、高校までとは異なって、価値観や考え方が異なる人々と共に学習を行っていく大学生活において、一年間同じ活動をすることが出来た。私にとってこの経験は貴重であったが、何よりもこの活動を素晴らしい人々と共に行えたことが純粋にうれしかった。私は今まで、人に対して意見を伝えることは苦手だとして発言を極力避ける時が多くあった。しかし、チームの為に自ら意見を肯定、否定に関わらず積極的に発言できるメンバーの人達に憧れを抱くようになり、もっとコミュニケーション能力を伸ばして、自らの言葉で分かり易く人に意見を言うことが出来るような存在になりたいと考えるようになった。自分が避けていたことに向き合うきっかけを作ってもらえたこと、一人の人間として憧れの対象になるような存在に出会わせてもらえたこと、そして、誰も見放さず温かく人に寄り添うことが出来る存在のありがたみを知ったことが、今年度の茨大交通政策課の活動を通して最も勉強になったことである。

苦勞と成長

チーム活動を通して得た貴重な経験

茨城大学3年 尾崎 友祐

私がプロジェクト演習を履修するのは今年が初めてだった。ガイダンス時に「この授業は、かなり大変です。」と先生方がおっしゃっていた時は、正直なところ不安な気持ちだった。1年近くの活動を通して、その言葉は決して大げさではなく事実であったと感じるが、その反面たくさんの貴重な経験を得ることができた。

私は茨大交通政策課チームの副リーダーとして参加し、茨大生の自転車マナー向上を目的としたチラシや電子パンフレット、動画の制作を行った。チーム内でチラシ・電子パンフレットを制作する班と動画を制作する班に作業を分担し、私は動画制作班のリーダーとして作業に関わった。動画は“茨大生のあるある”という



図：大洗海岸での撮影風景

自転車マナーとは全く関係のないテーマを軸に、自転車マナー啓発動画をCMとして挿し込む動画を制作することで、自転車マナーに興味のない人にも動画を見てもらうような工夫を施した動画を制作した。私は主にCMの撮影・編集を担当したのだが、そもそも私自身には動画制作の経験がなく、未知のことばかりだった。CMは“自転車は車道の左側”という合言葉を教室や砂浜などの様々な場所で呟くCMと、イヤホンをして自転車を運転する男子大学生が警笛に気づかず、事故に遭ってしまうというCMの2つを制作したのだが、後者は撮影をしたい場所が誰かの撮影許可を必要とするか否かの確認や、危険運転をしているような演出（実際は安全運転）の工夫など多くの困難に直面した。編集の際にも経験がないため、岩佐先生からお借りした参考書や映像制作の経験がある知人を頼って作業を行った。こうした多くの苦勞を伴いはしたが、完成したCMがキャンパスの各所で流れている様子を見ると、言葉では表せないほどの達成感があった。動画の内容が白紙に戻ることや撮り直しもあったが、その度に鈴木先生や岩佐先生、課題提案者である水戸市役所交通政策課の方々からアドバイスをいただきつつ、「どうすれば多くの人が見てくれる動画になるか」、「どうすれば上手く撮影がいくか」等をチームで話し合うことで少しづつ形にしていき、“茨大生ならではのオリジナリティある動画を完成させることができた。

「個人の達成目標ルーブリック」では私は基本的なIT能力や、物事に流されず疑問に思い主体的に対応する力、課題の本質を捉えて適切な解決に導く力の3つを養成することを目標として挙げていた。IT能力は、チーム活動の中では触れる機会がほとんどなく、残念ながら養成することがあまりできなかった。今後の生活の中で養成する機会を作っていきたい。主体的に対応する力は、チーム内で会議を重ねることで徐々に伸ばしていくことができた。動画の内容やチームとしての今後の方針等について話し合う際に自分の譲れない部分として、撮影する場所を絵コンテに限りなく近い場所にしたいことや動画を観る人の記憶に焼き付けるようなテーマにしたいというこだわりがあった為、周囲の声の大小に関わらず果敢に発言を行った。その中で、どういった言い方をすれば相手を納得させられるかという知恵も得ることができた。課題解決能力については、先生方や水戸市役所交通政策課の方々からアドバイスを頂く中で、新たな考え方や違った視点を取り入れることで、課題解決にどういったことが必要なか気づく力を完全にとはいかなかったが、養成することができた。

1年間の茨大交通政策課チームとしての活動を通して、企画を考え実行し、形にするまでの難しさを実感した。どれだけ面白そうな企画が思いついても、いざ実行しようとした時に自分たちの手に余り、考え直すことが何度もあり、「この企画は自分たちで本当に実現できるか？」を常に意識しながら熟考を重ねた。その結果、チラシや電子パンフレット、動画を無事に形にすることができ、水戸市のYouTubeやキャンパス内のデジタルサイネージにまで掲載を果たすことができた。また、活動の中で自分が今まで経験したことのない動画編集やラジオ出演などの貴重な体験もすることができ、とても充実した1年となった。茨大交通政策課チームとしての活動は、大変ながらも多くの経験や学びを私に与え、大きく成長させてくれる活動であった。

ここでしか学べないこと

茨城大学 2年 小野 夏鈴

私が茨大交通政策課チームでの活動を通して学んだことは、「計画性の大切さ」である。これはこのプロジェクト演習の講義を受ける際に自分で立てた目標の中のひとつでもあるのだが、自分達で構想を練り、それを形にする、茨大交通政策課チームのプロジェクトを進める上で必要不可欠なことであった。

そもそも私がプロジェクト演習の講義を受けようと思った理由は、社会人基礎力を育成するというこの講義の目的に魅力を感じたからだ。一年間茨城大学で生活をしてきて、講義もサークル活動もそれはとても楽しかったのだが、これらの学びや活動から社会に出た時に必要な能力は身につけているのか、自信を持つことができなかつた。なのでこの講義を通して社会人になるための力を身につけたいと思った。また、水戸市役所交通政策課様の課題を選択すると、交通政策課様の学外実習に参加できることを知った。将来について悩んでいる私にとって学外実習に参加することは職業選択の良いヒントになるのではないかと思った。また、交通というのは私たちの身近なテーマであり、自分の生活と結びつけて考えることができるのではないかと思ったことから私はこのプロジェクトに参加することを決めた。

私たちのプロジェクトは全体を通して様々な困難と共にあった。プロジェクトの対象をバスにするのか自転車にするのか、誰をターゲットにするのか、課題解決の為に何を行うのか、プロジェクトのベースを決めるまでに膨大な時間を要した。また、動画の内容で多方面に誤解を生んでしまう恐れがあることから数回にわたって修正を入れたり、成果物をどのように公開するかについても何度も議論を重ねた。このような様々な困難の中でも私が一番大変だと思ったのは、自転車マナー向上のための動画の内容を一から作り直したことである。もともとは自転車マナー向上のメッセージを組み込んだストーリーテイストの動画を作ろうとしていたのだが、この内容で誰が見ようと思うのか、メッセージは伝わるのか、そもそも私たちが伝えるべきメッセージは何なのか、構成が不十分であることに気づいた。交通政策課様の学外実習では、私たちが壁にぶつかっていることを気にかけていただき、動画やパンフレットの内容をもう一度見直すための時間と構想を練るプロセスについてのご教授を頂いた。もう一度、何を伝えるべきなのかをインターネットで調べなおして、どのような動画にすればたくさんの人が見たいと思うのかを You Tube で人気のある動画を参考に分析し、それをどのように動画に組み込むのかを話し合いをしながら考えなおした。また、そこでは自分が考えた構想案を課内で発表し、意見を頂くなど貴重な経験もさせてもらうこともできた。その結果、前に考えていた動画とは全く違う、茨大あるあるの動画の中に自転車マナーの CM を挟むという新しい案が出来上がった。この案ができた時、今まで下調べをほとんどせずに、「交通マナーの動画はきっとこんな感じだろう」と言ってプロジェクトの軸を見失って準備を進めてしまっていたことに気づいた。また、自分自身のスケジュールにおける計画性も足らず、あるある動画の完成がチームで決めた期限ギリギリになってしまうこともあった。これらのことから、チームでも個人でも物事を進めるにあたっては計画性が重要であることを身を持って学んだ。時間的な計画はもちろん、実行に移すまでのプロセスという意味での計画も大切であるということは、このプロジェクト演習からではないとここまで深く学ぶことができなかつたと思う。プロジェクト演習を履修して、そしてこのプロジェクトを選択して本当に良かったと思った。ここで学んだ様々なことを私は今後の学校生活や就職活動、社会人生活の中で生かしていきたいと強く思う。物事を進める時にはスケジュールを具体的に決め、その物事の本質は何なのかを考えながら妥協することなく突き詰めることを大切にしたいと思う。

最後にこのプロジェクトは多くの方の協力無しには成功させることができなかつた。プロジェクト演習に携わる先生方、水戸市役所交通政策課様、その他お力添えいただいたすべての方々から感謝したい。



図：水戸市役所交通政策課様での学外実習

自分に出来ることは何かを考え、実践した1年

茨城大学2年 齋藤 遥

2020年の春、新型コロナウイルスの流行によってなかなか終わらない春休みを自宅で過ごししながら、私は将来の不安を抱えていた。授業はすべてオンラインで行うことが決定し、例年とは何もかもが違う大学2年生のスタートを迎えた。私は「家の中で、ただ受け身で授業を受けているだけではいけない。何か挑戦してみよう」と思い、プロジェクト演習を受講することを決めた。自分の生活に身近な公共交通機関に関する課題と、公務員の仕事に興味があったので、水戸市役所交通政策課様が提案してくださった課題を選択した。オンラインで、どのようなメンバーがいるのか分からないままチームが結成されたので、当初は不安が大きかった。しかし、初対面のメンバーが多いなかで1から関係を作り、1年間活動を共にしたことは貴重な経験になった。



図：学外実習の様子

今回私たちは「茨大生の自転車マナー向上」を目標に、動画や電子パンフレット、チラシを制作した。活動開始当初は、例年通りにバスに関するプロジェクトを行う予定であった。しかし、コロナ禍で活動の制限があることや、例年よりもプロジェクト演習の機関が短いこと、自転車についての提案が水戸市役所交通政策課様からあったこと等を考慮して「自転車」に関するプロジェクトを行うこととなった。

茨大交通政策課のメンバーは、全員がプロジェクト演習は初めての履修だったので、手探りで活動がスタートした。今年度は活動のほとんどがオンラインで行われたので、コミュニケーションをとるのも、意見をまとめていくのも大変だった。「茨大生の自転車マナー向上」という目標を達成するために何をすればよいのかがなかなか決まらず、前期は時間だけが過ぎていった。「みんな初めてだから、分からなくて当然だ」というような甘えがあったと今振り返ると感じる。

そんな中、水戸市役所交通政策課様にインターンとして2日間お世話になった。水戸市が行っている自転車に関する取り組みについての説明や、私たちが提案したプロジェクトについてのアドバイス等をしていただいた。この2日間で、私は今までの活動では目標が達成できないと気づくことができた。当時、私たちが考えていたプロジェクトの内容は、ターゲット（茨大生）が本当に興味を持つのか、伝えたい内容がしっかり伝わるのかが考慮されていなかったのだ。「自転車ルール」という堅い内容のものを、ターゲットにどのようにすれば受け入れてもらえるのかという工夫が非常に重要だと学んだ。この学びは、以降の私たちの活動を大きく変えた。自転車マナーの動画を茨大生が興味も持ちそうな動画の間に挟んだり、ゲーム感覚で自転車マナーについて学べるようなチラシ等を作成したりすることになった。

私は、新しい環境に飛び込んだり、自分から積極的に外部の方と関わったりすることが苦手だった。しかし、消極的な自分を変えたい、コロナ禍でも成長できるチャンスをつかみたいと思い勇気を出してプロジェクト演習を受講した。想像していたよりもオンライン中心の会議や活動が難しく、悩むことが多かった。また、メールの仕方や、オンライン会議での態度等、協力してくださった先生や水戸市役所交通政策課の皆様失礼な振る舞いをしてしまった。

失敗を重ねながらも、チームのメンバーとIllustratorを使ってチラシを作成したり、動画を撮影したり、大学の学務や外部の方々と話し合いをしたりすることを通じて、確実に成長できたと感じている。コロナ禍で自分に出来ることに勇気を出してチャレンジし、最後までやり抜いたことで自信を持つと思う。今だからできることを模索し、実行に移すことの大変さや重要さを、身をもって学ぶことができた1年だった。

今回のプロジェクトを遂行するにあたって、たくさんの方々をサポートを受けた。特に、伊藤様、飯村様はじめ水戸市役所交通政策課の皆様、鈴木先生、岩佐先生には大変お世話になりました。プロジェクトの内容だけではなく、人として成長するためのご指導も丁寧に、沢山してくださいました。本当にありがとうございました。

チーム連携の大切さ

茨城大学 2年 高野 優香

私は、大学一年生の頃からチームで目標に向かって取り組むことに興味があり、社会人になる前の大学生のうちに経験したいと考えていた。そして、チームを構成して地域社会の課題に取り組むことができるプロジェクト演習という授業があることを知り、履修を決めた。私は、公務員という職業に興味をもっていたことと、自分自身が水戸市の公共交通を長年利用してきたことから水戸市役所交通政策課様と連携した活動を行いたいと思い、茨大交通政策課チームの一員として「茨大生の自転車マナー向上」を目的とした活動を行ってきた。チーム活動において大切なことを頭ではわかっていたつもりであったが、実際にチーム連携活動を行ってきたことで、本当に大切なことを経験と共に学ぶことができた。活動を通して学んだことは、大きく分けて3つある。



図：大洗海岸での撮影風景

1つ目は、自分の役割に責任をもって取り組むことの重要性である。チームでは動画や電子パンフレット、チラシを作成する際に、必ず一人一人が役割を担っていた。私は動画の撮影を担当した。撮影で使用させていただくお店の許可取りをし、撮影日程を立て、撮影と動画の編集を行った。この役割を担い、自分が動かなければチームメンバーに迷惑をかけてしまう、期日までに組み込まなければ今後のチーム活動に影響が出てしまう、といった責任が自分にかかっていることを実感した。私は、これまでこのような大きい役割と責任をもつ機会がなく、初めはとても不安であった。しかし、活動するにつれて不安な気持ちよりもプロジェクトを成功させたいという気持ちが強くなり、自分の行動に責任をもって活動することができた。何事にも責任をもって取り組むことは、社会に出てからもとても重要なことであるため、とても大きな学びであった。

2つ目は、メンバー同士の助け合いである。チーム活動は、一人一人が役割を担っているが、役割ごとにどうしても仕事量の差が出てしまう。そのため、メンバー同士で声をかけ合って助け合うことが重要である。活動を通して、定例会議やチームでの活動に参加できなかった人に対しては、進捗状況をしっかり伝えたり、困っているメンバーがいたら話を聞いて相談にのってあげたりすることが大切であると実感することができた。私が編集作業で困っていたときに、チームメンバーが「手伝おうか」と声をかけてくれたことがあった。私はこの言葉にとっても救われた。チーム活動では自分ひとりで抱え込もうとせずにメンバー同士で助け合うことが大切であると学んだ。今後の大学生活や社会人になってからのチーム活動において困っているメンバーがいたときは声をかけて助け合っていきたい。

3つ目は、チーム連携の大切さである。今年度は、新型コロナウイルスの影響により対面でメンバーとコミュニケーションをとる機会がとても少なかった。定例会議は毎週 Microsoft Teams を使用したオンライン会議であった。そのため、連絡を密に取り合う必要があった。チームの全員が活動内容を知っていなければスムーズに活動を進めていくことはできない。実際に、連絡がしっかり行き届いておらず、活動に支障が出たことがあった。作業も集まって行うことができなかつたため、互いの作業の確認や話しやすさといった点からオンライン上でのやり取りはとても大変であった。回数を重ねていくにつれて上手にオンライン環境を活用して作業を進めていくことができた。水戸市役所交通政策課様や先生方とも密に連絡を取り合うことが多かったため、何よりもチーム内でしっかりと連携している必要があることを学んだ。そして、チーム連携を深めていくにあたって、メンバーが誰一人として欠けてはならないということも学んだ。

以上のように、私はプロジェクト演習の活動において、自分の行動に責任をもつこと、チームメンバー同士の助け合い、チーム連携の大切さについて学んだ。また、撮影の許可取りや絵コンテの作成、撮影、編集は初めて経験することであった。プロジェクト演習を履修する前の自分と現在の自分を比較すると、できるようになったことが増え、自分のまだ足りない点を知ることができたことから、履修する前よりも成長することができたと考える。これらの学びや多くの経験は、今後の大学生活や社会人になってから活用する機会があるだろう。今回の学びを活かしていくとともに、今回知った自分の足りない部分や弱い部分をもっと成長できるよう努力していきたい。

連絡は「密」に

——プロジェクトを通して得た多くの学び——

茨城大学2年 和田 綾香

私は、茨大交通政策課チームの一員として、茨大生の自転車マナー向上を目的にした「茨大生自転車マナー向上プロジェクト」に取り組みました。例年、プロジェクト演習では水戸市の公共交通の課題はバスを対象とした取り組みが多く行われていましたが、今回は茨大生の自転車事故が増加していることを課題とし、茨大生の自転車マナーを向上させることを目的に、初めて自転車に焦点をあててプロジェクトに取り組むことにしました。このプロジェクトでは、自転車マナー啓発の動画とチラシ・電子パンフレットの作成を行い、私は主に電子パンフレットの作成を担当しました。電子パンフレットは「茨大生にとって実用的な自転車に関する情報を載せる」をコンセプトに制作し、私は主に自転車保険や茨大周辺の自転車修理店の情報など、茨大生にとって実用的な情報を載せたページを担当しました。電子パンフレットを作る中で、実用的な情報を盛り込みつつも見やすさと分かりやすさを重視し、最後まで飽きずに読んでもらえるよう工夫しました。

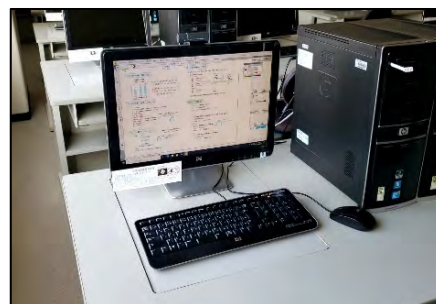


図 電子パンフレット制作の様子

私がこのプロジェクトを通して学んだことは3つあります。1つは、見る人を惹きつける制作物を作ることの重要性です。私たちのプロジェクトでは動画、チラシ・電子パンフレットと3つのコンテンツを作成しましたが、多くの人に見てもらえる工夫を考えることが難しく、チーム内で何度も構想を考えました。自転車マナーを知ってもらうためのものだが堅苦しすぎて見てもらえなかったら意味がないという事を意識し考えていく中で、人を惹きつける制作物を作ることの難しさと人を惹きつけるコンテンツ制作の重要性を改めて感じました。

2つめは、連絡を密に取り合うことの重要性です。最初の頃は、オンライン会議ならではの難しさもあり、メンバー間で異なった解釈をしたまま話が進んでしまうことや活発な議論ができないまま会議が終わってしまうこともありましたが、しかし、グループで作成途中の制作物を共有しコメントし合えるようにしたこと、誰がどんな作業をしているかが把握できるようになっただけでなく心配なところは随時確認し合いながら進めることができるようになり、作業の効率も上がったのではないかと思います。私は、所属や学年の違う人と1つの大きなプロジェクトに関わることは今回が初めてだったので、グループ内で連絡を密に取り合うことはグループでの活動を円滑に進め、プロジェクトを遂行していく上で最も重要な点であると身をもって学びました。

3つめは、逆算してスケジュールを立て行動することの重要性です。最初の頃は、報告会前の準備でスライドの作成が締め切り直前になってしまうこともありましたが、今では計画的に進めるよう心がけています。特に、逆算して何をいつまでにやるかを考えるだけではなく修正等の期間をあらかじめ設けてから計画的に取り組むことが重要であると感じました。また、1年間を通して何かを成し遂げた経験がなかったため、最初はイメージがわきにくく計画通りに進まないことも多くありましたが、このプロジェクトを通して全体を見通して計画を立てることの重要性とポイントごとにスケジュールを見直すタイミングを設けることの重要性を学びました。

このプロジェクトの最初にチームで立てた計画は最終的に断念せざるを得ない形となってしまいました。その経験から連絡を密に取り合う事の重要性や逆算してスケジュールを立て計画的に物事も進めることの重要性を学びました。私は、「主体性や積極性、協調性といった社会で求められる力をつけたい」という目的をもってこのプロジェクト演習を履修しました。プロジェクトを振り返り、この目標は達成できておらず、まだまだ不十分であると感じています。しかし、このプロジェクト演習を勇気をもって履修し、挑戦したことで得られたことや学んだことは多くあります。そのため、このプロジェクトでの経験を今後の生活に活かし、より一層成長していきたいと考えています。

最後に、このプロジェクトの遂行にあたりご指導いただいた先生方や水戸市役所交通政策課の方々を中心に心より感謝申し上げます。

「伝える」ことの重要性とこれからの課題

－ 渉外という役職を担当して－

茨城大学 2年 大竹 美沙

「大学生活の中でこれをやったと言えるような何かをしたい。」プロジェクト演習を履修しようと思ったのはこういう思いがあったからであった。1年生の時に振り返れば、これといったことをしていない。2年生になったとき、このまま何もせずに2年生が終わるのは避けたいと思った。そのときに見たのが、プロジェクト演習のお知らせであった。履修するかかなり迷ったが、思い切って履修して良かったと今振り返って思う。

プロジェクト演習を履修するにあたって、私が一番比重を置いたのはチームワーキング能力の「状況把握力」である。今回、私は渉外という役職を担当した。渉外は、チームと先生方・協力してくださる方々との間に立って、双方とやり取りを行う。その結果、周囲との関係性を理解し、今の自分に何ができるのかを考えながら、活動を行うことができたと考える。例えば、先生方や市役所の方から頂いたメールを共有する際には、ただ内容を伝えるのではなく、内容を踏まえて次はどうすれば良いのかなど、先のことを考えてメンバーに提案することが段々とできるようになった。しかし一方で、反省する点もある。活動の方針を変える際、先生への報告が不十分であった時があった。また、提供していただいた情報の掲載について提供先に確認しないまま、制作物を完成させようとしていたことは大きな反省点である。掲載許可の確認をとるために、予定していた計画に影響が出てしまった。これらの出来事から、活動は自分たちだけで進めているのではなく、周囲の人たちの協力があったということだということを学んだ。そして、その人たちへの連絡や報告を忘れてはならないことを痛感した。



図：チラシ掲示の様子

活動中はメールをすることが多かったが、1年生の時にはほとんどしたことが無かった。活動が始まった頃は、敬語や文章の書き方が合っているかなどを確かめながら作成し、1通のメールを送るにも時間がかかった。先生方や市役所の方とやり取りさせていただく中で、メールの書き方や言葉遣い、データの送り方などを学ぶことができた。社会人の方々と長期にわたって連絡を取り合えた経験は貴重であるのと同時に、スキルを身につけることができた経験であった。最近ではメールを作成するのが以前より早くなったと感じる。また、活動をしていると電話でアポをとることがあった。この経験も初めてである。電話で話すことが苦手で、いつも緊張しながらアポを取った。その中で1度だけ「何が言いたいのか分からない」と言われたことがあり、ショックだったのを覚えている。そのとき、自分の言いたいことを相手にきちんと伝えられるように工夫しなければと強く感じた。言いたいことを端的に、分かりやすく伝えることは普段の生活でも必要なことである。このスキルの向上はこれからの課題である。

自分に対して、これからの課題だと感じた点はもう1つある。それは、非対面でのコミュニケーションの方法である。チームで話し合う際には、オンライン会議に加えてLINEを使うことが多かった。しかし、LINEだと全員の返信を早く得られないことがあった。どうやったら見てもらって、早く返信がもらえるのかと悩んだ。もっと効果的な連絡方法や働きかけ方を見つけ、実践したいと考える。

はじめから渉外になるつもりは無かったが、結果的に自分が伸ばしたい能力を伸ばすことにつながり、普段の授業では学べないことを実践的に学ぶことができた。大変だと感じたときが多く、悩んだときもあったが、やりがいのある役職につけて良かったと感じる。

活動を進めていく中で、思い通りにいかないことが多々あったが、ひとまず制作物を残せたことに安堵している。これも多くの方のおかげである。茨大交通政策課のメンバーは、自分では思い浮かべないようなアイデアを出してくれたり、色々な場面で助けてくれた。また、活動中は先生方、伊藤様、飯村様をはじめとした水戸市役所交通政策課の皆様、その他協力してくださった皆様には大変お世話になった。メールや電話で直接やり取りをさせていただく中で、皆様が真摯に向き合ってくださっていること、応援してくださっていることを強く感じた。そのことにとっても嬉しく思うのと同時に、感謝の気持ちでいっぱいである。多くの方々のおかげで、「2年生の時にプロジェクト演習を頑張った」と胸を張って言うことができる。皆様に改めてお礼申し上げます。誠にありがとうございました。

「誰かを想うこと」の大切さ

チームで活動をして感じた事

茨城大学 2年 河内 彩奈咲

昨年の7月頃から始まった「茨大生の自転車マナー向上プロジェクト」と題した私たちのプロジェクトは、想像以上の紆余曲折を経て、なんとかプロジェクトを遂行することができた。「9人」という大所帯のチームで、水戸市役所交通政策課様をはじめ、先生方など多くの人と協力して取り組んだこのプロジェクトは、自分ではない他の誰かを想って行動することが、物事をやり遂げる上ではとても重要であるということをお私に教えてくれた。このことについて、2つの出来事から振り返ってみる。

1つ目は、私の担当係に関する出来事だ。この授業を受けるにあたって、年度初めに個人目標を立てたのだが、その内の1つに「自分の意見を、家族や友人等基盤となる知識・文化を共有する相手に対しては、その共通性に依拠しつつわかりやすい内容・話法で伝えることができる。」という目標があった。私はこのチームで渉外担当だった。一緒にプロジェクトを進めてくださった水戸市役所交通政策課様や先生方と主にメールを用いて連絡事項のやり取りをしたのだが、直接ではなく文面のみでのやり取りであったため、メールの文章は最初から最後までわかりやすくまとめるように私は心がけていた。しかし秋頃にプロジェクトをはじめ他の授業や自分の予定などが重なって忙しくなると、メールの作成を少し負担に思うようになってしまったことがあった。そのような時に友人と電話でこのことについて話す機会があったのだが、その時その友人は「指導してもらっているのに面倒くさいと思うのは矛盾だね。」と言った。この言葉はもともとであり、学生である私たちは常に意識していなければならないことではあったが、その意識が私の中から薄れてしまっていた。この後からは、自分で建てた目標を意識し、市役所様や先生方のことをより考えられるようになり、「経緯や理由もしっかり書こう」「すぐに理解してもらえるような文面にしよう」など、自然とメール作成の仕事を丁寧にこらわって取り組むことができた。

2つ目の出来事はチームでの活動である。これは1つの大きな出来事があったわけではないが、私たちのチームは仕事が予定通りに進まないことが多かった。私たちのチームは茨大生の自転車マナー向上のための動画・チラシ・電子パンフレットを作成したのだが、年間を通してそれらの作成に加えて中間報告会や活動報告会の準備などチームでの活動が多くあった。チーム活動はほとんどオンライン上で行われたため、仕事の進め方は各個人に任されていた。そのためチームで仕事を分担して取り組む時は、締め切り日を設けてそれまでに各自完成させておくという方法をとった。一見、普通で問題ない方法に見えるが、「オンラインのみ」ということがあって、各自の進捗状況が全く分からず、直前になって確認すると仕事ができていなかったり、お互い考えていたことが異なっていたりということが起きた。そのようなことを数回経験し、お互いに「これは何日までだよな?」「この内容でいいかな?」という確認がされるようになると、以前よりもチーム内の雰囲気は良くなり、会議はスムーズに進行し、大きな間違いなどがなくなった。顔が見えない分、他の人のことより自分の意見や都合を優先してしまいやすいのがオンラインでのチーム活動の特性だと思う。お互いの仕事や人柄が見えにくい分、自分から意識して他の人とのコミュニケーションをとることがとても大切だと感じた。

今回の授業でお互いのことを考えることで、はじめてチームとしての活動ができ、プロジェクトの目的を達成できるのだと学んだ。オンラインでの活動だったからこそ、対面の時以上に自分だけではなく相手のことも考えなければプロジェクトはできないということをとて実感できたと思う。これからも大学の授業や就職した先で、チームとして活動することが多くあると思う。その時には今回の授業で学んだ、相手を思いやることを忘れずに良いチームづくりのための働きかけができる人になりたいと思う。



図：学外実習の様子

7：おわりに

大竹 美沙

私たち「茨大交通政策課」チームは、茨大生の自転車マナー向上を目的に活動をしてきた。これまで、水戸市役所交通政策課様からご提案いただいた課題に取り組まれていた先輩方は、公共バスをテーマとしていた。自転車をテーマに活動するのは、私たちのチームが初めてである。そのため前例がなく、1から考えるという点で大変であったが、オリジナルのアイデアを生み出すことができたのではないと思う。

そのアイデアを生み出すまでに、何度も何度も話し合った。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、実際に会って話すことが少なかった。会議はすべてオンラインで行い、集まらないときはLINEを用いて決めた。また、報告会に向けたPPTの作成をMS-Teamsで共有しながら進めたこともあった。オンラインでの会議はうまく進まず、苦勞した点があったが、そういった経験が学生のうちにできたことは大きい。

これからの大学生活や社会にでた後でも、オンラインで会議をしたり、作業を進めたりすることがあるだろう。毎週のようにオンライン会議を行ってきた経験は、きっとそこで活かせるはずである。

自転車マナー向上に向けて、計画を変更しながらも、最終的に動画、チラシ、電子パンフレットを作成することができた。動画の編集やIllustratorを使った作業は、ほとんどのメンバーが初めての経験であった。初心者であるため、先生からお借りした参考書やインターネットで調べながら作り、予想よりも時間を費やした。そうして、なんとか活動の成果物を残すことができたものの、当初の目標であった「新入生ガイダンスで放映/配布し、大学のHPにも掲載する」ことが達成できなかったのは悔しい。少しでも私たちの制作物がSNSやYouTube、大学内で多くの人に見てもらえること、そして自転車マナーを見直すきっかけになることを願う。

上記のように、活動を通してうまくいかないことは多々あった。思わぬ計画の変更、直前の修正などがあり、なかなか思い通りに進まないものだと感じた。その反省から学べたことは多くあるが、以下は、特に学べたと感じる点である。

まず、スケジュールについてである。見通しが甘く、予定通りにいかなかったことがあった。水戸市役所交通政策課様や先生方への連絡や提出が直前となってしまう、大変ご迷惑をおかけしたこともある。スケジュールを逆算して組み立て、余裕をもつことの重要性を感じた。長期で活動をしたからこそ、スケジュール管理について学ぶことができたと考える。

次に、連絡をとるということである。活動の成功のためには、多くの方々に協力をお願いしなければならなかった。それを自覚し、もっとこまめに連絡をとるべきであったと痛感している。身内の中だけではなく、外部の方々とも連絡をすることの大切さを学んだ。

以上のことに加え、その他にも多く学んだことがあり、各メンバーは活動を行う前と比べて、一皮むけることができたのではないかとと思われる。活動から得たことは人それぞれであるが、それら全部が、きっとこれから先の大学生活や社会で活躍するために必要になるだろう。学んだことはただの経験としてそのままにするのではなく、未来へもっていき、活用したい。

最後になりますが、水戸市役所交通政策課様、担当の鈴木先生、岩佐先生をはじめ、私たちの活動をご支援くださったすべての皆様に感謝申し上げます。コロナ禍という中でこのような密度の濃い、貴重な経験をすることができたのは、皆様のおかげです。誠にありがとうございました。

7 : こみフェスチーム

リーダー	： 池田 拓野	茨城大学人文社会科学部人間文化学科	3年
副リーダー	： 木村 拓未	茨城大学人文社会科学部現代社会学科	2年
副リーダー	： 君和田彩歩	茨城大学人文社会科学部現代社会学科	2年
書記	： 飯泉 朋香	茨城大学人文社会科学部人間文化学科	2年
書記	： 新井 優花	茨城大学人文社会科学部現代社会学科	2年
書記	： 森田 壽一	茨城大学人文社会科学部現代社会学科	2年
会計	： 佐藤 宏紀	茨城大学人文社会科学部人間文化学科	3年
会計	： 大滝 琴美	茨城大学人文社会科学部現代社会学科	2年
会計	： 大山 翼	茨城大学人文社会科学部現代社会学科	2年
会計	： 佐藤 美理	茨城大学人文社会科学部現代社会学科	2年

副担当教員：神田 大吾 茨城大学人文社会科学部准教授
主担当教員：岩佐 淳一 茨城大学人文社会科学部 教授

こみっとフェスティバルチーム

1：はじめに

大滝 琴美

私たち「こみフェスチーム」は、水戸市市民生活課協働係様のご提案により、「こみっとフェスティバル2021」の活動に参加した。こみっとフェスティバルとは、水戸市内のNPO法人やボランティア団体等の市民活動団体（以下市民活動団体とする）を市民の方々に知ってもらう、身近に感じてもらうイベントである。さらに、このイベントは各団体間での交流を通して、団体の人々にもつながりを持ってもらうことも目的としている。2021年のテーマは「つなげよう ひろげよう こみっとの輪 ～わたしができるボランティア～」である。今年度は、新型コロナウイルスの流行により、人々との対面によるつながりが少なくなったからこそ、つながりの輪、「こみっとの輪」を広げることがより重要である。

今年度の「こみフェスチーム」は総勢10名のチームで、小チーム制を採用した。小チームは、企画担当の「こみフェス企画班」と広報担当の「こみ報」の2つである。学生の視点を活かした企画と、地域を支えている方々の想いを広める広報の両面に力を注ぐことで、よりパワーアップした「こみっとフェスティバル」を開催できると考え、この2チームで連携しながら活動を行った。

私たちが常に大切にしていた、今年度独自のプロジェクトの目的は「若い世代に合った方法で企画と広報を行うこと」である。こみっとフェスティバルの来場者に若者が少ないという課題を解決するために、この目的を設定した。私たちは「この企画は私たち若者にとって楽しいものなのか」「このパンフレットは私たち若者が目を惹かれるものか」ということを常に意識し、若者の視点に立って、活動を行ってきた。自己実現や就職のためにボランティアを行うという意識から、こみっとフェスティバルを通して、やりがいや社会貢献といった意識による参加を促し、若者による地域活性化を促すことが私たちの願いである。

このプロジェクトを通して、私たちは、「主体性」「働きかけ力」「課題発見・解決能力」の3つの力を身に付けることができたと考えている。なぜこのように考えたのか、以下では私たちのこれまで行ってきた活動を紹介し、おわりに理由を説明する。

2：活動概要

池田 拓野 君和田 彩歩 木村 拓未

私たち「こみっとフェスティバルチーム」は茨城大学における PBL 型授業の一環として、課題提案者である水戸市市民生活課協働係様と連携し、こみっとフェスティバル実行委員会の一員として活動を行った。市民活動団体の存在を、多くの人、特に若者からの認識を得るための「こみっとフェスティバル 2021」の広報・企画を主な活動としてきた。今年度のチームとしては、「いかに若者のボランティア参加に対する意識を能動的なものにするか」を目的に携わってきた。

今年度は「コロナ禍ならでは」の広報・企画を行うことにも尽力してきた。新型コロナウイルスにより、人々とのつながりが脆弱なものとなってしまった。しかし、こみっとフェスティバルのテーマにもある通り、「つなげよう ひろげよう こみっとの輪 ～わたしができるボランティア～」である。つまり、市民活動団体がアクティブに活動することで、その「輪」を強める、広げることができないかということである。そして、コロナ禍で何ができるかと考えたものが、「コロナ禍ならでは」の広報・企画である。

「はじめに」の部分で述べたように、今年度のチームは 10 人在籍している。小チーム制をとることとなったことにより、学生という若い視点による広報・企画の両面に力を注ぐことができた。小チームの名前は「こみ報」と「こみフェス企画班」である。

活動は、学生ミーティングだけでなく、月 1 回の実行委員会への参加やボランティア活動の体験、ラジオ出演、学外実習と多岐にわたる。さらに、各チームでの活動も加わる。これらを通じて、「社会貢献」や「やりがい」、「働きかけ力」、「主体性」「課題発見能力・解決能力」と様々な学びを受けることができた。すなわち、この 1 年間を通じた活動は、周りへの発信だけでなく、私たち自身の成長に結びつけることができたのである。

今年度は、新型コロナウイルスの流行という情勢に鑑みて、オンライン上での開催となった。今回は Zoom を用いての開催となり、その様々な機能を駆使してイベント運営を試みるというものになったために、今までとは全く異なった様相を呈したこみっとフェスティバルとなった。駆使した機能の代表例として、Zoom には「メインセッションルーム」と「ブレイクアウトルーム」がある。前者では全市民活動団体・参加者が集まるロビー的な役割かつ、団体の活動発表を行う場となった。後者では、全団体の発表終了後に、相談・交流する時間が設けられ、その「ブレイクアウトルーム」を各団体分用意して、参加者がその団体が待つ部屋に赴き、市民活動団体と参加者間の相談・交流が行われた。更に、市民活動団体側も参加者として各部屋に赴いたことによって、団体間の交流も生まれた。

学生は主に運営側に回った。後の活動トピックでも述べるが、こみ報は司会進行・当日広報の役を、こみフェス企画班では共同ホストとしてサポート関係の役に就いた。会場開催として動いていた頃とは方向性が異なる仕事をせざるを得なくなったが、当日は大きなハプニングなく遂行することができた。

活動トピックでは、オンライン開催決定前のことと決定後のことが綴られている箇所がある。「私たちの活動がいかに情勢に左右されつつも、あきらめずに柔軟な対応を取り、本番を迎えることができた」という事をお伝えできれば幸いである。そして、次頁からは各チームの活動概要について叙述する

こみ報

こみ報は先述されているように小チーム制ののっとり結成された、広報活動をメインに行うチームである。本チームは、こみっとフェスティバル当日のイベントと水戸市内の市民活動団体の周知活動を行うことで、若者を中心とした幅広い年齢層にイベント参加を促すこと、ボランティアという形での地域貢献の提案を行うことを目的とし活動を行ってきた。主な広報媒体は、パンフレットと SNS (Twitter、Instagram) である。前者のパンフレットは、課題提案者である水戸市市民生活課協働係様とこみフェス企画班により立案されたパンフレット作成企画を受託する形で始まり、以降「コロナ禍であっても」団体周知が実現でき、また「コロナ禍だからこそ」活かせるパンフレットを実現させるため、作成にあたった。後者の SNS は、既存の公式 Twitter 及び Instagram による広報活動である。双方の SNS の特徴を活かし、パンフレットには掲載しきれないチーム内活動の様子や、パンフレット内容をわかりやすくまとめた情報を定期的に発信し

た。こみっとフェスティバル実行委員会に所属する運びとなり、事務局や委員の方々に貴重なご意見・ご提案をいただきながらパンフレット作成が進められていた矢先、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、こみっとフェスティバルがオンライン開催となった。これをうけ、イベント当日の参加を促すパンフレットとしての枠組みを超え、半永久的に保存してもらえるガイドブックとしてパンフレットの意味づけを変え、内容を修正することで新たな方向性で広報活動を行うことになった。

こみフェス企画班

こみフェス企画班は先述されているように小チーム制にのっとり、こみっとフェスティバル当日の企画を水戸市市民生活課協働係様と共に考え、実行するというをメインに活動してきた。今年は新型コロナウイルスの感染拡大のため、「コロナ禍だからこそ」できるような企画を考えた。そこで、企画班では当初、パンフレット作成企画、VR企画、そして、デジタルクイズラリー企画を3つ考えた。この内、パンフレット作成企画については、こみ報での広報の方向性と一致したため、こみ報が以降担当する企画となった。そこで、VR企画とデジタルクイズラリー企画の2つの企画の実現を企画班が担当した。この2つの企画は、このコロナ禍にあって多くの人が感染等をおそれ、市民活動団体の活動へと参加できなかつたり、市民活動団体との接点を持つ機会が少なくなってしまうという状況にあることから、実際に市民活動団体の活動に参加しなくてもその団体の活動について「学べる場」を提供するというを旨とし、企画した。先述のように、月に1回、こみっとフェスティバル実行委員会に参加することができなかったことで、上記の2つの企画を実行委員会にて提案することができた。そして、「コロナ禍だからこそ」の企画であり、実際に市民活動団体の活動に参加しなくてもイベントにて視覚的な情報や知識を「学べる場」を創出する企画である賛同が得られ、承認された。また、これらの2つの企画はこのこみっとフェスティバルというイベントに限らず活用していけるということも評価された。しかし、準備が着々と進められていた一方で、新型コロナウイルスの感染拡大によって対面でのイベントが中止となってしまう、オンライン開催へと変更になった。それにより、今まで計画してきた企画ができなくなり、新たな企画を模索していかなければならなくなった。そこで、VR企画とデジタルクイズラリー企画を別の形で活かしつつ、それに加え当初予定になかったCM作成と活動発表の映像の作成という新たな企画を立案し、オンラインでできることを実行することにした。

3 : 議事録・活動記録

新井 優花 飯泉 朋香 森田 壽一

表 1 : 議事録・活動記録

No.	日時	場所	活動内容	参加者	実働時間
1	2020年 7月3日 14:50 - 16:30	Teams こみフェスチーム	自己紹介、顔合わせ、課題認識の確認	池田、木村、森田、大山、君和田、新井、飯泉、大滝、佐藤(宏)	1:40
2	2020年 7月10日 14:50 - 16:30	Teams こみフェスチーム	今後の企画・広報の見通しに関する打ち合わせ	池田、木村、森田、佐藤(美)、君和田、新井、飯泉、大滝、佐藤	1:40
3	2020年 7月17日 14:50 - 16:30	Teams こみフェスチーム	橋本様からの説明(規模の縮小、募集团体向けのチラシについて)・今後の予定	池田、木村、森田、大山、佐藤(美) 君和田、新井、飯泉、大滝、佐藤	1:40
4	2020年 7月24日 14:50 - 16:20	Teams こみフェスチーム	構想書、チラシについての意見交換	木村、森田、大山、佐藤(美)、飯泉、大滝、佐藤(宏)	1:30
5	2020年 7月31日 14:50 - 16:30	Teams こみフェスチーム	チラシ作成班決定、実行委員会参加者決定	池田、木村、森田、大山、佐藤(美)、君和田、新井、飯泉、佐藤	1:40
6	2020年 8月7日 15:50 - 16:30	Teams こみフェスチーム	写真撮影、諸連絡、企画・広報の今後の活動に関する打ち合わせ	木村、森田、大山、佐藤(美)、君和田、新井、飯泉、大滝、佐藤(宏)	0:40
7	2020年 8月18日 10:00 - 11:30	Teamsこみフェスチーム	SNS、実行委員会、チラシ、これからの会議日について。	池田、木村、森田、大山、佐藤(美)、飯泉	1:30
8	2020年 8月19日 14:00 - 15:20	水戸市役所本庁舎3階 会議室303	こみつとフェスティバルの分科会、実行委員会	森田、大山、君和田、新井、佐藤(宏)	1:20
9	2020年 8月21日 14:50 - 16:00	Teamsこみフェスチーム	実行委員会の内容共有、各班に分かれて会議	木村、大山、新井、飯泉、大滝、佐藤(宏)	1:10
10	2020年 8月26日 15:30 - 16:20	FMばるるん(水戸市酒門町)	ラジオ収録(参加団体募集の広報)	新井、佐藤(宏)	0:50
11	2020年 8月29日 9:20 - 13:00	城南病院裏のホール	にこにこ食堂でのボランティア体験	新井	3:40
12	2020年 9月4日 9:50 - 13:00	茨城大学付属小学校	水戸子どもの劇場でのボランティア体験	佐藤(美)、飯泉	3:10
13	2020年 9月4日 14:50 - 15:40	Teamsこみフェスチーム	ボランティア体験の日程調整、企画・広報の話し合い	木村、佐藤(美)、君和田、新井、飯泉、大滝、佐藤(宏)	0:50
14	2020年 9月5日 9:30 - 13:30	城南病院裏のホール	にこにこ食堂でのボランティア体験	君和田、佐藤(宏)	4:00
15	2020年 9月5日 15:00 - 19:00	水戸市常磐町借楽園	あしたの学校でのボランティア体験	飯泉	4:00
16	2020年 9月16日 14:00 - 15:30	水戸市役所本庁舎3階 会議室303	こみつとフェスティバルの分科会、実行委員会	森田、大山、佐藤(美)、君和田、新井、佐藤(宏)	1:30
17	2020年 9月18日 14:20 - 15:50	Teamsこみフェスチーム	学外実習についての情報共有、企画・広報の打ち合わせ	池田、森田、大山、佐藤(美)、君和田、新井、大滝、佐藤(宏)	1:30
18	2020年 9月19日 9:00 - 13:00	城南病院裏のホール	にこにこ食堂でのボランティア体験	森田、飯泉	4:00
19	2020年 9月23日 13:00 - 17:00	トモス水戸グッジョブセンター	グッジョブセンターでのボランティア体験	飯泉	4:00
20	2020年 9月27日 13:00 - 14:40	Teamsこみフェスチーム	資金について、後期の会議について、各班に分かれて会議	池田、木村、森田、大山、君和田、大滝、佐藤(宏)	1:40
21	2020年 10月5日 8:40 - 10:10	Teamsこみフェスチーム	キックオフ報告会での担当決め、各班に分かれて打ち合わせ	池田、木村、森田、大山、佐藤(美)、君和田、新井、飯泉、大滝、	1:30
22	2020年 10月7日 14:20 - 15:50	Teamsこみフェス企画班	キックオフ報告会のパワポ作成について、VRについて、クイズラリーについて	池田、木村、森田、大山、佐藤(美)	1:30
23	2020年 10月14日 12:40 - 14:10	講義棟21番教室・teams	キックオフ報告会での質疑応答を考える、企画・広報に分かれて打ち合わせ	池田、木村、森田、大山、佐藤(美)、君和田、新井、飯泉、大滝、	1:30
24	2020年 10月21日 14:00 - 15:15	水戸市役所本庁舎3階 会議室303	文科会、実行委員会	池田、森田、大山、佐藤(美)、飯泉	1:15
25	2020年 10月28日 12:40 - 14:40	講義棟21番教室	報告会の準備、実行委員会の内容共有、各班に分かれて会議	池田、木村、森田、大山、佐藤(美)、君和田、新井、飯泉、大滝、	2:00
26	2020年 11月4日 12:40 - 14:10	講義棟21番教室	キックオフ報告会の反省、各班に分かれて会議	池田、木村、森田、大山、佐藤(美)、君和田、新井、飯泉、大滝、	1:30
27	2020年 11月6日 9:00 - 10:10	講義棟22番教室	パンフレットの出席団体紹介ページのデザイン決め。	君和田、新井、飯泉、大滝、佐藤(宏)	1:10
28	2020年 11月7日 9:30 - 11:00	赤塚駅ミオス2F水戸福祉ボランティア会館水戸	VR撮影(手話サークルさくらんぼ)	池田、森田、大山	1:30
29	2020年 11月11日 12:40 - 14:10	講義棟22番教室	企画班、広報班の情報共有、各班に分かれて会議	池田、木村、森田、大山、佐藤(美)、君和田、新井、飯泉、大滝、	1:30

30	2020年 11月16日 8:40 - 10:10	Teamsこみ報	活動報告会での活動内容の検討。	君和田、新井、飯泉、大滝、佐藤(宏)	1:30
31	2020年 11月18日 14:00 - 15:05	水戸市役所本庁舎2階 会議室	分科会・実行委員会	池田、木村、森田、大山、佐藤(美)、君和田、飯泉、大滝	1:05
32	2020年 11月20日 8:40 - 10:10	講義棟22番教室	パンフレット修正作業、活動報告会の資料作り	君和田、新井、飯泉、大滝、佐藤(宏)	1:30
33	2020年 11月22日 10:00 - 12:00	森林公園 創造の森 もみじの森	VR撮影(ASOBIMORIプロジェクト)	池田、大山	2:00
34	2020年 11月23日 21:00 - 0:00	Teamsこみ報	活動報告会のパワポ作成	君和田、新井、飯泉、大滝、佐藤(宏)	3:00
35	2020年 11月25日 12:40 - 14:10	講義棟22番教室	実行委員会・分科会の内容共有、各班に分かれて会議	池田、木村、森田、大山、佐藤(美)、君和田、新井、飯泉、大滝、	1:30
36	2020年 11月28日 10:00 - 14:30	茨城保健生協組合員 ホール、千波湖	VR撮影(にこにこ食堂、環境保全会議)	森田、大山、佐藤(美)	4:30
37	2020年 11月29日 9:20 - 11:30	水戸市鯉淵町222-1もみじ館	VR撮影(ちいさの学校)	森田、大山	2:10
38	2020年 12月2日 12:40 - 16:00	Teamsこみ報	活動報告会原稿の添削、パンフレットの修正	君和田、飯泉、大滝、佐藤(宏)	3:20
39	2020年 12月2日 14:00 - 15:00	茨城県 県民文化センター	VR撮影(着物文化を大切にす会)	池田、大山	1:00
40	2020年 12月5日 12:40 - 17:30	Teams活動報告会	活動報告会リハーサル、リハーサルの反省点	池田、木村、森田、大山、佐藤(美)、君和田、新井、飯泉、佐藤	4:50
41	2020年 12月6日 13:30 - 15:00	水戸市役所2階こみつと ルーム	ミュージックベル28 ♪響き♪のVR撮影	池田、森田、大山、佐藤(美)	1:30
42	2020年 12月9日 12:40 - 14:10	講義棟22番教室	クイズラリー・VRについて	池田、森田、大山、佐藤(美)	1:30
43	2020年 12月9日 16:00 - 17:30	Teamsこみフェスチーム	活動報告会のパワポの修正点のまとめ	池田、森田、大山、新井、飯泉	1:30
44	2020年 12月13日 14:00 - 15:00	茨城県水戸市桜川市民 センター	水戸こどもの劇場のVR撮影	池田、森田、大山	1:00
45	2020年 12月14日 8:40 - 10:15	Teamsこみ報チーム	活動報告会に向けて打ち合わせ	君和田、新井、飯泉、大滝、佐藤(宏)	1:35
46	2020年 12月16日 14:00 - 15:30	水戸市役所本庁舎2階 会議室	分科会・実行委員会	池田、木村、森田、大山、佐藤(美)、飯泉、大滝	1:30
47	2020年 12月23日 12:40 - 14:10	講義棟22番教室	活動報告会の反省	池田、木村、森田、大山、佐藤(美)、君和田、新井、飯泉、大滝、	1:30
48	2020年 12月26日 22:30 - 0:30	Teamsこみ報	パンフレット作成	君和田、新井、飯泉、大滝	2:00
49	2020年 12月27日 10:00 - 14:30	Teamsこみ報	パンフレット作成	君和田、新井、飯泉、大滝、佐藤(宏)	4:30
50	2020年 1月6日 12:40 - 17:30	Teamsこみ報	パンフレット作成	君和田、新井、飯泉、大滝、佐藤(宏)	4:50
51	2020年 1月13日 12:40 - 14:10	講義棟21番教室	期末レポートの分担、各班に分かれて会議	池田、木村、森田、大山、佐藤(美)、君和田、新井、飯泉、大滝、	1:30
52	2020年 1月20日 14:00 - 15:30	zoom	こみつとフェスティバルの当日の流れの確認	池田、木村、森田、大山、佐藤(美)、君和田、新井、飯泉、大滝、	1:30
53	2020年 1月25日 8:40 - 10:10	Teamsこみフェスチーム	オンライン開催に伴う企画・広報の変更について	池田、木村、森田、大山、佐藤(美)、君和田、新井、飯泉、大滝、佐藤	1:30
54	2020年 1月29日 9:00 - 9:50	Teamsこみ報	パンフレット作成	君和田、新井、飯泉、大滝、佐藤(宏)	0:50
55	2020年 2月3日 14:00 - 15:30	zoom	出展団体説明会	池田、木村、森田、大山、佐藤(美)、君和田、新井、飯泉、大滝、	1:30
56	2020年 2月10日 12:40 - 15:00	講義棟22番教室	こみフェス当日について	池田、木村、森田、佐藤(美)、君和田、新井、飯泉、大滝、佐藤	2:20
57	2020年 2月19日 10:30 - 12:00	zoom	こみフェス当日の通し練習、確認事項について	池田、木村、森田、大山、新井、飯泉、大滝、佐藤(宏)	1:30
58	2020年 2月20日 13:00 - 14:30	zoom	情報共有、通し練習	池田、木村、森田、大山、佐藤(美)、君和田、飯泉、大滝、佐藤	1:30
59	2020年 2月21日 8:30 - 14:30	水戸市役所、zoom	こみつとフェスティバル	池田、木村、森田、大山、佐藤(美)、君和田、新井、飯泉、大滝、	6:00
60	2020年 2月26日 12:40 - 14:30	Teams こみフェスチーム	次回実行委員会について、こみフェスの振り返り	池田、木村、森田、大山、新井、大滝、佐藤(宏)	1:50
61	2020年 3月5日 10:20 - 12:00	Teams こみフェスチーム	活動報告書の推敲、今後の予定について	池田、木村、森田、大山、佐藤(美)、君和田、新井、飯泉、大滝、	1:40
62	2020年 3月17日 14:00 - 15:30	水戸市役所本庁舎4階 会議室	実行委員会	池田、木村、森田、君和田、新井、飯泉、大滝	1:30

4. 活動トピック

(1) 実行委員会

佐藤 美理

- ①日時：毎月第3水曜日 14:00～15:30
参加日：第3回実行委員会（8月19日）
第4回実行委員会（9月16日）
第5回実行委員会（10月21日）
第6回実行委員会（11月18日）
第7回実行委員会（12月16日）
第8回実行委員会（1月20日）
第9回実行委員会（3月17日）

②場所：水戸市役所会議室

※第8回実行委員会はコロナ感染対策のためオンライン参加



図1：第4回実行委員会の様子

③活動内容：

私たちは月に1度水戸市役所にて開催されたこみっとフェスティバル実行委員会に参加した。会議では私たちが考えた企画の提案やこみっとフェスティバルの運営に関する話し合いを行った。はじめに企画班が考えた2つの企画の提案については、学外実習で作成した企画書を基に、9月の実行委員会にてパワーポイントを用いて両企画のプレゼンテーションを行った。企画の内容やそれに伴う費用などを説明した後、実行委員会の方々から承認をいただき、企画が成立した。また広報班のパンフレット企画も同様に実行委員会にてご意見をいただきながら改良を重ねた。運営に関する話し合いではこみっとフェスティバルがより多くの人に来場していただき、活動団体にとってよりよい活動発表の場となるように、私たちも若者の視点から意見を述べるなど積極的に会議に参加した。

(2) ラジオ出演

佐藤 宏紀

- ①日時：
2020年8月26日(収録)、9月5日、8日(放送)
2021年1月27日(収録)、2月6日、9日(放送)

②場所：FM ばるるん(水戸市酒門町)

③活動内容

こみっとフェスティバルの広報活動の一環として去年と今年で2回ずつラジオの方に出演した。そのうちの9月に放送した方では市民活動団体向けにこみっとフェスティバルについての説明をし、こみっとフェスティバルへの参加を促した。2月に放送した方では、私たち茨城大学こみフェスチームの活動についてやこみっとフェスティバル当日の流れを紹介した。

この2回の放送により SNS を普段あまり使わないラジオリスナーも想定したこみっとフェスティバルの宣伝をすることに成功した。



図2：ラジオ収録の様子

(3) ボランティア参加

飯泉 朋香

私たちは、夏季休業期間に水戸市内にある市民活動団体の活動に参加した。具体的には、NPO 法人水戸こどもの劇場(2020年9月4日)、にこにこ食堂(2020年8月29日、9月5日、9月19日)、あしたの学校(9月5日)、認定NPO法人 茨城NPOセンター・コモンズ グッジョブセンターみと(以下グッジョブセンターとする、9月23日)においてボランティア活動を行った。

NPO 法人水戸こどもの劇場(図3)では、茨城大学附属小学校行われた赤ちゃん教室の手伝いをし、椅子や机、マットの消毒、赤ちゃんとのふれあいの時間には、赤ちゃんと生徒の間にアクリルシートを立てるなどの感染対策を行った。また、水戸こどもの劇場についてのご説明も頂いた。水戸こどもの劇場の歴史は50年以上あり、最初は、月に2、3回親子で観劇をするというものだったそう。現在では、子育て中のお母さん方が普段の悩みを共有したり、アドバイスをしたり出来る場を設けるなどを行っているという。にこにこ食堂(図4)では販売するお弁当作りをした。現在にこにこ食堂では、コロナウイルスの影響でテイクアウトのみとなっており、今回は、お弁当に詰めるおかずづくり、そしてお弁当の盛り付けをした。にこにこ食堂はこども食堂であり、有志の方々により無償で野菜やお米などを提供されている。多くの方のご協力のもと成り立っている活動のため、にこにこ食堂の活動を知って頂くことが重要だと考えているそう。広報活動には特に力をいれているとおっしゃっていた。あしたの学校では、偕楽園で開催された萩祭り中に行われたナイトウォークの手伝いをした。具体的には、ガイドが手に持っている紙芝居を照らす、説明があった建物や植物などを照らすなどである。このボランティアを通して、偕楽園について知らない情報をたくさん知ることが出来、そういったことを知ってそれを説明できる人間になるということもその地域にとって重要なことであると実感することができた。あしたの学校は校舎を持たない学校として地域のガイドをする、そのガイドを育成する活動をおこなっているそう。グッジョブセンターでは利用者の方と会話を楽しみ、普段の活動について丁寧にご説明をいただいた。利用者の方々が利用する理由は様々であり、今回は利用者の方と会話をしたり、双六ゲームをしたりした。グッジョブセンターでは、利用者さんの社会復帰に力を入れており、職業体験や履歴書の書き方、面接の練習、その他にも生活訓練合宿や折り紙教室なども開催しているという。

今回私たちは、市民活動団体に関するイベントに携わることとなった。それゆえ、実際に水戸市内のボランティア活動の内容を知り、やりがいや社会貢献も実感するために積極的にボランティア活動に参加した。この活動を通して、それぞれの団体がどのような目的をもって活動をしているのかを知ることができ、その活動も市には不可欠なものであると感じた。おそらく水戸市民でさえも水戸市内にどのような団体が存在するのか、多くの数を挙げられる人は少ないだろう。必要としていながらも、そういった活動を行っている団体が存在するということが知らない人がいるかもしれない。ますます、今回のイベントを通して、それぞれの団体について多くの人々に知って頂きたい、という思いが強くなった瞬間であった。



図3：水戸こどもの劇場にて



図4：にこにこ食堂にて

(4)学外実習

森田 壽一

- ①日時：9月14・15日（8:30～17:15）こみフェス企画班：大山、佐藤（美）、森田
9月24・25日（8:30～17:15）こみ報：新井、飯泉、君和田、佐藤（宏）

②場所：水戸市役所市民生活課

③活動内容：今年は新型コロナウイルス感染症の影響もあり、こみフェス企画班とこみ報の2グループで分かれて行った。

・こみフェス企画班

- 1日目→消費生活係、施設係、協働係の仕事体験
企画書作成と調べ物・企画書訂正
消費生活パンフレット訂正のためのシール貼り（事務作業）
「第6次総合計画」について意見の提案
2日目→こみフェスの企画書作成と実行委員会でのプレゼンの発表予行練習

・こみ報

- 1日目→消費生活係、施設係、協働係の仕事体験
パンフレット構想案・デザインのアイデアについて
学生アンケート実施について
消費生活パンフレット訂正のためのシール貼り（事務作業）
「第6次総合計画」について意見の提案
2日目→パンフレット案の見直しと新たな考え（団体紹介例など）
こみっとフェスティバル参加促進のため、市民活動団体へ個々に電話

こみフェス企画班とこみ報で担当した仕事の内容はあまり相違なく、市民生活課様が普段どのお仕事をされているか、市民の方々と向き合っているかということを実際に体得することができた。

また個々の活動に関しては、企画班ならではの企画書の作成や、広報を担当するこみ報ならではのパンフレット制作やアンケートの実実施計画など、今後実施していく内容に向けた話し合いをすることができた。



図5：こみフェス企画班作業中



図6：こみ報打ち合わせ

*編者注：

コロナ禍で各種活動が制限される中、感染症対策を徹底した上で受け入れて戴きました。市役所の皆様のご尽力に、心より篤く感謝申し上げます。なお、メンバーの内3名が不参加となったのは、感染症対策の一環として「水戸市内在住者限定での受け入れ」とならざるを得なかったことによる旨、この場を借りて明記致します。

(5)VR 撮影

木村 拓未

今年度は、先述のように新型コロナウイルスの感染拡大を受け、「コロナ禍だからこそ」できるような、求められるような企画として、立案されたものである。本企画の概要は、市民活動団体の活動を 360 度、空間ごと映像に収め、それを来場者に見てもらうという企画である。

①コンセプトとメリット

本企画のコンセプトは実際に市民活動団体の活動に参加しに行かなくても活動を擬似的に体験することを可能にし、市民活動団体の活動について「学べる場」を提供するということをコンセプトとした。そこで、本企画のメリットとして、実際に活動しているような空間を体験できる「擬似的な体験」、2D と差別化された 360 度の視点の提供、そして、新しい技術であるため、人々の興味、関心を引きやすいという 3 つの点があげられる。特に、人々の興味、関心を引きやすいという点に関しては、本イベントの目玉企画になり得るといふ評価をいただいたことから本企画は広く市民活動団体の活動をイベントにて宣伝することを期待された。



図 7：カメラ(矢印)をセットして VR 撮影

②成功基準について

本企画がこみっとフェスティバルで成功かどうかということを判断するために具体的な基準を設けるといふ点でも工夫した。本企画では、VR ゴーグルの台数が 6 台であり、1 人 1 台あたりにかかる時間を 4 分と想定し、1 時間(60 分)÷4(分)=15(人)と計算し、当日の活動の時間が 5 時間であること、そして、来場者が VR 企画受け入れ最大人数の 80 パーセントを企画の稼働率ということに変数にいれ、大成功の基準とし、 $15(人) \times 6(台) \times 5(時間) \times 0.8 = 360(人)$ 、成功の基準は VR ゴーグルが 1 台使えなくなったときの同計算式とし、 $15(人) \times 5(台) \times 5(時間) \times 0.8 = 300$ 人となった。

③VR 撮影団体選定について

本企画では、VR 上映を当日行うにあたって、上記のようなコンセプトとメリットから、内容にもこだわることとした。30 団体以上から、VR 撮影を行う団体として 10 団体を、当日上映する団体をその中から 6 団体選出し、上映することとした。そこで、明確な採用基準を設け、公平性を保った。

④VR 撮影について

以上のようにして選定された市民活動団体へ実際に参加し、VR 映像を撮影した。

⑤オンライン化への対応

しかし、先述の通り、対面開催からオンライン開催へと変更になったことで、本企画も再考する必要がでてきた。そこで、Zoom のブレイクアウトルームを設定していただき、従来の企画にあった 360 度の視点を、こちらで操作することになったが、提供するために映像を流すこととした。また、許可をいただいた団体は、YouTube に VR 映像を載せるという形で企画を活かすこととした。

⑥こみっとフェスティバル当日の様子

Youtube にアップしてある VR の映像を来場者にみってもらう予定だったが、映像を流すことができなかった。

(6) デジタルクイズラリー作成

大山 翼

今年度は、新型コロナウイルスの感染対策として、例年行われていた市民活動団体の活動を知らせるパネル展示が中止となった。その理由としては、展示されたパネルを見ることで来場者の足が止まり、人が密集してしまうことを懸念したためである。しかし、それでは、こみっとフェスティバル本来の目的である「市民活動団体を知る」というものが達成されないと私たちは考えた。デジタルクイズラリーはその目的を達成するための1つの企画である。

① コンセプトとメリット

「紙とペンを使わない。」これが、この企画のコンセプトである。通常のクイズラリーでは、専用の解答用紙と貸し出されたペンを手に、クイズの答えを探すという流れが定型となっている。しかし、このデジタルクイズラリーという企画では、解答をフォームに集計して行うことで、スマートフォンが解答用紙、画面を操作する指がペンに代わる。

このような形式を用いることで、来場者が共通の用紙やペンを用いる必要がないという点から感染対策というハードルを越えることが可能となった。さらに、スマートフォンというデジタルデバイスを用いることによる目新しさがこの企画には存在する。(5)のVR企画と併せて、「コロナ禍だからこそ」の企画としてPRすることができる考えた。また、こみフェスチームの目標である「若い人に知ってもらおう」ということに対しても、スマートフォンの活用は有効なものであると判断した。

② デジタルクイズラリー解答の流れ

デジタルクイズラリーの実際の解答の流れは以下のとおりである。

- (i) 解答用紙となる解答フォームを会場に設置されたQRコードより読み込む。
- (ii) 会場内の各市民活動団体のブースを巡り、解答のためのヒントを探す。
- (iii) ヒントをもとに解答を進め、ゴールとなる景品交換所で正解数を見せる。
- (iv) 全問正解の場合、景品を選択してクイズラリーは終了。



図8：解答フォーム

③ 成功基準について

本企画は景品交換を最終目標としている。そこで、成功基準は景品をもとに設定した。昨年度のこみフェスチームが行ったガチャガチャイベントの景品数が200個であったため、本年度もこの数が基準数となると判断した。具体的には景品数は200個の8割である160個交換された場合を成功、10割の200個が交換された場合を大成功と設定した。

④ 問題とヒントの作成

11月に当日にブースを出展される全29団体宛に問題とヒント作成のための情報収集の依頼を行った。その後、集まった情報をもとに、問題とヒントを図7、8のように作成した。また、情報収集の際に団体に特に情報を知ってもらいたい世代についても伺い、その情報をもとに難易度の振り分けを行った。

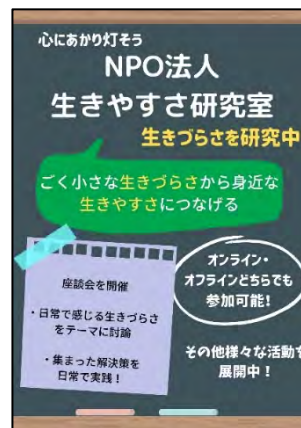


図9：ヒント

⑤ オンライン化への対応

本企画もVR企画と同様、オンライン開催に伴う企画変更が必要になった。しかし、Zoom上で実施するとなると複数のデバイスを必要となってしまう。そのため、チームのターゲット層である若者がクイズラリーに参加するのが難しくなってしまうと考え、オンライン上でのデジタルクイズラリーの中止を判断した。代替案として、作成した問題はこみ報のパフレットに掲載してもらうことでイベントに限らずいつでもどこでも解答できるクイズとして利用することとした。また、ヒントについては、イベント当日に参加される団体の紹介資料としてイベント前に流すCM等に用いることとなった。

(7)パンフレット作成

君和田 彩歩

パンフレットは、毎年こみっとフェスティバル開催に先立ち、イベント告知を目的に作成しているものである。今年度は新型コロナウイルス感染対策として、当初よりイベント規模の縮小に伴う出展団体数削減の方針が検討されていた。そこで、今年度のパンフレット作成は、こうした課題を抱えながらも市民活動団体の周知を行うことのできる広報として、例年以上に重点を置いた活動となった。

①コンセプト

今年度のパンフレットは「イベント後も活用できる」をコンセプトとした。理由としては、先述したイベント規模の縮小である。そこで、例年のように当日使用を前提に作成するのではなく、当日はもちろんのことイベント後も手元に置き活用できるパンフレットを作成する、という方針を定めた。

②成果

パンフレット作成における広報活動の成果として、昨年度作成したパンフレットと比較する。比較項目及びその結果は以下の通りである。

(i)配布部数

昨年度：2千部
今年度：3万部

(ii)配布対象

昨年度：こみっとフェスティバルの来場者のみ
今年度：水戸市内の全中高生、水戸市内の公共施設に配布

(iii)配布時期

昨年度：こみっとフェスティバル当日
今年度：2月上旬に事前配布

(iv)掲載団体数

昨年度：27団体
今年度：82団体

配布部数・配布対象の大幅な拡大と事前配布により若者を中心とした幅広い年齢層に広報を行うことができた。また掲載団体について、昨年度はイベント当日に出展される団体のみ掲載であったが、今年度は当日出展団体に加えパンフレット掲載のみの団体も含めることとなり、より多くの団体を広報することができた。



図 10：パンフレットの表紙

③パンフレットの内容

今年度は、パンフレットの内容についても昨年度の見直しを行い改善・修正を行った。主な見直し箇所は、「デザイン」「構成」「活用方法」の3点である。まず、デザインについて。若者が気軽に手に取ることを想定し、雑誌を参考にデザインやレイアウトを考えた。また、パンフレット全体の色合いをこみっとフェスティバル 2021 のロゴカラーである「桃色×黄緑色」に統一し、文字数・文字配置を調整することで洗練されたデザインになるよう工夫した。次に、構成について。今年度は、イベント当日の情報を見開き1ページに収め、代わりに市民活動団体の紹介ページをメインとする構成にした。後者に比重を置いたのも、イベント後に活用できるパンフレットとするための工夫である。最後に、活用方法について。QRコード、アイコン、ハッシュタグを用いることで視覚的にもわかりやすく活用できるパンフレットに仕上げた。QRコードは、各団体のHP、各種



図 11：団体募集のページ

SNS (Facebook、Twitter、Instagram) のリンクに飛ぶことができる。アイコンは、各団体が新規メンバーを募集していることを表す「新規メンバー募集」、各団体が主催しているイベントの参加者と提供しているサービスの利用者を募集する「利用者・参加者募集」、各団体に寄付して下さる方を募集する「寄付」の3種類。ハッシュタグは、各団体が届けたい情報をハッシュタグで表したものである。これらを作成するにあたり、情報受信側である若者を中心とした市民と情報発信側である各団体が「何を知りたいか」「何を届けたいか」に注目した。まず、前者を対象に実施したのが茨城大学学生対象の意識調査である。パンフレット構想時期である10月上旬に実施し、計134名の学生の協力を得られた。調査の結果、投票数の多い市民活動団体の雰囲気、活動費用や団体の年齢層、参加申し込み方法といった項目が受信側の知りたい情報であると分かり、パンフレット項目に反映した。次に、後者を対象に実施したのが各団体に向けたパンフレット原稿案の作成依頼である。先述したアンケート結果を反映させた項目を設定し、各団体が届けたい情報が何か原稿案を依頼することで明確にした。



図 12：オンライン化対応後の見開きページ

④オンライン化への対応

イベント開催がオンラインになったことで、当日の参加を促すパンフレットとしての枠組みを超え、半永久的に保存してもらえるガイドブックとしてパンフレットの意味づけを変えることになった。具体的には、パンフレットの名称を「ガイドブック【保存版】」として表紙に示し、当初見開き1ページで紹介していた当日の出展内容を、ガイドブックの見どころ、こみっとフェスティバルの概要説明、VR映像とデジタルクイズラリーのformに飛べるQRコードを添付した企画の活用方法に変更した。これにより、今まで以上にイベント後も活用できるパンフレットを作成することができた。

(8) SNSについて

新井 優花

①日時：2020年8月7日（金）～2021年2月21日（日）

②場所：茨城大学 こみフェスチーム/こみっとフェスティバル Twitter
茨城大学 こみフェスチーム/こみっとフェスティバル Instagram

③活動内容

こみ報内でTwitter担当とInstagram担当に分かれてSNS運営を行った。2つのSNSで同じ内容を投稿するのを避けるために、それぞれのSNSの特徴を分析して投稿内容によって使い分けをした。Twitterでは限られた文字数の中で日常的なことをツイートするため、こみフェスチームの会議の様子やこみフェス企画班の活動の様子などチームの動きについて投稿をした。更新の頻度としては、チームに動きがあれば随時ツイートしており、定期的な更新となった。Instagramではビジュアルを重視した写真が中心となるSNSであることから、こみっとフェスティバルのパンフレットに掲載している市民活動団体の情報を投稿した。こちらは2021年1月～こみっとフェスティバル当日までの約1か月間の短期集中的な更新ペースであった。

当初の計画としてはTwitter・Instagramどちらも8月からの定期的な更新を想定していたが、実際には先述のような結果となった。Twitterでは自分たちの活動の投稿を基本としていたため比較的ツイートしやすかったが、Instagramでは投稿する画像の加工や団体の情報収集など投稿するまでの手続きが多かったため高頻度での更新が難しかったということが原因と考えられる。投稿内容の検討だけでなく時間的計画も立てて運営方針を決めることの重要性を痛感した。

しかし、当初の計画とは異なるものの、短期間の投稿で多くの方の目に留まるための工夫や投稿する画像のアレンジなどといった軌道修正を行いながらSNS運営ができた。計画変更がなければこのような対応力

を磨く機会はなかったと予想され、今後に生かせる経験として良い機会になったと言える。

また、こみっとフェスティバル当日には Zoom 参加を果たせなかった方々もイベントに参加できるよう、Twitter・Instagram でイベント情報の随時更新も行った。



図 13 : Twitter のプロフィール画面



図 14 : Instagram のプロフィール画面



図 15 : Instagram の投稿画像例

(9) 団体募集チラシの作成

大滝 琴美

①日時：8月2日（日）～8月12日（水）

②場所：Microsoft Teams

③活動内容

団体募集チラシとは、こみっとフェスティバルに参加・出展して下さる市民活動団体を募集するために、配布するチラシである。今回、私たちはこのチラシの裏面を作成した。主な作成者は、池田・佐藤（美）・新井・飯泉・大滝である。私たちは、昨年チラシの改善点を見つけて、よりわかりやすく、団体の方に興味を持ってもらえるようなレイアウトになるように、工夫した（図 14）。工夫した点は以下の通りである。

- (i) 白黒だったものをカラフルにした
- (ii) 文章をただ並べるのではなく、配置を工夫した
- (iii) 文章それぞれに枠をつけた
- (iv) 説明を、動物が話しているような吹き出しにした

また、私たち自身、外部の方に配布するような公式のパンフレットを作成

することは初めてで、文章の構成や言い回しを考えるのに大変苦戦した。中でも、チームでアイデアを出し合って、指摘し合いながら、よりよい文章に改善していくことができた。特に、「新型コロナウイルスの流行により、対面によるつながりが少なくなったからこそ、人々のつながりを広げることが大切だ」というチームの想いを、市民活動団体の方に配布するチラシに記載できたことで、今年度ならではのチラシが作成できた。チームで意見交換をし、一つの公式な文書を作成する経験により、「チームワーク力」や、もらった人の立場になって考える「想像力」が身についたと考えている。



図 16 : 団体募集チラシ

①日時：2021年2月21日（日）イベント自体は10：00～12：15 その後の延長交流会は12：50まで

②場所：オンライン開催（Zoom）ただし、学生は運営側に回るため水戸市役所4階の会議室を使用

③イベント概要：

水戸市内で活動する市民活動団体の紹介や団体間のつながりを形成する目的で開催しているイベント。2013年に始まり、その後毎年開催されている。

今年は、新型コロナウイルスの流行という状況に鑑み、例年通りのイオンモール内原での会場開催は中止となり、セミナーやミーティングを行うためのアプリであるZoomを用いて、オンラインによる開催となった。

④当日の動向

当日の学生の役割としては、運営側に回ることであり、更にチーム内でもこみ報は司会・広報・タイムキーパーを担当、そしてこみフェス企画班は共同ホストとして、技術サポートやミュート関係、スポットライト、入室許可の担当をした。そして、「PBL授業」の一環として取り組んできた我々の今までの活動を、発表する場も設けられた。そこでは、映像を用いて活動（例えば、学外実習やボランティア参加、VR撮影、クイズラリー作成）の風景を様々な人に発表した。Zoomの機能であるブレイクアウトルームも用いて、本来当日行う予定であったVRによる疑似体験やデジタルクイズラリーの代替として学生の活動の発表の場をまた設定して頂いた。

当日のイベントの流れは以下の通りである。

表2：当日のスケジュール

8：30～ …学生集合 運営側の行動開始	10：10～ …活動発表開始 各団体5分 学生チーム含め19団体が発表
9：00～ …一般参加者・参加団体の入室開始 イベント用CMの放映開始（クイズラリーで 用いるヒントもここに掲載）	活動団体発表後 …ブレイクアウトルームを用いて、個別相談・ 交流会の開始 ブレイクアウトルームの注意事項の掲示
9：57～ …本番開始3分前のアナウンス 注意事項の呼びかけ	12：15～ …ブレイクアウトルームから全参加者がメイン セッションルームに移動 一旦の閉会后、延長相談会の開始
10：00～ …本番開始 当日の流れの提示 実行委員長、水戸市長からの挨拶	12：50 …完全終了

⑤当日の総括

当日は、特に高齢の方が担当された団体の発表では、操作に手間取って5分では収まることができず、途中で打ち切りになってしまうケースや、電波の調子が悪く、発表途中でZoomから退場してしまったケースがあった。しかし、ブレイクアウトルームでの相談・交流会では、異なる市民活動団体間の交流があったのを見受けられた。時間が短かったとはいえ、会場開催での目的をほぼ同様のことを、このオンライン上でも果たせたのではないだろうか。

そして本番後、こみっとフェスティバル実行委員長より、「高齢者もネット機器を扱いたくないわけではない」という話を頂いた。今回のように、我々若者がアプローチしていくことで高齢者が、今後ネットを使わざるを得ないという環境の中での懸念を晴らすことができるのではないだろうか。そして、若い世代と年配の方々による「教え、教わる」という相互的なサイクルができるのではないかと考えた。

このような視点から見ても、今回のこみっとフェスティバルの学生参加は大きな意味を持つだろう。



図 17：市役所での集合写真

運営側の会場である市役所にての集合写真。(左写真)
学生の手には、こみ報が主体となって作成し、完成したパンフレットを持つ。

当時は緊急事態宣言も発令されていたため、その対象地域で県外にいる学生は自宅からの参加となった。そのため、こちらの写真には9人のみ写っている。自宅にいる学生は、Zoom・LINEをもちいてコミュニケーションをとり、イベントの運営に参加した。

こみ報の運営体制の写真である。(右写真)
こみ報は、司会・広報・タイムキーパーを担当した。
主に水戸市市民生活課協働係の尾崎志野様とコミュニケーションを取りながら、前日までの準備、そして当日の役割を果たした。
また、自分の役割にとどまるだけでなく、こみ報のメンバー間やこみフェス企画班とも連携し、チームワークを発揮して、臨機応変に対応することができた。



図 18：こみ報の運営体制



図 19：こみフェス企画班の運営体制

こみフェス企画班の運営体制の写真である。(左写真)
こみフェス企画班は、共同ホストとして、技術サポートやミュート関係、スポットライト、入室許可の担当をした。
主に水戸市市民生活課協働係の橋本隆志様とコミュニケーションを取りながら、前日までの準備、そして当日の役割を果たした。
奥(写真中央付近)には、自宅参加となった学生が、モニター越しにコミュニケーションを取りつつ運営に携わる姿が映る。



図 20：本番後の集合写真



図 21：最後に水戸市市民生活課協働係と

5：学外実習レポート（水戸市役所 交通政策課）

「現場」に出ること・向き合うこと

君和田 彩歩（人文社会科学部現代社会学科 2年）

1. 参加の動機

学外実習を希望するきっかけとなったのが、委員として出席した第3回こみっとフェスティバル実行委員会です。ここで市民生活課協働係の方々と市民活動団体の方々と密接な交流を目の当たりにし、まちづくりが市民と行政の協働関係の下で成立していることを実感しました。そのうえで、市民にとって市民活動団体と行政の存在がそれぞれどのような立ち位置で、どうあるべきか、またどうアプローチすれば良い関係を構築できるのかを考慮理解することが、市民と行政の協働関係の在り方を理解することに繋がるだろう、また実際に行政の立場で仕事を体験することで漠然とした実感だけでなく、より具体的なアプローチ方法を学び理解することができるだろう、と考えたことが参加の動機です。



図：橋本様から水戸市の概要について
ご説明頂く

2. 派遣先の概要と業務内容

水戸市役所市民生活課には市民との協働の推進を行う協働係をはじめ、地域コミュニティの推進や消費生活に関する業務を行う市民活動・消費生活係、市内の市民センターの管理を行う施設係があります。学外実習では、大きく2つの活動を行いました。1つ目に各係からご提案頂いた課題に取り組むワークショップ、2つ目に本プロジェクトの目的であるこみっとフェスティバルに関連する活動です。ワークショップは、消費生活係から適切な経費利用について、施設係から水戸市民センター各所からの修理依頼を施設の利便性・危険性等を考慮して受諾を考えるという内容でした。こみっとフェスティバルに関連する活動は、茨城大学の学生を対象としたボランティアへの意識調査の作成と、こみっとフェスティバルで配布するパンフレットの項目考案、募集团体に向けた広報活動としてパンフレット掲載依頼の電話対応や募集依頼文書の作成を行いました。

3. 学外実習を通して修得したこと

私は学外実習を通し、今行っている広報活動について今一度振り返り、見直すことができたと感じています。そのきっかけは、学外実習1日目、パンフレット掲載の依頼が来ている団体についてお聞きした時のことです。1日目の時点でパンフレット掲載依頼が来ている団体数がわずか9団体でした。こみっとフェスティバルは市民活動団体の活動を、市民に広く知ってもらうことを目的としており、イベントに出展・パンフレットに掲載してくれる市民活動団体の方々が初めてこみっとフェスティバルとして成立するものです。パンフレット内容を考え、どうしたら市民の方々が見てくれるかということばかりを意識し、肝心の市民活動団体の方々とは向き合うことができていなかったと痛感した1日でした。2日目には、こうした現状から募集团体に向けた広報活動に重点を置き、掲載依頼の電話対応を行うことで、徐々に依頼数が増えていきました。市民・市民活動団体・行政。三者が互いの存在を理解し、相手の立場で考え、相手と向き合うことで初めて協働関係を築ける、ということを実感した2日間でした。

4. 後輩へのアドバイス

学外実習やインターンシップは「現場」を知ることのできる絶好の機会だと感じます。漠然と抱いていた職場の雰囲気や業務内容を、現場に出ることで経験することができます。私は、実際に学外実習に参加して、市役所のイメージが良い方向に変わったのと同時に、今まで行ってきたプロジェクト活動に、より精を出すきっかけとなりました。学外実習は大学のサポート体制もあるため、興味のある方は是非参加して自分の将来につなげてほしいです。

誰のために、何のために働くのか

飯泉 朋香（人文社会科学部人間文化学科 2年）

1. 参加の動機

私は現在、教職課程の授業を履修しており、将来、教師になることを視野に入れています。しかし、実際には、教師になるのか、それとも他の道を目指すのかについてはっきりと決めてはいません。コロナウイルスの影響で、就職に関するニュースをよく目にするようになると、自分が就職活動をする際に自信をもって言える強みはいったい何なのかについて考えさせられるようになりました。そこで、胸を張って自身をアピールできるような経験をしたい、と考えて学外実習に参加いたしました。



図：水戸市の概要に関するレクチャー

2. 派遣先の概要と業務内容

今回、学外実習をさせて頂いたのは水戸市役所市民生活課協働係です。先ず初めに水戸市についてその概要を学び、水戸市市民生活課が行っている業務を体験しました。中心となったのは、こみっとフェスティバルの広報物であるパンフレット作成、茨大生を対象に行うアンケート作成です。また、こみっとフェスティバルへの参加をお願いするため、ボランティア団体様に電話を掛けることも行いました。

3. 学外実習を通して修得したこと

市民生活課ではどのような業務を行っているのか、そして、水戸市市役所の方々がどのような心構えで仕事をしているのかについて知ることができました。特に、市役所の方々が就職時に署名する宣誓書に書かれた「全体の奉仕者として、誠実かつ公正に職務を執行する」という言葉が印象に残っています。私が就職をする時、何のために働くのか、誰の為に働くのか、ただ、お金を得るだけという考えしかもっていなかった私の「働くこと」の意味が大きく変わった瞬間でした。そして、誰の為に働くのか、その相手が見えるような職に就きたいと感じました。更に、今回の学外実習では、ボランティア団体の方々にこみっとフェスティバルへの参加を促すために電話を掛けました。こみっとフェスティバルの魅力を伝えるためにはどのようなことをアピールすればよいのか、失礼のないようにするにはどのような言葉を選ぶべきなのか、自分のことをどのように名乗ればよいのか、についてアドバイスをいただきました。友人以外の人に電話をかける、という経験が初めてだったため、とても緊張をしましたが、何を伝えたいのかを自分の中ではっきりと分かっていると、相手には伝わりません。こみっとフェスティバルの開催について、私自身がどのように感じているのか、どうして多くの団体の皆様に参加していただきたいのか、改めて自分の思いについて考えさせられました。また、電話を掛けて快くこみっとフェスティバルへの参加を承諾して下さった方々に、参加申込書を送付する際のメールの書き方、ファックスの書き方、などもご指導いただきました。普段、メールなどは大学の教授に送っていたりするので、簡単に文面を作成できると思っていたのですが、簡単にはいかず、そこでもアドバイスをいただきました。私が普段大学の教授へ送信するメールの文面にも誤りがあったことを知ることが出来たので、個人的に非常に為になる経験だと感じました。

4. 後輩へのアドバイス

学外実習の最初、そして終わりに学生から、お世話になった方々へ挨拶をします。何故、学外実習に参加することを決意したのか、この経験を通して何を身に付けたいのか、について自身の考えをはっきりさせておくべきだと感じました。自分が何を見つけたいのかをはっきりさせておかなくは、学外実習は受け身のままで終わってしまいます。初めて行く場所で自分から動く、というのは難しいことだと思いますが、今回の経験を通して私は、学びたいことの為に食欲に動いてこそこの学外実習である、と感じました。緊張すると思いますが、頑張ってください。とても充実した、為になる二日間になると思います。

人と関わるということ

新井 優花（人文社会科学部現代社会学科 2年）

1. 参加の動機

私が市役所での学外実習に参加した動機には、自分の将来の可能性を広げるといのが挙げられます。私は将来の道が定まっておらず、「大学4年で卒業して就職したい」という漠然としたことしか決まっていません。そこで、将来が漠然としているからこそ、公務員・民間企業問わず学外実習に参加することで「公務員」・「民間企業」それぞれに対する先入観なしに、自分のやりたいことやなりたい自分を見つけることが出来ると考えました。様々な職業を体験することは、将来どんな職業に就いた時でも必ず自分にとってプラスの経験になりますし、自分の勝手な先入観で将来の可能性を狭めたくないのです。以上のような思いから、今回の学外実習への参加を決めました。



図：水戸市の概要の説明を受ける様子

2. 派遣先の概要と業務内容

今回受け入れてくださった水戸市市民生活課は、市民活動・消費生活係、協働係、施設係に分かれており、市民同士のコミュニティや市民の消費生活上の悩みのサポートや公共施設の管理等、市民との密接なつながりが重要となる課です。中でも協働係ではそれが顕著で、ボランティア・NPO団体の活動を支援する事業の企画も行っています。

学外実習では、消費生活センターが配布する資料の修正や公共施設修繕の優先順位付けなどを行いました。また、チームで取り組んでいるこみっとフェスティバルについても話し合い、ボランティア団体へ直接電話をかけて参加をご提案しました。

3. 学外実習を通して修得したこと

私は今回、「時には人と一緒に動き、時には人をサポートすることの大変さ」を痛感しました。これまでの経験上、人と何かすることには楽しさの反面で苦労もあることは理解していたつもりでしたが、想像していたよりも難しいものでした。例えば、公共施設修繕の優先順位付けでは市民から寄せられた修繕依頼書を見て、危険度等を審査し修繕が必要か否かを判断するのですが、どれも修繕したくなる内容で順位付けに悩みました。ただ市民の要望に応えるだけでなく、必要に応じて要望を却下することも求められることを知り、感情に流されずに冷静な判断を下す難しさを感じました。また、ボランティア団体へ電話をかける際には、運営側の私たちには分かりきったことでも、参加を検討する団体には伝わっていない可能性もあるということで、丁寧かつ詳細な説明が求められました。どれだけ相手の立場に立って物事を考えられるかが重要であり、自分が詳しく知っている事柄について相手分かるように伝えるのは大変な作業だと実感しました。このように人と何かすることには楽しさと大変さがあるというのを改めて感じたうえで、だからこそやりがいがあるのだと私は考えます。実際、先述したボランティア団体への電話に関しては、その後多くの団体から反響があったと伺い、努力が報われて嬉しかったのを覚えています。今回のインターンで学んだ「冷静な判断を下すことや相手の立場に立つことの大切さ」というのは、普段のチームでの活動においても当てはまることです。常に意識しながら、活動に取り組んでいきたいです。

4. 後輩へのアドバイス

インターンは興味のある職業だけ参加しようと考えていませんか。私は、興味のあるなしに関わらず様々なインターンに参加することを強くお勧めします。参加したら何かが変わるかもしれません。とにかくチャレンジしなければ何も始まりません。自分の未知なる可能性を信じて、一歩踏み出してみてください。

クリエイティブな仕事を追求すること

森田 壽一（人文社会科学部現代社会学科 2年）

1. 参加の動機

私は受講している「プロジェクト演習」の授業において「こみっとフェスティバル」というNPOやボランティア団体による活動発表の催しの企画・運営に携わるチームに参加しています。その運営を行っている水戸市役所市民生活課様が普段どのようなお仕事をしているか知ることで新たな発見や今後の活動に活かすことができるのではないかと考え、学外実習に参加しました。新型コロナウイルスが世界中で流行している中で市役所ではどのような仕事をしているのか、どのように対処していくのかということにも興味を持ち、参加したいという思いに至りました。



図：企画書を作成中

2. 派遣先の概要と業務内容

今回お世話になった水戸市役所市民生活課は水戸市役所市民協働部の中の1つの課であり、市民活動・消費生活係、協働係、施設係の3つの係に分かれています。主な業務としては、NPOやボランティア団体などの活動をサポートしたり推進したり、消費生活センターと連携して消費生活の問題を解決したりしています。

学外実習では、主に「こみっとフェスティバル」の企画の検討や、エクセルとパワーポイントを使用し、後日行われた分科会に向けての企画書を作成しました。また市民センターの設備に問題がある際に工事がどうか審査をするといった事務作業や広報の訂正シールを貼るといった事務作業もしました。

3. 学外実習を通して修得したこと

私が学外実習を通して修得したことは主に2つあります。1つ目は「常に考えて動かなければならない」ということです。それは水戸市のため、水戸市民の生活をよりよくするために必須のことです。しかしながら実際に市民生活課の方々の仕事風景を見て実に熱心に、一生懸命働いていらっしゃるということが身に染みて分かりました。どんなことであっても期日を守り、真剣に考えておられた姿は、まさに社会人のそして公務員のあるべき姿であると思いました。

2つ目は「市役所の仕事はクリエイティブである」ということです。この“クリエイティブ”という言葉は、お世話になった協働係の橋本隆志様が仰っていた言葉です。市役所の仕事というと、どうしても窓口業務や事務作業ばかりという偏見を持っている人が多いと思いますが、実はそうとも限らないのです。今回は感染症対策のために実施できませんでしたが、市役所の外に出て作業したり、こみっとフェスティバルに関連してボランティア団体の方々と打ち合わせをしたりなど、一日中机に座っているということはない、ということです。また事務作業にしても新しい視点から考えたり、意見を述べたりなど、想像力が非常に必要になってくる仕事であると思いました。このような点から、市役所の仕事は大変クリエイティブであるということがよく理解できました。市役所の仕事内容や水戸市や市民に対する熱い思いを感じ取ることができ、大変有意義になりました。

4. 後輩へのアドバイス

「市役所の仕事は他の仕事に比べて楽そうだ」と考えている人こそ、ぜひ水戸市役所市民生活課様での学外実習をしてほしいです。どのような仕事でも人のために、地域のためにということが必要であると思いますが、公務員ほど、より真剣に向き合っていかなければなりません。もちろん難しい仕事もしなければなりません。市民の幸せを守るためには必要なのかもしれません。体験した2日間はあっという間でしたが、その達成感は今後の皆さんの糧にもなります。クリエイティブで充実した学外実習をしたいのであれば、ぜひ参加してほしいです。

市役所職員としての心持

佐藤 宏紀（人文社会科学部人間文化学科 3年）

1. 参加の動機

私は市役所や県庁などの地方公務員として茨城県内で就職したいという思いがあり、水戸市役所での活動を通して地方公務員がどういうものなのかを知りたいというのと、こみっとフェスティバルの運営に携わる中でこみっとフェスティバルや水戸市についてもっと知っておくべきだなと思ったという2つの理由より今回の学外実習に参加いたしました。

2. 派遣先の概要と業務内容

派遣先の水戸市役所市民生活課は市民との協働の推進など、文字通り市民の生活の手助けをする窓口です。学外実習は2日間行われましたが、1日目は午前中に水戸市の概要を学んだほか、市民生活課の仕事を経験させていただき、午後にはこみっとフェスティバルチームで作るパンフレットのデザイン作りに励みました。2日目はパンフレットの作成を1日目に引き続き行ったり、大学生向けに行うアンケートの作成を行ったりしました。以上のことが学外実習のメインの活動だったのですが、消費生活センターで話を聞くほか過去に出展していただいたボランティア団体の方々に電話やメールもしました。



図：水戸市についての概要を聴いている様子

3. 学外実習を通して修得したこと

公務員になりたいとは思っていましたが、具体的に何をするかをあまり理解しておらず、漠然としたまま学外実習に参加してしまいました。そんな中で水戸市役所の職員の皆さんは私たちに対して水戸市についてや市の仕事についてや職員の待遇など、ありとあらゆることを教えてくださいました。

特に印象に残ったのは、仕事に対する心持についてです。今回、職員のお一人が、世の中にはお金などをモチベーションに仕事をしている人もいるけれど、自分は公務員として市民の皆さんのために全力を尽くしたい、という趣旨のことをおっしゃっていました。その話を聞いた時に自分も福利厚生良さなどに惹かれて安易に公務員志望とか言っていたのが少し恥ずかしくなりました。市民の税金から成り立っているのが公務員なので、その奉仕の心は忘れてはならないし、自分も市民の方々が少しでも過ごしやすい生活を送るための手助けをできるような公務員になりたいと思いました。

業務の面でも、社会に出るうえで必要となる電話やメールのマナーを懇切丁寧に教えていただいたおかげである程度は身についたと思います。そういったことを体験していく中で、学外実習担当の職員の方だけでなく、ほかの職員の方々からも多種多様なアドバイスをいただきました。たとえ自分の管轄外であろうと困っている人に手を差し伸べるのが公務員なのだろうなどこの時思いました。

4. 後輩へのアドバイス

民間企業と比べて市役所などの公官庁はなかなか実態がつかみにくいと思います。学外実習にもたくさん種類がありますが、この学外実習は市役所について、また、市役所で働く意義についてを知ることができる貴重な体験だと思います。私自身もこの学外実習に参加するまでは、まだふわっとした印象しか抱いていませんでしたが、官公庁というのはこういうものなのだ、というのがつかめました。公務員になりたい方、そうでなくても人のためになるような仕事がしたい方にはこの学外実習はおすすめです。勇気を出して参加してみたいかがでしょうか。

学外実習を通して学んだこと

大山 翼（人文社会科学部現代社会学科 2年）

1. 参加の動機

私は将来どういった職業に就きたいかという明確な目標がありませんでした。プロジェクト演習では人文社会科学部の多くの方が就職する公務員という業種を、その授業の一環で体験できるということを知りました。そのため、実際に公務員として働くこととはどういうことなのか、またどういったことが必要になるのかを理解できるのではと考え、学外実習に参加することを決めました。



図:こみフェス企画書を作成する様子

2. 派遣先の概要と業務内容

初日はまず初めに、水戸市市民生活課協働係係長橋本隆志様から水戸市および水戸市政についての説明を受けました。さらに、公務員として働くということ、また市民生活課として市民の方々と「協働」して働くという仕事の意義についてお話を伺いました。さらに、市民生活課に届いている施設の修繕依頼を見て、実際に修繕が必要であるかを判断するという仕事を体験しました。その後、事前に作成していたこみっとフェスティバルで行う企画書を市民生活課のお二人に見ていただきながら、不足している事項等をご指摘いただきました。午後には、水戸市役所 2階の消費者生活センターでお話を伺った後、消費生活センターの広報冊子のシール貼りのお手伝いや水戸市総合計画の中から改善点や具体的な新たな施策の話し合いを行いました。

2日目は、翌日に控えていたこみっとフェスティバル実行委員会に私たちが企画提案を行えるように企画書やプレゼン資料の作成を行いました。

3. 学外実習を通して修得したこと

私が学外実習で修得したことは主に2つあります。1つ目は「理由に基づいた仕事を行う」ということです。市民生活課の中で行った業務の一つとして、市内の市民センターなどの公共施設の修繕依頼の評価を行いました。その際に、ただ単純に依頼書の内容だけで評価を行うのではなく、その土地がだれのものであるかなどの裏付けを行い、判断を行うことが重要であることを学びました。これは市役所の仕事にかかわらず、将来どの仕事でも通じることであるように感じます。

2つ目は「どのように市民の方々に働きかけるか」ということです。学外実習を行った協働係では、市民の方々を巻き込んで、行政と市民が力を合わせる「協働」が行われることを目的に仕事を行っている部署です。その目的達成の一つとして、現在私たちが参加しているこみっとフェスティバルのようなイベントの開催を行っていることを知りました。また、この「協働」というあり方は、ニーズが多様化する現在、行政だけでは対応しきれないものであり、今後私たちが働く際にも必要になってくる考えであることも学びました。その上で、実際に市民の方々に参加してもらうにはどのように働きかけるべきかを多面的な見方から判断する重要性を知ることができました。

以上2点が学外実習を通して、私が修得したことです。

4. 後輩へのアドバイス

私は将来どのような職業に就きたいのかわからない人にこそ、学外実習に参加するべきだと考えます。具体的な職種がわからない人は、ただ漠然と、仕事内容や給料などの目に見える情報から判断してしまうと思います。しかしながら、学外実習を行うことで、言葉では伝えきれない実際の職場の雰囲気が肌で伝わります。このような雰囲気というものは職業を決める際にも重要な、目に見えない情報であるとともに、実際に参加しなければわからないものです。そのため、積極的に学外実習に参加し、将来の自分の道を決める有意義な体験をしてほしいと思います。

市民の生活に寄り添う立場として求められるもの

佐藤 美理（人文社会科学部現代社会学科 2年）

1. 参加の動機

私が水戸市役所市民生活課で学外実習を行った理由は、進路選択の前に公務員の仕事を実際に体験したかったからです。私は将来公務員になるのか、それとも民間企業に勤めるのか、現時点で決めていません。そもそも公務員とは国の奉仕者と言われますが、どんな業務があつてどのように国民または市民の生活に関わっているのか、自分自身よくわからないことが多いです。そこで公務員の業務を体験することで公務員について理解し、自分に向いているのかどうかなどの参考にもするために市民生活課での学外実習に参加しました。



図:こみフェスの企画書等を作成

2. 派遣先の概要と業務内容

私が学外実習を行った水戸市役所市民生活課は市民活動・消費係、施設係、協働係に分かれて業務を行っています。初日は市民生活課の方々にご挨拶した後、協働係長の橋本隆志様からご説明を受け水戸市の概要について学びました。そして3つの係それぞれの業務をいくつか体験しました。2日目は主に協働係の業務の、こみっとフェスティバルの企画の内容を詰めたり、こみっとフェスティバル実行委員会に向けた資料作成を行いました。

3. 学外実習を通して修得したこと

私が水戸市役所での学外実習で学んだこととして、1つ目は公務員とはどのような立場であるべきなのか、ということです。特に市役所は市民と行政の間に立ち、市民の生活に寄り添う役目を果たすことが求められているように感じました。しかし市民からの要望をすべて受け入れるとなると膨大になり、要望に応えることが困難になってしまいます。できるだけ多くの要望に応えるためには優先すべきものはどれかを正確に判断し、物事を多くの視点から見る必要があると感じました。

2つ目は新しいアイデアを考え続けることが大事だということです。学外実習に参加する前は公務員とはあらかじめ決められた業務をこなすというイメージが強かったのですが、実際はそれだけではなく、これから水戸市を市民にとってもっとよい地域にするためにはどうするか考え、その際には新しい発想が求められます。その発想を実現するためには、今までの反省をふまえて既存のものを参考にしつつ、慎重に構成を考えていく必要があります。ただ思いつくだけなら簡単ですが、実現するには将来継続できるものなのか、平等性から多くの人に利益が与えられるものなのかなど、あらゆる点から考察し、より実現性が高いものにしなければならないということを学びました。

また市民生活課の業務とは直接には関係しませんが、学外実習を通して話し上手になりたいと思いました。目上の方とお話したり、意見を求められたりする機会が多くあり、その際に不自然な敬語を使ったり、話がまとまらず、話す力の未熟さを痛感したため、これから努力していきたいです。

4. 後輩へのアドバイス

学外実習というと3年生から考えるものと思っている人が多いと思いますが、正直学外実習に学年や時期は関係ないと思います。今回プロジェクト演習の授業の一貫として2年生で参加しましたが、実際早かったとは思いませんでした。むしろこの時期に参加したことで公務員について、資料だけではわからない雰囲気なども体感することができましたし、これが早期に進路選択を考えるきっかけにもなりました。学外実習は就活の面だけでなく自分自身にとって多くのことを学べて成長することができるいい経験になるので、機会があるなら躊躇せずに参加してみてほしいということを伝えたいです。

6：個人レポート

私の1年間を俯瞰的にみる

茨城大学3年 池田 拓野

本稿では、この1年間を振り返り、何が私にとっての「学び」となったのかを知りたい。特殊な事情、(私にとっては)特殊な立ち位置であったということで、それらがどう作用してきたのかを知りたい機会になることを願う。

今年度はチームの取締役、つまり「リーダー」という役に回ることとなった。後述する「コロナ禍」だからという側面も合わさり、かなり特殊な環境でのリーダーになったのだと思う。

私は、いわゆる「上に立つ人」になるという経験がない。特に、去年も別にチームとして参加したということで、そのリーダーの姿を見ている。そこから、この授業に順応するには、メールマナーや質問への対応、そしてメンバーとのコミュニケーションを行うためのスキルを一層養わなくてはならない、ということ、今年度チームの発足後にひしひしと感じていた。それはプレッシャーとなっていた。運動部ならではのリーダーの姿というものも当然見ていた。つまり、プレッシャーを跳ね返す、またはそれに負けていない姿を見せなくてはならないという意識があった。この意識を持つことは、今となってよいことであつたのだろうか考える。「現代的ではない」という風に見られる可能性ももちろんある。

オンライン上で会議を行った時期は長く、特に前期はすべての会議でこの様であった。ハウリングやネット回線不良を起さない対策として、リーダー以外のマイクは基本オフ、さらにカメラを使わないということが通常となっていた。そのため、私1人で話す機会が多く、コミュニケーションが一方通行である機会が多かった。何かしら良い方法だつてあつただろう。この点はかなり反省しなくてはならないことの一つである。

反省しなくてはならないことのもう1点として、小チーム制を取っていたこのチームで、どうしても互いのチーム間での情報共有がうまくいかない場面が多かった。あるメンバーよりそのことについての苦言を呈されたことがある。リーダーとして、その情報共有の機会の場を創出できなかったのは、いかなるものであろうか。

リーダーとして学んだことは、「コミュニケーションを取る、または取らせる」ことがいかに大事か、ということである。情報共有の場として、もちろん人間関係を円滑にする等々の作用があると改めて感じた。

「コロナ禍」ということで、今年度は事情が特殊であった。つまり、「課題提案者様から頂いた課題」に取り組むも、かなりの制限を受けた中で事を進めなくてはならなかった。初めてのことから、学生はもちろん、提案者様方も何をすれば良いのかわからなかったと思われる。そんな中、2年生のメンバーから出た「VR (virtual reality 仮想現実) 企画」や「クイズラリー企画」は、その滞っていた状況を、アクセルを踏み込んだかのように、企画班での議論の主軸として、学生の活動を活性化させたと思う。

最初はその2つの企画に対しては、懐疑的であった。特にVRによる「ボランティアを学ぶ場の創出」は全く想像できなかった。しかし、提案者様方にその企画についての内容が載った議事録を送信した際、想像以上に興味を示して下さった。印象的であったことは、「こういう突飛に思われる企画でも興味を示し、学生の活動の主軸として、さらにこみっとフェスティバル実行委員会の一員の活動の主軸として、組み込むことを容認して下さい」ということである。さらに、オンライン開催が決まった後の実行委員会にて、「学生の方には、こういった形でもよいから組み立てていった企画を遂行してほしい」ということを、実行委員会の委員長よりお話があった。つまり、「学生」、「若者」としての視点が求められていた、ということを実感した、学んだということである。

「何をすれば良いのかわからない」だからこそ、新たな発想によるアイデアを提供し、新たなイベントの基盤を創出することが私たち学生に求められているもののひとつである。来年度はメンターとしてこの授業に参加する。このことを今後の学生たちにぜひ知ってほしいと思う。

正直不安でしかなかったこの1年間を何とかして過ごせたのも、課題提案者の水戸市市民生活課協働係の方々、先生方、そして学生のメンバーの存在があったからである。本レポートにて少なからず悲観的な感想が混ざってしまったことを許してほしい。今後、水戸の市民活動団体の皆様、そしてこみっとフェスティバルが一層発展していくことを切に願う。最後となりましたが、水戸市市民生活課協働係、橋本隆志様、尾崎志野様、こみっとフェスティバル実行委員会の皆様、そして私たちの活動に関わって下さったすべての方々に御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

本プロジェクトを通して得られたもの

～コロナ禍だからこそ学べたもの～

茨城大学 2年 木村 拓未

1. 参加の動機

私は、新型コロナウイルスの感染が拡大しなければ、この授業を取ろうとは考えていなかった。

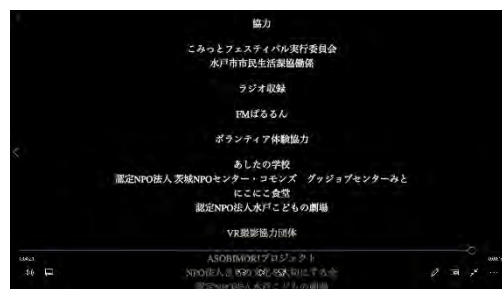
では、なぜ受けることにしたのか。それは、新型コロナウイルスの感染が拡大し、予定していた留学が中止になってしまい、何か喪失感があったことと、社会人基礎力を養うことができるということを知ったことにより、自分自身を成長させられる良い機会ではないかと考えたからである。授業に参加しようと決断してから水戸市市民生活課協働係様からの課題提案を選んだのは、自分が茨城県外に住んでおり、大学のある茨城県や水戸市について知らないことが多いと考えたため、もっと水戸について知りたい、関わりたいと考えたことから、この課題提案に参加した。

2. コロナ禍での活動

チームのメンバーとの顔合わせはオンラインであり、10月以降に空き教室にて対面でミーティングをするまで一度も直接会ったことはなかった。そのため、オンラインで顔を見ることなくミーティングを行っていたため、チームメンバーのことを知るのに時間を要した。また、対面での講義が再開されてからはオンラインと対面の折衷型のミーティングの形態をとった。そこで学んだのは、実際に対面で、水戸市市民生活課協働係様と現場で会っているメンバーとオンライン参加が基本で、こみっとフェスティバル実行委員会にもオンライン参加が可能となる11月18日まで一切参加できなかった自分との間では、一つのことに対する認識が大きく違ったという経験をしたことである。自分で実行委員会の資料に目を通し、どんなことが話し合われたのかということを確認したり、チームメンバーからその日の状況について個別に聞いたりしていたにもかかわらずそのようなことが起こったことに衝撃を受けた。このことから、人づてに聞くだけでは情報を正確に受け取れないことがあることを学び、まさしく「百聞は一見にしかず」という言葉通りの経験だと思った。だから、将来テレワークが進んで、在宅勤務が主流になるような時代になっても、ときには直接話すことで情報を入手することも大切なのだと考えた。しかし、一方で、チームメンバーが現場で悩んでいることをミーティングで話している際に、私は第三者のような視点でその現状というものを捉えることができたから、少し違った視点から意見が言えた。これにより、メンバーと議論を重ね、それを深めていくことができ、よりよい企画を立てることができたと考える。これについてだが、現場の活動に一切参加できない私を受け入れ、意見を尊重してくれたチームメンバーの協力なくして、これは実現できなかったと思う。これがコロナ禍だからこそ学べたことだと考える。

3. 自分の役割を全うするなかで学んだこと

私は、茨城県外に住んでいるため、直接現場に行き何かがするということができず、学外活動はすべてチームメンバーにお願いしていたのだが、そんな中、自分にできることをやろうと考え、チームメンバーに記入してもらったエクセルのシートを作ったり、こみっとフェスティバルがオンライン開催へと変更になり、当日Zoomを使うことになったためZoomでの会議を開くことに貢献したりした。また、最後には、茨城大学のチームとして、イベントで発表するための写真スライドショーの作成という重要な仕事も担当した。この仕事を担当できたことにより、今までチームがどんなことをしてきたのかと振り返ることができた。特に、エンドロールを作成した際、関わった団体や人の数はこんなにも多かったのだと実感したことから、私たちが提案した企画は、それが実現していくまでのプロセスの中で、水戸市市民生活課協働係橋本隆志様、尾崎志野様をはじめ、実行委員会の委員の皆様など様々な人がいろいろな場面で関わり、支えてくれたこと、賛同してくれたこと、指導してくれたこと、こういったつながりの中で実現したものだという事を一番学んだ。つまり、多くの人々が協力したからこそ今年度のプロジェクト演習の授業を終えることができたということだ。故に、今後も人と人のつながりを大切にしていこうと改めて決意した。最後に、今までご協力いただいた全ての方々へ篤く御礼申し上げます。



図：作成したエンドロール

成長

出会い、繋がり、輪となること

茨城大学 2年 君和田 彩歩

本レポート執筆中である2月下旬、今年度のコミットフェスティバルを無事に終え、広報担当としてチーム結成当初から作成していたパンフレットが手元に届いた。連日のミーティング、度重なる修正作業、突如決まったフェスティバル会場中止に伴うオンライン開催。授業履修当初は想像もできない、一授業の位置づけでは収まり切れないほどの時間をチーム活動に費やしてきた。しかし、私が今思うことは「こみフェスティチームとして1年間活動出来て本当に良かった」の一言だ。切磋琢磨できる仲間と出会え、活動過程で自分自身も多くの社会人基礎力を身に付け成長を実感することができた。以下、「達成目標ルーブリック」で当初掲げた3つの社会人基礎力とその目標をもとに振り返る。

一つ目は「自分の意見をわかりやすく伝える力」だ。私はこの力を長所とし、今年度までに「伝えたい事柄をわかりやすく論理的に伝えることができる、相手の立場を意識して伝えることができる」という目標を立てた。活動を振り返ると、目標は達成したと考えている。私は小チームのリーダーとしての立場から目標達成に向けて発信力の向上を試みた。実際に意識したのが「事前準備と目的の明確化」だ。広報活動の一環として行ったパンフレット作成は、各所に到達目標や締め切りの期日が設けられており、毎ミーティングの議題もこれらを考慮の上で設定する必要があるがあった。「何故この時期にこの議題を立てる必要があるか」を事前準備の段階で明らかにし、「今やっている作業の目的は何か」をメンバーと整理することで、小チーム全体だけでなく個々が行う作業目的が明確化され、皆が主体的に動くきっかけになったと感じている。

二つ目は「意見の違いや立場の違いを理解する力」だ。私はこの力を短所とし、今年度までに「寛容性を身に付けて意見や立場の違いを理解する」という目標を立て克服を試みた。活動を振り返ると、目標はおおよそ達成したと考えている。私はチーム結成当初の自分自身を柔軟性に欠け、遭遇した「違い」を受け入れられずにいたと評価している。例えば、チームメンバーと意見が異なるときの対応や、指導者である先生方や課題提案者である市役所の方々といった立場の異なる方との連絡の対応だ。こうした対応にその場で解決しないこと、周りに働きかけて助けをを求めることを学んだことで目標達成につながったと考える。これらの学びに共通するのは、自分自身のみを基準としないということだ。自分がその場で対応できないことを理由に否定的な態度をとったりあきらめたりするのではなく、検討し、チーム全体の課題として働きかけられることで解決策が見える。また、チームへの働きかけをメンバーが相互に行える関係になればチーム内の意思疎通が取れ、意見の違いに対する理解も深められる。私たちのチームは10名と大所帯である以上、意見や生活スタイル、忙しさ等、違いは様々に生じた。それでも、密に連絡を取りメンバー皆が相互に働きかけを行ったことにより、個人レベルだけでなくチーム全体として「違い」を理解し対応できていたと感じる。

三つ目は「情報収集力」だ。私はこの力を短所とし、今年度までに「身の回りの情報に敏感になる、今まで積極的な活用をしなかった媒体で情報収集ができるようになる」という目標を立て克服を試みた。活動を振り返ると、目標は達成したと考えている。実際に今年度の活動で目標達成に向けて意識したことと実践事項は、「人から得られる情報」への意識と「メモの習慣化」だ。私はこれまで、マスメディアやSNS等の情報収集源をいかに活用し取り入れていくかという点を重視する反面、人から得られる情報の重要性をさほど感じていなかった。しかしながら、コロナ禍によるオンライン化という異例の授業体制が、「人から得られる情報」の重要性を意識するきっかけとなった。例えば平時のミーティング活動は、後期に対面実施が増えたものの、大半はオンライン上での活動だった。オンラインミーティングは声でのやり取りを主とするため、発言者の発言内容を聞き取り理解することや、その意図を考えることを対面時以上に求められる。また、私はチームの副リーダー、小チームのリーダーとして皆の意見をくみ取り話題を展開させることが求められる立場でもあった。こうした状況下・役割上、メンバーから得られる情報は情報収集において最も重要であり、収集ツールとしてメモが欠かせないものになった。Teamsで会議を開きながら、Wordでメモを取る。これは、今年度になってからの私の習慣だ。良い習慣は、長所として生かせる要素でもある。新たな自分自身の長所として、力を発揮できるようにしたい。

活動で得られたものは個人の成長だけではない。支えてくださった先生方や課題提案者である市民生活課協働係様、そしてチームメンバーの皆、こうした素敵な出会いが繋がり、輪となる過程での成長であった。関わってくださった皆様に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

活動を通して学んだこと

茨城大学 2年 飯泉 朋香

私は、今年度水戸市主催のイベントこみっとフェスティバルの運営に実行委員会の一員として活動をした。

私は、広報を担当するチームになり、SNSの更新や、イベントパンフレットの制作を行った。一番苦勞をしたのは、パンフレット制作である。どういったものだったら若者が見て面白いと思ってくれるのか、自分が若い世代だからと言って泉のように案があふれ出てくるわけではない。そこでパンフレットに掲載する情報の一部は、茨城大学生にアンケートを取り、それを反映することにした。

その後の打ち込み作業では情報の洩れがあったり、団体によって情報量が異なるため、全体のレイアウトを整えるのに苦勞をしたりし、一から作ることの大変さを実感した。水戸市市民生活課協働係の橋本様、尾崎様にはメールにてご指摘をいただき、メールの返し方はここで多くの経験を積めたと感じている。

また、月一回の実行委員会(図)では、パンフレット作成案を提出し、承認をいただいた。自分たちの案に決して少なくはない予算が下りる。今まで以上に身の引き締まった日でもあった。多くの年上の方が見ている中で、公的な場でのプレゼンは、ほぼ同い年が集まっている大学の授業内でのプレゼンとは異なる緊張感があり、堂々と話すこと、質問にも的確に答えるという面で自分の力不足を感じた。しかし、その後の実行委員会でも、パンフレット作成の進捗を報告する機会があり、そこでは、指摘された課題や質問に対しても身構えることなく、代替案の提案、的確な受け答えなどをすること、不安を感じさせない態度で臨むことができた実感している。この場で学んだのは、すぐに誰かを頼りにするのではなく、自分の力で解決しようとする主体性、更に質問や批判に対しても堂々と受け答えをする話す力だ。そして、最も自分の中で重要な意味を占めたと感じるのが週一回のこみっフェスチームでの会議。最初は名前も顔も知らない人ばかりでなかなか自身の意見を言うことが出来ず Teamsでの会議では、マイクをミュートにしたまま会議が終わってしまうということもあった。ただ人の話を聞くだけで、唯一の発言と言え、「賛成です」といった一言のみであった。こういった自身の態度を振り返ると、チームに協力していたとは到底言い難い。しかし、チームが動き出して二カ月ほどたった頃、ようやく自身の意見を発信することに抵抗を感じなくなり、先に発言した人の意見に賛成する形としての意見はもちろんだが、それに反対する意見も出せるようになった。反対の意見もチームの皆は真剣に聞いてくれ、それを取り入れた新たな案を考えることもあった。自身の発信した意見が認められて初めて、自分もチームとして貢献できているように感じた。

最後に、2月21日に迎えたこみっとフェスティバル当日。オンラインで開催されることとなり、内容の変更など、想定外のことが多く起きたが、オンライン開催と決まっからは気持ちを切り替え、チーム内の会議において当日の流れのリハーサルを行うなどし、当日に向けての準備を行ってきた。私は当日、SNSでイベントの様子を発信する担当であったが、当日に投稿したものに「38いいね」がつき、これはこれまでの投稿なかでは最高記録。これにより、多くの人がSNSをとおして私たちの活動を見守ってきてくださったのだと実感することができた。私自身、非常に達成感のあるイベントになったと感じており、参加して下さった市民活動団体さんからも「来年も参加したい」といった言葉をいただいたことから、参加して下さった方々にも意味のあるイベントになれたのではないかとも思う。

このプロジェクト演習は想像以上に大変なものであった。しかし苦勞よりも充実感、達成感の勝る授業であり、今年度1年間は他人に誇れるものとなった。自分が行った実績(パンフレット作成、SNS、ラジオ出演、ボランティア体験、学生へのアンケート等)はもちろんだが、チームに関しても胸を張って一番結束力のあるチームだということができる。私がこの活動を通して身に付けたのは、プレゼンテーション能力、発信力、社会人としての基本的な知識が挙げられるが、そういった社会人基礎力以外にも、最高の仲間を手に入れることが出来た。私にとってこの活動は自分の基礎力を上げる以外にも大きな意味があったと言える。

最後になりましたが、この一年間たくさんのご指導をいただいた、水戸市役所市民生活課協働係橋本様、尾崎様、その他職員の方々、こみっとフェスティバル実行委員会の方々、ボランティア体験にてお世話になった市民活動団体の皆様、報告会などにおいてご指摘をくださった赤岩先生、渡辺先生をはじめとする先生方に感謝の意を表します。本当にありがとうございました。



図：実行委員会

思考力の壁を越えて

茨城大学 2年 新井 優花

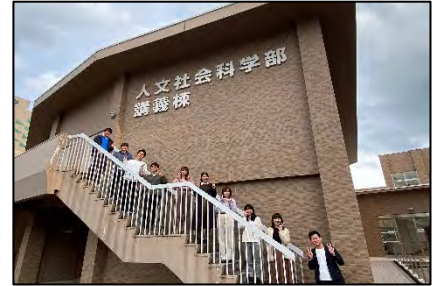
まさに、自分の「思考力」と向き合った一年間であった。

私がプロジェクト演習を受講したのには「思考力をつけたい」という大きな理由があった。以前から私はありきたりな考察や手段しか思いつかず、斬新な意見を提案する友人たちに憧れを抱いていた。大学に入学するとレポートやグループワークが増え、その思いはより一層強くなっていった。そこでプロジェクト演習の受講を通して、柔軟な思考力の獲得を目指したのである。

チーム編成の結果、私はこみっとフェスティバルの広報を担当するチームに所属する運びとなり、パンフレットを作成することとなった。最初に自分で考えた案は前年度までのチームで作成されたパンフレットと酷似していて、新しいアイデアが出せないことが悔しかった。しかし、そんな時にあるメンバーの「雑誌とかも参考になるのではないか」という提案がきっかけとなり様々なアイデアが湧いてきたのである。それまでは自分の身の周りにあるものを活かそうという考え方がなく、私にとって新鮮かつ画期的な提案だった。そうしてメンバーの提案を基に作成したパンフレットを水戸市市民生活課協働係の橋本隆志様・尾崎志野様やこみっとフェスティバル実行委員の皆様にお見せし、ご意見を頂いた。また、同じくこみっとフェスティバルの企画を担当するメンバーからも意見を募ると、企画担当の視点からアドバイスがもらえ、パンフレットが抱える課題が明らかとなった。この課題というのは広報担当の視点からでは見えてこず、完全に盲点となっていた。私はこの時、様々な立場からの意見を聞くことの重要性を痛感した。そしてとうとう沢山のアイデアが詰まったパンフレットが完成したのである。

ところがパンフレット完成に喜ぶのも束の間、新型コロナウイルスの流行により本来予定されていたイオンモール水戸内原での対面開催ではなく Zoom を用いたオンライン開催へと変更となった。パンフレットには対面開催を前提とした内容も含まれており、オンライン開催に対応した内容への変更を余儀なくされる。限られたページ数に加え、パンフレット入稿まで時間がない中での変更だったため、「間に合わないのではないか」という不安も大きかった。しかし、チームで何度も話し合いを重ねて意見を出し合ううちにそんな不安も消えていった。「こみフェスチームならきっと大丈夫」、そう思えた。そうしてついに“オンライン開催版パンフレット”が完成した。この時の達成感は言葉では言い表せないものだった。とうとう迎えたこみっとフェスティバル当日ではこれまでの活動を通して築き上げてきたチームの一体感が遺憾なく発揮され、初めてのオンライン開催を無事に終えることができた。想定通りにいかなかったことも多かったが、これまでの開催方式にとらわれないこみっとフェスティバルの形として新たな一歩を踏み出す良い機会になったのではないだろうか。

私はこの一年で「柔軟な思考力というのは多くの人と関わり、様々な視点から物事を捉えることで身につくものである」という大きな学びを得た。私はこれまで自分の貧弱な思考力を自分の力だけで解決しようとしていた。しかし、それでは結局自分の視点からのみ物事を見ていて、一つのものの見方に基づいた思考しかできない。そうではなく、多くの人と関わる中で様々な視点に触れ、自分の視点はほんの一部であることを理解することが大切なのである。そして、周りの人々を信頼して様々な視点からの声を自分のアイデアに取り入れることで柔軟な思考力が身についていく。私は今回、このことを強く感じた。当初自分の思考力に悩んでいた私であったが、プロジェクト演習を終えた今では胸を張って「柔軟な思考ができる」と言える。ここまで自信をもって自分の成長を認められることはあまりないだろう。こうやって堂々と言えるのは、水戸市市民生活課協働係橋本様・尾崎様、こみっとフェスティバル実行委員の皆様をはじめ、これまで関わった皆様の支えがあったからだ。そして何より、いくつもの困難を共に乗り越えた広報担当の「こみ報」チームの仲間、企画・広報という垣根を越えて協力してくれた企画担当の「こみフェス企画班」の仲間がいてくれたからである。「こみフェスチーム」のこのメンバーでなければ、私はここまで成長できなかったであろう。このプロジェクト演習に際して出会った方々の力を借りて、自分を変えることができたのだ。この場を借りて、お世話になったすべての方に心から感謝の意を表したい。



図：こみフェスチーム集合写真

予測不可能こそ、自分を伸ばすチャンス

コロナが私たちに教えてくれたこと

茨城大学2年 森田 壽一

2020年は新型コロナウイルス感染症が世界中で蔓延した年として、歴史に残るであろう。そして私たちの「こみっとフェスティバル2021」もまた、「コロナ禍におけるボランティア活動を伝える場」として水戸市の歴史に残るイベントであると強く考えている。水戸に生まれ、水戸に育ち、水戸市の皆さんに貢献してあげたい、私はその一心でこの1年間、こみっとフェスティバルに尽くしてきた。

今年度のこみフェスチームは、なんと10人ものメンバーで構成されている。私は主に当日に行う企画・運営を担当するこみフェス企画班（以下企画班とする）に配属となった。企画班では2大目玉企画である、「VR（ヴァーチャル・リアリティ）企画」と「デジタル・クイズラリー企画」を立ち上げ、私は前者の「VR企画」を担当した。そもそもVRとは360°の见たいものが見られるという、画期的な映像サービスである。夏休みに、水戸市役所市民生活課において、学外実習を行った。VR体験とクイズラリーの企画を、月1回開催されている「こみっとフェスティバル実行委員会」で認めてもらうために、2日間かけて企画書を作成した。先にも述べたが、昨年はコロナ禍の1年であった。その中で活動ができていないが、多くの人に知ってもらいたいという声を耳にした。そこでVRの特徴を活かした「その場になくても、その場にいるような感覚でボランティア体験ができる」ということをコンセプトに、実行委員会の方々に強く訴えかけた。そして努力のかいがあって、無事実行委員会の皆さんに認めていただくことができた。その後、VRの撮影機材を調達していただき、計9団体の団体の選定や日程調整などを綿密に計画を立て、VR撮影とその編集をすることとなった。この時はまだその大変さに気づいてはいなかった。

はじめは実際に活動団体の方々や活動場所に行き、動画を撮影し、皆さんに見てもらい、保存・編集するという全団体同様の流れで考えていた。しかし当然のことではあるが、団体によって活動内容や人数が違い、また場所も屋外か屋内かによってまたその映像も変わってくる。それゆえに全9団体の映像を撮るのは頭と体を使う大変な作業だった。ただそのような中で一番嬉しかったのは、こみっとフェスティバルチームのメンバーをはじめ、水戸市役所市民生活課協働係の橋本隆志様、尾崎志野様も協力して下さり、支えてくださったことである。団体の活動の特色を活かすために、どのような点を意識して撮影するべきかを中心に多くのアドバイスをいただいた。そのおかげで自分で言うのもはばかれるが、最高のVR映像を作り上げることができた。

しかし現実には時に非情なものだ。12月下旬にかけて新型コロナウイルス感染症が再び猛威を振るいはじめ、1月7日には一都三県に緊急事態宣言が、そして茨城県にも独自の緊急事態宣言が発出されてしまったのである。これを受け、2021年こみっとフェスティバルはZoomによるオンライン開催を余儀なくされてしまった。

私は大変悔しい思いに駆られながらも、オンラインでどのようなことができるか必死になって考えた。そして動画共有サイトYouTubeに一部のVR動画をアップロードしていただき、さらにこみっとフェスティバルのパンフレットにも掲載していただいた。また市民生活課様の方から企画班が運営をする側となって、サポート役も担当した。そしてZoomのブレイクアウトルームでVR動画の紹介をしようと考えていたが、思いのほか多くの団体様から学生ボランティアの案内やこのこみっとフェスティバルの学生主体の運営についてのお褒めの言葉などをいただき、予定通りには進まなかった。しかし、このブレイクアウトルームでの経験は良くも悪くも大変貴重なものとなった。市民活動団体の方々の人材不足や高齢化が進み、若く、アクティブな学生を切に求めている声を聞くことができた。こみっとフェスティバルは成功に終わり、さらにチームの絆を深められたと思うことができたと同時に、今後、こみっとフェスティバルにかかわらず親身に市民活動団体の想いにしっかりと耳を傾けたいという気持ちも強まった。

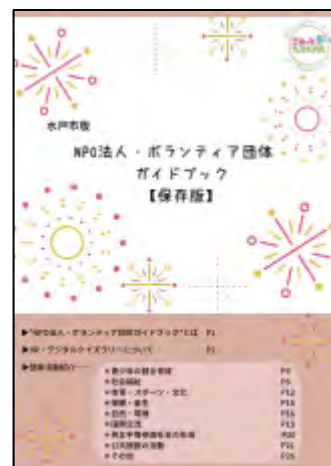
「2020年は災難な1年であった」と誰もが言うであろう。しかし私は多くのことを学ぶことができたとはっきり言うことができる。学校で授業ができて、気軽に外出できることのありがたさ、人と触れ合うことのできる嬉しさ、コロナは今一度私たちに「当たり前のことがどれほどありがたいことなのか」ということを教えてくれたのであろう。コロナとともに生きてきた2020年、関わってきた全ての人々に感謝をしたい。そしてこの1年間の学びを次の活動に活かし、より良い社会を共創していくために尽力していきたい。

総まとめとしてのこみっとフェスティバルチーム

茨城大学 3年 佐藤 宏紀

私は茨城大学こみっとフェスティバルチームに参加した。理由としては、地域志向教育プログラムという茨城大学が提供する地域についてより深く・より実践的に学ぶプログラムの総まとめとして、また、公務員志望の人間として水戸市役所の職員さんがどのような仕事をしているのかの一端を学びたいからというもの

が挙げられる。
去年からこの授業に参加していて精力的に活動していたリーダー、そして私と同じように今年初挑戦で右も左もわからなかったにもかかわらず積極的に発言をしていた2年生のみなさんなど、できる仲間たちに恵まれていたと思う。そのような仲間たちがいたおかげで個人の達成目標として挙げていた「目的を設定し確実に行動する力」は養われたのではないかと思われる。わがチームではチーム全体、また、小チームごとに毎週ミーティングを行い、そこで毎回ではないが課題ややるべきことが出てきた。2月に行われるこみっとフェスティバルを成功させるためにその課題をクリアしていったのだが、具体的には私は広報担当としてSNSの運営やパンフレット作成に取り組んだ。特にパンフレットの作成に関しては初めてのことであったのでわからないことだらけだったが、同じ広報担当としてパンフレットに携わった広報担当の皆さんとともにレイアウトや色、書式などを色々試行錯誤していった結果、企業が作るパンフレットと遜色ないものが作れたのではないかと思う(図)。SNSに関してもいつの時期に何を



図：出来上がったパンフレット

投稿したらよいかを広報担当の間で定期的話し合い、その内容に従って投稿をしていった。外部や教職員との連絡をこまめにとってくれるリーダーや少しでも内容を良くしようと頭を働かせる2年生のみなさんがいなかったら、私は低い完成度の物を作ってしまったかもしれないし、精力的にSNSを更新しようとも思わなかったかもしれない。そういう意味ではチームメンバーに感謝している。

一方で、自分の弱さが出てしまったところもある。私は個人の達成目標として「相手の意見を丁寧に聴く力」も挙げていたのだが、こちらはあまり達成できなかったのではないかと感じている。このコロナ禍の影響もありなかなか対面でミーティングをする機会に恵まれなかったのが原因の一つであると考えている。というのも、オンラインでMicrosoftのTeamsというソフトを用いて前述したミーティングを行っていたのだが、オンラインということもあり顔をあまり見せずに音声中心でミーティングを私たちはしていた。その結果として私はあまりミーティングに集中せず自分のことを考えてしまうことがそれなりの頻度で起こり、このような形であまり人の話を聞けなかったために後になって再度重要なことを聞き返すというようなことが何度かあった。このような行為をしてしまったことは話し相手にとっては非常に失礼なことであるので控えるべきである。オンラインであろうが対面であろうが人の話は集中力を持って聴くということを心の中に留めておきたい。

このような形で自分から何か積極的に人に行動を促すというよりは誰かに助けてもらいながら活動していくことが多かったように今までの行動を振り返って感じる。特に水戸市役所の職員さんにはお世話になった。こみっとフェスティバルについて何もわからなかった私たちにこみっとフェスティバルとはどういうものか、ボランティア団体さんとはどういうものか、また、覚えておくべきマナーなどをメールや学外実習、ミーティングや月に一度行われる実行委員会などを通して教わった。公務員の仕事とはどういうものなのかも同時に学習させていただけたと思っている。また、参加してくださったボランティア団体の皆さんや茨城大学の赤岩先生にもこの場をお借りして感謝申し上げます。ありがとうございました。

私はサブメジャーである地域志向教育プログラムの授業で各地域の現状やその現状を解決するためにどのようなことをしていけばよいかを学び、このプロジェクトに関わることで実際に活動した場合にどのようなことを経験できた。この大学生活で経験したことを就職した後も生かしていきたい。

人との「つながり」の大切さ

茨城大学 2年 大滝 琴美

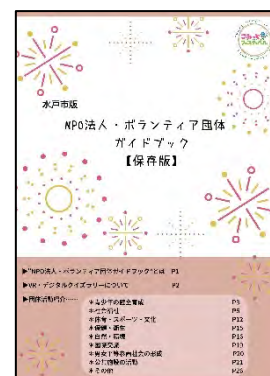
人との「つながり」の大切さ。これが、このプロジェクトを通して、私が強く感じたものである。プロジェクトを始めて約1年経ったが、多くの人との交流や、多くの人の支援がなければ、絶対にここまでプロジェクトを続けることができなかつた。また、自分自身ここまで成長することができなかつた。今回は、人との「つながり」の中で、私がどのような活動を行い、どのように成長できたのかを述べていく。私は、主に「主体性」と「想像力」の2つの点で、成長できたと考えている。

私は、こみっとフェスティバルチームに所属し、水戸市市民生活課協働係様のご提案により、「こみっとフェスティバル2021」の活動に参加した。まず、最初の段階で、私は大きな壁に立ち向かうことになる。それは、「対面授業の禁止により、オンライン上でしか会議ができない」ということである。積極的に意見を言うことが苦手だった私にとって、顔の表情がしっかり見えない中で会議をすることが本当に苦痛だった。より意見を言うことができなくなってしまい、チームに迷惑をかけてしまったと反省している。後期になり、対面でチームのメンバーの熱意や努力、優しさに実際に触れることで、私も努力をしなければいけないと感じるようになった。そして、いざ意見を伝えてみると、チームのメンバーはしっかりと意見を聞いてくれて、それに対してしっかりと反応してくれた。徐々に自分の意見を言えるようになっていき、最終的には、遠慮することなく、自分が思ったことを言えるようになった。このチームのメンバーと「つながり」を持つことができ、チームのメンバーが熱意を持って活動に取り組んでくれたおかげで、自分も刺激を受け、成長できたのだと考えている。まだ、足りない部分もあるが、このチームに所属できたことで、自分から意見を言い、自分から行動する「主体性」を身につけることができた。

今年度のこみっとフェスティバルチームは、小チーム制を採っていて、私は広報担当「こみ報」に所属した。そして、今年の広報担当「こみ報」は、水戸市市民生活課協働係様からご提案いただき、「パンフレット作成」をメインに行った(図)。とてもありがたいことに、1から自分たちでパンフレットを作るという大きなお仕事である。こみ報では、市役所への学外実習の際に、パンフレットの大きさを決めていた。私は、学外実習に参加することができなかつたため、パンフレットを作成するというお話をお聞きしたときには、決まっていることが多かった。最初は、決められたことをそのままやっていたが、受け取った人のことをよく考えた市役所の方のご指摘を受け、私にはなかつた視野の広い視点に多くの感動を覚えると同時に、よく考えようとしなかつた自分を恥ずかしいと感じた。そこからは、言われたことだけではなく、どのようなレイアウトなら見やすいのか、どのように文章を書けば読みやすいのかを、常に考えるようになった。受け手のことを考える「想像力」が身についたのである。また、イベント直前にオンライン開催になったことで、パンフレットの内容に変更を迫られた。市役所の方の臨機応変な対応に感動し、それに追いつくように、こみ報チームのみんなで「想像力」を働かせて、短い期間で修正をし、よりよいパンフレットに仕上げた。この「想像力」は、市役所の方々とお仕事をするという貴重な機会がなかつたら、身につけることができなかっただろう。

このように、様々な人との「つながり」の中で、私は「主体性」と「想像力」を身につけることができた。これらは、社会に出ても必要になる重要な力である。また、パンフレットを作成している中で、水戸市内にはこんなにも素敵なNPO法人・ボランティア団体が多くあるのかと感銘を受けた。これらの市民活動団体は、まさしく人との「つながり」を大切に活動されている団体である。コロナ禍で人との交流が減り、社会全体も、そして自分自身も孤独を感じる人が多い中で、一筋の光が差したようなそんな想いであった。人との「つながり」を大切にすることは、もちろん社会人になって必要になることでもあるが、生きていく上でも必要になることではないだろうか。私は、この活動に参加できたことで、「人との『つながり』を大切にすること」という、生きる指針を得ることができた。これからも、私と関わってくださるすべての皆様に大切に、感謝の気持ちを常に持つようにしていきたいと感じた。

最後に、活動にあたり多大なご支援をいただいた水戸市市民生活課協働係橋本様、尾崎様、実行委員会の方々をはじめとするすべての皆様に厚く御礼を申し上げます。誠にありがとうございました。



図：パンフレットの表紙

人とかかわること、つくること

茨城大学2年 大山 翼

私がプロジェクト演習を履修した理由は、学生が授業の一環で学外の活動に参加できるということに興味を持ったからだ。その中でもこみっとフェスティバルプロジェクトは新型コロナウイルスの感染が広がる状況下で、他の多くのプロジェクトが企画立案を最終目標としている中で、実際にイベントを行うことが目標となっていることに心惹かれて参加することにした。

私はそのプロジェクトチームのなかで、イベント内で実際に行う企画を立案する企画班に配属された。いざ、プロジェクトに参加してみると求められたことは「学生目線」というものだった。今年はこれに付随して「コロナ禍だからこそ」の学生参与の仕方も模索する必要があった。刻々と状況が変化する中で、中止という選択肢を取るのではなく、逆に何ができるのかを模索する必要があったのである。

そうした状況の中で、特に感じたのは人と人のかかわり合いの重要性だった。私個人では、決して立てることのできなかつた、考えつかなかつたことも多々ある。例を挙げてみれば、そもそも私が担当したクイズラリーという企画自体もチームとの話し合いの中でのふとした会話から生まれ発展したものだった。

さらに、企画をこみっとフェスティバル実行委員会に提示する際には、その前の学外実習でチームだけでなく水戸市市民生活課協働係の方々から助言をいただきながら企画を練り直していった。企画をプレゼンした実行委員会では実行委員の方々から様々な質問や指摘を受けた。例えば、デジタルクイズラリーで使用するスマートフォンを持っていない場合の代替案やそもそも市民団体を知るといふイベントでクイズラリーを行う意義などの質問を受けた。このような質問や視点から新たな視点を得ることができたことで、より誇れる企画となることができたと考えている。

振り返ってみれば、こうして一人で企画について考える時間より、複数の人で話し合ったこと、考え合ったこと、意見をもったことの時間の方が何倍も多かった。つまり、企画は立てるものではなく、つくりあげていくものだとこのことを痛感した。また、こうした学生とは異なる人、異なる視点が入ることによって「学生目線」というものが生まれることに気づいた。多くの人とかかわることで一人では自信を持ったもの、「学生らしい」ものとして、提案を行うことができたとは今は断言できる。

プロジェクト演習を通して、私はこうした人との関わり合い、誰かと何かを作り上げるということの重要性を特に学んだ。それは新型コロナの感染が広がる「コロナ禍だからこそ」、改めて人のつながりが見直される今だからこそ、学べたことであるとともにとても価値のあることであると考えている。この先でも積極的に人とかかわっていきたいと考えている。そうした意味でもプロジェクト演習を履修した価値があったと思う。

残念ながら、こみっとフェスティバルというイベント自体もオンラインに移行することとなった。そのため、私自身の企画したデジタルクイズラリーという企画も実行が難しく、また、参加者が限定されるということによる効力の低さからイベントでの開催は無くなってしまった。しかし、こみ報の作成したパンフレットにクイズが記載されることとなり水戸市の小中学生にクイズを見てもらおう運びとなり、イベント開催時と同等かそれ以上に水戸市の市民団体について知ってもらおう機会が増えたと考えている。市民団体をよく知らない私自身もクイズラリーという企画を通して多くの活動を知り、VR企画の撮影ではそうした活動を目の当たりにしたことで市民団体の活動に興味を持つことができた。パンフレット、その中のクイズの参加を通して少しでも多くの人と私と同じように自分の知らない世界を知り、興味を持ってくれることを願っている。

最後になりましたが、一年間お世話になった水戸市市民生活課協働係の皆様、こみっとフェスティバル実行委員の方々、赤岩正樹先生、そして活動にご支援いただいたすべての皆様に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



図：実行委員会でのプレゼンの様子

社会人になる前に

茨城大学 2年 佐藤 美理

私がこみフェスチームの活動で学んだこと、身につけたことを挙げるとなれば本当の「計画性」と「話す力」である。

まず「計画性」についてだが、このこみフェスチームでの活動を通して、本当の「計画性」とは何なのかを実感した。ある物事を行う際に事前に計画して段取りを決めて行動することが計画性だという認識であった。しかし、私は企画班の一員としてこみっとフェスティバル当日に行う企画を考えたのだが、企画を立てる際に「こんな企画をやりたい」だけではその企画を実行することは不可能であると知った。その企画はどんな目的があってターゲットは誰なのか、また企画にどんな準備が必要なのか、どれくらいの費用がかかるのかなど、あらゆる詳細を明確にして初めて企画を立てたといえるのだと分かった。自分が実現したい企画をいかに他の人にも実現したいと思ってもらえるかが肝心であり、他の人に実現する価値があると認められてはじめて、企画として成り立つことができることと学んだ。またこのように企画を行うにあたって必要な項目をすべて埋めて、本当に実施することができることと見通しが立ってこそ「計画性」がある企画であると言えるだろう。企画書に関しては学外実習のときに作成したのだが、VR撮影にどんな機材が必要なのか分からず、1日目の学外実習の帰りにメンバーと共に近くの大型家電量販店に視察をしに行ったのはとてもいい経験である。



図：ボランティア団体様にインタビュー

また計画性とは別に、企画書を作成する際に苦労したことは企画をより具体的にしなければならなかったことである。私の中では、まずは承認をいただいてからその後詳細を決めてより具体的なものにしていくイメージだったため、まだ本当に実行するか分からない企画を想像だけで実際に本番で行えるくらい明確にすることにはとても苦労した。しかしこれも企画を他の人に承認してもらうためにはとても重要なことであり、学外実習で何度もメンバーと話し合っただけで本番をイメージしながら企画を煮詰めた。これらのことは将来仕事をする上で必要なことであると感じた。

次に話す力について述べる。私は人前で話すことが苦手ではないが、正式な場で敬語を使ったり正しい文章構成で話したりすることがあまり上手ではないと自覚している。学外実習でも意見を求められたり挨拶をしたりするなど目上の方々の前でお話をする機会が数多くあったのだが、とても緊張してしまい、結局は自分が言いたいことが相手に伝わらないということも何度かありとても悔しい思いをした。また共に学外実習に参加していた他の2人がとても立派だったこともあり、なおさら実力の差を痛感した。それから何とか克服しようと努力した。今まで避けていたであろう、人前での発表に積極的に挑戦したり、目上の方とお話する機会を増やしたりした。まだまだ実力は充分ではないが、この一年間で成長できたのではないと思う。

当初はプロジェクト演習を履修するかどうかとても悩んだ。気軽に受けるような授業ではないため、受けたことで自分の時間が減ってしまうのではないかと不安になった。しかし今はプロジェクト演習そしてこみフェスチームとして活動できてよかったと心から思っている。コロナ禍で様々な大学生としての活動が制限された一年間で何よりも力を注ぐことができた。こみフェスチームの活動で経験した多くのことは将来生きてくると思う。初めはどんな活動をしていくのか全くイメージできず、正直毎週ある会議を負担に感じたことも度々あった。今となっては寂しさを感じるほど、こみフェスの活動が自分の中で欠かせない存在になっている気がする。内原イオンでの会場開催は中止となってしまったことは無念で仕方がないが、この一年間やってきたことは決して無駄ではなく、オンライン開催となってもこみフェスが開催できたことに感謝したい。

最後に水戸市市民生活課様をはじめとするこみフェスに関わる全ての方々に感謝申し上げます。そして共に1年間活動してきたこみフェスチームの皆さんありがとうございました。

7. おわりに

大山 翼

「コロナ禍だからこそ」これは今年度の私たちの活動に否応なく突き付けられた大きな課題であった。人と人が距離を置き、ウイルスの感染を抑えるという世の中の流れで、人と人が出会うことで新たな関係性を構築することを目的としているこみっとフェスティバルは時代の流れに反したイベントであったと言える。だからこそ、心の距離だけは詰められるような、感染が収まった後に活動に参加する一歩を踏み出せるようなものを作り出そうと決め、私たちこみっとフェスティバルチームは動き出した。

チームの目的が定まっていたことで小チームとして企画、広報に分かれた後も「若者に知ってもらう」ための活動を多層的に展開することができたのではないだろうか。実際に、私たちが立てた企画だけでも3つ、行った活動も含めると10個近くの内容を並行して行った。決して「コロナ禍だからこそ」活動を行えなかった、10人という大規模のチームだったからと言えない量があった。そのため、一人一人に責任がのしかかり主体性を育てることができた。

活動量だけでなく、その内容、質の面を振り返ってみても、デジタル環境が進んでいる時代の潮流に合わせたVR、デジタルクイズラリーというイベントの企画、水戸市の全中高生に配布することとなったパンフレットの作成と学生個人では成しえない規模の活動内容であった。これは、私たちが何度もチーム内での議論を交わし、過去の企画、パンフレットの改善点や不足点を見つけ出したこと、そして、多くの人の関わり合いによって形作られたものであった。

こうして形作ったものをただの考えで終わらないように、実行委員会で何度もプレゼンテーションを行い、実行委員の方々からの意見をもらい何度もブラッシュアップしていった。最終的には、実行委員会から予算を設定して頂けたことで、主体性を育てるというプロジェクト演習の目的の1つを果たすことができたと考えている。

もちろん、何もかも順風満帆には進まなかった。慣れないオンラインという環境、刻々と状況が様変わりする社会情勢、新型コロナウイルスの感染によって活動の減る市民活動団体の不参加等「コロナ禍だからこそ」の課題が降りかかってきた。その中で私たちはどのようにオンラインというものを使えばいいのか、どのように社会情勢を活かすか、活動のない中でどのように活動を伝えるのか常に考えることとなった。それが会議ごとのチームの情報共有の時間の設置や学外実習での市民活動団体への電話によるパンフレット掲載への依頼のように行動となって表れた。こうした行動は従来のプロジェクト演習とは別様の動きであり、「コロナ禍だからこそ」育てることができた能力のもと発揮されたものであった。

残念ながら、感染の再流行によってイベントそのものがオンライン開催に移行することとなった。オンライン開催に関してはチーム内でも賛否含め様々な意見があった。ただ、何が問題点なのかを明確にしたうえでの議論であったこと、そして、学生として何ができるのかを自主的に考えていったこと、決して1年前の私たちではできなかったことだろう。そういった意味でもこの1年の頑張りは無駄なものではなかったとチーム全員が胸を張って言える。同時に、この大きなプロジェクトに深く関わったこと、多くのことを学べたことに心から嬉しく思う。

末尾となりましたが、今年度の活動にあたり多大なご支援をいただいた水戸市市民生活課協働係・橋本隆志様、尾崎志野様、こみっとフェスティバル実行委員の方々、担当教員神田大吾准教授、岩佐淳一教授、そして活動にご支援いただいたすべての皆様に厚く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

2020 年度

根力育成プログラム 「プロジェクト実習」

地域志向教育プログラム「プロジェクト演習」

地域志向教育プログラム「地域 PBL 演習」

活動報告書

令和 3 年（2021）3 月 31 日刊行

編集 神田大吾 岩佐淳一 鈴木敦

発行 茨城大学人文社会科学部根力育成プログラム小委員会

〒310-8512 茨城県水戸市文京 2-1-1

茨城大学人文社会科学部

e-mail atsushi.suzuki.8115@vc.ibaraki.ac.jp